

---

ホーム・ライブラリー

---

# 豊かな人生の秘訣

---

エレン・G・ホワイト著

清野善夫訳

福音社

CHRIST'S OBJECT LESSONS

by

ELLEN G. WHITE

Fukuinsha  
Yokohama, Japan

## まえがき

人生の豊かさをモノに求めた時代は、またたく間に去っていった。消費はすでに美德ではなく、つましい生活が復権した。しかし、生活感情はなお豊富なモノを求めてさまよっている。それは人間の悲しい性質なのであろうか。

いま必要なことは、きびしい現実を直視することであり、それにふさわしい生き方を選択することである。

それは、与えられた人生の真実を追って生きることには他ならない。モノの豊富な時には、人はなんのために生きるのかとか、なぜ死ぬのかとかについては、あまり真剣に問うことがなかった。そこで人間のすること、考えることは、あまりに表面的で心に深く達することとは少なかうた。ひとびとは浮かれていた。ただそれは一時的であつた。

「世と世の欲は過ぎ去る」と聖書は言っている。一切のものが過ぎ去ることを直視するとき、人生の真実を見る目が開かれる。繁栄の時は短い。人生も短い。浮かれて終わる人生は、はかなく、時には無残である。しかし開眼したものは、単に無常な人生を嘆いては

いない。人生の真実に触れたものは、モノを超えた世界を見る。そこに真の豊かさを見る。

真剣に人生を考えようとするものにとって、いま「キリストの視点」に強い関心が集まっていることを知ることは有益であろう。それは何かといえば、キリストが人間と世界をどう見たかということである。キリストはまさにモノを超えた明晰な視点をもっていた。彼は曇りない目で貧しい人々や病む人々、また抑圧された人々の生を見つづけた。また権力をもつものの力に気押されずに、そこにある真実を見た。

そこでキリストが語ることは人々の意表をついて、ある時には厳しく、ある時にはやさしく、ある時は権威ある者のように、ある時は嘆願する者のように聞こえた。キリストの教えの特徴は「学者のようにではなく」、平易に、しかし鋭く人間の無知を明らかにし、新しく躍動するいのちの神秘を示すことにあつた。人間は神なくして生きるものではない、すべて真実なものは神のうちに生き、動き、在る。そして神とは天にいます父であり、すべてのものを統治される者である。この父なる神との比類ない深い交わりから、キリストの教えが発したのである。

キリストの教えは日常生活のありふれた事物に題材をとっている。種まき、穀物の成長と収穫、いちばん小さいからし種、ぶどう畑、婚礼、埋めた宝物、愚かな金持ち、あずか



った金、強盗に襲われた旅人と彼を助けた異国人、仕事にありついた労働者、放蕩に持ち物をつかいはたした若者。このようなだれでもよく知っている身近な事物や、折々起こったニュースなどを用いて、キリストは人間の生き方に深い示唆を与えた。

このような実物を通してキリストは、人生は明るく、強く、理想をかかげて生きる価値があることを、人々の心に印象づけた。抑圧された人々の心に希望が輝いた。長年の病者は新しいいのちによみがえったように立ちあがり、盲人の目が開いた。キリストの教えはふしぎな生命力を与える。それを聞いた人々は、キリストと同じように、日常のありふれた事物に、永遠の真理を発見する。心配、不安、失敗、死などが、時には心に暗いかげを投げかけても、そのうしろから光がさしてくるのである。その光を見て、人ほ生きる勇氣に満ちる。

本書はキリストの教えを深い霊的洞察力をもって解説している。読者が本書によってキリストの教えのふしぎな生命力に触れられることを心から願うものである。

発  
行  
者

# 目次

第一章	自然は知恵の宝庫	1
第二章	心に種をまく	10
第三章	成長の条件	41
第四章	小さな種が大きな木に	47
第五章	自然の法則を知る	53
第六章	隠された宝を掘る	64
第七章	人を生かす力	79
第八章	求めよ、そうすれば、与えられるであろう。	91
第九章	高慢と謙遜	106

第一〇章	「迷える羊」のたとえ	121
第十一章	「放蕩息子」のたとえ	137
第十二章	実を結ばない木はどうなるか	150
第十三章	幸福への招待	157
第十四章	人をゆるす方法	176
第十五章	人のいのちは持ち物にはよらない	185
第十六章	ことばより行動	193
第十七章	選ばれる人たち	206
第十八章	タラントの正しい使い方	218
第十九章	豊かな人生の秘訣	263
第二〇章	奉仕の精神	273
第二十一章	働きと報酬	289
第二十二章	人生の収穫	304



## 自然は知恵の宝庫

キリストのたとえの中には、キリストご自身がこの世界に対して持つておられた使命と、同じ原則を見ることができる。キリストは、わたしたちの性質をとって、わたしたちの間にお住みになった。それは、キリストが持つておられた神の性質と命とを人間が知ることができるためであった。神性が、人性の中に啓示されたのである。目に見えない栄光が、人間の姿の中にあらわされた。人間は、未知のものを、すでに知っているものによって学ぶのである。天のものが、地上のものによって啓示された。神が、人間のかたちの中にあらわされた。キリストの教えにおいてもそのとおりであった。未知のことが、既知のことによって説明された。人びとが一番よく知っている地上のことによって、神の真理が明らかにされた。

聖書にこう書いてある。「イエスはこれらのことをすべて、譬(たとえ)で群衆に語られた。…これは預言者によって言われたことが、成就するためである。『わたしは口を開いて譬を語り、世の初めから隠されていることを語り出そう』(マタイ一三ノ三四、三五)。自然のものが、霊的のものの媒介となった。自然界のものや、聴衆

の人生経験が、みことばの真理に結びつけられた。このように、キリストのたとえば、自然界から霊的世界へと導き、人を神と一つにし、地を天と結合させる真理の鎖の環である。

キリストが自然のことを教えられたとき、それは、ご自身の手が造って、ご自身が与えられた能力や機能について語っておられたのである。すべての造られたものは、初めの完全な状態にあったとき、神の思想を表現していた。エデンの家庭にいたアダムとエバにとって、自然界は、神の知識に満ち、神の教訓にあふれたものであった。知恵は、彼らの目からはいって、心にたくわえられた。彼らは、神の創造されたものによって、神と交わった。ところが、この清い夫婦が、至高者の律法をおかすや否や、神のみの顔の輝きが自然界の表面から去ってしまった。地球は、罪にそこなわれてしまった。しかし、その破壊された状態にあっても、なお、美しいものが多く残っている。神の実物教訓は消し去られてはいない。正しく理解しさえすれば、自然界は、その創造者について語るのである。

キリストのおられたころには、こうした教訓が見失われていた。人びとは、神のみわざである自然を見ても、神を認めることはほとんどできなくなっていた。人類の罪深さは、美しい世界の表面に黒衣をかぶせた。そして自然は、神をあらわすのでなくて、かえって、神をかくす障害物となってしまう。人びとは、「創造者の代りに被造物を拝」んだ。こうして、異邦人の「思いはおなくなり、その無知な心は暗くなったからである」(ローマ一ノ二五、二一)。同様に、イスラエルの国でも、神の教えの代わりに、人間の教えが人びとにいられた。自然のものだけではなく、神を啓示するために与えられた犠牲制度と聖書自身までが、非常にゆがめられて、神を隠す手段とまでなっていた。

キリストは、このようにして真理をおおい隠していたものを取り除こうとされた。キリストが来られたのは、罪が自然の上に投げかけた幕を開いて、万物が造られたときに反映することになっていた霊的栄光をあらわすためであった。彼のことは、聖書の教えと同様に自然の教えをも、全く新しい姿のものとし、新しい啓示としたのである。

イエスは、美しい野の花をつんでは、子供や青年にお与えになった。彼らが、天父のみ顔の光をうけて、若々しく輝くイエスの顔をながめていると、イエスは次のように教訓をお与えになった。「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。『自然のままの単純な美しさで』働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」イエスは、さらに続けて、「きょうは生えて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はどのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあるうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」と言われて、尊い確証と教訓をお与えになった。

山上の説教のこのようなことは、子供と青年だけでなく、他の者に向かつても語られた。それは、さまざまの心配と苦勞にみち、失望と悲しみに沈んだ人びとのいる群衆に向かつて語られた。「だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである」とイエスは言われた。そして、彼は、まわりの群衆におかつて、両手をひろげて、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」とおおせになった（マタイ六ノ二八

—三三三—。

こうしてキリストは、ご自分が野の花や草に託された使命を解き明かされた。彼は、わたしたちが、どの草花にも、そうしたメッセージを読むことを望んでおられる。キリストのことばは、確信に満ちていて、神に対する信頼を強めずにはおかない。

キリストの真理に関する観念は、実に広く、その教えも各方面にわたったものであったので、自然界のあらゆる方面のものが、真理の例として用いられた。毎日、人びとの目に触れる光景が、霊的真理に結びつけられたために、自然は、主のたとえによって装いを新たにした。

キリストは伝道を開始されたころ、真理を平易にお語りになった。それは、すべての聴衆が真理を理解して救いにいたる知恵を得るためであった。しかし、真理は、多くの人の心の中に根をおろすにはいたらず、すぐに、取り去られた。「だから、彼らには譬で語るのである。それは彼らが、見ても見えず、聞いても聞かず、また悟らないからである。…この民の心は鈍くなり、その耳は聞えにくく、その目は閉じている」とイエスは言われた（マタイ一三ノ一—一五）。

イエスは、人びとが心の中に質問を起こすことを望まれた。彼は不注意なものの目をさまし、真理を示して、彼らの心に強い感銘を与えようとなさった。たとえを用いて教えることは、一般に行なわれていたことで、たとえばによって語ることはユダヤ人ばかりでなくて、他国の人びとの尊敬と注目をもひいた。キリストにとって、これ以上の効果的な方法は他になかった。もし聴衆が神に関することを知ろうと思えば、イエスのことばを理解することができたはずであった。イエスは、まじめな質問をしてくる人には、いつも喜んで説明をなさったからで



ある。

また、キリストが語ろうとされる真理に対して、人びとの側では受けいれる準備もなければ、理解することさえできないことがあった。キリストがたとえを用いてお教えになったもう一つの理由はこれであつた。また、その教えを人生の実際のできごとや経験や自然界と結びつけて、人びとの注意をひき、深い感銘をお与えになった。キリストの教えの例としてあげられたものを、人びとがあとで見たときに、彼らは、天からの教師イエスのことばを思い出した。こうして聖霊の働きに対して開かれている心には、救い主の教えの意味がますます明らかに示された。神秘的なことも明りようになり、前には把握(はあく)できなかったことも明白になった。

イエスは、すべての人の心に通じる道をおさがしになった。彼は、さまざまな例話をお用いになることによって、真理の種々な面のことを説明するばかりでなく、異なつた聴衆に訴えられたのである。人びとの日常生活の中からひかれた比喩(ひゆ)に、人びとは興味を持った。救い主のことばに聞き入っていた人の中には、一人として、自分はかえりみられていないとか、忘れ去られているとか感じるものはなかった。どんなに卑しく、罪深い人であっても、同情と親切なひびきをもって語りかける主のみ声を、彼の教えの中に聞いたのである。

それから、イエスがたとえによってお教えになった理由がほかにもあつた。彼の回りに集まつた群衆の中には、祭司、ラビ、律法学者、長老、ヘロデ党の者、会堂の司(つかさ)、俗人、頑固者、または、野心家などがいて、なんとかして、イエスを訴える言いがかりを見つけようとしていた。彼らの手下どもは、毎日、イエスにつきまとして、民心を全く捕えてしまったかと思われる主を罪に定めて、永久に沈黙させてしまう材料を手に入れようとしていた。救い主は、この人びとの性格をよく心得ておられて、彼らがサンヒドリンの議会に、イエスを告訴

できるようなことは、何一つ言わないようにして、真理を説かれた。彼は、高い地位の人びとの偽善と悪行をたとえによって責め、鋭く人の心を刺す真理を比喩的なことばによって表現された。もしもイエスが直接人びとに非難のことばを言われたとするならば、彼らは耳を傾けるどころか、ただちに、イエスの伝道の働きを阻止したことであろう。こうしてイエスは、スパイには、なんの手がかりも与えないでおきながら、真理を明らかにして、誤りをはっきり示されたので、まじめな人はイエスの教えによって啓発される場所が多かった。神の知恵と無限の恩恵とが、神の創造されたものによって明らかにされた。「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである」(ローマ一ノ二〇)。

救い主のたとえ話には、真の「高等教育」がなんであるかが示されている。キリストは、科学のどんな深い真理でも、人に説明することがおできになった。人類が幾世紀もの努力と研究を重ねて到達できるような神秘の扉を開くこともおできになった。また、世界の終わりにいたるまでの思想のかてとなり、発明の刺激となる科学的提言をすることも、主には可能であつた。しかし、彼はそうはされなかった。人びとの好奇心を満たし、または世俗的の偉大さへの希望をいだかせて野心を満足させるようなことは、何も言われなかった。キリストは、何を教えるになつても、人間の心を、無限の神の心に接触させるようになさつた。神と、神のみことば、または、神の働きに関して人間が述べた理論を学ぶようには少しも指導なさらなかった。彼は、神の創造の働きと神のみことばと、そして、神の摂理の中に示されている神をながめるようにとお教えになつた。

キリストは、抽象的理論はお扱いにならないで、品性の向上に必要なもの、神を知る能力を高め、善を行なう力を増すものを扱われた。彼は、日常生活の行状とか、永遠に関する真理について語られたのである。

むかし、イスラエルの民の教育を指導したのは、キリストであつた。神の戒めと定めとについて、主は、こう言われた。「努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起る時も、これについて語らなければならない。またあなたはこれをあなたの手につけてしるしとし、あなたの目の間に置いて覚えとし、またあなたの家の入口の柱と、あなたの門とに書きしるさなければならない」(申命記六ノ七一九)。イエスは、この戒めをどうして守ることができるか、すなわち、神の国のおきてと原則の美しさと尊さをどうすればあらわすことができるかを、その教えの中で示された。主がイスラエルの民族を自分の特別の代表者とするために訓練なさったとき、住居として彼らにお与えになったのは、山地や谷間であつた。彼らの家庭生活と宗教的行事とは、常に彼らを自然と神のみことばとに接触させた。そのように、キリストも弟子(でし)たちを湖畔や山腹、または原野や森林に導かれたので、弟子たちはお教えの中で引用される自然の事物を目の前に見ることができた。彼らは、こうしてキリストから学んだ知識を実際に活用して、主と協力して働いた。

わたしたちも、同様に、自然を通じて創造主を知らなければならない。自然という書物は、一大教科書であるから、神の品性について人に教えたり、いなくなつた羊を神のおりに連れもどしたりするために、聖書とともに用いなければならないものである。神のみわざを研究すると、聖霊が人の心に確信を与える。この確信は、理論的推論から得られるものではない。しかし、神を知ることができないほどに心が暗くなり、神を見ることができないほどに目がくらみ、み声を聞くことができないほどに耳がにぶくなつていないかぎり、人は、その深い意味を理解し、崇高な霊的真理に強い感銘を受けるのである。

このような自然からの直接の教訓を何にもまして、価値あるものとするのは、その単純さと純粹さである。自

然からの教訓はすべてのものに必要である。もともと、自然の美は、罪とそして、世の誘惑から人の心を引き離して、純潔と平和と神へと向けさせるものである。とかく、学生の心は、いわゆる科学や哲学と名づけられている人間の学説や推論にとらわれる。学生は、親しく自然に接する必要がある。そして、自然の神も、キリスト教の神も、一つであることを学ばなければならない。自然界と霊界は一致していることを彼らに教えなければならない。彼らの目が見、手が触れるすべてのものを、品性建設の教訓としなければならない。こうして、彼らの知力は強められ、品性は啓発され、生活が全面的に高尚にされるのである。

キリストが、たとえ話を語られた目的は、安息日の目的と全く同じものであった。神のみ手のわざを見て、人間が神を認めるようになるために、神は、ご自分の創造の力を記念するものを、人間にお与えになった。安息日は、自然の中に、創造主の栄光を見ることを、わたしたちにうながしている。そして、イエスが自然界の美とご自分の尊い教訓とを結合されたのも、そのことを願われたからである。わたしたちは、清い休みの日には、他のどんな日にもまさって、神が自然の中に書かれた使命を学ばなければならない。わたしたちも、救い主がたとえ話をお語りになった野原や森林、あるいは戸外の草花のなかなどで、たとえを研究しなければならない。自然のふところに近づけば近づくほど、キリストは、ご自分の臨在を明らかにわたしたちに示して、平和と愛のことばをお語りになるのである。

キリストは、単に安息日ばかりでなく、普通の労働の日にも、教訓を結びつけられた。彼は、畑を耕し、種をまく人に、知恵をお与えになる。畑にあぜを作って種をまき、耕しては収穫を刈り取るということから、キリストの恵みがどのように人の心の中で働くかを学ぶように、主はお教えになる。こうして、どんな職業に従事し、

どんな社会にしようとも、そこで神の真理を学ぶようにイエスは望まれる。そうするとき、日常の雑事に心を奪われて、神を忘れることはない。自然は常に、わたしたちの創造主であり、あがない主であるイエスを思い起こさせる。神の思いは、黄金の糸のように、わたしたちのすべての家庭の仕事や職業の中に一貫して見られるようになる。そして、わたしたちは、神の笑顔の栄光が、ふたたび自然界の上に輝くのを見る。わたしたちは、天の真理を学び続けて、主の純潔なお姿へと成長し続けることであろう。こうして、わたしたちは、「主に教をうけるものとなり、召されたそれぞれの場所で、「神のみまえにいる」ことであろう（イザヤ五四ノ一三、コリント第一・七ノ二四）。

第 2 章

# 心に種をまく

## 種まきと種

キリストは、種まきのたとえによつて、天国のことと、大いなる農夫であられる神が、神の民のために何をなさるかをお教えになった。農夫が畑に出て種をまくのと同じように、イエスは、真理という天からの種をまくためにこられた。イエスのたとえそのものが種であった。キリストの恵みに関する尊い真理は、たとえによつてまかれた。種まきのたとえは、一見簡単なもののように思われるために、その真価が十分に認められていない。種を土地にまくことから、福音の種をまけば、人びとを神に立ち帰らせるにいたることを考えることをキリストは望まれた。小さい種のたとえを語られたのは、天の王である。そして、この地上の種まきを支配するのと同じ法則が、真理の種まきをも支配している。

ガリラヤの湖畔には、イエスを見、彼の話を聞こうとする一団——熱心に何かを期待する群衆がすでに集まつ

本章は、マタイ一三ノ一―九、一八―二三、マルコ四ノ一―二〇、ルカ八ノ四―一五に基づく。

ていた。病人も敷き物の上に横たわって、彼にいやしを求めるときをいまかいまかと待っていた。罪深い人類の苦しみをいやすことは、神から与えられたキリストの権限であった。キリストは、病気をいやし、ご自分の回りに命と健康と平和とをふりまかれた。

群衆は続々とやってきて、キリストの回りにつめよって、立つ場所すらなくなった。そこで、イエスは漁船の中の人びとに声をかけて、彼を向こう岸にお連れするためにおいてあった舟に乗り、岸から少しこぎ出させて、そこから、岸边にいる群衆にお話しになった。

湖畔一帯は、美しいゲネサレの平野で、向こうには山々が見えていた。そして、山にも野にも忙しく働く農夫たちの姿が見え、種をまく人もあれば、すでに実った穀物のとり入れをしている人もあった。こうした光景を見ながら、キリストは言われた。

「見よ、種まきが種をまきに出ていった。まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種はいばらの地に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまった。ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。」

キリストの務めは、彼の時代の人びとに理解されなかった。彼のこられた様子が、彼らの期待にそわなかったのである。主イエスは、ユダヤの制度全体の基礎であられたその荘重な儀式も、神の定めによるものであった。こうした儀式は、それが予表しているおかたが、定められた時にこられるということを入びとに教えるためのも

のであった。ところが、ユダヤ人は、形式と儀式を重んじるのみで、その目的を見失っていた。伝説や言い伝え、人間の作った戒めなどは、神が人に伝えようと意図された教訓を人びとから隠した。これらの格言と伝説は、真の宗教の理解と実行を妨げるものになった。そして、実在者なる神がキリストとなってこられたとき、人びとは、彼こそすべての典型の成就であり、すべての影の実体であることを認めなかった。彼らは、実体を拒んで古来からの典型や無益な儀式を固守した。神のみ子が来ておられたのに、彼らは、しるしを求めてやまなかった。「悔い改めよ、天国は近づいた」という使命に対して、彼らの求めたものは奇跡であった(マタイ三ノ二)。救い主の代わりに奇跡を求めた彼らには、キリストの福音は、つまずきの石であった。彼らは、メシヤが偉大なわざをなしとげてご自分がメシヤであることを証拠だて、地上の国々を打ち破ってメシヤ王国を建設するものと期待した。その期待に、キリストは種まきのたとえをもっておこたえになった。神の国が発展していくのは、武力や暴力の干渉によってではなくて、人の心に新しい原則を植えつけることによってである。

「良い種をまく者は、人の子である」(マタイ三ノ三七)。キリストは、王としてではなく、種をまく者としておいでになった。国々を滅ぼすためではなくて、種をまくためにこられた。また、それは、世的勝利や国家的繁栄を弟子たちに示すためではなく、顔に汗して働き、どんな損失や失望にもめげずに、収穫を刈りとらなければならぬことを教えるためであった。

パリサイ人は、キリストのたとえの意味を理解はしたが、その教訓を彼らは歓迎しなかった。彼らは、わざとわからないふりをした。この新しい教師が何を言おうとしているかは、一般の群衆にとってはなおさら、わからなかった。イエスのことは、彼らの心に不思議な感動を与えるとともに、彼らの野心を容赦なく砕いた。弟子



たち自身でさえも、たとえの意味がわからなかったが、何か強く心をひかれるものがあった。彼らは、ひそかにイエスのところに来て、その説明を求めた。

キリストは、さらにはつきりとした教訓を彼らに与えようとしておられたので、弟子たちが説明を求めてくることを望んでおられた。イエスは、まじめな気持ちをもって、主を求めるすべての者に、みことばの意味を明らかになさるのであるから、彼らにもそれと同じようにしてたとえを説明なさった。聖霊の光をいつでも心に受ける用意をしながら、神のみことばを研究するものは、決してその意味がわからないということはない。「神のみことばを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ七ノ一七)。真理を、さらに、はつきりと知りたいと願ってキリストのところに来る者は、みな教えを受けることができる。キリストは、彼らに天国の神秘をご説明になる。こうした神秘は、真理を知ろうと願う人には、必ずわかるのである。天からの光が、魂の宮にさしこんでくる。そして、その光は、暗い道を照らすともしびのように、人びとの前に輝きでるのである。

「種まきが種をまきに出て行つた。」東の国々では、社会の状態が落ちつかず危険なことが多かった。人びとは、城壁にかこまれた町の中に住んでいた。農夫たちは、城壁の外の仕事をするために、毎日、外へ出て行つた。そのように、天来の種まく者であられたキリストは、種をまくために外へ出られた。彼は、平和な天の故郷(ふるさと)をあとにし、世界が造られる前から、天父とともに持つておられた栄光を捨てて、宇宙の王座を去られた。彼は、苦しみや試みに会う人間として、しかもただ一人で、涙とともに出て行き、この失われた世界のために、命の種をまき、ご自分の血をそそがれた。

キリストのしもべたちも、同じように種をまくために出ていかなければならない。アブラハムは真理の種をまく者として招かれ、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」との命令を受けた(創世記一二ノ一)。そして、彼は「行く先を知らないで出て行った」(ヘブル一ノ八)。使徒パウロもそうであった。彼は、神殿で祈っていたとき、「行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」という神のことばに接した(使徒行伝二二ノ二)。このように、キリストと結合する召しを受けた者は、彼に従うためにすべてを捨てなければならぬのである。むかしからの友人に別れを告げ、人生の計画を放棄し、世の望みを断念しなければならない。そして、ただひとり、困苦と涙の中に自己を犠牲にして、種をまかなければならない。

「種まきは御言をまくのである。」キリストは、真理を世界にまくためにこられた。人類の墮落以来、サタンは誤りの種をまき続けてきた。サタンは、いつわりによつて、まず人間を支配したのであるが、今もなお、同じ方法で、この地上の神の国をくつがえし、人びとを自分の支配下におこうとしている。キリストは、天国からの種まく者として、真理の種をまくためにこられた。神の会議に座し、永遠の神の至聖所におられたおかたは、まじりけのない真理の原則を人びとに伝えることがおできであった。人類が墮落して以来、キリストは、この世界に対する真理の啓示者であられた。「神の変わることはない生ける御言」である朽ちない種が彼によつて人びとに伝えられた(ペテロ第一・一ノ二三)。エデンの園で、あの最初の約束のことばを語られたとき、キリストは、福音の種をまいておられたのである。しかし、この種まきのたとえば、特にイエスご自身の、人間の間での奉仕のこと、イエスが建設されたお働きに適用される。

神のことばは種である。どの種の中にも発芽力がある。種の中に植物の命が含まれている。そのように、神のことばには命がある。「わたしがあなたがたに話した言葉(ことば)は霊であり、また命である」(ヨハネ六ノ六三)。「わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受ける」とキリストは言われる(ヨハネ五ノ二四)。神のことばの中にあるすべての命令とすべての約束には、力、すなわち、神の命そのものが宿っている。それであるから、命令はなしとげられ、約束は果たされる。信仰によって、ことばをうけいれる者は、神の命と品性そのものを受けているのである。

どの種も、その種類に従って実を結ぶ。正しい状況のもとに種をまけば、その中にある命が芽ばえてくる。朽ちないみことばの種を、信仰によって心に受け入れると、神の品性と命に似た品性と命が実るようになる。

イスラエルの教師たちは、神のことばの種をまいていなかった。真理の教師としてのキリストの働きは、当時のラビたちの働きとは、著しく異なっていた。彼らは、伝説や人間の理論や推論などを強調していた。人間がみことばについて教えたり書いたりしたことを、みことばそのものの代用にしたこともしばしばあった。彼らの教えには、魂を生かす力はなかった。キリストの教えと説教の主題は、神のことばであった。イエスは質問する人に、「……と書いてある」「聖書に何とあるか」「あなたはどうか読むか」などとおおせになった。興味をもった人があれば、それが友であろうと敵であろうと、彼はみことばの種をまかれた。道であり、真理であり、命であり、みずから生きたことばであられるイエスは、聖書を指さして、「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」と言われた。「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた」(ヨハネ五ノ三九、ルカ二四ノ二七)。

キリストのしもべたちも、これと同じ働きをしなければならない。今日も、おかしと同じように、神のことは重大な真理は無視されて、人間の理論や推論が重んじられている。福音の牧師と称する人びとの中にも、聖書を全部神の靈感によることばとして信じていない者が多い。ある学者がある部分を拒否すると、他の人が別のところを疑うといったありさまである。彼らは、自己の判断をみことばよりも重んじる。彼らの教える聖書は、彼ら自身の権威に基づく。聖書が神から与えられた信頼すべき書であるという事実は、かえりみられなくなった。こうして、不信の種がまき散らされ、人びとは、何を信じてよいのかわからなくなる。心に思うことさえしてはならない信仰がたくさんある。キリストの時代のラビたちは、聖書に多くの不可解な解釈をほどこしていた。神のみことばが、彼らの行為を明らかに責めていたので、その力をそぐうと試みた。それは、今日も同じである。神のことばは、不可解で不明りようなものであるかのように見せかけて、それを神の戒めに従わなくてもよい理由にしている。キリストは、当時のこうした習慣をお責めになった。彼は、神のみことばが、すべての者によって理解されるべきであることをお教えになった。キリストは、聖書が疑問の余地のない権威書であることを指摘されたが、わたしたちもそうすべきである。聖書は、無限の神のことばであって、あらゆる論争の解決とすべての信仰の基礎であることを示すべきである。

このように、聖書の力が奪われているために、人びとの霊的生活が低下するにいった。今日、多くの説教が講壇から叫ばれても、そこには、良心をさまし、魂に命を与えて神の力の現われを見ることができない。「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」と聴衆は言うことができない(ルカ二四ノ三二)。多くの者が生きた神を求めて叫び、神の臨在をかわくように望んでいる。ど

んなにりっぱな哲学論も文学論も、心に満足を与えることはできない。人間の主張と思索は、無価値である。神のみことばを人びとに語ろう。これまで、伝説と人間の説と戒めばかりを聞いてきた人びとに、心を新たに、永遠の命にいたらせる神の声を聞かせよう。

キリストが好んで語られた主題は、神の父親としての情深さとあふれる恵みであつた。彼は、神の品性と神の律法の神聖さについて多く語られた。また、ご自分が、道であり、真理であり、命であると人びとにいわれた。これが、キリストの牧師たちの主題でなければならない。イエスの中にあるがままの真理を伝えなさい。律法と福音が要求しているものを明らかにしなさい。キリストの克己と犠牲の生活、彼のけんそんと死、彼の復活と昇天、彼の天の宮廷での彼らのためのとりなし、「まだきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」という彼の約束などについて語りなさい(ヨハネ一四ノ三)。

まちがった説について論議をしたり、福音の敵と争おうとする代わりに、キリストの模範に従いなさい。神の宝の庫の中からの新しい真理を取り出しなさい。「御言を宣べ伝えなさい。」「すべての水のほとりに種をまき」「時が良くても悪くても」「わたしの言葉を受けた者は誠実にわたしの言葉を語らなければならない。わらと麦とをくらべることができようかと、主は言われる。」「神の言葉はみな真実である。…その言葉には付け加えてはならない、彼があなたを責め、あなたを偽り者とされないためだ」(テモテ第二・四ノ二、イザヤ書三二ノ二〇、エレミヤ書二三ノ二八、箴言三〇ノ五、六)。

「種まきは御言をまくのである。」「ここに、すべての教育の基礎となるべき大原則が示されている。」「種は神の言葉である。」「しかし、今日、神のみことばを捨ててしまった学校があまりにも多くある。ほかの科目が、心を占領

している。無神論的著書の研究が、教育の大部分を占めている。懷疑的思想が、教科書の中に織り込まれている。科学の研究の面でも、発見された事実の誤解、曲解が、人びとを誤らせる。いわゆる科学的学説と神のことばとを比較してみて、神のみことばを不確実な頼りないもののように思わせる。こうして、青年の心に疑惑の種がまかれ、それが試みの時にはえてくる。神のことばを信じなくなると、魂に対する何の指導も保護もなくなる。青年たちは、神と永遠の命からかけ離れた道に引きこまれていく。

今日、世界に罪惡がこのようなにはびこったのは、主として、このことが原因であろうと思われる。神のことばを無視すれば、人間の生来の悪い感情を制するみことばの力を拒んでしまうことになる。人は、肉に種をまき、肉から腐敗を刈り取る。

また、知力の衰えと能率の低下の原因がここにある。神のみことばを捨てて、靈感をうけない人の著書を読むことによって、頭脳は、いじけ、低級になる。深遠な永遠の真理の原則に、心は触れなくなる。人間の理解力は、平常考えていることの理解に止まるもので、限られた地上のことばかりに没頭していると、理解力は衰えて、やがては、伸びる力を失うにいたる。

これは、みな、偽りの教育である。すべての教師は、靈感によって与えられたことばの大真理に、青年の心を結びつけなければならない。これが現世と来世のために必要な教育である。

これが科学の研究の妨げになるとか、教育の標準を低下させることになるとか、考えてはならない。神に関する知識は、天のように高く、宇宙のように広いものである。永遠の命に関する大きな主題の研究くらい、わたしたちを高尚にし、活気づけるものはない。青年たちは、神から与えられたこの真理を理解しようと努めなければ

ならない。そうすれば、その努力によって、彼らの知力は伸び、強くなるのである。みことばを実行する生徒はだれでも、広々とした思想の分野に導かれ、朽ちることのない知識の富を手に入れることができる。

聖書の探究によって受け得る教育は、救いの計画を体験的に知ることである。このような教育は、魂のなかに神のみかたちを回復する。それは、誘惑に対して生徒の心を強固にし、この世界に対するキリストの恵みの働きを、キリストとともにするのに、適した者にする。この教育は、彼を神の家族の一員とし、光の中にある聖徒たちの嗣業にあずからせる。

しかし、神聖なる真理をあつかう教師は、自分自身が経験によって知っていることしか教えることができない。「種まきは」自分の持っている「種をまいた」のである。キリストは真理であられたから、真理をお教えになつた。イエスご自身の思想と品性と体験とが、彼の教えの中に具体的に表現されたのである。彼のしもべたちもそうでなければならない。みことばの教師になりたいと思う者は、まず、体験によって、みことばを自分のものとしなければならない。彼らは、キリストが彼らの知恵と義と聖とあがないになつてくださるとはどういうことを知らなければならない。神のことばを人びとに語るときに、こうだと思つとか、ああであろうなどと言つてはならない。「わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである」と使徒ペテロは言ったが、わたしたちもそう宣言しなければならない(ペテロ第二・一ノ一六)。またキリストに仕えるすべての牧師、教師は、愛された弟子ヨハネとともに、「このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今や

わたしたちに現れたものである」と言うことができなければならない(ヨハネ第一・一ノ二)。

## 土——道ばた

この種まきのたとえが主として扱っている問題は、種のまかれた土地の状態が、種の成長にどんな影響を及ぼすかということである。このたとえによれば、キリストは実際にこう言っておられるのも同然である。つまり、あなたがたは、わたしの働きを批判的な目で見て、あなたがたの考え通りにいっていないからといって失望するのはよくない。あなたにとって一番大切なことは、あなたがわたしの使命をどう扱うかということである。あなたがそれを受けるか拒むかによって、あなたの永遠の運命が決まるのである。

主は道ばたに落ちた種を説明して言われた。「だれでも御国の言を聞いて悟らないならば、悪い者がきて、そ



道 ば た に



の人の心にまかれたものを奪いとって行く。道ばたにまかれたものというのは、そういう人のことである。」

道ばたにまかれた種は、神のことばが不注意な人の心に落ちた場合をあらわしている。ちょうど、人や牛馬にふまれて道がなくなっているように、心は世の売買と世の快楽や罪のために固くなっている。その人は、勝手気ままな罪深い生活に心を奪われて、「罪の惑わしに陥って、心をかたくな」にしている（ヘブル三ノ二三）。霊的能力はまひしている。人びとはみことばを聞いても理解せず、そのことばが自分たちにあてはまっているのを悟らない。彼らは、自分たちの必要も危険も自覚しない。彼らはキリストの愛に気づかない。そして、キリストの恵みの使命も、自分たちにはなんの関係もないもののように無視してしまう。

鳥が道ばたの種をすべに、ついばんでしまうように、サタンは、真理の種を魂から奪い去ろうとまちかまえている。サタンは、神のことばが不注意なものの目をさまし、かたくなな心をくだくの恐れれている。サタンとサタンに属する悪天使たちは、福音が宣（の）べ伝えられている集会の中にはいつている。天使たちが、神のみことばによって、人びとの心を動かそうとしているときに、敵は、なんとかして、そのみことばの力を失わせようと努めている。サタンは、さまざまの悪がしこい方法と熱心さをもって、神の聖霊の働きを妨げる。キリストが愛をもって魂を引き寄せようとなさると、サタンは、救い主を求めてくる者の心を他へそらし、世的の計画に没頭させようとする。また、批評非難の気持ちを起こさせ、疑惑と不信の心をいだかせる。説教者の用語や態度に聴衆が満足しないような場合は、その欠点ばかりが気になるようにしてしまうのである。こうして、彼らが必要としている真理と、神の豊かな恵みも、なんらの永続的印象を心に残さないのである。

サタンには、多くの部下がいる。クリスチャンであると称しながら、真理の種を人びとの心から奪い取って、

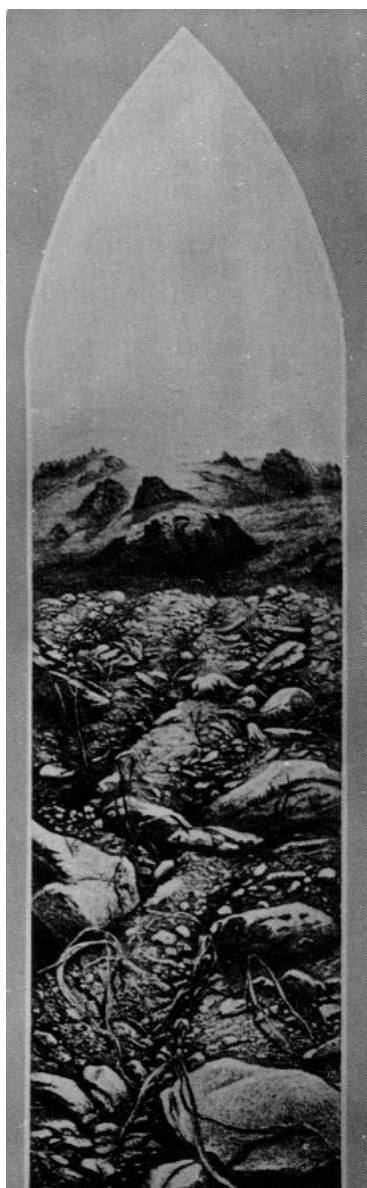
サタンの手助けをしている者が多い。説教を聞いて帰って、家でそれを批評の材料にする者が多いのである。彼らは、普通の講演や政治演説のことを批評するのと同じように、説教を批評する。神からのことばとして受けるべき使命を軽々しく茶かしてしまう。牧師の品性のことから始めて、その動機と行動、または、教会員の行為に至るまで、無分別に話し合い、手きびしい判断を下し、人のうわさ話や悪口などを未信者のいる前で平気で言うのである。親は子供の聞いているところでよくこうしたことを言う。こうして、神の使者たちに対する尊敬と、彼らの語る使命に対する敬意とを失わせる。そして、多くの者は、神のことばそのものをも軽々しく扱うようになってしまっている。

こうしていわゆるクリスチャン家庭で、無神論的教育を受けるものが多い。それなのに、親たちは、子供たちが福音に関心をもたず聖書の真理を信じようとしなかったのを不思議に思うのである。また、彼らを道徳的、宗教的感化の中に育てることが、なぜこんなに困難なのであるかと思案する。しかし、子供たちの心をこんなに頑固にしたのは、自分たちであるのに彼らは気づかない。良い種は、根をおろす土をみつけることができずにいる間に、サタンに奪い取られてしまっている。

## 石 地

「石地にまかれたものというのは、御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。その中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のための困難や迫害が起ってくると、すべつまずいてしまう。」

石地にまかれた種は、土がわずかしかないうちに落ちた。すぐ芽は出たけれども、根が岩に妨げられて、成



石地に

長にどうしても必要な養分をとることができずに、やがて枯れてしまう。わたしには信仰があると口先だけで言っている人の多くは、石地の聴衆である。地下に岩があるように、良いことをしたいという願いや大きな希望の下には、生来の利己心が横たわっている。自己愛が征服されていないのである。彼らは、罪がいかに恐ろしいものであるかを悟らず、罪の自覚によって心がぐだかれていない。この種の人びとはすぐに受け入れて、有望な改心者のように思われるけれども、彼らはほんの表面だけの宗教しか持っていないのである。

そうかといって、すぐにみことばを信じ、喜んでいる人なら必ずつまずくとも限ってはいない。マタイは、救い主の召しを受けたときに直ちに立つて従った。神は、わたしたちが、神のことばを聞くや否や、すぐに受けることを望んでおられる。たしかに、喜んで受けることは正しいのである。「罪人がひとりでも悔い改めるなら：  
：大きいよろこびが、天にあるであろう」(ルカ一五ノ七)。また、キリストを信じる魂にも喜びがあるのである。

ところがたえの中で、すぐことばを受けいれたといわれている人びとは、その払うべき価を十分に見積もらない。彼らは、神のことばが何を要求するものであるかを考慮しない。彼らは、人生のあらゆる習慣をみことばに照らしてみても、みことばの支配に全く従うことをしない。

植物は、土の中に深く根をはって、目には見えないところで、植物の生命に栄養を与えている。クリスチャンもそれと同じである。霊的生命が養われるのは、魂が信仰によって、目には見えないが、キリストと結合することによってである。しかし、石地の聴衆は、キリストにたよろうとはせず、自分にたよるのである。自分たちの善行や時折りのよい心がけにたより、自分を義とする心が強い。彼らは、主とその偉大な力によって強くなっていない。このような人は、キリストに連なっていないから、「その中に根がない」のである。

やけつく真夏の太陽は、穀物をじょうぶに実らせるものであるが、根のないものを枯らしてしまう。そのように、「その中に根がないもの」は、「しばらく続くだけであって、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまづいてしまう。」「罪からの救いを求めるのではなく、苦しみを避けるために、福音を受けられるものが多くいる。宗教とは、困難や試練から人間を解放するものであるかのように思っているから、しばらくは喜んでいる。彼らは生活が平穏な間は、堅実なクリスチャンらしく見えるのである。しかし、はげしい誘惑に出会うと倒れてしまう。彼らは、キリストのためにつける恥辱に耐えることができない。神のことばが、心に秘めた罪を指摘し、克己と犠牲を要求したりすると、彼らはつまづいてしまうのである。彼らの生活を徹底的に改革することは、あまりにも努力を要することなのである。彼らは、現在の不便や試練をながめて、永遠の實在のことを忘れてしまうのである。彼らは、イエスのもとを去っていった弟子たちと同じように、「これは、ひどい言葉だ。だれがそん

なことを聞いておられようか」と言うのである(ヨハネ六ノ六〇)。

神に仕えていると言いながら、神に関する体験的知識を持っていないものが多い。神のみこころを行ないたいという願いも、ただ一時の気まぐれによるもので、心が聖霊に深く感動したためではない。彼らの行動は、神の律法と一致していない。□ではキリストを救い主として信じると言いながら、キリストが彼らに罪に打ち勝つ力をお与えになることを信じない。彼らは、生きた救い主と個人的接触がなく、彼らの品性は、先天的、および後天的欠陥を示している。

聖霊は力ある働きをなさるとばく然と認めることと、悔い改めを促す譴責(けんせき)者として、聖霊の働きを受け入れることは、全然別のことである。多くのものは、自分たちが神から離れ、自己と罪との奴隷になっていることを自覚している。そして、改革しようと努力するのではあるが、自己を十字架につけない。彼らは自分たちを全くキリストのみにまかせて、みこころを行なう力を神に求めようとしなない。彼らは、神のかたちにかたどって形造られることを喜ばない。彼らはばく然と自分たちの不完全さを認めはするが、自分たちの犯している罪をすてない。彼らが悪い行為を重ねるごとに古い利己心は勢力を増していくのである。

こうした魂の救われる唯一の望みはキリストがニコデモに対して言われた次のみことばを自分で理解することである。「あなたがたは新しく生まれなければならない。」「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ三ノ七、三)。

真のきよめとは、神への奉仕に専心することである。これが真のクリスチャン生活の条件である。キリストは、何一つ保留しない献身、完全な奉仕を求めておられる。キリストは、心と思いと魂と力とをご要求になる。自己

に執着してはならない。自己のために生きるものは、クリスチャンではない。

愛が行為の原則でなければならぬ。愛が、天地間の神の政府の基本的原則である。そして、これがクリスチャンの品性の基礎となるべきものである。この愛のみが、クリスチャンを堅く立たせてささえるものである。これのみが、彼を試練と誘惑に勝たせるのである。

また、愛は、犠牲によってあらわされるものである。贖罪（しよくざい）の計画は、犠牲によって立てられた。

しかも、その犠牲とは、とうてい測ることができないほど深く高いものであった。キリストは、わたしたちのためにすべてをお与えになったのであるから、キリストを信じるものは、あがない主のために、喜んですべてを犠牲にするのである。また、キリストに誉れと栄光を帰することをまず第一のこととするようになるのである。

もし、わたしたちが、イエスを愛するならば、イエスのために生き、感謝のささげ物をし、イエスのために働くことは、何よりの楽しみとなる。主の働きは、やさしいのである。イエスのためならば、痛みも苦しみも犠牲も喜んで忍ぶのである。イエスが人びとの救いを、熱望されたと同じように、わたしたちも魂を熱く愛し、イエスが魂に同情なさったようにわたしたちも感じるようになるのである。

これがキリストの宗教である。ここまで達しないものは偽りものである。真理に関する単なる理論を唱え、弟子であることを表明するだけでは、魂を救い得ない。全くキリストのものでないとすれば、全然キリストに属していないのである。人びとの意志が薄弱で、うつり気なのは、クリスチャン生活が中途はんぱだからである。自己とキリストの両方に仕えようとすることが、人を石地の聴衆にしていまい、一度試練が襲ってくると、くずれて去ってしまうのである。

## いばらの中にまかれたもの

「また、いばらの中にまかれたものとは、御言を聞くが、世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさぐので、実を結ばなくなる人のことである。」

福音の種は、しばしば、いばらや毒草の中に落ちる。そして、人の心の中になんの道徳的变化も起こらず、以前の癖や習慣、あるいは、罪の生活が続くのである。サタンの性質が捨てられずに残っているならば、麦はふさがれてしまう。実を結ぶのは、いばらであって、麦は枯れてしまつのである。

真理の尊い種を受けいれる準備が常にできている心の中にだけ、恵みは成長することができる。罪のいばらは、どの土地にでも育つのである。それは耕さなくてもよい。しかし、恵みは、注意深くつちかわれなければならない



いばらの中に

い。とげやいばらは、いつでもすぐにはえてくるものであるから、常に、手を入れてきれいにしておかなければならない。もし、心が神の支配下になく、品性の向上と洗練のために聖霊が活動しないならば、古い習慣が生活の中に現われてくる。□では福音を信じるといってみても、そう公言している福音によって清められていなければ、なんの役にもたたない。もし、彼らが罪に勝利していないならば、罪が彼らに勝利しているのである。ただ刈っただけで、根がぬかれていないならば、いばらは、すぐに育って、ついには魂を、おおいかくしてしまうのである。

キリストは、魂を危険におとし入れるものを指摘された。マルコが記録しているように、キリストは世の心づかいと富の惑わし、その他いろいろの欲をあげられた。ルカは、生活の心づかいや富や快楽をあげた。こうしたものが、みことばをふさぎ、霊的種の成長をはばむのである。魂は、キリストから栄養分を吸収しなくなり、心の霊性が死んでしまつのである。

「世の心づかい」ここに世の心づかいとあるが、これにまどわされない人は、どの階層の人にもない。貧しい者には、苦勞や圧迫、欠乏と恐怖などの心配がある。金持ちは、財産を失いはしないかという心配に苦しむものである。キリストが野の花から学べといわれた教訓を忘れているクリスチャンが多い。彼らは、キリストの変わらぬご保護にたよらない。キリストは、人びとが重荷をキリストにゆだねないために、その重荷を負うことがおできにならない。世のわずらいというのは、救い主に援助と慰めを求めるようにすべきものであるにもかかわらず、かえって、人びとをキリストから引き離しているのである。

神のご用をするならば、豊かな実りを得ることができるとにもかかわらず、金もつけに没頭している者が多い。



事業に全力を尽くして、靈的方面のことをおろそかにするのはやむを得ないことのように思っている。こうして、彼らは神から離れていくのである。聖書には、「熱心で、うむことなく」と命ぜられている(ローマ二ノ一)。わたしたちは、助けを要している人びとに分け与えるために働くべきである。クリスチャンは、働かなければならない。また、商売もしなければならない。しかも、それを罪を犯さずにできるのである。ところが、多くの者は、事業に没頭してしまい、祈りのための時間や、聖書研究の時間や、神を求めて、神に仕える時間がないのである。時には、清めのことや天のことを渴望することもあるが、世の雑音から離れて、神の霊のおごそかな権威あるみことばに耳を傾ける時間がないのである。永遠の事物はあたまわしにされ、世の事がらが第一のものとされている。これでは、みことばの種が実を結ぶことは不可能である。世俗といういばらを育てるために魂の生命が奪われているからである。

また、これとは全く異なった目的をもって努力していながら、同じ誤りにおちいつているものが多い。彼らは、他人のために働いている。種々の仕事に追われ、責任も多く負っている。彼らは忙しさのために礼拝をする余裕がない。そして、祈りとみことばの研究によって神と交わることを怠っている。「わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」とキリストが言われたことを忘れている。彼らは、キリストから遠く離れて歩いている。そのために、彼らの生活には、キリストの恵みがあふれず、利己的性質があらわれてくるのである。彼らの奉仕は、最高位を望む野心や、くだかれていない心の粗暴なみにくい性質のために汚されている。クリスチャンの働きが失敗に終わるおもな原因がここにある。またこれが、実がわずかしき実らない原因でもある。

「富の惑わし」富を愛することは、人の心をとらえて惑わす力をもっている。世の財宝を持っている者は、と

かく、彼らに富を得る力を与えるのが神であることを忘れる。「自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た」と彼らは言う(申命記八ノ一七)。彼らの富は、神に対する感謝の念を起こさせるどころか、かえって自己称揚の念を起こさせる。彼らは、神のおかげをこうおり、同胞に対して義務が負わされていることを忘れる。富は、神の栄光と人類向上のために用いるべきタラントであると考えずに、自己のために用いるものであると思う。富をこのように使用するならば、人間の中に神の性質を啓発させることにはならないで、サタンの性質を助長することになる。みことばの種は、いばらの中でふさがれているのである。

「快樂」ただ自分の楽しみだけを追求するところの娛樂は危険である。すべて肉体を弱らせ、知力をくもらせ、靈的知覺をまひさせるような習慣は、「たましいに戦いをいどむ肉の欲」である(ペテロ第一・二ノ一一)。

「その他のいろいろの欲」これらのものは、必ずしも何か罪深いものというわけではない。しかし、それは、神の国をさしおいて第一位におかれるもののことをいうのである。人の心を神から奪い去り、心の愛情をキリストから引き離すものは、なんであつても、魂の敵である。

### 若い心という地

青少年の心が若い力にあふれ、發育盛りのときには、自分の野心などのことばかりに心を奪われるという大きな誘惑がある。世の中の仕事が成功すると、とかく、良心がにぶり、品性の眞の価値を正しく評価することができなくなるものである。また周囲の状態が、それを助長するようなときには、青少年は、ますます神のみことばに禁じられている方向に進んでいく。

成長期にある子供たちを持った親の責任は、実に重大である。彼らは、子供たちに正しい感化を与えなければならない。そして、正しい人生観と人生の真の成功とはどんなものであるかを教えるように、研究しなければならない。ところが、そうではなくて、子供たちが世的の繁栄を得ることを第一にしている親がなんと多いことであろう。子供たちの友だちを選ぶときにも、みな、これを念頭においている。多くの親は、大都会に住んで、子供たちを上流の人びとと交際させるのである。こうして世俗を愛する心と誇りを助長している。こうしたふんい気の中では、心も魂も萎縮(いしゆく)してしまう。彼らは、人生の高貴な目標を見失ってしまう。神の子として永遠の嗣業を受ける特権は、世俗の利益に心を迷わされて捨ててしまったのである。

子供たちの娯楽を好む心に、満足を与えることによって、彼らを幸福にしてやろうとする親が多い。彼らは、子供たちがスポーツに参加し、パーティーに出かけるのを許し、虚飾と自己満足のために、勝手に金を費やすまにさせている。快樂に対する欲求は、満たせば満たすほど、強烈になってくる。これらの青年たちの関心は、ますますスポーツに奪われ、それが人生の大目的であるかのように思ってしまう。そして、怠惰、放縱の癖がつき、堅実なクリスチャンになる望みがなくなってしまう。

また、真理のとりででなければならぬ教会までが、人びとの快樂追求心を助長しているのを見受ける。宗教的目的のために資金を募集するにも、多くの教会は、どんな手段に訴えるであろうか。それには、バザーとか、夕食会とか、小間物市とか、あるいは宝くじといった方法さえとられている。神を礼拝するためにささげられた場所が、こうして飲み食いや売買のためや、宴樂などのために汚されている。神の家に対する敬意と、神の礼拝に対する敬虔な態度とが青年たちの心から失われていくのである。自制の力は弱まる。我欲、食欲、外見の虚飾など

は、強く人の心を捕え、彼らがほしいままな生活をしているうちに、ますます深みに落ちこんでいくのである。

快楽と娯楽の追求は、都会を中心に行なわれている。都会のほうが便利なので、子供たちの住居を都会に選ぶ親が多くいるが、やがて彼らの期待は裏切られ、彼らがあやまちに気づいたときには、すでにおそろきるのである。今日の都会は、急速にソドムとゴモラのようになっている。多くの休日は、怠惰を助長している。刺激の強いスポーツ、劇場、競馬、かけ事、酒、宴会などは、種々の欲情を極度に刺激する。青年たちは、このような風潮に感化されている。ただ自分の娯楽のみを追求する者は、潮のように寄せてくる誘惑に門を開いている。彼らは、社交上の歓楽や前後をわきまえない遊興にふけている。こうした快楽を愛する人びとの交際は、彼らの心を陶醉状態におとしめている。彼らは、一つの道楽から次の道楽へと誘いこまれて、ついには、有用な生活を送りたいという希望も能力も失ってしまう。彼らの宗教的願望は冷えきって、霊的生活はやみに閉ざされる。人の心のけだかい能力と、人を霊的世界に結びつけるものがごとく低下してしまう。

時には、こうしたことの愚かさを悟って悔い改めるものもある。神は、彼らをお許しになることに変わりはない。しかし、彼らは、自分自身の魂を傷つけ、一生の間、自分の身を危険にさらしてきたのである。彼らは、善悪に対して鋭敏な識別力をもっているべきなのに、その大半が破壊されて、聖霊の導きの声を認めたり、また、サタンの策略を見破ることができないまでに鈍くなった。危険にさらされたとき、ともすると誘惑におちいり、神から離れてしまうのである。こうして、快楽を追求していく果ては、現世においても、また、来世においても破滅以外の何ものでもないのである。

サタンが人の魂をおとしめようとして、人生のゲームで打った手は、世の心づかい、富、快楽である。「世

と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちがない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである」と警告されている(ヨハネ第一・二ノ一五、一六)。「あなたがたが放縦や、泥酔、世の煩いのために、心が鈍」らないように、「よく注意していなさい」と手にとるように人の心を読まれるかたが言われるのである(ルカ二一ノ三四)。使徒パウロも聖霊に感じて書いている。「富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまな情欲に陥るのである。金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした」(テモテ第一・六ノ九、一〇)。

### 土地の準備

種まきのたとえ全体を通じて、種まきの結果がこのように相違しているのは、土地の状態いかんによるものであることを、キリストは示された。どの場合を見ても、種をまく人と種は同じである。神のみことばが、わたしたちの心と生活になんの効果もあらわさないとすれば、その原因は、わたしたちにあることを、こうして教えておられるのである。しかし、このような結果も、決してどうにもならないというものではない。確かに、わたしたちは自分を変えることはできない。けれども、わたしたちには選択の力がある。そして、自分が将来、何になるかは、自分が決めるのである。道ばた、石地、いばらの地の聴衆は、いつまでもそのままいる必要はないのである。神の聖霊は、常に、世のことに心を奪ってしまう迷夢から、わたしたちをさまし、永遠の富に対する願

いを起こさせようと働かれる。人びとが、神のことはに無関心であったり、おろそかであったりするのは、聖霊を拒むからである。心がたくなで、よい種が根をおろすことができず、悪がはびこって、よい種の成長をふさいでしまうのは、その人びと自身の責任である。

心の畑は、耕さなければならない。土地は、罪に対する真心からの悔い改めによって、くだかれなければならない。悪魔的毒草は、ぬかなければならない。いばらが一面にはえていた土地はけんめいに努力してこそはじめて回復することができるのである。そのように、生まれながらの心の悪の傾向も、イエスの名と力によって、熱心に努力してこそ、打ち勝つことができるのである。神は、預言者によって命じておられる。「あなたがたの新田を耕せ、いばらの中に種をまくな。」「あなたがたは自分のために正義をまき、いつくしみの実を刈り取」れ（エレミヤ書四ノ三、ホセア書一〇ノ一二）。神は、このようなことを、わたしたちのために成しとげようと望んで、わたしたちの協力を求めておられるのである。

種をまく者は、人びとが福音を受けるようになるために、彼らの心の準備をしなければならない。みことばを人びとに伝える伝道においても説教が多すぎて、人の心に真に接する時が少ないのである。失われた魂に個人的に働きかけなければならない。キリストの持つておられたような同情をいだいて、個人的に人に近づき、永遠の生命という大きな事ながらに彼らの注意を呼び起こさなければならない。彼らの心はふみつけられた道のように固く、救い主について語ってもおぼたのように思われる場合がある。しかし、論理が動かし得ず、議論も説得する力がないと思われるときにも、個人的な奉仕のうちにあらわされるキリストの愛は、石の心をも和らげ、真理の種が根をおろすようになるのである。

このようにして、種をまく者は、種がいばらにふさがれたり、または、土が浅いために枯れたりしないように、手入れをしていなければならない。まず、クリスチャン生活の出発点において、すべての信者に、その基本的原則を教えなければならない。ただキリストの犠牲によって救われたということだけでなく、キリストの生活を自分の生活とし、キリストの品性を自分の品性にすべきであることをも教えなければならない。重荷を背負うことと、生まれながらの傾向に勝利すべきことを、すべての者に教えなければならない。キリストの自己犠牲にならない、キリストのよき兵卒として苦難に耐えて、キリストのために働くことの幸福を彼らに教えなければならない。また、キリストの愛にたよって、すべての思いわずらいを主にゆだねることを学ばせ、主に魂を導く喜びを味わわせなければならない。失われた者に愛と関心を寄せることによって、彼らは、自己を忘れてしまうのである。世の快樂は、ひきつける力を失い、世の重荷も苦にならなくなる。真理の鋤(すき)はその任務を果たし、未開の土地を掘り起こすのである。こうしてただ、いばらの上の部分を切るばかりでなくて、それを根から引き抜いてしまふのである。

### よい地に

種をまく者は、いつも失望ばかりを味わうのではない。救い主は、よい地に落ちた種についてお語りになった。これは、「御言を聞いて悟る人のことであって、そういう人が実を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである。」「良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。」



良い地に

「正しい良い心」とたとえの中でいわれているのは、罪のない心のことではない。なぜなら、福音は失われた者に宣べ伝えられるからである。キリストも、「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」といわれた(マルコ二ノ一七)。それは、聖霊のささやきに従う正しい心の持ち主で、罪を告白して、神のあわれみと愛の必要を感じる人のことである。また、まじめに真理を学び、それに従おうとする人である。よい心とは、信じる心のことで、神のことはを信じる心である。信仰がなければ、みことばを受けいれることができない。「神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることを、必ず信じるはずだからである」(ヘブル一ノ六)。

これは、「御言を聞いて悟る人のことである」。キリストの時代のパリサイ人は、見ることがないようにと目を閉じ、聞くことがないように耳をふさいでいたので、真理を悟ることができなかった。彼らは、自分たちの故意



の無知と、ことさらに自分たちの目を盲目にした刑罰を受けなければならなかった。しかし、キリストは、弟子たちに、心を開いて教えを受け、快く信じるようにとお教えになった。彼らは、目で見、耳で聞いたことを信じたので、さいわいであると、主はいわれたのである。

良い地の聴衆は、「それを人間の言葉としてではなく、神の言として——事実そのとおりであるが——受け入れた(テサロニケ第一・一ノ一二)」。聖書を自分に語りかける神のことばとして受けいれる人だけが真に学ぶ者である。彼は、みことばに強く心を打たれる、ことばは彼にとって生きた実在なのである。彼は、みことばを受けいれるために心を開いて理解しようとする。コルネリオと彼の友人たちは、このような人びとであった。そして、使徒ペテロに、「今わたしたちは、主があなたにお告げになったことを残らず伺おうとして、みな神のみ前にまかり出ているのです」といった(使徒行伝一〇ノ二三)。

真理の知識が与えられるのは、知力がすぐれているからではない。それは、純粋な目的をもって、熱心にすがっていく単純な信仰によるのである。心を低くして神の導きを求める者に、天使は近づく。真理の豊富な宝を開くために、聖霊が彼らに与えられるのである。

良い地の聴衆は、みことばを聞いてそれをしまっておく。サタンとすべての悪天使たちも、彼らからみことばを奪い去ることはできない。

ただ単に、みことばを聞いたり、読んだりするだけでは十分でない。みことばから恵みを受けたいと思う者は、示された真理についてよくめい想しなければならぬ。わたしたちは、細心の注意と熱心な祈りをもって、真理のことを深く考えつつ学び、みことばの精神を体得しなければならぬ。

偉大でしかも純粋な思想をもって、わたしたちの心を満たすようにせよと、神は命じておられる。神は、わたしたちが、神の愛とあわれみをめい想し、偉大な救済の計画の中にひめられた、神の驚くべきお働きを研究することを望んでおられる。そうすれば、わたしたちの真理に対する認識は、ますます明りようになっていく。そして、純潔と明快な思想に対するわたしたちの願いがますます強まってくる。清い思想をいだき、純潔なふんい気の中に宿っている魂は、聖書を研究して、神と交わることによって、変えられていくのである。

「実を結び」みことばを聞いて、それをたくわえているものは、服従という実を結ぶ。魂の中に受けいれた神のことばは、よい行ないとなってあらわれる。キリストのような品性と生活とが、その結果となってあらわれてくるのである。キリストは、ご自分について次のようにいわれた。「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」（詩篇四〇ノ八）。「それは、わたし自身の考えですのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである」（ヨハネ五ノ三〇）。「『彼にある』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」と聖書にあるのである（ヨハネ第一・二ノ六）。

しばしば、神のみことばは、人間の先天的、あるいは後天的性質、または、社会の習慣などと衝突することがある。けれども、良い地という聴衆は、みことばを受けいれるときにそのいつさいの条件と要求とを受けいれるのである。そして、これまでの習慣や風習などを神のことばに従わせるのである。彼にとって、有限で誤りやすい人間の命令などは、無限の神の戒めとは比較することができないほど全く無意味なものになってしまう。彼は、まっしぐらに、ただ永遠の生命のみを追い求め、どんな犠牲も迫害も死さえいとわずに真理に従うのである。

また、彼は、「耐え忍んで」実を結ぶのである。神のみことばを受けいれる者には、困難や試練がないというわ

けではない。しかし、苦難に臨んでも、真のクリスチャンは、動揺したり、疑惑をいだいたり、失望したりはしないのである。たとえ、事態がどのように発展するかをはっきりと見ることができず、神の摂理の目的を悟ることができないとしても、確信を投げすててはならない。そのようなときには、主の情深いあわれみを思い起こして、わたしたちの思いわずらいを主にゆだね、忍耐して、主の救いを待たなければならぬ。

戦いを経ることによって、霊的命は強められるのである。試練に耐えることによって、品性は堅固になり、霊の結ぶ美しい徳が養われる。信仰、柔和、愛といった美しい完全な実は、暴風と暗黒の中で最もよく成熟するものなのである。

「農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている」(ヤコブ五ノ七)。そのようにクリスチャンは、神のことはが自分の生活の中で実るのを忍耐して待たなければならない。わたしたちが聖霊によって与えられる美德を祈り求める場合に、神は、わたしたちをそのような実を結ぶことができる環境におくことによって、わたしたちの祈りに答えてくださることがたびたびある。しかし、わたしたちは、神の目的が理解できないで、うろたえてしまう。しかし、この成長と結実の過程を通らなければ、だれ一人として、このような実を結ぶことはできないのである。わたしたちのなすべき分は、神のことはを受けいれて、それをしっかりと心に保っていて、みことばの支配に全く自分をゆだねることである。そうすれば、みことばの与えられた目的が、わたしたちの中に完成されるのである。

「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行つて、その人と一緒に住むであろう」とキリストは言われた(ヨハネ一

四ノ二三。わたしたちは、強く完全な神の意志に心を引きつけられてしまう。それは、わたしたちが、尽きない能力の源と生きたつながりを持つからである。わたしたちの信仰生活は、イエス・キリストに全く捕えられてしまう。もはや、ありきたりの利己的生活は送らなくなり、キリストがわたしたちの内に住んでくださる。イエスの品性がわたしたちの中に再現される。このようにして、わたしたちは、聖霊の実を結び、「三十倍、六十倍、百倍」にもなるのである。

# 生長の条件

本章は、マルコ四ノ二六―二九に基づく。

種まきのたとえば、さまざまの疑問を人々の心にいだかせることになった。聴衆の中には、キリストが地上に王国を建設なさらないことを悟った者もあつたが、不思議な感に打たれ、とまどう者も多かつた。キリストは、このような人びとの困惑をござんになつた。そして、別のたとえばをお用いになつて、現世的王国の迷夢からさめさせ、魂の中に働く神の恵みのことに人びとの心を向けさせようとなさつた。

「また言われた、『神の国は、ある人が地に種をまくようなものである。夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育つて行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。実がいると、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである。』」

「刈入れ時がきたから」かまを入れるのは、キリストにほかならない。最後の大きいなる日に、地の収穫をかりとるのは、キリストである。ところが、種をまく者は、キリストに代わつて働く者を表わしている。「種は芽を

出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない」といわれているが、神のみ子は、そうではない。キリストは、命ぜられた仕事をなおざりにして眠ったりなさらない。彼は、昼も夜も見守っておられるのである。種がどのように育つかを知らずにおられるのではない。

種のたとえば、神が自然界に働いておられることを示している。種の中には、神ご自身が植えつけられた発芽力がある。しかし、種をそのままにしておいたのでは、発芽する力はない。種の発芽を助けるために、人間の側でしなければならないことがある。人間は土を耕して肥料をほどこし、そして種をまくのである。また、畑の耕作もしなければならない。しかし、人間の力には限度がある。どんな能力と知恵をもってしても、種から作物を発生させることはできない。人間は、力の限りを尽くしたあとでもなお、神の力に依存しなければならない。神は、種まきから収穫までの驚くべき段階を一つずつ、全能の力によって結びつけられたのである。

種には命があり、土には力がある。無限の力が昼となく夜となく活動していなければ、種は、実を結ばない。乾燥した原野にうるおいを与えるために、雨が降らなければならない。また、太陽は熱を与え、埋もれた種には電力が通じなければならない。創造主が植えつけられた命は、創造主だけが呼び起こすことができるのである。どの種の発芽も、どの植物の成長も、みな神の力によるのである。

「地が芽をいだし、園がまいたものを生やすように、主なる神は義と誉とを、もろもろの国の前に、生やされる」(イザヤ書六十一)。自然界の種まきと霊の種まきは同じで、真理を教える者は、まず心の土地の用意をしてから種をまかなければならない。しかし、命を発生させる力は、神からだけくるのである。人間には限界があって、それ以上はどんなに努力してもむだである。わたしたちは、みことばを宣べ伝えるのではあるが、魂を生き

かえらせる力を与えることはできない。また、義を生じ賛美の声をあげさせることもできない。みことばの宣教には、人以上の力が働かなければならない。ただ神の霊によってのみ、みことばは、生きた力を持つようになり、魂を造りかえて永遠の命に至らせる。キリストが弟子たちに印象づけようとなさったのは、このことであつた。弟子たちの持っている力が、彼らの働きに成功をもたらすのではなくて、神の奇跡を行なう力が、みことばに力を与えることを、お教えになった。

種をまく者の働きは、信仰の働きである。彼は種の発芽と成長の神秘を、理解することはできない。しかし、彼は、作物を豊かに実らせてくださる神の力に信頼している。種をまくということは、家族の食糧となる尊い穀物を投げすてるようなものである。ところが、それが、さらに増加して返ってくることを信じて、今あるものを地にまいているだけである。そのようにキリストのしもべたちもまた種が豊かに実ることを期待して働かなければならない。

よい種は、しばらくの間は、冷淡で利己的な世俗を愛する心の中に置かれて、それが根をおろしている様子を外部からは見る事ができないが、やがて、神の霊が魂の上に吹きかけられると、埋もれていた種から芽がはえてきて、神の栄光のために、実を結ぶようになるのである。わたしたちの一生の仕事の中でも、どれが実るようになるのかよくわからない。これであるか、あれであるかわからない。しかしこれは、わたしたちの決定すべき問題ではない。わたしたちは、自分の本分を尽くして、結果を神にゆだねればよいのである。「朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない。実るのは、これであるか、あれであるか、あるいは二つともに良いのであるか、あなたは知らないからである」(伝道の書一一ノ六)。「地のある限り、種まきの時も、刈入れの時も、

…やむことはないであろう」と神のお与えになったお約束は語っている（創世記八ノ二二）。農夫は、この約束を信じて、土地を耕し、種をまくのである。わたしたちも、霊的の種まきを、これと同じようにすべきである。「このように、わが口から出る言葉も、おなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事を果す」（イザヤ書五五ノ一）。「種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう」（詩篇<sup>（しへん）</sup>一二六ノ六）という神の約束を信じて働かなければならない。

種の発芽は、霊的命の発生を示し、作物の成長は、クリスチャンの成長の姿を美しく象徴している。自然界と同様に恩恵の世界でも、成長がみられなければ命があるとはいえない。作物は、成長するか、枯れるかのどちらかである。作物は、黙々と、人知れず、成長し続けるが、クリスチャン生活の成長もそれと同様である。成長中のどの段階においても、わたしたちの生命は完全であり得るのである。しかし、神がわたしたちのために備えられた目的を達成するためには、継続的に前進する必要がある。きよめは一生の仕事である。わたしたちの機会が増加するにつれて、経験も広くなり、知識も加わるのである。そして次第に重い責任を負うことができるようになり、特権が与えられるにつれて、ますます円熟するのである。

苗木は、その生命をささえるために神がお備えになったものを受けて、成長するのである。苗木は地中に根をおろし、日光を浴び、露や雨にうるおされる。空気中から生命をささえる養分を受ける。それと同じように、クリスチャンも神がお備えになるものを受けて成長しなければならない。自分たちの無力を感じつつも、豊かな経験を得るために、与えられたすべての機会を活用しなければならない。苗木が地の中に根をおろすように、わたしたちは、キリストの中に深く根をおろさなければならない。また、苗木が太陽の光や露や雨を受けるように、



わたしたちも、心を開いて、聖霊を受けなければならない。それは、「権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」と万軍の主は言われる(ゼカリヤ書四ノ六)。わたしたちの心がキリストをめい想し続けているならば、主は、「冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される」のである(ホセア書六ノ三)。主は、義の太陽のように上り、「その翼には、いやす力を備えている」(マラキ書四ノ二)。わたしたちは、「ゆりのように花咲き」園のように栄え、ぶどうの木のように花咲くのである(ホセア書一四ノ五、七)。キリストをわたしたちの個人的救い主と仰いで信頼することによって、わたしたちは、すべてのことにおいて、わたしたちのかしらであるキリストのよつに成長するのである。

「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。」農夫が種をまき、作物の手入れをするのは、穀物を実らせるためである。飢えたものに食を与え、将来の収穫に備えて種をたくわえることを望むのである。そのように、天の農夫であるキリストも、ご自分の労苦と犠牲に対する報いとして収穫を期待なさるのである。キリストは、人びとの心の中にご自分のかたちを再現しようとしておられ、現に彼を信じる者によって、このことが実現されているのである。クリスチャン生活の目的は、実を結ぶことである。すなわち、信者の中にキリストの品性が再現され、それがまた他の人びとの中に再現されるようになるためである。

草木は、ただ自分のために芽ばえ、生長し、実を結ぶのではなくて、「種まく者に種を与え、食べる者にかてを与える」ためである(イザヤ書五五ノ一〇)。そのように人は、自分だけのために生きるものではない。クリスチャンは、キリストの代表者として、他の魂を救うために、この世界に存在しているのである。

自己中心の生活には、成長もなければ、実を結ぶこともない。もし、キリストを自分の救い主として信じたな

らば、自分を忘れて、他を助けようと努力するはずである。わたしたちは、キリストの愛とあわれみについて語り、負わせられるすべての義務を果たし、心には、救霊の責任を感じて、失われた者を救うために、力の限りを尽くさなければならぬのである。もしも、わたしたちが、キリストの霊、すなわち、他に対する無我の愛と働きの精神を受けるならば、自然に成長して、実を結ぶのである。あなたの品性にはみ霊(たま)の実が熟し、信仰は増し加わり、確信は強固になり、愛は完成される。そして、すべての純真なこと、すべての尊ぶべきこと、すべての愛すべきことにおいて、ますますキリストのみかたちを反映するようになるのである。

「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」である(ガラテヤ五ノ二二、二三)。この実は、決して滅びうせることがなく、永遠の命に至る収穫をもたらすのである。

「実がいと、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである。」キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである。

主イエス・キリストの再臨を待ち望むばかりでなく、それを早めることが、すべてのクリスチャンの特権である(ペテロ第二・三ノ一二文語訳参照)。キリストの名をとなえるすべての者が、神のみ栄えのために実を結ぶなら、福音の種は、どんなにすみやかに、全世界にまかれることであろう。世界の最後の大収穫は、急速に熟すであろう。そして、この尊い実を集めるために、キリストはおいでになるのである。

第4章

小さな種が大きな木に

本章は、マタイ一三ノ三一、三二、マルコ四ノ三〇―三二、ルカ一三ノ一八、一九に基づく。

キリストの教えに耳を傾けていた群衆の中には、パリサイ人がたくさんいた。イエスをメシヤであると認めるものが、群衆の中にわずかしかないのを、彼らは軽べつの目でみていた。そして、この見ばえのしない教師が、どうしてイスラエルを世界の主権を握った国家にすることができであろうかと心の中で疑った。富も権力も地位も持つことなくして、どうして新しい王国を建設することができであろうか。キリストは、彼らのこのような考えをすばやく読みとって、彼らにお答えになった。

「神の国を何に比べようか。また、どんな譬で言いあらわそうか。」神の国になぞらえることができるものは、この地上の政府のどこにも見いだすことはできなかった。また、一般の社会制度の中にも、神の国の象徴になるものはなかった。「それは一粒のからし種のようなものである。地にまかれる時には、地上のどんな種よりも小さいが、まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる。」

種の中の胚種(はいしゅ)は、神が種の中に植えつけられた生命の原則によって生長するのである。種の發育は、全く人間の力によるものではない。キリストの王国でもそれと同様である。それは、新創造である。その發達の原則は、世界の諸国を支配している原則とは正反對のものである。地上の政府は、武力によって目的を達し、戦争によって領土を保持する。しかし、新しい国の建設者は、平和の君である。聖靈は、おそろしい猛獸によって地上の王国を象徴したが、キリストは「世の罪を取り除く神の小羊」である(ヨハネ一ノ二九)。暴力をつかって良心をしいることは、小羊の政策ではない。ユダヤ人は、この世の王国の建設と同じ方法で、神の国が建てられることを期待し、正義をおし進めるためには、外的手段に訴えて、いろいろの策を講じたのである。しかし、キリストは、人の心に原則をお植えになるのである。真理と義とを植えることによって、誤りと罪に対抗なさるのである。

キリストがこのたとえを語られたときに、からしの木があちこちにはえているのが見え、回りの草や穀類などよりも高くのびて、その枝が軽く風にゆれていた。鳥は枝から枝に飛び回り、その茂みの中でさえずっていた。ところが、このように大きくなつた植物の種といえば、種の中でも最も小さいものの一つであつた。それは、最初、若芽を出す。その強い生命力にあふれた芽は、ますます茂つて、大きな木になるのである。そのようにキリストの王国も、最初のうちは、取るに足らない微々たるもののように思われた。それを地上の国々に比較するならば、最も小さいもののように見えた。この世の支配者たちは、キリストの王權の主張をあざ笑つた。しかし福音の王国の命は、キリストの弟子たちにゆだねられた偉大な真理の中にひそんでいた。しかも、その成長はなんと早く、その感化はなんと広い範圍にまで及んだことであろう。キリストがこのたとえを語られたときには、

この新王国を代表したものは、少数のガリラヤの漁夫たちに過ぎなかった。彼らはまた、貧しかったので、このような少数の無学な弟子たちの仲間には加わるものではないと、強く主張する人びともあった。ところが、からし種は、生長してその枝を全世界に広げることになっていた。当時の民衆の心を満たしていた世界的国家の栄光が消え去ったあとにも、キリストの国は存続して、偉大な感化力を地のすみずみにまで及ぼすことになるのである。

このように、人の心の中の恵みの働きも、初めは、小さいのである。わずか一つのことば、人の魂にさし込む一すじの光、といった感化が、新しい生命の出発になるのである。いったい、だれがその結果を測りしることができらるであろうか。

からし種のたとえば、キリストの王国の成長のことばかりでなくて、その成長の各段階において、このたとえばの中でのべられていることがくり返されるのである。神は、各時代の神の教会に、その時、その時にふさわしい特別の真理と特別の仕事をとお与えになった。世の知者、学者にはかくされた真理が、幼児のようなけんそんな者にあらわされた。真理は自己犠牲を要求する。戦いもあれば、勝利も得なければならぬ。初めのうち、支持者の数は少なく、世の偉大な人びとや俗化した教会からは、反対され、軽べつされた。キリストの先駆者ヨハネはどうであろうか。彼は、ユダヤ民族の誇りと形式主義を恐れることなく責めた。また、ヨーロッパに福音を伝え、パウロとシラスはどうであろうか。彼らは、天幕作りであった。彼らが仲間とともに、トロアスからピリピに船出したときに、彼らの任務は、人の目にもつかない小さいことに思われた。また、「すでに老年」となって、鎖につながれたパウロは、カイザルの家の者にキリストを説いた。ローマ帝国の異教主義と戦った少数のどれいと

農民たちに目を向けて見よう。また、世の知恵の作り出した傑作ともいうべき大教会に対抗したマルチン・ルツターを見てみよう。彼は皇帝や法王の面前で、「わたしはここに立つ。わたしはこうせざるを得ない。神よ、わたしをお助けください」と叫んで、神のことに確く立った。ジョン・ウエスレーは、彼の時代の形式主義、肉欲主義、無神論のただ中であって、キリストとキリストの義を説いた。彼は、異教の世界の悲惨な状態に心を痛め、キリストの愛の使命を彼らに伝える特権が自分に与えられることを願った。ところが、教会の指導者は、「若者よ、すわりたまえ。神が異教徒の改心を望まれるなら、神は、何もわれらの助けを受けずとも、それをなさるであろう」と言ったのである。

現代の大宗教家たちは、幾世紀も前に真理の種を植えた者をほめたたえて、その記念碑を建てる。ところが、そうする一方、彼らは今日、その同じ種から生じてきたものをふみにじることが多いのではないだろうか。「モーセに神が語られたということは**知っている**。だが、あの人（キリスト）につかわされた使者はキリストを代表している」どこから来た者か、わたしたちは知らぬ」という叫びが依然としてくり返されている（ヨハネ九ノ二九）。初期におけると同様に、現代に対して特別に与えられた真理は、教会の権威者のところに見いだされるのではない。それは、これといった学識も知恵もないけれども、神のみことばを信じる男女のところにあるのである。

「兄弟たちよ。あなたがたは召された時のことを考えてみるがよい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない。それなのに神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、

この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである」(コリント第一・一ノ二六―二八)。「それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」(コリント第一・二ノ五)。

からし種のたとえば、この最終時代において勝利のうちに輝かしい成就を見るのである。小さな種が木になるのである。最後の警告使命が、「あらゆる国民、部族、国語」に宣べ伝えられ(黙示録一四ノ六―一四)、「その中から御名を負う民を選び出され」る(使徒行伝一五ノ一四)。そして、地は神の栄光によって照らされるのである(黙示録一八ノ一)。



神への信頼を自覚することは、わたしたちにとって大変重要なことである。人間がなにかをなしとげるためには、創造主との協力が必要なことを忘れてはならない。



## 自の法則を知る

家庭でも、学校でも、この種まきと種の生長とから、尊い教訓を子供たちに教えることができる。青少年には、自然の中に神の力が働いていることを認めさせなければならない。そうすれば、彼らは、目では見ることができない祝福を、信仰によって受けることができる。神は驚くべきお働きによって、大きな家族の必要を満たしておられることを知り、それとともに、神と協力する方法がわかってくると、もっと神を信じることができるようになり、彼ら自身の日常生活の中に、もっと神の力を自覚するようになる。

神は、地球を造られたのと同様に、神のことばによって、種を創造なさったのである。神は、みことばによって種に生長する力と、繁茂する力をお与えになった。神は、言われた、『地は青草と、種をもつ草と、種類にわたがって種のある実を結ぶ果樹とを地の上にはえさせよ。』そのようになった。…神は見て、良しとされた」

（創世記一ノ一一、一二）。今でも、種を生長させているのは、このことばである。太陽の光をめざして、種からもえ出る緑の葉は一つ一つ主のみことばの奇跡的力を物語っている。「主が仰せられると、そのようになり、命じられると堅く立った。」

「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください」と祈ることを、キリストは弟子たちにお教えにな

った。そして、野の草花を指さして、「野の草でさえ、神はこうに装って下さるなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあるのか」と保証されたのである（マタイ六ノ一一、三〇）。キリストは、この祈りに答えるため、また、この保証を果たすために、絶えず働いておられるのである。人間に衣服や食物を与えるために、目に見えない力が、人間のために常に活動を続けている。一見、捨て去られたように思われる種を生きた植物にするために、主は、いろいろの方法をお用いになる。そして、豊かな収穫をもたらすために必要なものを、適当にお与えになる。詩篇の記者は、美しく次のようにそのことを歌っている。

「あなたは地に臨んで、これに水をそそぎ、

これを大いに豊かにされる。

神の川は水で満ちている。

あなたはどのように備えて

彼らに穀物を与えられる。

あなたはその田みぞを豊かにつるおし、

そのつねを整え、夕立をもつてそれを柔らかにし、

そのもえ出るものを祝福し、

またその恵みをもって年の冠とされる。

あなたの道にはあぶらがしたたる」（詩篇六五ノ九——一）。

物質の世界は、神の支配のもとにある。自然界は、自然の法則に従っている。万物は、創造主のみこころを語り、また行なっている。雲、日光、露、雨、風、あらしなどはみな、神の支配のもとにあって、神の命令には絶対に従う。「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実」と麦が生長していくのは、それが神の法則に従っているからである（マルコ四ノ二八）。穀物の苗は、神の働きに逆らわない。であるから、季節がめぐってくるにつれて生長するのである。それなのに、神のかたちに造られ、理性と言語が与えられた人間だけが、神のたまものに対する感謝もあらわさず、みこころにも従わないということがあつてよからうか。理知をもった人間だけが、世界に災いをおよぼしてよいであろうか。

人間の命をささえることに貢献することは、みな神と人間とが力を合わせることによって得られる。種をまく人間の手のわざがなければ、収穫はあり得ない。一方、日光、雨、露、雲などによる神の力が働かないなら、作物は実らない。これは、どんな事業や、どんな研究でもまた、どんな分野でも同様である。さらに、霊的の事から、品性の形成、クリスチャン活動の各部門においても同じことが言える。そこには、わたしたちのなすべき仕事があるとともに、それに神の力が結びつかなければならない。そうでないと、わたしたちの努力は、全く無に帰してしまうのである。

霊的事からであろうと、物質的事からであろうと、人間がなにかをなしとげるためには、創造主との協力が必

要なことを忘れてはならない。わたしたちは、神のささえによって生きていることをどうしても自覚しなければならぬ。わたしたちはあまりにも人間に信頼し、人間の作り出したものにたよりすぎる。神が喜んで与えようとしておられる神の力にわたしたちは、ほとんど信頼していない。「わたしたちは神の同労者である」(コリント第一・三ノ九)。人間が分担することは、ごくわずかな部分である。しかし、キリストの神性と結ばれることにより、キリストの力が与えられて、すべてのことをすることができるのである。

種が次第に穀物に生長していくことは、子供の教育のよい実物教訓である。「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実」がみのる。このたとえを語られたイエスが、小さい種をつくり、それに活力を与え、その生長の法則をお定めになった。しかも、たとえば教える真理は、イエスご自身の生活の中に生きた現実となっており、あらわれていた。彼は、肉体においても、霊性においても、植物が示している生長の法則に従っており、そして、世のすべての青年たちも、その通りに従うことを望んでおられる。キリストは、天の主権者であり、栄光の王であられたにもかかわらず、ベツレヘムの赤子となり、しばらくの間、母の腕の中のか弱い幼児となられた。成長しては、従順な子として家業に従事し、おとなの知恵ではなく、子供にふさわしい知恵をもって語り、行動された。また、親を敬い、親のいいつけを守ってよく手助けをし、子供の能力に応じたことをなさった。しかし、キリストは、その成長のどの段階においても完全で、罪のない人として、単純な、かざり気のない美德をもっておられたのである。聖書には、彼の少年時代のことの次のように記録されている。「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった」。イエスの青年時代については、「イエスはますます

知恵が加わり、背だけも伸び、そして神と人から愛された」と書いてある(ルカ二ノ四〇、五二)。

ここに、親と教師がどんな働きをすべきかが教えられている。彼らは、青年たちの性質をよく育て、それぞれの成長の段階で、あたかも、花園の花が自然に開くように、その時期にふさわしい、自然の美を発揮するように導かなければならない。

自然のままのかざり気のない子供たちが一番人をひきつける。子供たちを特別あつかいにしたり、子供の言った小ざかしいことを彼らの面前で、また言ったりするのは、賢明ではない。彼らの容貌(ようぼう)やことばや行動をほめそやして虚栄心をあおってはならない。また、高価な衣服を着せたり、はでな服装をさせてはならない。こういうことは、子供の心に高慢な気持ちを起こさせ、友だちの心にはしつと心を起こさせる。

子供は、子供らしく無邪気に教育すべきである。彼らは、簡単な家事の手伝いや、その年令にふさわしい楽しみや経験で満足するように訓練しなければならない。子供時代はたとえの芽に相当する。芽には芽独特の美しさがある。無理に彼らをおとなびたませたものにするのではない。子供時代のはつらつさと美しさをできるだけ長く保たせたいものである。

小さい子供たちでも、その年令に相当した宗教経験をもって、クリスチャンになることができる。神が子供たちに期待しておられるのは、それだけである。彼らに霊的のことを教えなければならない。子供たちが、キリストの品性にならって品性を築くことができるように、親は、あらゆる機会を活用しなければならない。

自然界の神の法則によれば、原因があれば、必ず結果が生じるということである。収穫によって、何がまかれ

たかがわかる。なまけ者は自分のした仕事にせめられる。収穫が、彼のなまけたことの証拠となる。霊的なことでも同じである。その働きの結果をみて、すべての働き人の忠実さがはかられる。どんな仕事をしたか、勤勉であったかなまけたかは、収穫を見ればわかる。永遠の運命も同じようにして、決定されるのである。

どの種でも、まいた種の実を刈り取る。人生においても同じである。わたしたちは、すべて、あわれみ、同情、愛などの種をまかなければならない。なぜなら、まいたものの実を刈り取るからである。また、利己主義、利己心、自尊などの性質やわがままな行動には、すべて、それ相当の収穫がある。利己的な生活をして、肉の種をまくものは、その結果として滅びを刈り取るのである。

神は、人を滅ぼすようなかたではない。滅びにおちいる者は、自分で自分を滅ぼすのである。良心の警告をかえりみないものは、不信の種をまいて、必ず、その収穫を刈り取るのである。むかし、パロは、神の最初の警告をしりぞけて、強情の種をまいたために、強情の収穫を刈り取った。これは、何も神が彼を無理に信じられないものになさったのではなかった。パロのまいた不信の種がそれ相当の実を結んだのである。こうして、彼の抵抗は続き、ついに、エジプトの国は全く荒れ果て、パロの長子と、エジプト全国民の長子がごとく冷たいしかばねとなり、パロの全軍が馬と戦車もろともに、海底に沈んでしまうことになったのである。「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」というみことばがいかに真実であるかを、パロの生涯は、恐ろしいばかりに示したのである(ガラテヤ六ノ七)。人びとが、このことを自覚しさえすれば、どんなに種をまくことに注意することであろう。

まかれた種が収穫をもたらし、それがまたまかれて、収穫はさらに増し加わっていく。わたしたちと他人との

関係においても、この法則があてはまる。どの行為、どのことばも実を結ぶ種である。情け深い心からの親切、服従、自己犠牲などの行為は、他の人びとの心の中にふたたびはえ出て、それが彼らによって、また、他の人びとの心の中にまかれるのである。同様に、ねたみ、悪意、争いなどは、「苦い根」となってはえ、多くの人を汚すのである（ヘブル二二ノ一五）。そして、この「多くの人」は、どれだけ多数の人びとを毒することであろう。こうして、善と悪の種まきは、現世ならびに永遠にわたって続くのである。

霊的なことであろうが、物質界のことであろうが、物惜しみせずに施すことが、このたとえの中で教えられている。「すべての水のほとりに種を」まく者は、幸福であると主はいわれる（イザヤ書三二ノ二〇）。「わたしの考えはこうである。少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる」（コリント第二・九ノ六）。すべての水のほとりにまくことは、神のたまものを絶えず人びとにわかつことを意味する。それは、神の働きであろうが、人類の必要であろうが、援助が必要なところにわかつと与えることなのである。ところが、与えたからといって、自分が貧しくなることはない。「豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる」からである。種をまく者は、種をまいてふやす。神のたまものを忠実に人びとにわかつ者も同様である。彼らはわかつことによって、自分たちの祝福を増し加えるのである。神は、彼らが、人びとに与えることができるように、十分なものを約束しておられる。「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう」（ルカ六ノ

三八。

種まきと収穫には、これよりもっと多くのことが含まれている。わたしたちが神から与えられた物質的祝福を人びとに分け与えると、人びとは、わたしたちの心の中に愛と同情があふれているのを見て、神に賛美と感謝の念をいだくのである。こうして、心の畑は、霊的真理の種を受け入れる用意ができる。種をまく者に種をお与えになる神は、種を芽ばえさせ、永遠の命に至る実を結ばせてくださるのである。

種まきの話によってキリストは、ご自分をわたしたちの贖罪のために犠牲になさることを示された。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」と言われた(ヨハネ一ノ二四)。このように、キリストの死は、神の国のために実を結ぶことになる。命は、植物界の法則と同じように、イエスの死の結果として与えられるものである。

キリストとともに働く者として、実を結ぶことを願う者は、すべてまず地に落ちて死ななければならない。世界の必要という畑のうねの中に自分の命をまかななければならない。利己心と自己中心主義を殺さなければならない。しかし、この自己犠牲の法則は自己保存の法則でもある。地に埋もれた種は、実を結び、それがまたまかれる。こうして、収穫はふえていく。農夫は、まくことによって、穀物を保存するのである。そのように、人生において、与えることは、生きることである。保存される命とは、神と人との奉仕のために、おしげもなくささげられる命である。この世においてキリストのために、その命を犠牲にしたものは、それを保って、永遠の命に



至るのである。

種は、新しい生命にもえ出るために死ぬのである。ここに復活のことが教えられている。神を愛するものは、みな、天のエデンにおいてふたたび生きるのである。墓の中に横たえられ、朽ちてゆく者について、神は言われるのである。「朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえる」と(コリント第一・一五ノ四二、四三)。

以上は、種をまく者と種という自然の生きたたとえから学ぶ数多い教えの二、三にすぎない。親や教師がこのことを教える場合、その教訓を実際のものにしなければならぬ。子供たちに土をたがやさせ、種をまかせなさい。そして、子供たちに仕事をさせながら、親や教師たちは、心もまた畑であることを説明することができる。そこにはよい種や悪い種をまくことができ、畑と同じように、真理の種をまくためにたがやさなければならぬことを説明することができる。種をまくときには、キリストの死について教え、芽が出たときには、復活の真理について教えることができる。植物が生長するにつれて、自然と霊の種まきとを比較しながら教訓を続けて教えることができる。

青年にも、同じようにして教えなければならない。彼らに土を耕すことを教えなければならない。どの学校にも耕作の土地があるとよい。こうした土地は、神ご自身の教室であると思わなければならない。また、自然界は、

神の子供たちが研究すべき教科書とみなさなければならない。そして、そこから得た知識を心のかたとすることができるのである。

土地を耕し、地ならしをすることによって、常によい教訓を学ぶことができる。新しい開拓地に移って行って、すぐに収穫を得ようと期待する人はいない。土地を切り開いて種をまくまでにするには、熱心に励んで忍耐深く努力しなければならない。人の心の中の霊的働きもこれと同じである。土地を耕して恵みを受けようとすれば、心の中に神のことばをもって出て行かなければならない。そうすれば、心の畑が聖霊のなごやかな感化によってしめられて、碎かれることであろう。土地のために熱心に努力しなければ収穫は得られない。心の畑も同じである。神の霊の働きによって、きよめと訓練を受けてこそ、はじめて神の栄光のために実を結ぶことができるのである。

ときたま思い出したように耕したくらいでは、土地は地の産物を生じるものではない。注意深く、毎日世話をしなければならぬ。たびたび、土地を深く耕して、雑草に作物の栄養を奪われないようにしなければならぬ。まく者も耕す者も、収穫の準備をする。そうすれば、だれ一人畑に出て、不作を嘆く必要はない。

このようにして、土地を耕して、自然からの霊的教訓を学ぶ者には、主からの祝福が与えられる。土地を耕すときに、どんな宝がでてくるかは、人にはわからない。経験の豊かな人から得られる教えや、知者から受ける知識を軽んじてはならないのであるが、自分自身で教訓を集めることが必要である。土地を耕すことは、魂的教育となるのである。

種を発芽させて、昼も夜もこれを見守り、生長する力をお与えになるのは、わたしたちの創造主、天の王であ

る。神は、いまなお、神の子供たちに深い関心を寄せて守っておられるのである。地上の種をまく者がわたしたちの現世の命をささえるために種をまいているとき、天の種をまく者、キリストは、永遠の命に至る実を結ぶ種を魂の中にまかれるのである。

第 6 章

# 隠された宝を掘る

本章は、マタイ一三ノ四四に基づく。

「天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、その畑を買うのである。」

むかしは、宝を土の中に隠す風習があったが、その宝が、よく、強盗に盗まれたりした。また、国の統治者が変わるごとに、財産に重税が課せられた。その上、国土は、いつも敵軍の侵入にさらされていた。そのようなわけで、金持ちは、どこかに財産を隠しておかなければならなかった。かくし場所としては、土の中が一番安全であると思われるのであるが、そのたいせつな場所がわからなくなってしまいうことがよくあった。所有主が死んだり、投獄、追放などによっていなくなってしまうと、せっかく彼が苦心してたくわえた宝は、幸運な発見者の手にはいるのであった。こうしてなんの役にも立たない土地から古い貨幣や金銀の装飾品などが発見されることは、キリストの時代には、まれではなかったのである。

ある人が農地を借り受けて、牛に畑を耕させていると、ふと隠されていた宝を掘り当てた。彼は、宝を発見す

## 第6章 隠された宝を掘る



神についての実際的知識は、宇宙の豊かな宝物を人に開放する。これは神のみことばを探究することによって得られる知識である。

るなり、自分が素晴らしい幸運をつかんだことを知った。彼は、黄金をそのまま、元の隠し場所へもどして、家に帰り、全財産を売り払って、宝の隠されている畑を買うのである。家族も、隣人も、彼の気が狂ったのではないかと思う。彼らは、その畑を見ても、荒地になんの価値も認めない。しかし、本人は何事もよく承知の上である。そして、土地の所有権を手に入れると、自分のものになった宝を発見するために、その土地全体を捜すのである。

このたとえば、天の宝の価値と、それを獲得するためには、どんな努力をしなければならないかを教えている。畑の中に宝を発見した人は、隠された宝を手に入れるためには、ただちに全財産を売り払い、どんな努力をもうしない。そのように、天の宝を見いだした者は、真理の宝を手にするためには、どんな努力をもうとわず、どんな犠牲も高価すぎるとは思わないのである。

たとえばの中の宝の隠された畑は、聖書のことで、福音は、宝である。神のことばの中ほど、金鉱が縦横に走り、宝に満ちているものは、他のどこにもないのである。

### どのように隠されているか

福音の宝は、隠されているといわれている。自己を高く評価し、おなしい哲学思想に心を奪われた高慢な者は、贖罪の計画の美と力と神秘とを認めることができない。彼らは目があっても見ず、耳があっても聞かず知力はあるても、隠された宝を認めないのである。

時には、宝のかくされている場所の上を通ることもあろう。足の下に高価な宝が隠されているとはつゆ知らず、

疲れて木の陰に腰をおろして休んだりすることもある。ユダヤ人がちょうどそのようなありさまであった。ヘブル人には、真理が黄金の宝のように、託されていた。天にあるものにかなたどって定められたユダヤの制度は、キリストご自身が制定なさったものであった。贖罪の大真理が、型や象徴の中におおい隠されていた。それにもかかわらず、キリストがおいでになったときに、彼が、こうしたすべての象徴の指示していたお方であることを、ユダヤ人は認めなかった。彼らは、神のことばを持っていた。しかし、おかしながらの伝説や、聖書に対する人間的解釈のために、イエスの説かれる真理がおおい隠された。そして、聖書の霊的意味を見ることができなかった。彼らの前には、あらゆる知識の宝庫が開かれていたのに、それに気づかなかった。

神は、神の真理を、人から隠したりなさらない。彼らは、自分で、それをわかりにくくしているのである。キリストは、ご自分がメシヤである証拠をユダヤ人に十二分にお与えになった。彼の教えは、人びとの生活に決定的変化を要求した。もし彼らがキリストを受けいれるならば、彼らが尊重している人間の教えと伝説、利己的で不敬虔な習慣を捨てなければならなかった。永遠に変わらない真理を受けいれるには、犠牲を払わなければならなかった。このようなわけで、彼らは、キリストを固く信じることができるよう、神から与えられた最も確かな証拠を拒んでしまった。彼らは、旧約聖書を信じると公言しながら、キリストの生涯と品性とがどんなものであるかがしるされている聖書のおかしを認めなかった。もしそれを認めるとすれば、彼らも悔い改めなければならず、先入観も捨てなければならなかった。彼らは、それを恐れたのである。福音の宝であり、道であり、真理であり、命であるお方が彼らの中におられたにもかかわらず、彼らは天からの最大の賜物を拒んでしまったのである。

「しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである」(ヨハネ二二四二)。彼らは疑いもなくイエスが神の子であることを信じたけれども、イエスに対する信仰を告白することは、彼らの野望と相いれなかったのである。彼らには、天の宝を彼らの物とさせるだけの信仰がなかった。彼らは世の宝を求めていたのである。

今日も、人びとは、熱心に地上の宝を求めている。彼らの心は、利己心と野心に満たされている。世の富と名声、権力を得るために、人間の教えや伝説、人間の戒めなどを、神の戒め以上に重んじるのである。神のことは、このような人からは隠されているのである。

「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けられない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によつて判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(コリント第一・二二一四)。

「もしわたしたちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとつておおわれているのである。彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである」(コリント第二・四ノ三、四)。

## 宝の価値

救い主は、人びとが利益のために熱心に働いて、永遠の世界を見失っているのをごらんになって、この誤った状態を正そうとなさった。主は、なんとかして人の心をまひさせるまどわしの力を破ろうとして、声を大にして「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか、また、人はどんな代価を払って、



その命を買いもどすことができようか」と言われた(マタイ一六ノ二六)。彼は、墮落した人類が忘れてしまった天上の世界を彼らに示して、その永遠の实在を彼らが認めるように望まれた。彼は、ことばでは言い表わせない栄光に輝く無限の神の戸口にまで、彼らを導いて、そこにある宝をお見せになった。

この宝の価値は、金銀にまさり、地のどんな富にも比べることはできない。

「淵は言つ、『それはわたしのうちにはない』と。

また海は言つ、『わたしのもとにはない』と。

精金もこれと換えることはできない。

銀も量ってその価とすることはできない。

オフルの金をもつてしても、

その価を量ることはできない。

尊い縞(しま)めのも、サファイヤも同様である。

こがねも、玻璃(はり)もこれに並ぶことができない。

また精金の器物もこれと換えることができない。

さんごも水晶も言つに足りない。

知恵を得るのは真珠を得るのにまさる(ヨブ記二八ノ一四―一八)。

これが聖書の中に発見される宝である。聖書は、神がお与えになった大教科書であり、大教育者である。真の科学の基礎は、ことごとく聖書の中に含まれている。聖書の研究によって、あらゆる方面の知識を得ることができる。特に、科学中の科学である、救いの科学がこの中に含まれている。聖書は、はかり知れないキリストの富の隠された鉱山である。

真の高等教育は、神のことばを学んで、それに従うことによって得られる。神のことばを学ばず、神にも、天国にも人の心を向けさせない書物によって行なわれる教育は、教育の名をはずかしめるものである。

自然には驚くべき真理がひそんでいる。天、地、海のどこにも真理が満ちあふれている。こうした自然がわたしたちの教師である。自然は、天からの知恵と永遠の真理のことばをわたしたちに語りかける。しかし、墮落した人間はそれをさとらない。罪が人の視覚をくらせたので、自分の力だけでは、自然を神以上の力あるものと考えられない。神のことばを受けられないものは、どんな正しい教えに接しても深い感銘を受けることはできない。彼らは、自然の教訓をあまりにもゆがめて考えているために、自然は、かえって人の心を創造主から引き離すことにさえなるのである。

天来の教師の知恵よりも人間の知恵のほうがすぐれたものであると思っているものが多い。また、神の教科書は、時代あくれで、古くさく、興味が無いもののようになされている。しかし、聖霊によって命を与えられた者は、そうは思わない。彼らは、貴重な宝を見つけて、自分の持ち物を全部売り払って、宝の隠されている畑を買っているのである。彼らは、世の著名な筆者の論説をしるした書物の代わりに、世界最高の著者であり、最も偉大な教師であるイエスのことばを選ぶのである。イエスは、わたしたちのために、その命をお与えになったのである。

わたしたちは、イエスによって、永遠の命を受けることができるのである。

### 宝を無視した結果

神によらなくても、すばらしい知識を学ぶことができるものであると、サタンは人びとに思わせている。サタンは、アダムとエバを巧みにあざむいて神に反逆させてしまった。まずサタンは、神のことばに対する疑いを彼らにいだかせ、そして、その代わりに別の思想を与えている。サタンは、今日もなお、エデンで行なったのと同じ方法で人びとを欺いている。無神論著者の思想を教育の中に織り込む教師は、神への不信と律法にそむこうとする気持ちを青年の心の中に植えつけているのである。ところが、彼らは、そのようなことには全然気づかず、どんな結果になるかも自覚していないのである。

学校のあらゆる課程を修め、大学課程も終了してのちも、全力をあげて知識の獲得に努力する学生もあるであろう。ところが、ただそれだけで、神に関しては、なんの知識もなく、自分を支配している法則にも従わなければ、ただ自滅の道を行くほかない。そのような人はいつの間にか、悪習慣のとりことなり、自尊と自製の力を失い、重大なことからの判断を誤り、身も心も考えなしに粗末に扱うようになる。そして、ついに悪習慣のために破滅におちいつてしまうのである。これでは、幸福をつかむことはできない。清く健全な原則に従って生活をしていないために、心の平和がかき乱される。そして、長年の熱心な勉強もむだになってしまう。この学生は、自分を破滅させてしまった。彼は、心身の力を正しく用いなかったために、体の宮を破壊した。そして、現世と来世の破滅を招いた。このような人は、世的宝を得ていたときに、宝を所有していると思っていた。しかし、聖書をす

てたために、何より尊い宝を犠牲にしてしまった。

## 宝の探究

わたしたちは、神のことばを研究の課題としなければならない。子供たちは、聖書の真理に従って教育しなければならぬ。これは尽きることのない宝である。ところが、人びとがその宝を見いだすことができないのは、それを自分のものとするまで捜さないためである。実に多くの人びとが、真理に関する推測だけで満足している。ただ表面だけの研究に満足して、すべての重要なことを知りつくしたと思い込んでいる。熱心に努力することは、神のみことばの中で、隠された宝を掘り出すことであるといわれているが、彼らは、自分たちでそうするには、あまりにもなまけ者で、人の言ったことばを真理だとうのみにする。ところが、人間の作り話は信頼できないばかりか、危険である。それは、神のおられるべきところに、人間をおき、「主がこう仰せになる」とあるべきところに、人間のことばを持つてくるのである。

キリストは真理である。キリストのことばは真理であつて、そこには表面に表われた以上の深い意味がこめられている。すべてキリストの言われたことは、一見みばえはなかったが、その外見に似合わぬ価値があつた。聖霊によって心を開かれた者は、これらのことばの価値をさとり、たとえば、これらが隠された宝であつても真理の宝石であることを認める。

神のことばは、人間の理論や思索によつては、とうてい理解することはできない。自分は哲学がわかると思っている人びとは、知識の倉を開き、教会を異端から守るためには、自分たちの説明がどうしても必要だと考える。

ところが、このような説明が、かえって、誤った理論と異端を持ちこむ結果になった。人は、こみいっていると思われる聖句をなんとかして説明しようと努めたが、それは、明りようにしようとしてかえってわかりにくくしてしまっただのである。

祭司やパリサイ人たちは、神のことばに彼らの解釈をつけて、偉大なことをしているように思っていた。しかし、キリストは、「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではないか」といわれた(マルコ二ノ二四)。また、あなたがたは「人間のいましめを教として教え」ていると、お責めになった(マルコ七ノ七)。彼らは、神のことばの教師であり、それに精通しているはずであつたにもかかわらず、みことばの実行者ではなかつた。サタンが、彼らの目をくらましていたために、ことばの真の意味をさとることができなかった。

今日、多くの人がこれと同じことをしている。多くの教会が、この罪に陥っている。今日のいわゆる知者、学者といわれる人びとが、昔のユダヤ人の教師たちと同じ経験をくり返す危険が多分にある。彼らが、神のことばを偽って解釈するために、人びとは、このような誤った思想にまどわされて、暗黒の中に閉ざされてしまう。

聖書は、伝説とか人間の思索などといった薄暗い光のもとで読む必要はない。聖書を人間の伝説や想像によって説明することは、あたかも、太陽の前に、たいまつをかざすようなものである。神のきよいことばは、地上のたいまつのごく微光によって照らされる必要はない。聖書それ自体が光であり、神の栄光のあらわれである。聖書と比べるならば、どんな光もその輝きがあせてしまうのである。

とはいふものの、聖書は、熱心に研究し、精密にしらべるべきものである。なまけ者が真理の明確な理解を持

つようになることはあり得ない。この世の中のどんな幸福も、熱心に耐え忍んで努力することなしに得られるものではない。どんな事業においても成功をおさめようとすれば、物事をしようとする意志と、必ず実がみられるという確信とがなければならぬ。霊的知識も、熱心な努力なしに得られるものではない。真理の宝を見いだそうと願うものは、鉱夫が地中に隠された宝を掘るように、自分で掘っていかねばならない。中途はんばなことではだめである。老いも若きも、神のことばを読むだけでなく、隠してある宝のように、祈りとともに真理を探究し、全心を打ちこんで研究することがたいせつである。こうする人びとは、必ず報いられる。それは、キリストが理解力を深めてくださるからである。

わたしたちの救いは、聖書の中の真理を知ることにかかっている。わたしたちがこの知識を持つことは、神のみこころである。尊い聖書を、飢えかわくように、さぐり、調べなさい。ちょうど、鉱夫が金鉱を発見するために、地中深くさぐるように、神のことばを調べなさい。あなたの神との関係と、あなたに対する神のみこころを確かめるまでは、決して探究をやめてはならないのである。「わたしの名によって願うことは、なんでもかなくてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう」とキリストは言われた(ヨハネ一四ノ一三、一四)。

敬神の念が厚く、才能のある人びとでさえ、永遠に実在するお方があるのを知りながらも、見えるもののために、見えないものの栄光がさえぎられて、理解できないことがよくあるものである。隠された宝の探究に成功しようとする者は、世の物を追求する以上の熱心さをもって追求しなければならぬ。その愛情と、力量のすべてを探究のためにささげなければならない。

また、不服従のために、聖書から学び得るはずのばく大な知識の扉が閉ざされてしまうことがある。理解するということは、神の戒めに服従することである。聖書は、人間の偏見と嫉視(しっし)に応じて変えられるべきものではない。聖書は、けんそんに真理の知識を求め、真理に従おうとする人だけが理解することができるのである。

わたしは、救われるために、何をすべきかと、あなたは、おたずねになるであろうか。それでは、あなたは、まず研究にはいるにあたって、先入観、すなわち自分のもっている先天的、後天的の考えを捨てなければならぬ。自分の意見を支持する目的で、聖書を探究するならば、決して真理を発見することはできない。主は、いたい、なんと言っておられるかということを学ぶために探究しなければならない。探究しているうちに、強く心に感銘を受け、たとえ、自説が真理と一致していないことがわかって、それに合わせようとして、真理を曲解せずに、与えられた光を受け入れなければならない。神のことばの中から驚くべきものを見ることができるよう、心を開かなければならない。

キリストを世の救い主として信じるためには、よく磨かれた知力がなければならない。そして、その知力は、天の宝を見わけて、その真価を認め得る心に支配されたものでなければならない。この信仰は、悔い改めと心の変化とも切り離すことができない。信仰をもつことは、発見された福音の宝に含まれているすべての義務とともに、福音を受けいれることである。

「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ三ノ三)。人間はいろいろと推測したり想像したりはできても、信仰の目がないならば、宝を見ることはできない。キリストは、このはかり知れない

尊い宝を、わたしたちのために確保するために、その生命をお与えになったのである。しかし、キリストの血を信じる信仰による新生が伴わないならば、それは滅び行く魂にとって、罪の許しにも宝にもならないのである。神のことばの真理を理解するためには、聖霊の光に照らされなければならない。太陽が暗黒を追いやって、光を降り注ぐのでなければ、自然界の美を見ることができない。そのように、神のことばという宝も、義の太陽の輝かしい光によってあらわされなければ、認めることはできない。

無限の愛と慈悲によって、天から送られた聖霊は、キリストに絶対的信仰をいだいているすべてのものに、神に関することを啓示する。聖霊は、魂の救いに関する重大な真理を、人の心に強く印象づける。こうして生命の道は、ふみあやまることができないほど明らかにされるのである。わたしたちが聖書を研究するときには、神の聖霊の光がみことばを照らし、わたしたちがみことばの宝をみとめて、理解できるようになることを祈り求めなければならない。

## 探究の報い

もうこれ以上、わたしには学ぶべき知識はないなどと、だれも考えてはならない。人間の知力には限界があり、人間の著作は学び尽くすことができるであろう。しかしどんなに高く、深く、広く想像をたくましくしてみても、神を見きわめることはできない。わたしたちの理解を越えたかなたに無限が横たわっている。わたしたちは、ただ、神の栄光と神の無限の知恵と知識とのほんのかすかな光をかいま見たに過ぎない。ちょうど、地下には金鉱が豊富にかくされていて、それを掘り当てる人がでてくるのを待っているのに、わたしたちは、その鉱山のほん



の表面だけを掘っていたようなものである。わたしたちは、ますます深く掘り下げなければならない。そうすると、みごとな宝を発見することができる。真の信仰によって、神の知識が人間の知識となるのである。

キリストの精神をもって、聖書を探究するものには、必ず報いが与えられる。人が幼児のようにすなおな態度で教えを受け、神に絶対的に服従するならば、神のことばの中に真理を見いだすことができる。人びとが従順になるときに、神の政府の計画を理解することができるようになるのである。探究者の前には天上の世界の美と栄光とがますます輝かしく開かれることであろう。そのとき、人類は、現在とは全く変わったものとなることである。というのは、真理の探究は、人間を高めるからである。贖罪、キリストの受肉、キリストの贖罪の犠牲などの神秘は、現在のようなばく然としたものではなくなる。このような問題に対して、わたしたちは、更に理解を深めるばかりでなく、その真価をより高く評価することができるようになる。

キリストが、父なる神に祈られた祈りの中に、わたしたちが忘れてはならない教訓が教えられている。それは「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがたがかわされたイエス・キリストとを知ることです」といわれたことばである(ヨハネ一七ノ三)。これが真の教育である。これが、人に力を与えるものである。神と、神がつかわされたイエス・キリストを体験によって知るとは、人間を神のみ姿に変えるのである。これは、人を自己を治めるものにする。低い性質の衝動と欲望とは、高度の意志の力に支配されるようになる。そして、それは、また、彼を神の子すなわち、天国の相続人とし、無限の神との交わりに入れ、宇宙の豊富な富を開いて見せるのである。

これが神のことばの探究によって得られる知識である。そして、この宝は、それを得ようとしてすべてをささげ

る者なら、だれにでも見いだすことができるものである。

「しかも、もし知識を呼び求め、

悟りを得ようと、あなたの声をあげ、

銀を求めるように、これを求め、

かくれた宝を尋ねるように、これを尋ねるならば、

あなたは、主を恐れることを悟り、

神を知ることができるようになる」(箴言(しんげん)二ノ三一五)。

第 7 章

# 人を生かす力

本章は、マタイ一三ノ五一、五二に基づく。

キリストは、人びとを教えると同時に、弟子たちを将来の働きのために教育しておられた。イエスの教えの中には、常に弟子たちに対する教訓が含まれていた。イエスは、網のたとえを語られたあとで、「あなたがたは、これらのことが皆わかったか」と彼らにおたずねになった。彼らは、「わかりました」と答えた。そこでイエスは、もう一つのたとえをお語りになって、今お教えになった真理を聞いたものの責任をお示しになった。「それだから、天国のことを学んだ学者は、新しいものと古いものとを、その倉から取り出す一家の主人のようなものである。」

一家の主人は、手にした宝をただしまっておくのではない。彼は、他に与えるために宝を持ち出す。宝は用いることによって増加するのである。この主人は、新しい宝や古い宝を持っている。そのように、弟子たちに与えられた真理は、世界に宣べ伝えるべきものであることを、キリストはお教えになった。そして、真理の知識も人に伝えれば伝えるほど増加するのである。

福音の使命を心に受け入れたものは、みな、その使命を他の人びとに宣べ伝えたいと願うものである。天から与えられたキリストの愛は、どうしても表わさなければならぬ。キリストを着たものは、聖霊が一步步導いてくださったことを振りかえって、その経験を語るのである。すなわち、自分が神と、神のおつかわしになったイエス・キリストとを知ろうとして、飢えかわいたことや、聖書研究の成果や祈りや自分の経験した魂の苦悩のことを話す。そして、キリストが「あなたに罪はゆるされた」といわれたことを語る。だれでも、このようなくことを秘密にしておくことはできない。キリストの愛に満たされたものは、かくしておかない。主が自分を聖なる真理の保管者にしてくださったその度合に応じて、他の人びとも同じ祝福をあたえようと望む。そして、彼らが神の豊かな富を人びとに語れば語るほど、キリストの恵みがますます彼らに与えられる。彼らは、幼児のようなすなおな心で、真心から服従する。彼らの魂は、きよめを慕い求める。そして、真理と恵みの宝が、ますます、彼らにあらわされるようになる。そして、それが全世界に伝えられる。

真理の大宝庫とは、神のことば、すなわち、文字に書かれた聖書、自然という書、そして神が人間の生活をお導きになる経験の書をいうのである。キリストのしもべたちが引き出すべき宝は、ここにある。真理の探究にあたっては、人間の知恵や偉大な人物にたよることをしないで、神に信頼すべきである。人の知恵は、神にとっては愚かなものである。主は、ご自分がお定めになった方法によってすべての探究者に、ご自分のことをお示しになるのである。

もし、キリストの弟子が、キリストのことばを信じて、それを実行するならば、どんな自然の研究でも理解できないものはない。どんなものでも、人に真理を伝えるためのよい手段となる。キリストの学校の生徒はみな、

自然科学という宝庫から知識を得なければならない。自然の美をめい想し、耕作や、木々の繁茂、あるいは天と地と海に満ちている驚異の中に秘められている教訓を学ぶならば、真理について、新しい観点を持つようになる。また、神が人を扱われる不思議な方法、人の生涯の中に見られる神の知恵と神の思慮深さなども、また、豊かな宝の倉であることがわかる。

しかし、神の知識が墮落した人類に最も明らかにあらわされたのは、聖書においてである。これは、キリストの無尽蔵の富の宝庫である。

神のことばとは、旧約聖書と新約聖書の両方をさしている。どちらが欠けても完全ではない。キリストは、旧約聖書の真理も新約聖書の真理と同様に価値があることを言明なさった。キリストは、今日、あがない主であると同様に、世の始めからのあがない主であられたのである。イエスが、人性によって神性をおおってこの世に來られる以前に、福音の使命はすでに、アダム、セツ、エノク、メトセラ、ノアによって伝えられたのである。アブラハムはカナンで、ロトはソドムで使命を伝えた。こうして、どの時代においても、忠実な使者たちは、きたるべきキリストのことを宣べた。ユダヤの儀式制度は、キリストご自身がお定めになったものであった。キリストこそユダヤ人の犠牲制度の基礎で、彼らの全宗教制度の偉大な実体である。犠牲がささげられたときに流された血は、神の小羊の犠牲をさし示していた。典型的ささげ物は、すべて、キリストによって成就した。

家長たちに示されたキリスト、犠牲制度に象徴され、律法に描かれ、預言者によって、啓示されたキリストが、旧約聖書の宝である。キリストの生涯、死、復活、それに、聖霊によってあらわされたキリストが、新約聖書の宝である。父の栄光の輝きであられるわたしたちの救い主は、旧約であると同時に新約でもあらわれる。

使徒たちは、預言者たちが予告したキリストの生涯と死とキリストのとりなしの証人として出て行くべきであった。キリストのけんそん、その純潔と聖潔、その比類なき愛が、彼らの伝えた主題であった。しかも、福音を完全に宣べ伝えるためには、キリストの生涯とその教えの中にあらわされたことばかりでなくて、救い主について旧約の預言者が予告し、犠牲制度に象徴されていたことについても語らなければならなかった。

キリストは、その教えの中で、ご自分が初めにお教えになった古い真理や家長と預言者を通じてご自分がお語りになった真理をお教えになった。ところが今度は、その真理に新しい見方をお与えになった。すると、その意味がなんと異なってみえたことであろう。イエスが説明なされると、光と靈性がみなぎるのであった。そして、主の御約束によって、弟子たちには、聖霊が与えられ、悟りが開かれて、神のことばが常に彼らの前に明らかにされるのであった。彼らは、新しい美に包まれた真理を、人びとに伝えることができた。

エデンの園で贖罪の最初の約束が語られてから、キリストの生涯、品性、とりなしの働きが人びとの研究題目であった。しかし、聖霊に感じた人は、みなこれらの主題を新鮮な光に照らして説き明かした。贖罪の真理には、絶えず発展し拡張する能力が伴っている。真理は、古いとは言っても、常に新しく、さらに大きな栄光と能力とを真理の探究者にあらわすのである。

真理には、どの時代でも新しい発展があつた。つまり、時代ごとに、その人々のための特別の神からの使命があつた。古い真理はみな重要である。新しい真理は古い真理から切り離されたものでなく、古いものの解明である。古い真理を理解して始めて、新しい真理を悟ることができる。キリストが弟子たちにご自分の復活の真理を示して、「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説

きあかされた」(ルカ二四ノ二七)。真理を新たに解き明かすことによって、輝く光が古いものをいっそう輝かしくする。新しい光を拒んでなおざりにする人は、実は、古いものを持っていない。それは、彼にとって、生きた力を失ったむなししい形式と化してしまうのである。

人びとの中には、旧約聖書の真理は、信じて教えるけれども、新約の方は拒否するという人がある。しかし、彼らはキリストの教えを拒否することによって、家長や預言者たちの語ったことをも信じないことを示している。「もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであろう。モーセは、わたしについて書いたのである」とキリストはおおせになった(ヨハネ五ノ四六)。従って、彼らが、どんなに旧約聖書を説いても力がないのである。

また、わたしたちは福音を信じて、福音を説いていると主張しながら、同様のあやまちにおちいつている人びとが多い。彼らは、キリストが「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」といわれた旧約聖書を無視している(ヨハネ五ノ三九)。旧約を拒むことは、事実上、新約を拒むことである。この二つは切り離すことのできない統一体である。だれでも福音を説かないで、神の律法を正しく語ることはできない。また、律法ははなれた福音を説くこともできない。律法は、福音の具体的表現であって、福音は、律法の解説である。律法は根であって、福音は、律法のかんばしい花であり、その結ぶ実である。

旧約聖書は、新約聖書を照らし、新約聖書は旧約聖書に光を投げかける。両者ともに、キリストによってあらわされた神の栄光の啓示である。どちらも、真理を示していて、熱心な探究者にたえず新しい意義深さを啓示する。

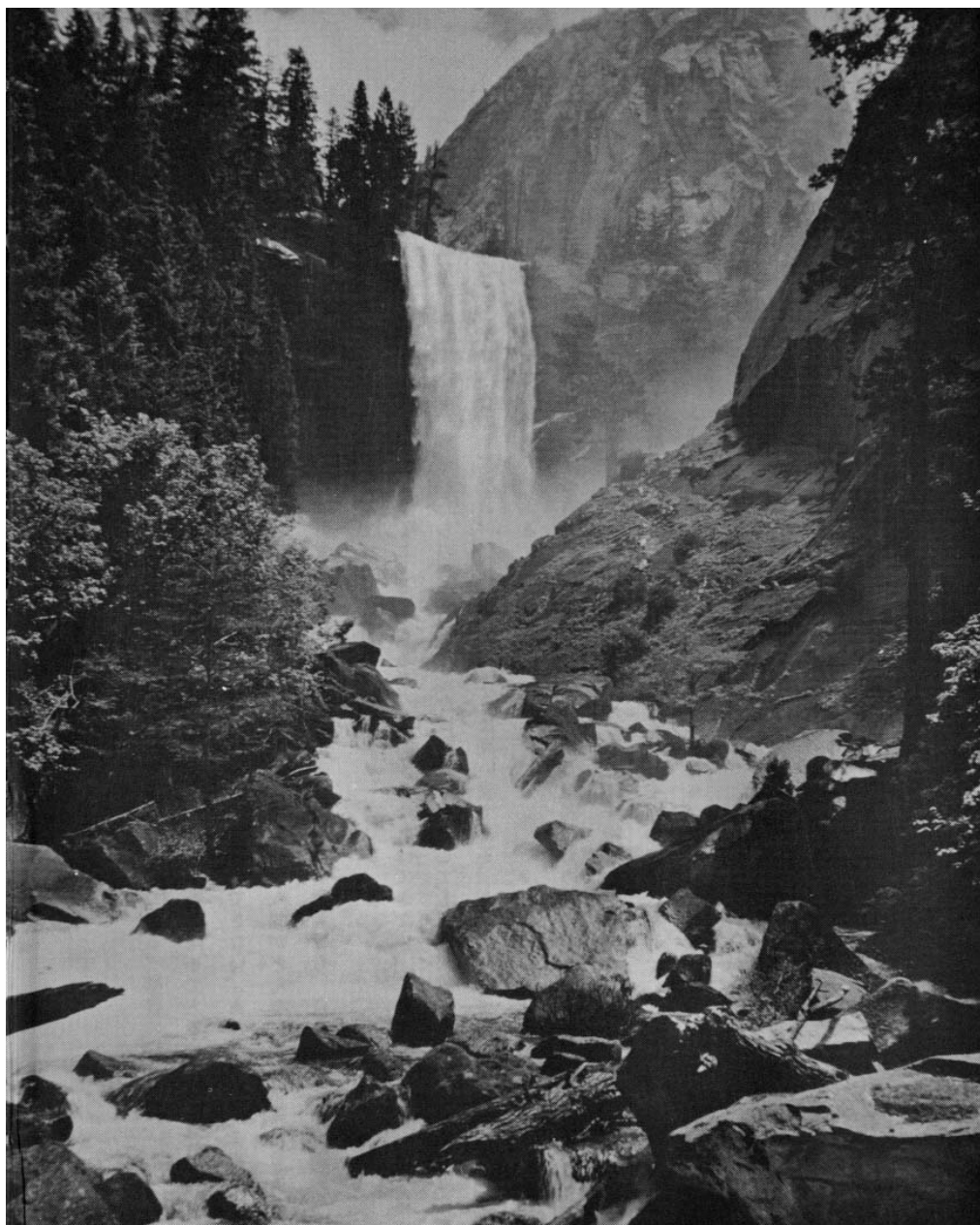
キリストにある真理、また、キリストによって与えられる真理は、無尽蔵である。聖書の探究者は、ちょうど泉の深みをながめていると、それがますます深く広がっていくように思えるのと同じである。人類の罪のあがないのために、み子をお与えになった神の愛の神秘は、とうてい現世では理解できない。あがない主のこの地上のわざは、人間がどんなに想像してみても、さぐり得ない崇高な課題である。人間がどんなに知力を働かせてこの神秘を解こうとしても、いたずらに疲労するだけである。どんなに勤勉な研究者でも、自分の前には、無限な大海がなおも果てしなく続いているのをさとることであろう。

イエスのうちにある真理は、経験することはできるが、説明することはできない。その高さ、広さ、深さは、人間の知識を超越している。わたしたちの想像力をどんなに働かせたとしても言語に絶する愛のあらましをただかすかに見ることができないにすぎない。これは、天のように高い愛である。そしてすべての人類に神のかたちを押すために、この地上に降ったのである。

ところが、この神のあわれみについて、わたしたちが知り得る範囲のものは、みな悟ることができる。これは、けんそんな悔いた心の者に示される。神がわたしたちのためにどんな犠牲を払われたかをわたしたちが知るにつれて、神のあわれみ深さを理解することができる。けんそんな心で神のことをさぐれば、贖罪という大主題が、わたしたちの研究課題として開かれる。この大主題は、わたしたちがながめればながめるほど輝きを増し、熱望すれば熱望するほど高く深くその偉大さを増していくのである。

わたしたちの命は、キリストの生命と結びつかなければならない。わたしたちは、常にキリストから受け、天から降った生きたパンであるキリストを食べ、いつも新鮮に、豊かに清水という宝を注ぎ出す泉の水を飲まなけ





キリスト教は生きて働く霊的活力であって、山間の冷たい溪流のように、疲れた者やかわいた者、重荷にあえぐ者を元気づける。

ればならない。いつも、主を目の前にあおいで、主に感謝と賛美をささげているならば、わたしたちの信仰生活は常に新鮮さを保つことができる。わたしたちの祈りは、ちょうど友人と語るように、神との会話のかたちになり、神は、わたしたちに個人的に、神の神秘について語りかけてくださるのである。わたしたちは、しばしば、尊いイエスの臨在を身近に感じることもある。昔、神がエノクと語られたときのように、神がわたしたちに近づくされると、わたしたちの心中も燃えるのをおぼえる。こうしたことがほんとうに、クリスチャンの経験となるときに、そのクリスチャン生活には、純真、けんそん、柔和、心のひくさなどがいちじるしくなり、接するすべての人に、彼がイエスと共にあって、イエスから学んだ者であることを感じさせるのである。

こうした経験の持ち主にとって、キリスト教は、生きた浸透力のある原則であって、生きて働く霊的活力であることがわかるであろう。そこには、新鮮さと能力があり、永遠の青春の歓喜がある。神のことばを受ける心は、水が蒸発してしまう池とか、せっかくの清水を保つことのできない破れた水槽のようなものではない。その冷たい水は、つきない泉からわき出る山間の溪流のようにしびきをあげて岩から岩へ飛び散って流れて、疲れた者やかわいた者、重荷にあえぐ者を元気づける。

このような経験こそ、真理を教える者がキリストの代表者となる資格そのものである。キリストの教えの精神は、その人の話や祈りに、力と率直さを与える。彼のキリストに関するあかしは偏狭な無気力なものではなくなる。牧師は、くり返し、くり返し、同じ説教をしたりしない。彼の心は、聖霊の光に常に照らされていることであろう。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、…生ける父がわたしをつかわされ、また、

わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう。…人を生かすものは霊であって、…わたしがあなたに話した言葉は霊であり、また命である」とキリストはいわれた（ヨハネ六ノ五四―六三）。

わたしたちが、キリストの肉を食べ、彼の血を飲むならば、わたしたちの伝道の働きの中に、永遠の命の要素が見られることであろう。わたしたちの心の中には、気のぬけた使い古した考えなどはなくなり、活気のない眠い説教もなくなる。たとえ古い真理を語ったとしても、今までと違った新しい見方をする。真理を新たに認めるのであるから、その明白なことと力とは、すべての者が感じることができるのである。このような牧師の指導のもとに聖霊の力を感じることができれば、躍動する新しい命に満たされるのを感じることであろう。心の中に、神の愛の炎が燃え上がり、理解力も活発になってきて、真理の美と荘厳さに打たれるのである。

たとえの中のこの忠実な主人は、青少年の教育にあたる人を代表している。彼が神のことばを宝として尊重しているなら、常に新しい美と新しい真理を引き出すことであろう。教師が神に信頼して祈るならば、キリストの霊が彼の上に臨み、聖霊は彼を用いて人びとの心に働いてくださる。聖霊は教師の心に希望と勇気をみだす。そして、彼の頭に満ちている聖書の思想などがみな、その指導のもとにある青年たちに伝えられる。

靈感のことばによって教師の心の中にわき起こった天からの平和と喜びの泉は、大きな川の流れとなって彼に連なるすべての者を祝福するのである。聖書は、生徒にとって、たいくつな書物ではなくなる。賢明な教師のもとで、みことばはますます楽しいものとなる。それは、命のパンとなって、いつまでも古びない。聖書の新鮮さと美しさとは、青少年をしっかりとひきつけることであろう。それは、あたたかも太陽が地を照らし、絶えず光と

暖かさを与えてもなお、尽きないようなものである。

人びとに教えを与える聖霊は、神のことばの中に宿っている。新しい、尊い光がみことばの各ページから輝き出ている。みことばの中に真理があらわされている。どのことば、どの文章をとってみても、それが魂に呼びかける神の声のように、輝かしく折にかなったふさわしいものになるのである。

聖霊は、青年に語りかけることを愛しておられて、神のことばの宝と美とを彼らが発見することを望んでおられるのである。大教師の語られた約束は、彼らの心をしっかりと捕え、彼らの魂を霊的力によって活気づける。人びとは、豊かに実を結び、神に関する知識をさらに深めていき、誘惑に対しても防壁を持つようになる。

真理のことばは、ますますその重大性を増し、これまで夢想さえしなかった意味深さをもったものとなる。みことばの美と富とは、人の心と品性を変える力を持っている。天からの愛の光は、靈感となって人びとの心の上に注がれる。

聖書は、研究するにつれてますます理解が深まるものである。聖書のどこを開いて見ても、そこに神の無限の知恵と愛とがあらわされているのを見いだすのである。

ユダヤ制度の意義は、まだ一般に十分に理解されていない。その儀式や象徴の中に意味深い真理が予表されていた。その神秘を開くかぎが、福音である。贖罪の計画を知ることによって、その真理を理解することができる。このような驚くべき主題を理解することは、わたしたちが考えているよりは、はるかに大きな特権である。わたしたちは、神の深遠さを理解しなければならない。ほんとうに悔いた心の持ち主が、神のことばを調べ、神のみが与え得る知識の長さ、広さ、深さ、高さがもつと与えられるように祈り求めるときに示される真理は、天使で

さえ、知ろうと願っているものである。

世界の歴史が終末に近づくに従って、最後の時代に関する預言は、特に研究すべきである。新約聖書の最後の書には、理解しなければならない真理が満ちている。サタンは、多くの人々の目をくらましている。であるから、彼らは、黙示録を研究しないでもいい言いわけなんでも歓迎してきた。しかし、キリストは、そのしもべヨハネによって終末時代の状態を描かせ、「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである」とおおせになった(黙示録一ノ三)。

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがたかわされたイエス・キリストを知ることであります」とキリストは言われるのである(ヨハネ一七ノ二三)。わたしたちが、この知識の価値を認めないのは、どうしてであろうか。なぜこのような驚くべき真理が、わたしたちの心をもやし、くちびるをふるわせ、全身に深い感動を与えないのであろうか。

神は、神のことはわたしたちにお与えになった。これはわたしたちの救いに必要な真理がみな与えられたことを示している。こうした命の泉から水をくんだ者は、数えきれないほどあるけれども、水はつきる様子もない。同様に多数の者が主をながめつつ、その同じみかたちに変えられていった。彼らがキリストの品性について語り、キリストと彼らとがいかに重大な関係によって結ばれているかを話すとき、彼らの心は燃えるのである。しかしながら、こうした探究者は、このような崇高で神聖な主題を探りつくしたわけではない。さらに、多数の人びとが救済の神秘の探究にあたってよいのである。キリストの生涯とその使命の特徴とをめい想し、真理の発見のため努力すればするほどより明らかな光が輝くのである。新たな探究が行なわれるたびに、これまでの啓示になか

ったさらに興味深いものを見るのである。研究の課題は、無尽蔵である。キリストの受肉、キリストの贖罪の犠牲と仲保の働きに関する研究は、勤勉な生徒の永遠の研究課題となることであろう。そして、彼らは、無限の年月にわたって、大空を仰ぎみながら、「確かに偉大なのは、この信心の奥義である」と叫ぶことであろう(テモテ第一・三ノ一六)。

もしわたしたちが光を受けさえしたならば、この世で理解できたはずのものを、永遠の世界において学ぶであろう。贖罪という主題は、あがなわれた人びとがその全能力をあげて永遠に学び続ける主題となるであろう。かつて、キリストが弟子たちに示そうとなさったけれども、彼らが不信仰であったため、理解することができなかった真理を彼らは悟ることであろう。キリストの完全さと栄光に関して常に新しい思想が永遠にわいてくることであろう。忠実な一家の主人は、新しいものと古いものとを、いつまでもつぎることなくその倉から取り出すのである。

第 8 章

求めよ、そうすれば、与えられるであろう。

本章は、ルカーノ一三に基づく。

キリストは、わたしたちに与えるために、父なる神から絶えずお受けになった。「あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である」と、主は言われた(ヨハネ一四ノ二四)。

「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためである」(マタイ二〇ノ二八)。イエスは、自分のためではなく、他の人びとのために、生き、考え、そして祈られた。イエスは、毎朝神との交わりに幾時間かを過ごしたあとで、人びとに天の光を与えるために出ていかれた。イエスは、日ごとに聖霊の新しいバプテスマをお受けになった。神は、新しい一日の早くからイエスの目をさまし、彼の心とくちびるに恵みをそそがれた。それは、彼が人びとに分け与えるためであつた。彼のことは、天の宮廷から新たに与えられた。それは、生活に疲れ、しいたげられている人びとに、イエスが折にかなったことばをおかけになるためであつた。「主なる神は教をうけた者の舌をわたしに与えて、疲れた者を言葉をもつて助けることを知らせ、また朝ごとにさまし、わたしの耳をさまして、教をつけた者のように聞かせられる」(イザヤ書五〇ノ四)。

キリストの弟子たちは、彼の祈りとそして神との交わりの習慣とに強い感銘をうけた。イエスからしばらく離れていた彼らは、ある日、イエスが熱心に祈っておられる姿を見つけた。イエスは、彼らの帰って来たことには、気づかれないかのように、声をあげて、祈っておられた。弟子たちは、深い感銘を受けた。イエスが祈りを終えられると、彼らは、「主よ、…わたしたちにも祈ることを教えてください」と叫んだ。

それに答えて、キリストは山上の教えの中でお与えになった主の祈りをくり返し、続いて、一つのたとえをお語りになって、教訓の意味を明らかにさせた。

「そして彼らに言われた、『あなたがたのうちのだれかに、友人があるとして、その人のところへ真夜中に行き、「友よ、パンを三つ貸してください。友だちが旅先からわたしのところに着いたのですが、何も出すものがありませんから」と言った場合、彼は内から、「面倒をかけないでくれ。もう戸は締めてしまったし、子供たちもわたしと一緒に床にはいつているので、いま起きて何もあげるわけにはいかない」と言うであろう。しかし、よく聞きなさい、友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要なものを出してくれるであろう。』」

ここで、キリストは、この哀願者を、与えるために求めている人として描かれた。この人は、どうしてもパンを手に入れなければならない。さもないと、道に行き暮れた旅人の必要をみたすことができない。彼の隣人は、煩わされることを好まないが、彼は、願うことを止めないのである。彼は、この友人をなんとかして助けたいと思っている。ついに、彼がしきりに願ったことによつて、求めていたものを与えられることになるのである。

それと同様に、弟子たちは、神からの祝福を祈り求めなければならなかった。キリストは群衆を養われたこと



第8章 求めよ、そうすれば、与えられるであろう。



自分本位の隣人は、休息が妨げられないために、切なる願いを聞き入れる。しかし、神は与えることを喜ばれる。神はわたしたちの願いを聞こうと切望しておられる。

と、それから自分が天から下ってきたパンであるという説教によって、弟子たちがキリストの代表者となるためには、何をすべきであるかをお教えになった。彼らは、命のパンを人びとに与えなければならなかった。この働きを彼らにお与えになったイエスは、彼らの信仰がさまざまな試みに会うことを知っておられた。彼らは、予期しない事態にしばしば陥って、人間の力なさを痛感させられることであろう。また、命のパンに飢えた魂がやってきても、みずからの欠乏と無力を感じることもあろう。彼らはまず自分が霊の食物を受けなければならなかった。そうしなければ、彼らには、何も人に与えるものがない。しかし、彼らは、ただ一人の魂でも、食を与えずに去らせてはならなかった。キリストは、食糧の源泉がどこであるかを示された。折悪しく、真夜中に友人の来訪を受けた人は、その友をしりぞけなかった。客に出すものは何もなかったが、食物をもっている隣人のところへ行って、しきりに願い求めて、必要なものを手に入れた。神は、飢えたものに食物を与えるために、神のしもべたちを送り出された。そして、神がご自分の働きのために送り出された人びとの必要をお満たしにならないということがあるだろうか。

たとえの中のこの利己的な隣人は、神の性質をあらわしたものではない。ここでは、比較でなく、対照によって教訓が教えられている。自分本位の隣人は、休息が妨げられないために、切なる願いを聞き入れる。しかし、神は与えることを喜ばれる。神はあわれみに満ちたお方で、信じて神に来るものの願いを聞こうと切望しておられる。神がわたしたちにお与えになるのは、わたしたちが他に奉仕するためである。そして、その奉仕によって神のようになるためである。

「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、

あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである」とキリストは言われる。

救い主は続いて言われる。「あなたがたのうちで、父であるものは、その子が魚を求めるのに、魚の代りにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さないことがあるつか。」

キリストは、わたしたちが、神をますます信頼するようになるために、神を新しい名、すなわち、人の心に最も親愛の情をいだかせる名で呼ぶことをお教えになった。彼は無限の神を、わたしたちの父と呼ぶ特権をわたしたちにお与えになった。神に向かい、また人の前で用いるこの父よという呼び名は、わたしたちの神に対する愛と信頼のしるしであると同時に、神のわたしたちに対する保護と、神とわたしたちとの関係を保証するものである。わたしたちが、神の恵みや祝福を求めるときにこう呼びかけることは、神の耳に音楽のようにひびくのである。こうして、神を父と呼ぶことは、少しも出すぎたことでないことを示すために、主は、このことについてくり返してお教えになった。主は、わたしたちが、この名称によくなれるようにお望みになるのである。

神は、わたしたちを神の子供たちとみなしておられる。神はわたしたちを冷淡な世からあがなって、王族の一人とし、天の王のおすこ、娘としてくださった。わたしたちは、子供が地上の親を信頼する以上の強い信頼感をもって神に信頼するようにと、神は招いておられる。親は子供を愛する。しかし、神の愛は、人間の愛がとつてい及び得ないほど大きく、広く、深いものである。それは測りしることができないものである。世の親が自分の

子供には、良い贈り物を知っているとすれば天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊をくださらないことがあるのか。

祈りについてキリストが教えられたことは、注意深く考えてみなければならない。祈りには、天上の科学がかくされている。そしてイエスのこのたとえには、すべての者が知らなければならない原則が明らかに示されている。すなわち、祈りの真の精神とはなんであるかということ、神にお願いをするときには、どうしても忍耐が必要なことを神は教えておられる。そして、神は喜んで祈りに耳を傾け、祈りに答えてくださることを、保証なさるのである。

わたしたちの祈りは、ただ自分の利益のみを求める利己的な願いであってはならない。わたしたちは、与えるために求めるべきである。キリストの生活の原則が、わたしたちの生活の原則でなければならない。「彼らが真理によって聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別いたします」とキリストは、弟子たちについて言われた(ヨハネ一七ノ一九)。キリストがあらわされたのと同じ献身、同じ自己犠牲、神のみことばに対する同じ服従が、彼のしもべたちの中にあらわれなければならない。わたしたちが世におかれている任務は、自己に仕えて自己を喜ばせることではなくて、罪人を救うために神と協力して、神に栄光を帰することである。わたしたちは、他の人びとにわかつことができるように、神に祝福を求めなければならない。受ける能力は、わかつことによつてのみ維持することができる。まわりにいる人びとに与えないでいて、天の宝を受けつづけることはできない。

たとえの中の哀願者は、何度も断わられたけれども、簡単にあきらめなかった。そのように、わたしたちの祈りも、常に速答があるとは思われない。しかし、祈りはやめるべきものではないと、キリストはお教えられる。

祈りは、神を変えるものではない。祈りは、わたしたちを神に一致させるものである。わたしたちが、神に願っているときに、神は、わたしたちの側に自己反省と、罪の悔い改めの必要があることをみとめられる場合もある。そのようなときに、神は、わたしたちにさまざまな試練と、恥辱をお与えになる。そして、聖霊がわたしたちを通して働きになるのを妨げているものがあるかをお示しになる。

神の約束が実現されるためには、条件がある。そして、祈りは、義務を行なうことの代わりにはならない。キリストは言われる。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」(ヨハネ一四ノ一五、一一)。

祈りのときに、こうした条件に従わないでいて、神の約束が果たされることを求める者は、神を侮辱する者である。彼らは、キリストの名を唱えていれば、神の約束が実現するものと思っているが、キリストを信じていることと、キリストを愛していることをあらわす行為を示さないのである。

父なる神に受けいられる条件にかなっていない人がたくさんいる。わたしたちは証書になんと書いてあるかをよく調べてみなければならない。わたしたちが神に近づくことができるのはこの約束のことばである。もし、わたしたちが従わないでいれば、それは、支払いの条件にかなわないでいながら、小切手の現金引き替えを、主に求めることである。わたしたちは、これがあなたのお約束ですから、これを、実現してくださいと祈る。しかし、それでは神ご自身のみ名の汚れになるのである。

「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたとどまっているならば、なんでも望む

ものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」というのが約束である(ヨハネ一五ノ七)。「もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである。『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである」とヨハネも言っている(ヨハネ第一・二ノ三一―五)。キリストの弟子たちへの最後の戒めの一つは、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」ということである。わたしたちは、この戒めに従っているであろうか、それとも、世知にたけたクリスチャンらしくない性質をあらわしているであろうか。もし何かの点で、他人の心を痛め、傷つけたならば、その過失を告白して、和解を求めなければならない。これは、信仰をもって神の祝福を求めつつ神のみ前に出るためにしなければならない準備である。

主に祈り求める者が、とかく見過ごしやすいことがもう一つある。それは、わたしたちが、神のみ前に正直であつたかどうかという点である。主は、預言者マラキによって次のように言われる。「あなたがたは、その先祖の日から、わが定めを離れて、これを守らなかった。わたしに帰れ、わたしはあなたがたに帰ろうと、万軍の主は言われる。ところが、あなたがたは『われわれはどうして帰ろうか』と尋ねる。人は神のものを盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物をもってである」(マラキ書三ノ七、八)。

神はすべての祝福の与え主であられる。その神が、わたしたちのすべての所有の一部を要求なさる。これは、神が、福音の宣教を維持なさる費用としてあてられる。こうして、うけたものを神にお返しすることによって、

わたしたちは、神の賜物に対する感謝をあらわす。しかし、神ご自身のものを自分のところに保留しているならば、どうして神の祝福を求めることができようか。もしわたしたちが、この地上のものに不忠実な管理者であるならば、どうして、天のものをゆだねられることを期待することができようか。祈りにこたえがない理由はここにあるのではなからうか。

しかし、主はあわれみ深く、わたしたちを快くゆるし、こう言われる。「わたしの宮に食物のあるように十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みをあなたがたに注ぐか否かを見なさい…。わたしは食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を滅ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、その熟する前に、その実を畑に落とすことのないようにしよう。…こうして万国の人はあなたがたを祝福された者となえるであろう。あなたがたは楽しい地となるからであると、万軍の主は言われる」(マラキ書三ノ一〇—一二)。

神のその他の要求もみな同じである。神がお与えになる賜物はみな服従が条件となっている。神は神と力を合わせるもののために、あふれる祝福を天に備えておられる。神に従う者は、すべて、確信をもって、神の約束の成就を求めることができるのである。

しかし、わたしたちは、神に対する堅い不動の信頼を示さなければならない。主はわたしたちの信仰を試み、心の願いが純粋なものであるかどうかをためすために、ときには祈りに対する応答をお延ばしになることもある。わたしたちは神のみことばに従って求めたのであるから、神の約束を信じ、この祈りは必ず聞きとどけられることを確信して、祈り続けなければならない。

一度だけ求めよ、そうすれば、与えられるであろうと、神は、言っておられない。神は求めよと命じておられる。根気よく祈り続けなさい。求め続けることは、祈るその人をもっと熱心にし、求めているものに対する願いを更に増大する。キリストは、ラザロの墓で、マルタに次のように言われた。「もし信じるなら神の栄光を見るであろう」と(ヨハネ一ノ四〇)。

しかし、生きた信仰を持たない者が多い。彼らがなぜ、もっと神の力を見ることができないかは、それに起因している。彼らが弱いのは、不信仰の結果である。彼らは、神が彼らのために働いてくださることよりも、自身の働きのほうを信じている。彼らはなんでも自分で処理しようとする。いろいろ考えてはみるが、ほとんど祈ることをせず、神に対する真の信頼に欠けている。自分では信仰があるように思っているが、それは、一時の衝動にすぎない。彼らは、自分たちの必要、あるいは神が、喜んで与えようとしておられることを認めないために、主の面前に彼らの願いを述べつつ、耐え忍ぶことをしないのである。

わたしたちの祈りは、夜中にパンを求めた友人のように熱心に忍耐強く求め続けなければならない。熱心に不屈の精神をもって祈れば祈るほど、キリストとわたしたちの霊的結合は親密になる。信仰が増すにつれて、受ける恵みも増すのである。

わたしたちのすべき分は、祈って、信じることである。目をさまして祈っていないなさい。目をさまして、祈りをお聞きになる神と協力しなさい。「わたしたちは神の同労者である」ことを覚えていなさい(コリント第一・三ノ九)。あなたの祈りに調和して語り行動しなさい。試練がきたときにあなたの信仰が真実のものであるかを証明するか、それとも、祈りが単なる形式であるかがわかるのでは、格段の違いである。



めんどろな事が起こり困難に直面した場合、人間に助けを求めてはならない。何事も神にたよらなければならぬ。困難なことについて他人に話しても、それは、自分を弱めこそすれ、それを聞いた人にはなんの力にもならない。わたしたちの霊的弱さというどうすることもできない重荷を彼らに負わせるだけである。わたしたちは少しも誤りたもうことのない無限の神の力を受けることができるにもかかわらず、誤りやすい有限な人間の力にたよろうとしているのである。

わたしたちは、知恵を求めて、何も地の果てまで行く必要はない。神は、そば近くにあらわれる。成功するか否かは、あなたが今持っている能力とか、または、将来の能力によるものではない。それは、主があなたのために何をなし得るかということによる。わたしたちは、人間のできることに、信頼をおかないで、信じるすべての魂のために、神がおできになることにもっとも信頼をおかなければならない。神は、あなたが信仰によって、神にたよることを望んであらわれる。神は、あなたが、神に大きなことを期待することを望んであらわれるのである。神は、霊的のものと同様に、この世のものに対する理解をも与えようと望んであらわれる。神は、知性を鋭敏にすることがおできになる。また、手腕と技巧とを与えることがおできになる。あなたの才能を大いに働かせて、神に知恵を祈り求めなさい。そうすれば、知恵は与えられるであろう。

キリストのみことばをあなたの保証としてかたく信じなさい。主はみもとに來たれとお招きになったのではない。決して失望落胆のことばを言うてはならない。さもないと、大きな損失をするであろう。もしあなたが困難や圧迫に遭遇したとき、その表面だけを見て、つぶやいたりすると、あなたの信仰が病的で薄弱なことをあらわしてしまう。あなたの信仰が、あたかも絶対無敵であるかのように語り、行動しなさい。神は豊かな資源

の持ち主である。神は世界を所有しておられる。信仰をもって、天を仰ぎなさい。光と権力と能力の持ち主をながめなさい。

真の信仰は、どんなに年月がたち、また、どんな苦勞があってもゆるがない快活さ、主義に対する忠実さと忍耐強さを持ちつづける。「年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができ。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」(イザヤ書四〇ノ三〇、三一)。

他人を助けたいと望みながらも、与えるべき靈的能力も光も自分にはないと感じる者がたくさんいる。そのような人は、恵みの座に来て彼らの願いを述べるとよい。聖靈を求めなさい。神は、そのすべてのお約束を保証しておられる。聖書を手に持って、わたしは、あなたのおっしゃったとおりにいたしました。「求めよ、そうすれば、与えられるであらう。捜せ、そうすれば見いだすであらう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであらう」とあなたは約束なさいました、と言いなさい。

わたしたちは、キリストの名によって祈るだけではなくて、聖靈に感じて祈らなければならない。「御靈みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである」といわれているのは、そのことを説明している。このような祈りを神は喜んで聞いてくださるのである(ローマ八ノ二六)。熱心に力をこめて、キリストの名によって祈るならば、そのような熱心さをもって祈ること自体が、「求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えて」神がわたしたちの祈りに答えようとしておられることの神の保証なのである(エペソ三ノ二〇)。

「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ一ノ二四)。「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光を受けになるためである」とキリストは言われた(ヨハネ一四ノ一二)。愛された弟子ヨハネは、聖霊の感動によって、次のように確信をもって明言している。「わたしたちが神に対していただいている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。そして、わたしたちが願い求めることは、なんでも聞きいれて下さるとわかれば、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るのである」(ヨハネ第一・五ノ一四、一五)。そこであなたの願いをイエスの名によって父なる神に切に願い求めなさい。神はイエスの名を尊ばれるのである。

み座のまわりにあるにじは、神が真実であって、変化とか回転の影とかいうもののない保証である。わたしたちは、神に対して罪を犯し、神の恵みに浴すことができないものになった。それにもかかわらず、「み名のために、われわれを捨てないでください。あなたの栄えあるみ位をはずかしめないでください。あなたがわれわれにお立てになった契約を覚えて、それを破らないでください」という驚くべき祈りのことばを神ご自身が、わたしたちの口に入れてくださったのである(エシヤ書一四ノ一二)。わたしたちが、自己の無価値なことで罪とを告白して、みもとに近づくならば、神はわたしたちの叫びに耳を傾けると神ご自身がお約束になった。神がわたしたちに言われたことが成就するためには、神の栄えあるみ位がかけられているのである。

キリストを象徴したアロンと同じようにわたしたちの救い主は、聖所の中で、神の民のすべての名を、胸の上にかけておられるのである。わたしたちの大祭司は、わたしたちに、神を信頼することを促して、わたしたちに

言われた励ましのことばを全部覚えておられる。彼は、ご自分の契約をお忘れにならない。

すべて神を捜し求める者は、見いだすであろう。すべて門をたたく者は、あけてもらえるであろう。めんどつをかけないでくれ。もう戸はしめてしまった。今更、戸はあけたくないなどと、神は仰せにならない。あなたを助けることはできないとは、だれにもいわれない。夜中に、飢えた魂にパンを与えるために求めるものは必ずその願いが聞かれるのである。

たとえの中で、旅人のためにパンを求めた人は、「必要なもの」を与えられたのである。果たして、わたしたちが他に分け与えるために神からいただくのは、どれほどの量であろうか。それは「キリストから賜わる賜物のはかりに従って」与えられるのである(エペソ四ノ七)。人が同胞をどのように扱うかを、天使は、非常な関心をもつてながめている。天使たちは、キリストが表わされたのと同じ精神を、人があやまちを犯している者に示すのを見ると、その人のそばに走り寄って、魂にとって生命のパンであるみことばを思い起こさせて語らせる。「神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであらう」(ピリピ四ノ一九)。あなたのあかしが純粋で真実のものであれば、神はそれを永遠の命の力に満ちあふれたものにしてくださる。あなたは、主のことばを真実と義とをもって話すようになる。

まず、密室でよく祈ってから、人びとのために個人的努力を始めなければならない。というのは、救霊の科学を理解するためには、大きな知恵が必要だからである。人に語る前に、キリストと交わりなさい。天の恵みの座において、人びとに奉仕をする準備をしなさい。

あなたの心が、かわいているように神を慕い、生ける神を慕ってくだかれるようにしよう。キリストの生涯は

人間がもし神の性質を持つならば、いったい何ができるかを示した。キリストが神からお受けになったものはみな、わたしたちも持つことができるものである。だから求めて受けることにしよう。ヤコブのような不屈の信仰と、切に求めてやまぬエリヤの精神をもって、神の約束なさったことが全部与えられるように求めなさい。

あなたの心が、栄光に輝く神のことについての思いで満たされるようにしなさい。あなたの生活を、イエスの生涯にしっかりと結びつけなさい。やみの中から光が照りいでよと仰せになった神は、イエス・キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、あなたの心を照らしてください。聖霊は、神に関することを明らかにし、従順な者に生きた力を与えるのである。キリストは、あなたを無限の神の門口に導いてくださるのである。あなたは、幕のかなたの栄光を見ることができ。そして、いつも生きていて、わたしたちのためにとりなしておられるお方の十分な力を入びとにあらわすことができるのである。

第 9 章

# 高慢と謙遜

本章は、ルカ一八ノ九―一四に基づく。

「自分を義人だと自任して他人を見下している人たちに対して」キリストはパリサイ人と取税人のたとえを語られた。パリサイ人は礼拝をするために宮に上るが、それは自分がゆるしを受けなければならない罪人であることを認めたからではなく、自分をたいたいと思ひ、神の賞賛を受けようと思うからである。彼は、自分の礼拝を、何か神の前に自分をよく思われるようにする行為でもあるかのように考える。また、他の人びとも、自分を信心深い人間のように思わせていた。彼は神からも人からも、よく思われようとする。彼の礼拝は、私利私欲から出たものであった。

そして、彼は、自己称賛の念に満ちている。それが態度にも、歩きぶりにも、祈りにもあらわれている。「わたしに近づいてはならない。わたしはあなたとは別の人間だから」と言わぬばかりに、彼は他の人びとから離れて立って、「ひとりで」祈る。全く自己に満足しきって、神も人もともに自分に満足してくれるものと考えてる。

「神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のよ

うな人間でもないことを感謝します」と彼はいう。彼は神の聖なる品性によらず、他の人の品性によって、自分の品性を評価したのである。彼の心は神を離れて人に向けられていた。彼の自己満足の原因がここにある。

彼は、自分の善行をこまごまと述べて「わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています」と言う。パリサイ人の宗教は魂になんの変化も起こさない。彼は、品性が神に似てくことや、愛とあわれみの心を求めようとしない。ただ上べだけの宗教に満足している。彼の義は、自分の義、つまり、彼自身の行ないの結果であり、人間の標準によって評価されたものである。

だれでも自分はだしいと自認するものは、他を軽べつする。パリサイ人は他人を標準にして自分を評価するように、自分を基準にして他をさばくのである。彼の義は、人びとの義によって評価されるから、人びとが悪ければ悪いほど、対照的に彼のほうがだしく見えるのである。こうした自分を義とする精神をもつと、他を非難するようになる。「ほかの人たち」は、神の戒めを犯していると宣言する。こうして、彼は兄弟を訴えるものであるサタンの精神をあらわすのである。この精神をもっているならば、神との交わりに入ることができない。彼は神の祝福を受けないで、自分の家に帰っていく。

取税人も、他の礼拝者とともに宮へ上ったけれども、彼は人びとと一緒に礼拝する価値はないと考えて、彼らから離れて一人になった。彼は、はるか遠くに立って、「目を天におけようもしないで、胸を打ち」、深い悲しみと自己嫌悪(けんお)の情をあらわした。彼は、神に対して罪を犯している自分が、罪深く汚れていることを感じた。彼は回りの者から、あわれみをうけることさえ期待することはできなかった。人びとは彼を軽べつしていた。また、自分を神に推賞するようななんの功績も持たないことを知って、絶望のあまり、「神様、罪人のわた

しをおゆるしてください」と叫んだ。彼は自分を他人と比較しなかった。彼は罪の意識に圧倒され、神の前に自分たった一人で立っているような気がした。彼の唯一の望みはゆるしと和らぎが与えられることであつた。彼の唯一の嘆願は、神のあわれみを受けることであつた。そして、彼は祝福を受けた。「神に義とされて自分の家に帰つたのは、この取税人で」あつたとキリストは言われた。

パリサイ人と取税人とは、神を礼拝するために来る二種類の人を代表している。そして、その人びとを、この世界に生まれてきた最初の二人の子供たちがよく代表している。カインは、自分を義であると考え、感謝のささげ物をもってきただけであつた。カインは、罪の告白をしなかった。彼はあわれみの必要も認めなかった。ところが、アベルは、神の小羊を予表した血をもってきた。アベルは、自分が罪人であり、失われた人間であることを認めて神のところに来た。彼の何よりも望んだものは、なんのいさおしもなくして与えられる神の愛であつた。神はアベルのささげ物をお受け入れになつたが、カインとカインのささげ物は、お認めにならなかった。神に受け入れられる第一の条件は必要感をもつこと、つまり、自分の欠乏と罪とを自覚することである。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」(マタイ五ノ三)。

パリサイ人と取税人とが代表している二種の人びとのことについては、使徒ペテロの生涯がその両方のよい実例になっている。ペテロは、弟子になつた始めは自分の強さをほこつていた。自分自身の評価によれば、彼もパリサイ人と同じように、「ほかの人たちのようではないと考えた。キリストはあの裏切りの夜、弟子たちに警告を発して、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう」といわれたが、その時も、ペテロは「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」と確信にみちて言った(マルコ一四ノ二七、二九)。ペテロ



は、自分の危険な状態を知らなかった。彼をおとし入れたのは自己過信であった。彼は、自分の力で誘惑に対抗できると思っていたけれども、わずか数時間後に試練がきたときに、ののしりと誓いのことばとともに主を拒んだのである。

ペテロは、にわとりの鳴く声を聞いて、キリストのことばを思い起こし、自分がなんということをしたかに恐れおののいて振り返って、主の方を見た。ちょうどその瞬間、キリストもペテロをご覧になった。そしてそのまなざしは悲痛な表情ではあったが、そこにペテロに対するあわれみと愛とが混じっていた。ペテロは、それと外に出て激しく泣いた。彼の心をくだいたのはキリストのそのときの表情であった。ペテロはここで人生の転換期に立っていた。そして彼は心から罪を悲しんで悔い改めた。彼は、取税人のように真心から悔い改めた。そして、取税人が受けたと同じ神のあわれみを受けたキリストのみ顔が、彼にゆるしの確証を与えたのである。

こうして、ペテロの自己過信はうせた。彼は、二度と高慢なことを口に出さなくなった。

キリストは、復活後、三回もペテロを試みられた。「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」といわれた。ペテロは、もはや兄弟たち以上に自分を高めてはいなかった。彼は自分の心を読むことができるお方に訴えて、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」といったのである(ヨハネ二一ノ一五、一七)。

こうして彼は主の任命を受けた。これは、彼がこれまでゆだねられていたものよりは、はるかに広く、熟練を要するものであった。キリストは、彼に羊や小羊をかうように命じられた。救い主が命を捨てて、お救いにな

った魂を指導するようペテロにゆだねられたことは、主がペテロを信任して弟子に復帰させられた最大の証拠であった。かつては、落ちつきがなく、高慢で自己過信に満ちていた弟子が、落ちついた心の砕けた者になり、主の克己と自己犠牲にならない、キリストの苦しみにあずかる者となった。そして、キリストが栄光の王座につかれるときには、ペテロも、主の栄光にあずかるものとなるのである。

ペテロを失敗におとしいれ、パリサイ人を神との交わりに入れさせなかったその罪が、今日、幾千という人を滅びにおとしいれている。高慢とうぬぼれほど神がおきらいになるものではなく、また人の魂を危険にさらすものはない。あらゆる罪の中で、これほど絶望的でどうにもならないものはない。

ペテロの失敗は、瞬間的でなく、除々に起こった。自己を過信して、救われたものと思い込んでいるうちに、一歩一歩と墮落の道をたどり、ついには、主を拒否するようになった。わたしたちも天国にはいるまでは、もはや自分は試練に負ける心配はないと感じたり、自信をもったりすることは安全ではない。救い主を受け入れた者は、たとえどんなにまじめな改心者であっても、わたしたちは救われている、と言ったり、また、感じたりするようにその人びとに教えてはならない。これは、誤解を招きやすい。もちろん、わたしたちは、すべての者に希望と信仰とをいさぐように教えなければならない。しかし、みずからをキリストにささげ、キリストに受けいれられたことを知ってもなお、わたしたちは、誘惑の手のとどこかないところにいるわけではない。「多くの者は自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう」と神のことはにしろされている(ダニエル書一二ノ一〇)。

試練を耐え忍ぶ人だけが、命の冠を受けるのである(ヤコブ一ノ一二)。

人がまず初めにキリストを受けいれ、心に確信をいだき始め、自分は救われたのだというときに、自己に依存

する危険がある。彼らは自分の弱さと神の力がいつでも必要なことを忘れやすい。彼らはそのようなすきにつけこまれてサタンの誘惑に負け、ペテロのように罪の深みに沈んでしまう。「だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」と忠告されている(コリント第一・一〇ノ一二)。常に自分に依存せずに、キリストに信頼することが唯一の安全な方法である。

ペテロは自分の品性の欠点を知り、キリストの能力と恵みの必要なことを学ばなければならなかった。主は、彼が試練に会わないようにすることはおできにならなかったが、試練に敗北しないように救うことがおできになった。ペテロがもしキリストの警告に聞き従っていたならば、彼は目をさまして祈っていたことであろう。また、彼の足がつかないように、恐れおののきつつ歩んでいたことであろう。そうすれば、彼は神の助けによって、サタンに負けることはなかったであろう。

ペテロが倒れたのは、うぬぼれのためであった。そして、彼がまた立ち上がるようにしていただいたのは、悔い改めとへりくだった思いを持つことによってであった。このような経験が記録されているのを見て、悔い改める罪人はみな勇気づけられる。ペテロははなはだしい罪におちいったけれども、主に見捨てられたのではなかった。「わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」というキリストのことばが、彼の心に刻まれていた(ルカ二ノ三二)。ペテロはげいしい良心の呵責(かしゃく)に苦しめられたときにも、この祈りとキリストの愛とあわれみに満ちたお顔を思い出して、希望をいだくことができた。復活後、キリストは、ペテロをお忘れにならなかった。天使は女たちに次のように言っている。「今から弟子たちとペテロとの所へ行つて、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。…そこでお会いできるであろう」

(マルコ一六ノ七)。救い主はペテロの悔い改めをお受けいれになった。主は罪をおゆるしになる方である。

こうして、ペテロを救った同じあわれみが、試練におちいったすべての魂にさし伸べられている。人に罪を犯させ、そのまま、絶望と恐怖の中に放任して、ゆるしを求めることを恐れさせるのは、サタンの特別の策略である。しかし神は、「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」といつておられるのであるから、何を恐れることがあろうか(イザヤ書二七ノ五)。わたしたちの弱さを助けるための備えは、十分に整っている。そして、キリストに来るようにとのあらゆる招きが与えられている。

キリストは、ご自分のさかれた体を提供して、神の嗣業を買いもどされた。これは人間にもう一度機会を与えるためであつた。「そこでまた、彼は、いつもいきっていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル七ノ二五)。キリストは彼の清い生涯、服従の生活、カルバリーの十字架の死によつて、失われた人類のためにとりなしをされた。そして、今わたしたちの救いの君は、単なる嘆願者としてではなくて、戦いに打ち勝った勝利者として、わたしたちのために、とりなしをなさるのである。彼のささげ物は完全なものである。そして、主は、わたしたちをとりなすお方として、神の前で、ご自身の汚れなき功績と神の民の祈りと告白と感謝を盛った香炉を持って、ご自分が制定なさったお勤めをしてあられる。これらは、キリストの義の香りとともに、芳しい香りとなって神の前に上る。このようなささげ物なことごとく神に受けいられる。あらゆる罪はゆるされておられるのである。

キリストは、わたしたちの身代わりであると同時に保証人となることを約束しておられて、どんな人でもおろそかになさらない。主は人類が永遠の滅びにおちいろうとしているのを見るに忍びず、人類のために死に至るま

でご自分の魂を注ぎ出されたのである。主は、自己をみずから救うことができないことを認め、すべての魂にあらわれ、みと同情をよせられるのである。

主はおののきつつ嘆願する者を、必ず助け起こしてください。主は、贖罪によって、つきることのない道徳的能力をわたしたちのために備えてくださったから、必ずこの力をわたしたちのために用いてくださる。主は、わたしたちを愛しておられるから、わたしたちは、罪も悲しみとともに主の足もとにおけばよい。イエスのお顔のどの表情もまたこのことばもすべて主に対する信頼を起こさせる。主はみ心のままにわたしたちの品性をお造りになる。単純な信頼のうちに自分を全く主にゆだねる魂に対しては、サタンがどんなに全勢力をあげて来ても、とうてい勝利することはできない。「弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる」(イザヤ書四〇ノ二九)。

「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」「ただあなたは自分の罪を認め、あなたの神、主にそおい」たことを言いあらわせと、主は言われる。「わたしは清い水をあなたに注いで、すべての汚れから清め、またあなたがたを、すべての偶像から清める」(ヨハネ第一・一ノ九、エレミヤ書三ノ一三、エゼキエル書三六ノ二五)。

しかし、わたしたちが罪をゆるされ、平和を与えられるためには自分を知らなければならぬ。つまり、わたしたちを悔い改めに至らせる知識がなければならぬ。パリサイ人には、罪の自覚がなかった。聖霊は、彼を動かすことができなかった。パリサイ人の魂は、自分の義というよいをまもっていたので、天使の手が放つ鋭い矢も、それをさし通すことができなかった。キリストは罪人であることを自覚した人だけをお救いになれるの

である。彼は、「囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」るために来られたのである（ルカ四ノ一八）。しかし、「健康な人には医者はいらない」（ルカ五ノ三一）。わたしたちは、自分たちの真の状態を知らなければならない。そうでなければ、キリストの助けが必要なことを感じないことであろう。わたしたちは、自分たちの危険について知らなければならない。そうでなければ、避難所にのがれることもないことであろう。わたしたちは自分たちの傷の痛みを感じなければならない。そうでないと、いやしを求めないことであろう。

「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買ひ、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買ひなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買ひなさい」と神は言われる（黙示録三ノ一七、一八）。火で精錬された金といわれているのは、愛によって働く信仰である。これだけが、わたしたちを神と調和させるものである。わたしたちが、どんなに活動して、どんなに多くの仕事をして、愛がなく、キリストの心に宿っていたような愛がないならば、天国の一員となることはできないのである。

人間は、自分で、自分のあやまちをさとすることはできない。「心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか」（エレミヤ書一七ノ九）。わたしたちは心に思ってもいないことなのに、いかにも心が貧しいかのように表現してみることができる。また、心の貧しさを神に訴えながら、自分がどんなにけんそんで義に富んでいるかを誇ることができる。ほんとうに自分を知る方法は、

ただ一つしかない。それは、キリストをながめることである。人びとが自分の義を誇るのは、キリストを知らないからである。神がどんなに清く、尊いかたであるかをめい想することによって始めて、わたしたちは、自分がどんなに弱く貧しく、またどんな欠点があるかを、そのまま見るようになる。わたしたちも、他のすべての罪人と同様に、自分の義の衣をまとして、墮落と絶望の中に沈んでいることをさとる。もし、わたしたちが救われたとするならば、わたしたち自身の善行によるのではなくて、全く神の無限の恵みによるものであることを知ることであろう。

取税人の祈りが聞かれたのは、彼が手を伸ばして全能の神にしっかりとすぎる信頼を示したからである。取税人にとって自分というものは、恥辱以外の何ものでもなかった。すべて神を求めるものは、これと同じでなければならない。哀れな嘆願者はすべての自己過信を否定する信仰によって、無限の能力を自分のものとしなければならない。

外見上どんなにりっぱに律法をまもってみても、それは単純な信仰と全的自己否定の代わりにはならない。しかし、人間は、自分で自分をおなくすることはできない。ただキリストが働いてくださることに同意することができないに過ぎない。そうすれば魂は次のように言うようになる。わたしは弱いのです。そして少しもキリストに似ていません。このようなわたしですが、どうぞお救いください。主よ、わたしの心をお受けください。わたしはこれをささげることはできません。これは、あなたのものです。どうぞきよく保ってください。これを、わたしが保っていることはできません。どうぞ、わたしを練り、形造り、清い聖なるふんい気の中に引き上げて、あなたの豊かな愛の流れが、わたしを通して流れ出るようにしてください。

この自己否定は、クリスチャン生活の出発において行なうばかりでなくて、天に向かって前進するごとに、新たにしなければならぬものである。わたしたちの行なう善行は、すべて、わたしたちの外からの力によるものである。であるから、常にはげんで神を仰ぎ、たえず、心をくだいて罪を告白し、神のみ前に心をひくする必要がある。わたしたちは、絶えず自己を捨て、キリストにたよることによってのみ、安全に歩くことができる。

わたしたちが、イエスに近づき、主の品性の純潔さを明らかに認めれば認めるほど、罪がどれほどはなはだしく恐ろしいものであるかをさとり、自己を称揚する気持ちにはなれなくなる。清い者として神に認められるほどの人は、自分の善良さを誇ったりはしない。使徒ペテロは、キリストの忠実なしもべとなって、天からの光と力を受ける大いなる光栄に浴した。彼は、キリストの教会の建設に活動的な役割を果たした。しかし、ペテロは、あの不名誉な恐るべき経験を忘れることができなかった。ペテロの罪はゆるされた。しかし、ペテロは自分をつまづかせた品性の弱さに対しては、キリストの恵みによらなければ救われないことを知った。彼は、自分には、何一つ誇り得るものがないことを認めた。

使徒にしても、預言者にしても、自分には罪がないと主張した者は一人もない。神に最も近く生活した人、知りつつ罪を犯すよりは、むしろ生命を犠牲にした人、また、神からの特別の光と力とを与えられた人は、みな、自分たちの性質の罪深いことを告白している。彼らは、肉に信頼をおかず、自分たちの義を誇らず、キリストの義に絶対の信頼をおいた。キリストをながめる者もみな、そうなるのである。

クリスチャンの経験が進むにつれて、悔い改めも深まっていく。「その時あなたがたは自身の悪しきおこないと、良からぬわざとを覚えて、その罪と、その憎むべきことのために、みずから恨む」と主が言っておられる



のは主がおゆるしになった人びと、すなわち主がご自分の民としてお認めになった人びとに対してである(エゼキエル書三六ノ三一)。「わたしはあなたと契約を立て、あなたはわたしが主であることを知るようになる。こうしてすべてあなたの行ったことにつき、わたしがあなたをゆるす時、あなたはそれを思い出して恥じ、その恥のゆえに重ねて口を開くことがないと、主なる神は言われる」とおおせになる(エゼキエル書一六ノ六二、六三)。そのとき、わたしたちは、口を開いて、自己をほめない。わたしたちのこうした力は、ただキリストによって与えられることをさとする。そして使徒パウロの告白をわたしたちの告白とするようになる。「わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている」(ローマ七ノ一八)。「しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇りとするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである」(ガラテヤ六ノ一四)。

この経験に調和して、次の命令が与えられている。「恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」(ピリピ二ノ一二、一三)。神は約束を実行しないのではなからうか、または忍耐と同情に欠けているのではなからうかと、心配せよとは言っておられない。それよりもあなたは、自分の意志をキリストの意志に従わせているかどうか、また、あなたの先天的および後天的性質が、自分の生活を支配していないかどうかをよく考えなければならない。「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神で」ある。偉大な働き人であられる主とあなたの魂との間に自己をさしはさんでいないか、また、神があな

たによって完成しようと望んでおられる大目的を利己的な意志によって、さまたげてはいないかを注意すべきである。わたしたちは自己の力にたより、キリストのみ手を離して、主のお導きを仰がずに人生の旅路を歩こうとすることのないように気をつけなければならない。

誇りとうぬぼれを助長するものは、ことごとく避けなければならない。であるから、お互いにへつらったり、ほめそやしたりすることがないように注意すべきである。へつらうことは、サタンのすることである。サタンは責め訴えることと同様にへつらうこともする。こうして、魂を滅ぼそうとしている。だから、人を称賛する者は、サタンに使われている手下である。キリストのために働く者は、自分をほめることばを避けなければならない。自己を見えないところにしまおう。ただキリストのみを称賛すべきである。「わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し」てくださったおかたにすべての目が向けられ、すべての人の賛美の声がささげられなければならない(黙示録一ノ五)。

主を恐れる者の生活は、悲しい、いんうつな生活ではない。キリストのない生活こそ、顔つきを憂うつにし、人生を嘆きと悲しみに満ちた生涯とするのである。うぬぼれと自己主義にみちている者は、キリストとの生きた個人的交わりを持つ必要を感じない。まだ岩なるキリストの上に落ちていない心は自分の完全さを誇る。人びとは、威厳の保てる宗教を欲する。彼らは、自分たちのさまざまな性質を持ったまま、ゆうゆうと歩ける広い道を望む。彼らの利己的で人びとにもてはやされ、ほめられることを好む気持ちが、救い主を心からしめ出すことになり、キリストのないところは、いんうつと悲哀の場所となってしまう。キリストが魂の中に住んでくださるならば、それは喜びの泉となる。神を受け入れる者はすべて、神のことばの主題が喜びであることをさとするので

ある。

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心をいかにす』(イザヤ書五七ノ一五)。

モーセが神の栄光を見たのは、彼が岩の裂け目にかくれたときであつた。わたしたちも裂かれた岩なるキリストの中にかくれるときに、キリストはご自分の裂かれたみ手をもって、わたしたちをおおってくださいるのである。そして、わたしたちは、主がそのしもべたちに言われることを聞くことができるのである。神は、モーセにあらわされたと同じように、わたしたちにも、「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」としてご自分をあらわしてください(出エジプト記三四ノ六、七)。

贖罪の働きには、とうてい人間の考え及ばない重要さが含まれている。『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかつたことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである(コリント第一・二ノ九)。罪人がキリストの力に引きつけられて、高く掲げられた十字架のそばにいき、そこにひれ伏すときに、新しい創造が行なわれるのである。彼は、キリスト・イエスにあつて新しく造られた者となる。聖なる神もこれ以上何もお求めにならない。神ご自身が「イエスを信じる者を義とされるのである」(ローマ三ノ二六)。そして、「義とした者たちには、更に栄光を与えて下さつたのである」(ローマ八ノ三〇)。罪のゆえに受けた恥辱と墮落は、たしかに大きなものであつたが、贖罪の愛による栄光とほまれとは、更に大きいのである。神のみかたち

に一致しようと努力する人類には、豊かな天の宝とすぐれた力が与えられて、墮落したことのない天使たちよりもさらに高い地位におかれることになるのである。

「イスラエルのあがない主、

イスラエルの聖者なる主は、

人に侮られる者、民に忌みきらわれる者…

『もろもろの王は見て、立ちあがり、

もろもろの君は立つて、拝する。

これは真実なる主、イスラエルの聖者が、

あなたを選ばれたゆえである』

(イザヤ書四九ノ七)。

「おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであらう。」

## 「迷える羊」のたとえ

本章は、ルカ一五ノ一一〇に基づく。

「取税人や罪人たちが」、キリストの回りに集まってくると、律法学者たちは、つぶやいて、「この人は罪人だちを迎えて一緒に食事をしている」と言った。

ユダヤ人はこのように非難することによって、キリストが罪深く汚れた人びとと交わることを好み、彼らの罪深さをご存じないのだと遠回しに言った。律法学者たちは、イエスに失望した。イエスはご自分の品性の清いことを主張しながら、律法学者たちと交わらず、その教え方にも同調しないのはなぜであろうか。イエスが少しももったいぶらないで、どの階級の中にもはいつて働かれるのはなぜであろうか。もし、彼が真の預言者であれば、律法学者と同じ意見を持ち、取税人や罪人を、当然彼らの受けるべき冷淡な取り扱いをするはずであると彼らは考えた。こうした社会の保護者たちは常にイエスと争いながらも、イエスの生活の清らかさに畏敬（いけい）と自責の念をいだいていた。しかし、社会から見捨てられた人びとに、彼がこのような明らかな同情を示されたことを怒った。彼らは、イエスの方法を承認しなかった。彼らは、自分たちが教育と教養にすぐれた宗教家であると

自認していたが、キリストの模範によって、彼らの利己心が暴露された。

彼らを怒らせたもう一つのこととは、これまで律法学者たちを軽べつして、会堂には来たこともなかった人びとが、イエスの回りに群らがり、彼のことに魅せられたように聞き入っていることであった。律法学者やパリサイ人は、彼の清らかなみ前に立つと心を責められるばかりであるのに、どういうわけで、取税人や罪人は、イエスに引きつけられたのであろうか。

彼らは、その理由が、「この人は罪人たちを迎えて」と彼らがあざけりながら発したことばそのものにあることを知らなかった。イエスのところにきた魂は、自分たちのようなもののためにも、罪の穴からのがれる道があることをイエスの前にきたときに感じた。パリサイ人は、ただ、彼らをあなどり、とがめるだけであった。しかし、キリストは、長く父の家から離れていたとはいえ、父のみ心から忘れ去ることのできない神の子供たちとして、彼らをお迎えになった。そして、彼らが悲惨と罪の中にあること自体が、特別に神のあわれみの対象になる理由であった。彼らが神から遠ざかっていればいるだけ、彼らに対する熱望も大きく、彼らの救いのために大きな犠牲を、神は払われるのである。

イスラエルの教師たちは、これをみな、自分たちが保管者で解釈者であると誇っていた聖書から学ぶことができたはずであった。罪を犯したダビデは、「わたしは失われた羊のように迷い出ました。あなたのしもべを捜し出してください」と書いたのではなかったか(詩篇一一九ノ一七六)。ミカも罪人に対する神の愛を記して「だれかあなたのように不義をゆるし、その嗣業の残れる者のためにとがを見過ごされる神があろうか。神はいつくしみを喜ばれるので、その怒りをながく保たず」といった(ミカ書七ノ一八)。

### 道に迷った羊

このとき、キリストは、聴衆に聖書のことばを思い起こさせようとはなさらなかった。主は、彼ら自身の経験にふれてお話しになった。ヨルダン川の東に広がっている高原地方には、牧草がたくさんはえていた。そして、谷間や、山林などにはよく羊が迷い込んでしまつて、羊飼いが苦心して羊をさがし出しては連れもどしていた。イエスの回りの群衆の中には、羊飼いや、牧畜に投資している人びとがいたから、イエスのたとえは、だれにでもよくわかつた。「**あなたがた**のうちに、百匹の羊を持つている者がいたとする。その一匹がいなくなつたら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなつた一匹を見つけるまでは捜し歩かないであらうか。」

人々からさげすまれるこれらの魂は、神の財産であるとイエスは言われた。彼らは、創造と贖罪によつて神のものであつて、神の前に価値あるものである。羊飼いは羊を愛して、その中の一匹でも道に迷つたのがわかるとじつとしてはいられない。神は、これとは比べものにならない無限の愛をもつて世から捨てられた魂を愛されるのである。人は、神の愛を拒み神から離れ、他の主人を選ぶこともできよう。しかし、彼らは、依然として、神の所有であり、神は彼らをご自分のものとして回復しようと望まれる。「牧者がその羊の散り去つた時、その羊の群れを捜し出すように、わたしはわが羊を捜し出し、雲と暗やみの日に散つた、すべての所からこれを救う」と言われる(エゼキエル書三四ノ一二)。

たとえの中の羊飼いは一匹の羊、すなわち、数として最少のものをさがしに出かけた。そのように、道に迷つた魂がただ一人であつたとしてもキリストは、その人のためにおなくなりになられたはずであつた。

おりから迷い出た羊は、動物の中で一番無力なものである。羊は自分で帰ってくるのができないから、どうしても羊飼いがさがしに行かなければならない。神から離れ去った魂もそれと同じである。神の愛の助けがさしのべられなかったならば、彼も道に迷った羊と同様に無力で、神に帰る道を見いだすことはできなかったのである。

羊が一匹いなくなったことを知った羊飼いは、おりの中に安全にはいつている羊の群れをながめて、少しも驚いた様子もなく、「ここに九十九匹いる。迷った一匹をさがしに行くのはいへんだ。そのうちに帰ってくるだろう。おりの戸をあけておいてはいれるようにしておこう」などとは言わない。一匹が迷い出たことを知るや否や、羊飼いはそれを悲しんで心配し出す。彼は、なん度も羊を数えなおす。いよいよ一匹が迷ったことが明らかになると彼は眠ることができない。九十九匹をおりに残して、道に迷った羊をさがしに出る。夜は暗く、あらしははげしい。道がけわしくなるにつれて、羊飼いの不安はつのり、ますます熱心に捜し求める。彼は、道に迷っている一匹の羊を見いだすために全力をつくすのである。

やっこのことで遠方から羊のかすかななき声が聞こえたときに、羊飼いはどんなに安心したことである。彼は、そのなき声をたよりに、自分の身の危険もかえりみないで、けわしい坂をよじ上って、絶壁の頂上まで行く。こうして捜しているうちに、なき声はいよいよ弱まり、今にも死にそうになっているのがわかるが、ついに、彼の努力は報いられ、いなくなった羊が見いだされる。さて、彼は、その羊に向かって、お前は、ずい分わたしにやっかいをかけたといってしかったりはしない。おちでかりたてようともしない。また、おりにひいていこうともしない。彼は、喜びのあまり、ふるえる羊を肩にのせる。もし、傷ついていたりと、しっかり自分の胸に



だきしめて、自分の心臓の温まりで、元気づけてやろうとする。羊飼いは搜索がむだにおわらなかつたことを感謝して、羊をおりまでかかえて帰るのである。

さて、羊飼いが羊をつれず、悲しんで帰ってくる光景がここに描かれていないことは感謝である。このたとえでは、失敗ではなくて、成功、すなわち見いだした喜びが語られている。これは、神のかこいからさ迷い出た羊はたとえ一匹であっても見過ごしにされたり、救われないままにすておかれたりすることはないという保証である。キリストは、あがないにあずかるうとして服従するすべてのものを、腐敗の穴と罪のいばらから救ってくださる。

悪を行なって絶望におちいつている魂も、勇気を出さなければならない。**多分**、神は罪をゆるして、神の前に出ることをゆるしてくださるのであるうなどと考えてはならない。すでに神は、第一步をふみ出されたのである。あなたが神にそおいたときに、神はあなたを求めてさがしに出られたのである。羊飼いのようなやさしい心で神は、九十九匹をあとに残して、さ迷い出た一匹をさがすために荒野へ出ていかれた。彼は、傷ついて、死ぬばかりになつていいる魂を愛の腕にいだいて、喜び勇んで安全なおりにかかえてこられるのである。

罪人は、神の愛に浴するためには、まず悔い改めなければならないと、ユダヤ人は教えていた。彼らの見解によると、悔い改めは、人間が神の恵みを得るための努力なのである。パリサイ人たちが、驚きと怒りをもって、「この人は罪人たちを迎えて」と叫んだのは、このような考え方からであった。悔い改めたもの以外は、彼に近づかせてはならないと、彼らは考えていたのである。しかし、この迷い出た羊のたとえでは、救いが与えられるのはわたしたちが神を求めるからではなくて、神がわたしたちをお求めになるからであるとキリストは教えて



善と悪の力は、常に人間の心の中であらそっている。わたしたちの主は平安と永遠の生命を、サタンはスリルと永遠の死を提供する。その選択はわたしたちにまかされている。

おられる。「悟りのある人はいない、神を求める人はいない。すべての人は迷い出」た(ローマ三ノ一、一二)。  
神に愛していただくために、わたしたちが悔い改めるのではなくて、わたしたちが悔い改めに至るために、神が  
わたしたちに愛をあらわしてくださいさるのである。

ついに迷い出た羊を、連れて帰ることができたとき、羊飼いの感謝の気持ちは、たのしい喜びの歌となって表  
現された。彼は、友人や隣人を呼び集めて「わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたか  
ら」といった。そのように羊の大牧羊者なるイエスが迷い出た者を見いだされるとき、天と地とは、感謝と喜び  
の歌を歌うのである。

「罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよ  
こびが、天にあるであろう」。あなたがた、パリサイ人は、自分たちを天の寵児(ちようじ)であると思っていると、  
キリストは言われた。あなたがたは、自分自身の義で安全であると思っている。あなたがたに悔い改める必要がない  
とするならば、わたしは、あなたに用がないということを知ってもらいたい。自分の貧しさと罪深さを感じるこ  
のような魂こそ、わたしが救うためにきたその人びとなのである。あなたがたが軽べつするこのような失われた  
魂に、天の使いたちは関心を持っている。あなたがたは、これらの魂の一人がわたしの側に加わると、つぶやき、  
あざけるが、天使たちは、喜んで、天の宮廷で勝利の歌をひびかせる。

神にそむいた者が滅ぼされると天において喜びがあると律法学者たちは言い伝えていたが、神にとって滅ぼす  
ことは異常な行爲であることをイエスは教えられた。神の創造された魂の中に神のかたちが回復されるのを、全  
天は喜ぶのである。

罪の中に深く沈んだ者が、神に帰ろうとすると、人びとから批判と疑いの目で見られるものである。彼の悔い改めは純粹であろうかなどと疑ったり、「あの人はすっかりしていない。長く続くとは思わない」とささやいたりする人がある。このような人は神の働きでなくて、兄弟を訴える者であるサタンの働きをしている。悪魔は、彼らの批判によって、その魂を失望落胆させて、神から、さらに遠くへ追いやろうとしている。悔い改める罪人は、一人の道に迷った者が立ち帰るときに天でどんな喜びがあるかをよく考えて、神の愛に安んじ、どんなことがあっても、パリサイ人の軽べつや不信の目に失望してはならない。

律法学者たちは、キリストのたとえが、取税人や罪人にあてはまることを理解したけれども、これはさらにもっと広い意味をもったものであった。キリストは、この道に迷った羊によって、個々の罪人だけでなく、反逆して、罪に傷ついたこの世界をも描かれた。この地球は、神が統治しておられる広い宇宙の一原子に過ぎない。しかし神の目にはこの道に迷った一匹の羊である墮落した小さな世界は、**おり**からさ迷い出ない九十九匹にまさって、尊いのである。天の宮廷の愛された司令官、キリストは、この失われた一つの世界を救うために、その高い地位からくだり、天の父とともにもっておられた栄光をおすてになった。彼は天の罪なき世界、すなわち、彼を愛していた九十九匹をあとにして、この世界に來られて、「われわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ」(イザヤ書五三ノ五)。神はいなくなった羊をまた迎え入れる喜びのために、み子を与えるとともに、ご自分をお与えになった。

「わたしたちが神の子と呼ばれるためにはどんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい」(ヨハネ第一・三ノ一)。また、キリストは、「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につ

かわしました」といわれた(ヨハネ一七ノ一八)。すなわち、「キリストのからだなる教会のために、キリストの苦しみのなのお足りないところを…補」うのである(コロサイ一ノ二四)。キリストに救われたものは、みな、キリストの名のもとに、失われた人びとのために働くように召されている。イスラエル人は、この働きをおろそかにしたが、今日、キリストの弟子であると公言している者も、おろそかにしてはいないであろうか。

読者よ。あなたは、さ迷い出たものを、何人さがしあてておりに連れもどしたことであろうか。見込みもなく、見ばえもないと思われる人びとに背を向けることは、キリストがさがしておられる魂をないがしろにすることであるのを自覚しておられるだろうか。あなたが、彼らをかえりみないそのときこそ、おそらく彼らがあなたの同情を一番必要としているときである。どの礼拝集会のときにも、休息と平安を求める魂がいる。彼らは見たところ、不まじめな生活を送っているようではあるが、聖霊の働きに無感覚でいるわけではない。彼らの中にも、キリストに導かれる人が多くいることである。

もし、道に迷った羊をおりにつれてこないならば、それはそのまま死んでしまう。そのように救いの手がさしのべられないために、滅びてしまう魂がたくさんある。誤りにおちいった人びとは、かたくなで無謀とさえ思えるであろう。しかし、彼らにも他の人びとと同様の機会が与えられたならば、その人々よりはるかに気高い品性と、世に役立つ大きな才能を持つことができたかもしれない。天使たちは、これらのさ迷う人びとをあわれんでいる。天使は泣いているのに、人の目は涙にぬれもせず、心は固く戸をとぎしてあわれもうともしないのである。ああ、誘惑やあやまちにおちいった人びとへのまごころからの深い同情が、なんと欠けていることであろう。もっともつと自己をすてて、もっとキリストの精神がほしいものである。

パリサイ人は、キリストのたとえが彼らへの譴責（けんせき）であることを知った。キリストは、主のお働きに対する人びとの批判に耳をかすことをせず、彼らが取税人や罪人をおろそかにしていることを譴責なさった。キリストは、彼らが主に対して心を閉じてしまわないように、公然とは彼らをお責めにならなかった。しかし、イエスのたとえば、神が彼らに要求なさる働きであるにもかかわらず、そのたいせつな働きを彼らが怠っていることを彼らに示した。もしも、このイスラエルの指導者たちが真の牧羊者であつたなら、彼らは羊飼いの仕事をしたことであろう。彼らは、キリストの愛とあわれみとをあらわし、イエスと一致して、主の働きをしたことであろう。彼らがこうしなかったことは、彼らの信心が偽りであつたことを証拠立てた。さて、キリストの譴責を拒んだ者は多かつたが、キリストのことばによつて罪を悟つた者もあつた。キリストが昇天なさつたあとで、このような人びとに聖霊が下つた。そして、彼らは弟子たちと一つになつて、道に迷つた羊のたとえの中で教えられたこのたいせつな仕事にあたつたのである。

### なくした銀貨

キリストは、迷つた羊のたとえを語られたあとで、もう一つのたとえを語つて言われた。「また、ある女が銀貨十枚を持っていて、もしその一枚をなくしたとすれば、彼女はあかりをつけて家中を掃き、それを見つかるまでは注意深く捜さないであらうか。」

パレスチナの貧しい人の家は、たいてい一へやだけで、普通は窓もない暗いへやであつた。それに、へやの中を掃くことはまれであつたので、床に落ちた銀貨は、すぐにちりやほこりの中に埋まってしまうて、それを見つ

けるためには、昼間でも、あかりをつけて、よく気をつけて掃かなければならなかった。

花嫁の結婚のときの持参金は普通、何枚かの銀貨になっていて、彼女は、それを何よりもたいせつな宝としてしまっておいて、自分の娘に譲ることにしていた。もしも、その中の一枚でも紛失すると、たいへんな災難とみなされた。また、なくなったものが発見されたときの喜びも非常なもので、近所の女たちとともに喜びのあった。

「見つけたなら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『わたしと一緒に喜んでください。なくした銀貨が見つかりましたから』と言うであろう。よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使たちの前でよろこびがあるであらう。」

このたとえも、前と同じように、何かがなくなっただけでもさがしにさがした末に、発見することができて大きな喜びがあったという。しかし、この二つのたとえは異なつた種類の人びとをあらわしている。道に迷つた羊は、迷っていることを知っている。羊は羊飼いとおりを離れて、自分で元のところへもどれないでいる。これは、自分が神から離れて、行きづまり、恥辱とはげしい誘惑の中にいることを自覚する人びとを代表している。ところがなくなつた銀貨は、罪過と罪との中に失われた状態にありながら、それを自覚していない人びとをあらわしている。彼らは、神から離れているが、それを知らない。彼らの魂は危険にさらされているのに、それに気づかず、全く無関心でいる。キリストは、神のご要求に無関心な人びとでさえ、神はあわれみ深くお愛しになることを、このたとえの中で教えておられる。わたしたちは、彼らをさがし出して、神につれもどさなければならぬ。

羊は、おりからさ迷い出て行った。それは、荒野かまたは山で道に迷ったのである。銀貨は、家の中でなくなった。すぐ近いところにありながら、よく捜さなければ見つけることができなかった。

このたとえば、家庭の者に対する教訓である。家庭では、よく家族の者の魂があるそかに扱われがちである。その中には、神から遠ざかっているものもあるう。ところが、こうして神からゆだねられたたまものの一人でさえ、家族の中で見失うことがないように気をつけているものはごくまれである。

銀貨は、ちりやほこりの中に落ちていても、銀貨であることに変わりはない。銀貨には価値があるから、さぐすのである。そのように、どんなに墮落していても、人の魂は、神の前には尊い価値がある。貨幣には、統治者の像と記号が刻まれているように、人類には、創造の始めから、神のかたちと記号とが刻まれていた。そして、今こそ罪の影響によって神のかたちがそこなわれて薄らいだとはいえ、まだその記号がかすかながらすべての魂に残っている。神は、魂を回復して、神ご自身のかたちを再び魂に押して、ただしく、聖なるものにしようと望んでおられる。

たとえばの中の女は、なくなった銀貨をけんめいになつてさがした。彼女は、あかりをつけて、家をはきぎよめた。銀貨を捜すのにじやまになるものは、残らず取り除いた。ただ一枚だけがなくなったのであるが、彼女は発見するまで捜すことをやめなかった。そのように家庭の中に、もしも一人でも神から離れたものがあるならば、その回復のために全力を尽くさなければならない。ほかの家族のものもみな、深く自分を反省して、日常の行為を吟味しなければならない。その魂の悔い改めの妨げになるものがなかったか、彼の取り扱いにあやまちがなかったかを考えなければならない。



もしも家庭の中に一人でも、自分の罪深い状態を自覚しない者があるならば、両親は、それをそのままにしておいてはならない。あかりをつけよう。神のことばを探り、その光によって家にあるすべての物をよくさぐって、なぜこの子が失われたかをよく考えることにしよう。両親は、自分の心を反省してみ、日常の習慣や行為について考えてみなければならない。子供たちは、神の嗣業であるから、こうした神の財産の取り扱い方の責任を神の前で問われるのである。

遠い外国の伝道地で働くことを熱望する父親や母親がよくある。また、家庭の外で、クリスチャン活動を活発に行なっているが、自分たちの子供には、救い主と救い主の愛について、何も教えない親たちが多い。子供たちをクリスチャンに導くという仕事は、牧師や安息日学校の教師にゆだねられている親たちが多い。しかし、それでは、神からゆだねられた責任をおろそかにしていることになる。子供たちをクリスチャンにするために教育と訓練を与えることは、親たちが神に対して行なうことができる最高の奉仕なのである。忍耐強くはげんで、一生の間たゆまず努力しなければならない。この任務を怠ることによってわたしたちは不忠実な管理人になってしまう。このような怠慢に対して、どんな弁解も神はおゆるしにならない。

とはいうものの、このような怠慢におちいっていたものも失望してはならない。銀貨をなくした女は発見するまで捜した。そのように、愛と信仰と祈りによって、親たちは家族の者のために働き、ついには、喜びつつ神のところへきて、「見よ、わたしと、主のわたしに賜わった子たち」と言うことができるようにしよう(イザヤ書八ノ一八)。

これこそ、真の家庭の伝道であって、伝道の働きをされるものも、するものも共に大きな利益を受ける。わた

したちは、家族の者のために忠実に働いて始めて、教会の中の仕事をする資格が与えられる。もし忠実であれば、わたしたちも、彼らと共に永遠に生きることが出来る。わたしたちは、家族の者に対していただいているのと同じ関心をキリストにある兄弟姉妹に対して示さなければならぬ。

そして、神は、わたしたちがこのような経験によって、更に広く他の人びとのために働くようになることをご計画になった。わたしたちの同情心が範囲を広め愛が増加するにつれて、どこにでも、なすべき仕事を見いだすことができるようになる。神の一大人類家族は、世界的なものであるから、だれ一人見過ごしてはならない。

わたしたちはどこにしようと、そこには、失われた銀貨が発見されるのを待っている。わたしたちは、それを捜しているであろうか。わたしたちは、毎日、宗教に無関心な人びとに会っている。彼らと会話をかわしたり、お互いに行き来したりしている。そういうときわたしたちは、彼らの霊的幸福に関心をもっていることを示しているであろうか。キリストを罪からの救い主として彼らに紹介しているであろうか。わたしたち自身の心がキリストの愛に熱していて、その愛のことを人々に語るであろうか。もしそうしていないとするならば、やがて神のみ座の前に立つときに、これらの魂、しかも永遠に失われた魂と、どうして顔を合わせる事ができよう。

いったい、だれが一人の魂の価値を評価できるであろうか。もしその価値を知りたいと思うならば、ゲッセマネへ行って、血の大きなしずくのような汗を流して苦しまれたキリストと苦悩を共にするとよい。そして、十字架にかけられた救い主を見ることである。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」というあの絶望の叫びを聞き、傷ついた頭、刺された脇、さかれた足を見なければならぬ。そして、キリストは、ここですべてのものを失う危険を冒しておられたことを忘れてはならない。わたしたちの贖罪のために、天その

ものが危機に落ちいったのである。十字架の下に立って、キリストはただ一人の罪人のためさえ、その命をおすてになったのだということを考えるとき、始めて一人の魂の価値を正しく評価することができる。

もし、あなたがキリストと親しく交わっていれば、どの人にも価値があることを認めるようになる。キリストがあなたに対していだかれたと同じ深い愛を、あなたも他の人びとにもいだくようになる。そうしてこそ始めて、キリストが身代わりになってなくなれた人びとを追いやるのではなくて、引きよせることができ、反感をいだかせるのではなくて、ひきつけることができる。もし、キリストが個人的に努力されなかったならば、だれ一人として、神に引きもどされるものはなかったことであろう。わたしたちが、魂を救うことができるのも、この個人的働きによってである。このような滅びゆく人びとを見ると、何知らぬ顔をして、じっと安んじているわけにはいかない。彼らの罪が大きく、みじめさが深刻であればあるだけ、彼らを回復させようとする努力も熱烈で、愛のこもったものとなることであろう。悩み苦しむ者や、神に罪を犯している者、または、罪の重荷に圧倒されている人びとに何をすべきかがわかるであろう。またあなたは、彼らに心から同情することができて、援助の手をさしのべるようになることであろう。あなたの信仰と愛の腕の中に彼らをかかえてキリストのみもとに彼らを連れてくることであろう。そして、彼らをあたたく見守って励まし、彼らに対するあなたの同情と信頼を示して、彼らがかたく立って動かされることがないようにすることであろう。

このような働きには、天のすべての使いたちが常に協力しようとしている。全天の資源は、失われた者を救おうとする人びとが、いつでも自由に使用できるように提供されている。天の使いたちは、どんなに軽率で、どんなにがんこな人にも、あなたが近づくことができるように助けを与える。そして、道に迷ったものが一人でも

神のところに連れもどされると、天全体が歓喜の声をあげる。セラピムやケルビムは、金の立琴をかきならし、人の子らに対する神のあわれみといつくしみに対して、神と小羊をほめたたえるのである。

# 「放蕩息子」のたとえ

本章は、ルカ二五ノ一二―三二に基づく。

道に迷った羊、なくなった銀貨、そしてこの放蕩(ほうとう)おすこのたとえは、神からさ迷い出たものに対する神のあわれみ深い愛を明らかに示している。彼らは、神にそむいたけれども、神は彼らをその悲惨な状態のままにしておかない。敵の巧みな誘惑にさらされているすべての者に対して、神は、情けとあわれみに満ちておられる。

放蕩おすこのたとえでは、かつては天の父の愛を知っていたにもかかわらず、敵の誘惑のとりこになっている者に対する神のお取り扱いが示されている。

「ある人に、ふたりのおすこがあった。ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで父はその身代をふたりに分けてやった。それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行」った。

この弟は、父の家の束縛をきらった。彼は、自分の自由が制限されているものと思った。彼は、自分への父親

の愛情と配慮を誤解した。そして、彼は自分のかつてな生活をしようと決心した。

この青年は、父に尽くすべきことがあるのを認めようとせず、感謝もあらわさない。ところが、父の財産を受けるべき子としての特権は、主張する。彼は父の死後にあたえられるべき遺産を、今手にすることを欲した。彼は、現在の快樂に熱中して、将来のことを考えなかった。

彼は、父からの財産を譲り受けると、父の家から離れた「遠い所」へ行つた。金は豊富にあるし、思うままに行動する自由もあるので、自分のかねての念願がかなつたと思つて、とくいになつていた。そこには、だれ一人として、それはあなたのためにならないから、してはいけないとか、これは正しいことだから、しなさいとかいう人はいなかった。彼を罪の深みに沈ませる悪友もいて、彼は、ついに「放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した」。

聖書に、「自ら知者と称しながら、愚かにな」る人びとのことが書いてある(ローマ一ノ二二)。たしかに、たとえばの中の青年は、ちょうど、そのような人であつた。彼が自分かつてに父親から要求した財産は、すべて遊女たちに費やしてしまつた。彼の青年時代という宝も浪費してしまつた。人生の尊い年月、知性の力、青年時代の希望に満ちた幻、靈的向上心などのすべてが、欲望の炎の中で燃やしつくされたのである。

そこへひどいききんが起こつて、彼は食べることに困り始め、その地方のある人に身を寄せたところ、その人は、彼を畑にやって豚を飼わせた。ユダヤ人にとって、これは、最も卑しく下等な職業であつた。自分の自由を誇つていた青年は、今や、自分がどれいになつてしまつたことをさとつた。彼は「自分の罪のなわにつなされる」最悪のどれいであつた(箴言五ノ二二)。彼の心を夢中にさせていた世の華麗さは、消え去つて、鎖の重さを

身に感じるようになった。放蕩むすこは、ききんにおそわれた外国の畑の中にすわって、豚のほかにはただ一人の友もなく、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどになった。彼の全盛時代に彼の回りに群らがって散々飲み食いした遊び友だちで、彼を助けに来たものは一人もなかった。彼の宴樂のよろこびは、今は、もうどこへ行ったのか。彼は良心の声をしずめ、知覚をまひさせて、はかない幸福感に酔っていた。しかし、彼は、すでに金も使い果たし、食べるものもなく、誇りも傷つけられてしまった。道徳性は萎縮し、意志は薄弱になり、高尚な感情はどこかへ消え去ったようである。これでは、全く人間として最もみじめなものといわなければならぬ。

これは、また、なんとよく罪人の状態を描写していることであろう。神に愛され、祝福にとりかこまれていながら、放縦と罪深い快樂に心を奪われた罪人は、なんとかして神から離れ去ることを願う。感謝の心を失ったおすこのように、当然受けるべき権利として、神の祝福を受けることを主張する。そして、神の恵みを当然のことのように受けて、感謝もしなければ、愛の奉仕もしない。カインが住むところを求めて、神の前を去っていったように、また放蕩むすこが、「遠い所」へさまよっていったように、罪人は、神を忘れてはかに幸福を求めるのである(ローマ一ノ二八)。

外觀がどんなものであろうと、自己を中心に行っている人の生活は、浪費である。だれでも神を離れて生きようとするならば、自分の財産を浪費するのである。すなわち貴重な年月を浪費し、思いと魂の力を浪費し、自分を永遠の破産者にしようとしている。自分を満足させるために神から離れていくものは、富のどれいである。天使との交わりのために創造された人の心が、この世的で肉欲的なことのために用いられるまでに墮落してしま

った。自己のために生きることとは、ついに、こうした結末となるのである。

もしも、あなたがこのような生活を選んだなら、パンでないもののために金を費やし、満足を与えないもののために労しているのである。やがて、自分の墮落した状態を認めるときがやってくる。遠国でただ一人、自分のみじめさを感じ、絶望の果て、「わたしはなんというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」と叫ぶようになる(ローマ七ノ二四)。預言者は、「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人は、のろわれる。彼は荒野に育つ小さい木のように、何も良いことの来るのを見ない。荒野の、干上がった所に住み、人の住まない塩地にいる」といったが、これは万人の認める真理をあらわしたことばである(エレミヤ書一七ノ五、六)。神は、「悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」が、太陽や雨を受けないようにする力が人にはある(マタイ五ノ四五)。そのように、義の太陽が輝き、恵みの雨がすべての人びとの上に豊かに注がれているのに、神から離れて、「荒野の、干上がった所に住」むこともできる。

神の愛は、今でも神から離れて生きる人の上に注がれ、神はなんとかしてその人を、父の家へ引き返そつと働きかけてくださる。放蕩むすこは悲惨な状態におちいつて始めて、「本心に立ちかえつ」た。今まで彼を捕えていたサタンの欺まんの力から解放された。彼は、この苦しみが自分自身の愚かさの結果であることをさとり、「父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。立って、父のところへ帰」ろうといった。放蕩むすこは、実にあわれむべき状態であつたけれども、父の愛を確信して望みをいいただくことができた。放蕩むすこを家へ引きつけたのは、この愛であつた。そのように、神の愛の確証が、



罪人を神に帰らせることになるのである。「神の慈愛があなたを悔改めに導く」のである(ローマ二ノ四)。神の愛のあわれみとなさけという黄金の鎖が、危険に落ちいったすべての魂にのべられている。「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」と主は言われるのである(エレミヤ書三一ノ三)。

放蕩むすこは、自分の罪を告白しようと決心した。父のところへ行つて、「わたしは天に対しても、あなたにおかつて、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません」と言おうとする。しかし、父親の愛に対する彼の認識が乏しかったことが「どうぞ、雇人のひとり同様にしてください」ということばにあらわれている。

青年は、豚の群れと豆がらをあとにして、家路に向かう。弱り果ててふるえ、飢えのために気も遠くなりながら、彼は、ひたすら家路を急いでいく。今は彼のぼろをおおいかくすものは何もないが、あまりにもみじめなので、恥も外聞もあつたものではない。かつては、子であつたところへ、召使の地位を求めるために急いでいくのである。

昔、意気揚々となんの深い考えもなく父の家を出た青年は、それが父の心にどんな痛みと寂しさを残したかを夢想だにしなかった。非道な仲間たちと踊ったり、騒いだりしていたときに、それが自分の家庭にどんな暗い影を投げたかは考えても見なかった。ところが、今、疲労のため痛む足どりで、彼が家路をたどるときにも、彼の帰りをまちわびている人があるのを彼は知らないのである。放蕩むすこが、「まだ遠く離れていたのに、」父は彼の姿を認めた。愛は、すばやく発見する。長年の罪の生活のために変わり果てた姿であっても、父の目から子を隠

することはできなかった。父は「哀れに思って走り寄り、その首を」しっかりとあたたく抱きしめたのである。

父は、他人が軽べつの目でぼろをまとったおすこのあわれな姿をあざわらうことを許さない。父は、自分の肩から、巾広いりっぱな上衣をぬいで、おすこのやつれたからだにかけてやる。すると青年は、悔い改めの涙においで、「父よ、わたしは天に対しても、あなたにおかっても、罪を犯しました。もうあなたのおすことと呼ばれる資格はありません」といったが、父はおすことをしっかりと抱いて、家へ連れてはいった。召使の地位を求めることばをいう機会はなかった。彼は、おすことなのである。家の最上のものをもって優遇しなければならない人である。そして、召使や女中たちが尊敬して仕えなければならない人なのである。

父は召使たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このおすことが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』それから祝宴がはじまった。」

放蕩おすこは、かつての落ちつかない若者だったときには、父親を厳格で恐ろしい人のように考えていた。ところが今は、その考えがなんと変わったことであろう。そのように、サタンに欺かれているものは神を厳格苛酷(かこく)な方のように思う。神は、罪人をきびしく見張っていて、責める方であって、真に正当な理由がない限り、助けを与えようとしなければ、迎えいれてくださらないものと、彼らは考える。また、彼らは、神の律法を、人間の幸福を制限するもの、重苦しいくびきとみなして、それからのがれようと望む。しかしながら、キリストの愛によって、目が開かれた者は、神があわれみ深いお方であることをさとる。神は横暴で残酷なかたではなくて、悔いて帰る子を、だきかかえようとして待っている父のような方であると知ることができる。罪人は、

詩篇記者とともに、「父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる」というようになる（詩篇一〇三ノ一二）。

このたとえでは、放蕩むすこの愚かな行ないに対しては、なんの非難や侮辱のことばも言われていない。むすこは、過去がゆるされ、忘れられ、永久に消し去られたことを感じる。同様に神は、罪人に対してこういわれる。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した」と（イザヤ書四四ノ一二）。「わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」（エレミヤ書三一ノ三四）。「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」（イザヤ書五五ノ七）。「主は言われる、その日その時にはイスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない」（エレミヤ書五〇ノ一〇）。

これは神が悔い改める罪人を快く受け入れてくださることの、なんと尊い確証であろう。読者よ。あなたは、自分かつての道を選んできたであろうか。神からさ迷い出ていったことであろうか。あなたは、罪の実を食べようとすると、それがあなたのくちびるの上で灰にかわってしまうことに気づかれたであろうか。今や、財産は使い果たし、人生の計画は挫折（ざせつ）し、希望も消え、ただひとり、心寂しく座しているであろうか。これまで長くあなたの心に語りかけていたけれども、あなたがいつこうに耳をかそうとしなかった、まぎれもないあのみ声が、今明りように聞こえてくる。「立って去れ、これはあなたがたの休み場所ではない。これは汚れのゆえに滅びる。その滅びは悲惨な滅びだ」（ミカ書二ノ一〇）。あなたの天の父の家に帰りなさい。「わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」といって、あなたを招いておられるのである（イザヤ書四四ノ一二）。

自分もつと善良になり、神の前に出るにふさわしい者となるまでは、キリストに近づくべきではないという敵のささやきに耳を傾けてはならない。それまで待っているとすれば、いつまでも主のところに来ることはできない。もし、サタンが、あなたの汚れた衣を指さすならば、「わたしに来る者を決して拒みはしない」というイエスの約束をくりかえしなさい(ヨハネ六ノ三七)。イエス・キリストの血がすべての罪から清めると敵に言いなさい。ダビデの祈りをあなたの祈りとして言いなさい。「ヒソプをもつて、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白くなるでしょう」(詩篇五一ノ七)。

立って、あなたの天の父に帰りなさい。神は、遠くからあなたを迎えてくださる。あなたが悔い改めて、一步神に向かって進むならば、神は、永遠の愛の腕にあなたをいだこうと走りよられるのである。神の耳は、悔い改めた魂の叫びを聞くために開かれている。人の心が、まず神を求め出したその瞬間を、神は、ご存じである。どのようににためらいがちの祈りであっても、どのようなひそかな涙であっても、どのようなか弱い切なる心の願いであっても、必ず神の霊がそれを迎えに出られるのである。キリストから与えられる恵みは、祈りが口から出て、心の願いが述べられるその以前にすでに、人の心に働いている恵みに合流する。

天の父は、罪に汚れた衣をあなたからぬがせてくださる。ゼカリヤの美しい比喩的預言の中で、大祭司ヨシユアが汚れた衣を着て、主の使いの前に立ち、罪人を代表している。そして、主からみことばがあつた。『彼の汚れた衣を脱がせなさい』。またヨシユアに向かって言った、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう。』…そこで清い帽子を頭にかぶらせ、衣を彼に着せた」(ゼカリヤ書三ノ四、五)。そのように神は、あなたに「救いの衣」を着せ、「義の上衣」をまとうせてくださる(イザヤ書六一ノ一〇)。「たとい彼らは羊のおり

の中にとどまるとも。はこの翼は、しろがねをもっておおわれ、その羽はきらめくこがねをもっておおわれる」(詩篇六八ノ一二三)。

神は、あなたを祝宴の家に連れて行き、あなたの上に愛の旗をひるがえしてくださる(雅歌二ノ四)。「あなたがもし、わたしの道に歩」むならば、「ここに立っている者どもの中に行き来することを得させる」——神のみ座のまわりの聖天使たちの間にさえ立たせると、神は言われるのである(ゼカリヤ書三ノ七)。

「花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神はあなたを喜ばれる」(イザヤ書六二ノ五)。「彼はあなたのために喜び、その愛によってあなたを新にし、祭の日のようにあなたのために喜び呼ばれる」(ゼパニヤ書三ノ一七)。こうして天と地は、天の父の喜びの歌に声を合わせる。「このおすが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。」

救い主の語られたたとえのこのところまでには、喜ばしい光景の調和をみだす不調和音は、どこにも見られない。しかし、キリストは、ここでもう一つの分子について語られた。放蕩おすが帰ってきたときに、「兄は畑にいたが、帰ってきて家に近づく、と、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕(しもべ)を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。僕は答えた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなされたのです』。兄はおこって家にはいろいろとしなかった。」この兄は父とともに失われた者のことを心配し、その帰りを待っていたのではなかった。それだから、迷い出たものが帰って来ても、父とともに喜ばないのである。楽しい音も、彼の心になんのうれしさも感じさせない。一人のしもべに祝宴の理由を聞いたが、その答えを聞いて、彼はねたましく思った。そしていなくなっていた兄弟を家にはいって歓迎し

よいとしないのである。放蕩むすこに示された父の愛を自分に対する侮辱と考えるのである。

父が出て来て兄をいさめるときに、彼の心の高まんと悪意に満ちていることがあらわされる。彼は、自分の父の家の生活は無報酬の労働であるといい、それを今帰ったむすこに示された愛と卑劣にも比較する。彼は、むすことしてではなくて、召使として働いてきたことを明らかにする。父とともに住むというつきぬ喜びにひたっていないならぬそのときに、彼の心は、その慎重な生活から得られる利益のことを考えていた。彼の言うことによれば、罪の快樂を見合わせたのもそのためであった。もし、この弟が父からこのようなたまものを受けるとするならば、自分は不当の扱いをされたのだと兄は考える。彼は、弟が親切にされているのを快く思わない。また、もし自分が父の立場にあれば、放蕩むすこを家に入れたりしないことを明らかに示す。兄は帰ってきた弟を自分の弟として認めないばかりか、冷淡に弟をさして、「あなたの子」というのである。

それでも、父はやさしく彼を扱って言う、「子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ」。あなたの兄弟がさ迷い歩いていたこの年月の間、あなたは、わたしと交わる特権をもっていたではないか。

父の家では子供たちの幸福のためになるものであれば、なんでもおしみなく与えられていた。子は、たまものとか、報酬とかを考える必要はなかった。「わたしのものは全部あなたのものだ」。あなたはただわたしの愛を信じ、そして、おしみなく与えられるたまものを受ければよいのである。

一人のおすこが、父の愛を認めないで、しばらくの間、家から離れていた。ところが、そのおすこが今帰って来た。そして、喜びの潮がすべての心配事を洗い流してしまう。「このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、

いなくなっていたのにつかつたのだ」。

兄は、自分のみにくい忘恩の精神に気づいたことであろうか。弟は、どんなに悪いことをしたとしても、なお、自分の弟であることに変わりがないことを悟ったであろうか。兄は、そのねたみとがんこさを悔い改めたであろうか。それについて、キリストは何も言われなかった。なぜなら、このたとえは、なお現実に演じられていたからである。そして、その結末は、聴衆のこれからのかかっていたからである。

この兄は、キリストの時代の悔い改めないユダヤ人を代表していた。そして、また、いわゆる取税人や罪人を軽べつするところの各時代のパリサイ人をもさしている。彼らは、自分たちが、ひどい罪におちいていないといて、自分を義とする精神に満ちている。キリストは、これらのとがめ立てする人びとに対して、彼らの側に立ってお語りになった。たとえの中の兄のように、彼らは、神からの特別の特権にあずかっていた。彼らは、神の家の子であるとなえてはいたが、実は雇い人の精神をもっていた。彼らは、愛の動機からではなくて、報酬を望んで働いていた。神は、彼らの目には、きびしい主人と思えた。彼らは、キリストが取税人や罪人を招いて、恵みのたまものをおしみなくお与えになるのを見た。ところがこれは、ラビたちが、難行苦行によってのみ与えられることを願っていたたまものであったので、彼らはこころでつまずいた。放蕩むすこが帰って来たというところで、天の父は喜びに満ちておられるのに、彼らの心には、ただしつこの思いが起るばかりであった。

たとえの中で、父が兄をいさめたことは、パリサイ人に対する天のやさしい訴えのことばであった。「わたしのものは全部あなたのものだ。」それは報酬ではなくて、たまものである。それは、放蕩むすこと同じようにしてもらえるものである。わたしたちもなんの功績もなく、天の父の愛のたまものとしてのみ、受けることができる

のである。

自分を義とすることによって人は、神を誤り伝えるばかりでなくて、兄弟を冷たく批判するようになる。利己的でしつと深い兄は、ことごとく弟に目をつけて、その行動を批判し、ほんのさ細なことまで非難した。兄は、あらゆるあらさがしをして、責めとがめた。こうして、兄は彼が許し得ないことを正当化しようと努めた。今日も同じことをしているものがたくさんいる。魂が、人生における最初の誘惑の大水の中で苦闘しているのを、彼らは、かたくなな態度でかたわらからながめて、つぶやき責める。彼らは、神の子であるとなえても、サタンの精神をその行動にあらわしている。これらの兄弟を訴える人びとは、兄弟に対する彼らの態度によって、神が彼らに祝福を与え得ないところに自分たちをおくのである。

「わたしは何をもって主のみ前に行き、高き神を拝すべきか。燔祭および当歳の子牛をもってそのみ前に行くべきか。主は数千の雄羊、万流の油を喜ばれるだろうか」と絶えずたずねている人が多い。「人よ、彼はさきによい事のであるかをあなたに告げられた。主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか」(ミカ書六ノ六―八)。

「悪のなわをほどこき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折る、…自分の骨肉に身を隠さないなど」こそ、神の喜ばれる奉仕なのである(イザヤ書五八ノ六、七)。あなたが、自分はただ天の父の愛のみによって救われた罪人であることを認めるときに、罪になやむ人びとをやさしくあわれむことができる。そして、あわれな人や、悔い改めた人を、ねたんだり、責めたりしなくなる。利己という氷が、あなたの心からとけ去って、始めて、神の心と一つになり、失われた者の救いを神と共に喜ぶようになるのである。



確かに、あなたは、自分が、神の子であると表明している。もしそれが事実であるなら、「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」のは、「あなたの弟」である。神が、彼を子としてお認めになるのであるから、彼はあなたと最も密接な関係によって結ばれている。このような関係を拒むならば、それはあなたが神の家族の子ではなくて、雇い人であることを示しているのである。

たとえ、あなたが失われた者を迎えなくても、その喜びの宴は続けられる。そして回復されたものは、天の父のそばに座し、天の父の働きにあずかる。多くゆるされたものは、多く愛するのである。しかし、あなたは、外の暗きに出されるであろう。「愛さない者は、神を知らない。神は愛である」(ヨハネ第一・四ノ八)。

第 12 章

# 実を結ばない木はどうなるか

本章は、ルカ一三ノ一一九に基づく。

キリストは、お教えになったとき、審判の警告とめぐみの招待とを結合なさった。「人の子が来たのは、人のちを滅ぼすためではなく、それを救うためである」と主はいわれた（ルカ九ノ五六詳訳聖書）。「神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである」（ヨハネ三ノ一七）。神が義と審判を行なわれるのに対して、キリストは、どんなあわれみ深いお働きをなさるものかが、この実を結ばない、いちじくの木のたとえに示されている。

キリストは、すでに神の国の到来について、人びとに警告してこられた。そして、人びとの無知と無関心を鋭く譴責された。彼らは、天候を予報する空のしるしは、早く読みとつたが、キリストのお働きをはっきり指示した時のしるしは、見分けなかった。

現代の人びとが、自分たちは天の愛顧をうけているもので、叱責（しっせき）のことばは、人にあてられたものだときめているように、その当時の人びともそうであった。聴衆は、つい先ごろ、大きな騒ぎをひき起こした事

件をイエスに告げた。ユダヤの総督ピラトのとった処置が人びとを怒らせた。エルサレムに民衆の暴動が起こり、ピラトは暴力によってこれを鎮圧しようとした。あるときなどは、ピラトの兵卒たちが神殿の境内におしり、犠牲をほふっていたガリラヤの巡礼者たちを数人切り殺したことがあった。ユダヤ人は、この災難を、被害者たちの罪に対する天のさばきとみなした。この暴力行為について語ったものらも心ひそかに満足感をいだいてこう言った。自分たちの幸運は、彼らがガリラヤ人よりすぐれていて、ガリラヤ人より多く神のめぐみを受けている証拠であると考えた。彼らは、これらの人々が刑罰を受けるのは当然であると疑いもなく考えたから、イエスがこの人びとをとがめることばを聞くものと期待した。

キリストの弟子たちは主の意見を聞くまでは、あえて自分たちの考えを言わなかった。主は、人間が限られた判断力によって、他人の品性を批判し、罰を与えたりすることについて、明らかな教訓をかねてから与えておられた。しかし、彼らは、キリストがこの人びとを他の人よりも罪深いと非難されることを期待した。彼らは、イエスの答えを聞いて、大いに驚いた。

群衆に向きなあって、救い主は「それらのガリラヤ人が、そのような災難にあったからといって、他のすべてのガリラヤ人以上に罪が深かったと思うのか。あなたがたに言うが、そうではない。あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう」と言われた。これらの驚くべき災難は彼らの心をへりくだらせるために、また彼らが罪を悔い改めるようになるために起こった。刑罰のあらしは近づいている。そしてそれはキリストの中にかくれ家を見いだしていないすべてのものの上に、まもなく吹き荒れようとしている。

イエスは、弟子たちと群衆に向かつて語っておられたとき、預言的な眼をもって将来を見、軍勢に包囲された

エルサレムを見ておられた。イエスは選ばれた町に向かって進軍する外国人の足音を聞き、包囲攻撃を受けて幾千のものが死んでゆくのをごらんになった。多くのユダヤ人が、あのガリラヤ人たちと同じように、犠牲をささげている最中に、神殿の庭で殺された。個人にのぞんだ災難は、同様に罪深い国家に対する神よりの警告であった。「あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう」とイエスは仰せになった。彼らのために猶予の日がしばらく与えられていた。彼らが平和をもたらす道を知るときが、彼らのためになおのこっていた。イエスはつづいてお語りになった、「ある人が自分のぶどう園にいちじくの木を植えて置いたので、実を捜してきたが見つからなかった。そこで園丁に言った、『わたしは三年間も実を求めて、このいちじくの木のところきたのだが、いまだに見あたらぬ。その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか』」。

キリストの聴衆はキリストのことばをまちがって適用することはできなかった。かつてダビデはイスラエルのことを、エジプトからたずさえ出されたぶどうの木として歌った。イザヤは、「万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、主が喜んでそこに植えられた物は、ユダの人々である」と書いていた（イザヤ書五ノ七）。救い主がこられた時代の人々は主のぶどう園——主の特別な保護と祝福の囲い——の中にあるいちじくの木によって代表されていた。

主の民に対する神の御目的、また、彼らの前途にある輝かしい可能性は、次のように美しく表現されていた。「こうして、彼らは義のかしの木となえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者となえられる」（イザヤ書六十一ノ三）。ヤコブは臨終に際しみたまの靈感のもとに、最愛の子ヨセフについて語った、「ヨセフは実

を結ぶ若木、泉のほとりの実を結ぶ若木。その枝は、かきねを越えるであろう。」更に彼は語った、「あなたの父なる神はあなたを助け」全能者は「上なる天の祝福、下に横たわる淵の祝福……をもつて、あなたを恵まれる」（創世記四九ノ二二、二五）。そのように、神は生命の井戸のそばに、よいぶどうの木としてイスラエルをお植えになった。神はそのぶどう園を「土肥えた小山の上に」つくられた。彼は「それを掘りおこし、石を除き、それに良いぶどうを植え」た（イザヤ書五ノ一、二）。

「良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ。ところが結んだものは野ぶどうであつた」（イザヤ書五ノ二）。キリストの時代の人々は、彼らの時代の前のユダヤ人よりもはるかに敬けんな態度を示していた。しかし彼らは神のみ霊の美しい徳性にはさらに欠けていた。ヨセフの生涯を香り高いものとし、美しいものとした品性の尊い実は、ユダヤの国のうちには見られなかった。

神はみ子をつかわして、実を求められたが、何も見いだされなかった。イスラエルは地をふさぐものであつた。それが存在するということはのろいであつた。ぶどう園の実りの多い木が占めるべき場所をそれがふさいでいたからであつた。それは神が与えようとされた祝福を世から奪つた。イスラエル人は国々の中に神を誤って表わした。彼らは単に無用であるばかりか、明らかにじゃま物であつた。彼らの宗教の大半は、人を迷わせ、救うどころかかえつて破滅に陥れるものであつた。

たとえの中でぶどう園の園丁は、もし実を結ばないでいるならば、その木は切り倒されるという宣告に、なんの疑問ももっていない。しかし彼は実を結ばない木に対して主人が関心を持つていることを知っており、自分も同じ関心をもっている。彼にとって木が生長し、多くの実を結ぶのを見ることぐらい大きな喜びは他にない。彼

は主人の希望に答えて言った、「ことしも、そのままにして置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから、それで来年実がなりましたら結構です」。

園丁はこれほど見込みがない木なのに、そのために働くことを拒んでいない。彼はなおいつそう、ほねおってみようとする。環境をもっとも良いものにしてやり、あらゆる心づかいを惜しみなく与えようとする。

ぶどう園の主人と園丁はいちじくの木に同じ関心をもっている。同様に父なる神とみ子は、選民を愛する点で一体となっておられた。こうして、キリストは、ますます多くの機会があなたがたに与えられるのだと聴衆に語っておられた。彼らが義の木となり、世界の祝福のために実を結ぶようになるために、神の愛が考え出すことができるすべての方法が実施されるはずであった。

イエスはたえの中で園丁の働きの結果についてはお語りにならなかった。主のお話はここでとぎれた。その結論は、主のみことばを聞いた時代の人々の態度にかかっていた。「もしそれでもだめでしたら、切り倒してください」という厳粛な警告が、彼らに対して与えられた。最終的な宣告が発せられるかどうかは、その人々次第であった。怒りの日は近づいていた。ぶどう園の主人は、すでにイスラエルをおそった災害によって、実を結ばない木の破滅について、あわれみ深い警告を前もって発しておられたのである。

その警告は時代をくだって現代のわたしたちにまで響いてくる。ああ、軽はずみな人よ。あなたは主のぶどう園の実を結ばない木ではないだろうか。破滅の宣告がまもなくあなたに向かって発せられるのではないか。あなたはどれほど長く主のめぐみをつけてきたか。どんなに長く主はあなたが愛をもって答えるのをじっと待ってこられたか。主のぶどう園に植えられ、園丁の注意深い保護をうけて、なんという大きな特権をあなたは受けてい

ることか。どんなにしばしば情け深い福音のおとずれが、あなたの心を震わせたことか。あなたはキリストの名を名乗り、外面的にはキリストのからだである教会の一員である。しかしあなたは偉大な愛のみ心との生きたつなかりを自覚していない。主のいのちの潮はあなたに流れてない。「みたまの実」である主の品性の美しい徳性はあなたの中にみられない。

実を結ばない木は雨と日光と園丁の世話をうけている。土から栄養を吸収している。しかし実のない大枝が地面を暗くし、実を結ぶべき木がその影のために繁茂できないようになっていく。同様にあなたに惜しげなく与えられた神のたまものは、世界になんの祝福をもたらさない。あなたは他の人に与えられるはずの特権を、彼らからうばっているのである。

あなたはおぼろげながら、自分が地をふさぐものであることを感じている。しかし神は、その大いなるあわれみによって、あなたを切り倒されなかった。神はあなたを冷たく見ておられるのではない。神は顔をそむけてないの関心をもたず、あなたを滅びるままにしておかれるのではない。神は幾世紀も前にイスラエルに叫んでいわれたように、あなたを見て叫ばれる、「エフライムよ、どうして、あなたを捨てることができようか。イスラエルよ、どうしてあなたを渡すことができようか。…わたしはわたしの激しい怒りをあらわさない。わたしは再びエフライムを滅ぼさない。わたしは神であって、人ではないからである」(ホセア書一一ノ八、九)。あわれみ深い救い主はあなたについてこう言っておられる。ことしも、そのままにして置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから。

キリストは猶予の期間を長くなさった。また、なんという不屈の愛をもってイスラエルのために働かれたこと

であろう。十字架上で、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」とキリストは祈られた(ルカ二三ノ三四)。キリストの昇天後、福音はまずエルサレムで宣教された。そこで聖霊がそそがれた。そこで最初の福音教会は、よみがえられた救い主の力をあらわした。そこでステパノ——「彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた」(使徒行伝六ノ一五)——はあかしを立て、その生命をささげた。こうして、天が与えることができるすべてのものが与えられた。「わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか」とキリストは言われた(イザヤ書五ノ四)。そのように、あなたのためのキリストのご配慮とお働きはおとろえるどころか、かえって強くなっているのである。更に彼はこう言われる、「主なるわたしはこれを守り、常に水をそそぎ、夜も昼も守って、そこなう者のないようにする」(イザヤ書二七ノ三)。

「実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら。」——

神の力に応答しないでいると心はかたくなになって聖霊の感化にもはや感じなくなってしまう。そのとき、次のことばが語られるのである、「その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか」。今日、神はあなたを招いておられる。「イスラエルよ、あなたの神、主に帰れ。…わたしは彼らのそむきをいやし、喜んでこれを愛する。…わたしはイスラエルに対しては露のようになる。彼はゆりのようにに花咲き、ポプラのように根を張り、…彼らは帰ってきて、わが陰に住み、園のように栄え、ぶどうの木のように花咲き、…あなたはわたしから実を得る」(ホセア書一四ノ一―八)。



## 幸福の招待

本章は、ルカ一四ノ一、一二―一四に基づく。

救い主はあるパリサイ人の宴会の客となっておられた。救い主は貧しい人の招待も、金持ちの招待も同様にうけになった。そしてその場その場の光景を真理に結びつけてお教えになるのが常であつた。ユダヤ人の間では、国家的宗教的な祝祭日には聖なる祝宴がもよおされた。彼らにとってそれは永遠の命のたまもの象徴であつた。大宴会が開かれて、そこに、自分たちはアブラハム、イサク、ヤコブと共に座し、異邦人は外に立って、物ほしそうな目つきでながめているというような話を、彼らは好んでしたものであつた。キリストは今、大宴会のたえによって、ご自身が与えようと望んでおられる警告と教訓をお教えになった。ユダヤ人は現世と来世の両方の神のたまものを自分たちだけで独占しようと考えた。彼らは異邦人に対する神のあわれみを否定していた。そのようなときにキリストは、神の国の招きと、あわれみの招待を拒んでいるのは、実に彼らであることをお示しになった。彼らが軽んじた招待は、彼らが軽べつしていた者たち、らい病人をさけるかのようにいみきらっていた者たちに与えられることを、イエスはお示しになった。

このパリサイ人は、宴会に客を選ぶにあたって、自分の利己的な関心を念頭においていた。そこでキリストは彼に言われた、「午餐(ごさん)または晚餐の席を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持の隣り人などは呼ばぬがよい。恐らく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を受けることになるから。むしろ、宴会を催す場合には、貧乏人、不具者、足なえ、盲人などを招くがよい。そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際にはあなたは報いられるであろう」。

キリストはかつてモーセによってイスラエルに与えられた教えを、ここにくりかえしておられる。彼らの宴会のときには、「他国人と、孤児と、寡婦を呼んで、それを食べさせ、満足させなければならぬ」と主はお命じになった(申命記一四ノ二九)。こうした集会はイスラエル人に実物教訓となるべきであった。人々は、このようにまことの親切の喜びを教えられて、その一年の間、親しい人に先だたれたものや、貧しいもののために世話をすべきであった。また、これらの宴会には広い教訓が含まれていた。イスラエルに与えられた霊的祝福は、彼らのためだけではなかった。神は、彼らが世に分け与えることができるように、彼らにいのちのパンをお与えになったのである。

彼らはこの働きをなしとげなかった。キリストのことは彼らの我欲に対する譴責であった。パリサイ人はキリストの言葉を不快に思った。彼らの一人は、話題を他に向けようとして、信心深げに「神の国で食事をする人は、さいわいです」と言った。この男は、神の国に確実にはいれるという、大きな確信をもって語った。彼の態度は、救われるための条件を満たさないでいて、キリストによって救われたと喜ぶものの態度と同じであった。彼の精神は「わたしは義人のように死に、わたしの終わりは彼らの終りのようでありたい」と祈ったときのバラム

の心と同じであつた（民数記二三ノ一〇）。このパリサイ人は自分が天にふさわしいかどうかは考えないで、自分の望んでいる天での楽しみだけを考えていた。彼のことは宴会の客の心を彼らの実際の義務という主題からそらすとする意図からでたものであつた。彼は、現在の生活をす通りして、はるかかなたの義人の復活のときのことを考えさせようとしたのである。

キリストはうわべを装っているものの心をお読みになつた。そして彼に目をとめ、彼らが今もっている特権の性質と価値をお示しになつた。主は将来の祝福にあずかるためには、今このときに彼らがなさなければならぬことがあることをお示しになつた。

「ある人が盛大な晩餐会を催して、大ぜいの人を招いた」と主は語られた。宴会のときがきたので、主人は招いた客にしもべをつかわして、「さあ、おいでください。もう準備ができましたから」と二度めの伝言を言わせた。ところが不思議なことにみな無関心であつた。「みんな一様に断りはじめた。最初の人は、『わたしは土地を買いましたので、行って見なければなりません。どうぞ、おゆるしく下さい』と言つた。ほかの人は、『わたしは五対の牛を買いましたので、それをしらべに行くところです。どうぞ、おゆるしく下さい』、もうひとりの人は、『わたしは妻をめましたので、参ることができません』と言つた。」

言いわけをしたもののうちだれ一人として実際にその必要があつてそういつたのではなかつた。土地を「行って見なければなりません」と言つた男は、それをすでに買つていたのである。彼が早く行ってそれを見たいということは、彼の関心が買ったものにすっかり奪われていたということのためである。牛も同様に購入済みであつた。それをしらべるといふのは、買った当人の興味を満足させるにすぎないことであつた。第三の言いわけは理

由らしいものさえない。招かれた客が妻をめとったという事実は、宴会に出ることを少しもさまたげるものではない。彼の妻も同様に歓迎されるにちがいないのである。しかし彼は、自分の楽しみ計画をもっていた。そして彼にとってはそのほうが、出席いたしますと言った宴会よりもっと望ましいものであった。彼はその主人の宴会よりは他の社交のほうが楽しいことを知っていた。彼は断わりを言わず、断わりの礼をつくすふうさえしなかった。「わたしはできません」ということは、「わたしは行こうと思っていない」というほんとうの気持ちのおいでしかなかった。

□実は、みな心が他のことに奪われていたことを示す。招かれた客は、他の興味に心が奪われて夢中であつた。彼らは、行きますと約束した招待を破棄して、彼らの無関心によつて、氣高い主人を侮辱した。

キリストは大宴会のたとえによつて、福音が提供する祝福を例示された。ごちそうとはキリストご自身にほかならない。彼は天から下ってきたパンである。彼から救いの川が流れでるのである。主の使者たちは救い主の来臨をユダヤ人にのべ伝えた。彼らは「世の罪を取り除く神の小羊」としてキリストを示した(ヨハネ一ノ二九)。神はお備えになった宴会において、天が与え得る最大のたまもの——見積もることもできないたまものを彼らに提供された。神の愛は大宴会をもつけ、くちない富を供給された。キリストは、「それを(天から下ってきた生きたパンを)食べる者はいつまでも生きるであろう」と仰せになった(ヨハネ六ノ五一)。

しかし福音の宴会の招待を受けるためには、まずキリストとその義を受けるという一つの目的を第一にして、世俗的関心をその次にしなければならぬ。神は人間のためにすべてをお与えになった。であるから、神は神のための奉仕を、地上のどんな利己的な心づかいよりも先にすることを人にお求めになる。神は二分された心をお

受けにならない。この世の愛情に没頭している心を、神にささげることではできない。

この教訓はすべての時代のためである。わたしたちは神の小羊が行かれるところには、どこへでも従うべきである。主の導きを選び、主の友となることを世の友の交わり以上にたいせつにしなければならない。キリストは、「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもおすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない」と仰せになった(マタイ一〇ノ三七)。

キリストの時代には多くのものは、家庭の食卓で日ごとのパンをさくとき、「神の国でパンを食べるものはさいわいである」ということばをくりかえした。しかしキリストは、無限の価を払って備えられた食卓に客を招いてくることがどんなにむずかしいかをお示しになった。こうしてキリストのみことばを聞いた人びとは、自分たちがあわれみ深い招待を軽んじたことを知った。彼らの心を奪っていたのは世の所有物や、富や、楽しみであつた。彼らは一せいに言いわけをしはじめた。

今日も同じである。人びとは、いろいろの言いわけをして宴会への招待を断つたのであるが、それは福音の招待を拒む言いわけを網羅(もうら)している。人々は福音の要求することに耳を傾けることによって、彼らの現世の有望に思われるものを危険にさらすことはできないと主張する。彼らは永遠の事物より現世の利益のほうを重視する。彼らが神から受けた祝福そのものが、彼らの魂を創造主とあがない主からひきはなすじゃま立てをする。彼らは、彼らの現世の利益追求を妨げられたくないの、あわれみの使者に向かつてこう言う。「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」(使徒行伝二四ノ二五)。他の人々は、神の召しに従うとき、彼らの社会的関係の中で起こると予想される困難を言い出す。彼らは、彼らの肉親や友人たちと

仲たがいになることはできないと言う。こうして彼らは、彼らがたとえの中に描かれている人物の一人にほかならないことを、証明する。宴会の主であるお方は彼らの見えすいた口実を、ご自身の招待に対する侮辱であるとみなされるのである。

「わたしは妻をめとりましたので、参ることができません」と言った男は、大きな階級を代表する。神の召しに心を留めないのを自分の妻や夫のせいにするものが多くいるのである。「わたしの妻が反対するので、わたしはわたしの確信する義務に従うことができません。彼女の影響で、わたしはそうすることができないようになっていきます」と夫は言う。妻は、「さあ、おいでください。もう準備ができましたから」とのめぐみ深い招きを聞く。すると彼女は「『どうぞ、おゆるしく下さい』わたしの夫はあわれみの招待を断っています。彼は仕事がりやかけだと言っています。わたしは夫といっしょに行かなければなりません。ですからまいることができません」と言うのである。子供たちの心は感銘を受ける。彼らは行きたいと思う。しかし彼らは父母を愛している。両親が福音の招待に気を留めないで、子供たちは行つてはならないと思う。彼らもまた、「どうぞおゆるしく下さい」と言う。

この人々は皆、家庭内に分裂がおこるのを恐れて救い主の招待を断わるのである。彼らは神に従つことを拒むことによって、家庭の平和と幸福を確保したと考えている。しかしこれは思い違いである。利己的な種をまくものは利己的な収穫を刈り取らなければならない。彼らはキリストの愛を拒むことによって、人間の愛に純潔と堅固さを与えることができる唯一のものを拒んでいるのである。彼らは天国を失うのみならず、天国を犠牲にしてまで得ようとしたものを真に楽しむことすらできなくなるのである。

たとえば宴会の主人はその招待がどのようにあしらわれたかを知り、「おこつて僕に言った、『いますぐに、町の大通りや小道へ行つて、貧乏人、不具者、盲人、足なえなどを、ここへ連れてきなさい』」。

主人は彼のたまものをさげすんだ人々を捨てて、満たされない階級、家も土地ももっていない人々を招待した。彼は貧しく飢えているもの、与えられたたまものを喜んでうけるものを招待した。キリストは「取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる」と言われた(マタイ二一ノ三二)。人々に相手にされず、顔をそむけられるようなみじめな人々ではあつても、しかし彼らは、神の注目と愛をうけられないほど低く、みじめになりさがつてはいない。キリストは心配にやつれ、疲れ、しえたげられている人間が、ご自身のもとに来ることを切望される。キリストは他のどこにも見いだすことができない光と、喜びと、平和を彼らに与えたいと望まれる。手のつけようのない罪人こそ、主の深く、熱いあわれみと愛の対象なのである。主は彼らをご自身にひきつけようと、聖霊をつかわし、やさしく切々と訴えられるのである。

貧しいものや、盲人につかわされたしもべは、主人に報告した。「『ご主人様、仰せのとおりにいたしました、まだ席がごさいます』。主人が僕に言った、『道やかきねのあたりに出て行つて、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱつてきなさい』。ここでキリストはユダヤ教の境界をこえて、世界の大通り、小道に福音の働きがなされることを指摘された。

この命令に従つてパウロとバルナバは、ユダヤ人にこう言明した。「『神の言は、まず、あなたがたに語り伝えられなければならなかった。しかし、あなたがたはそれを退け、自分自身を永遠の命にふさわしからぬ者にしてしまったから、さあ、わたしたちはこれから方向をかえて、異邦人たちの方に行くのだ。主はわたしたちに、こ

う命じておられる、「わたしは、あなたを立てて異邦人の光とした。あなたが地の果までも救をもたらすためである」。異邦人たちはこれを聞いてよろこび、主の御言をほめたたえてやまなかった。そして、永遠の命にあずかるように定められていた者は、みな信じた」（使徒行伝一三ノ四六―四八）。

キリストの弟子によって宣布された福音の使命は、世界に対する主の初臨の布告であった。それは主を信じる信仰による救いのよい知らせを人々にもたらした。それは主の民をあがなうために栄光の中に来られる主の再臨をさし示し、信仰と服従によって光の中にある聖徒の嗣業に共にあずかる望みを、人々の前に示したのである。この使命は今日人々に与えられている。今はそれに間近に迫っているキリストの再臨の布告が結びつけられている。キリストご自身が、再臨について語られたしるしは成就した。神のみことばによってわたしたちは、主が戸口におられることを知ることができる。

黙示録の中でヨハネは、キリストの再臨の直前に、福音が宣布されることを預言している。彼はひとりの天使が「中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである』」（黙示録一四ノ六、七）。

この預言によると、さばきとそれに付随した警告の使命のあとに、天の雲にのって人の子が来られることがのべられている。さばきの使命の宣布は、キリストの再臨が近いことを知らせている。そしてこの宣布は永遠の福音と呼ばれている。このようにしてキリスト再臨のことを説教して、その切迫を告げることが福音使命の本質的部分であることが示されている。



終末時代には、快樂と金錢を求めて人々は現世の利益追求にその心を奪われると聖書は言明している。彼らは永遠の實在に盲目となる。「人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう」とキリストは仰せになった(マタイ二四ノ三七―三九)。

今日も同じである。人々はあたかも神も、天国も、来世もないかのように、利益と自己中心的放縱な生活を追い求めている。ノアのように、悪を行なっている人々の目をさまし、悔い改めをうながすために、洪水の警告が発せられた。同様にキリストの切迫した來臨の使命は、世俗のことに心を奪われているものの覚醒(かくせい)をうながすために計画された。それは彼らの目をさまして永遠の實在を意識させ、彼らが主の宴会への招待に心を留めるために与えられたのである。

福音の招待は全世界に――「あらゆる国民、部族、国語、民族」――与えられるべきである(黙示録一四ノ六)。警告とあわれみの最後の使命は栄光をもって全地を照らすべきである。それはあらゆる階級の人々、富める者、貧しい者、高貴なもの、卑賤(ひせん)なものに行きわたらなければならない。キリストは、「道やかきねのあたりに出て行って、この家がいつぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい」と仰せになる。

世界は、福音の欠乏のために滅びつつある。神のみことばのききんがくる。人間の言い伝えをまぜないでみことばを説教するものはほとんどいない。人々は聖書を手にしているけれども、神が彼らのために聖書の中に備えてくださった祝福を受けていない。主は、人々にご自身の使命を伝えるためにしもべたちをお召しになった。罪

の中に滅びつつあるものに、永遠の命のことを伝えなければならない。

キリストは道やかきねのあたりに出て行けとの命令によって、主のみ名によって奉仕の召しをうけたすべてのものの働きをお定めになった。全世界は、キリストの教役者の畑である。人類家族全体が彼らの会衆である。主はめぐみのみことばがすべての魂に深い感銘を与えることを望んでおられる。

このことは大部分個人的な働きによってなしとげなければならない。これがキリストの方法であった。キリストの働きは大部分個人的な面談によってなされた。主は、一人の聞き手に心からの配慮をおもちになっていた。しばしばその一人の魂がイエスから聞いた話を数千の人々に伝えたのである。

わたしたちは人々が自分のところにくるまで待つていてはならない。わたしたちは人々がいるところへ出て行って、彼らをさがし求めねばならない。みことばが講壇から説教されたとき、働きは始まったばかりである。こちらからもつていかなければ、福音に接することができない人々があびだしくいるのである。

宴会への招待ははじめにユダヤ人に与えられた。彼らは人々の間で教師、指導者として立つように召された人であった。キリストの来臨を予言する預言の書をその手にもつ人々であった。そしてキリストの使命を予表する象徴的儀式が彼らにゆだねられた。もし祭司たちや民がその召しに応じたならば、彼らは世界に福音の招待を与える働きのために、キリストの使者たちと一つになったにちがいない。他の人々に与えるために、真理が彼らに送られたのである。彼らがその召しを拒んだとき、それは貧乏人、不具者、盲人、足なえに送られた。取税人や罪人たちはその招待を受けいれた。福音の召しが異邦人に送られるときにも、その伝えられる方法は同じである。使命はまず「大通りに」与えられる。つまり世の働きに活発に従事している人々、民の教師や指導者に与え

られる。

主の使者はこのことを心に留めておくべきである。群れの牧者たち、神によって立てられた教師たちはその招待に応じなければならない。社会の上層階級に属する者をやさしい愛情と兄弟に対するような心づかいをもって捜し出すべきである。実業家、責任ある高い地位にいる人々、大きな発明の才や、科学的知識をもつ人々、天才とよばれている人びと、現代に対する特殊の真理をまだ知らない福音の教師たち——これらの人々がまず最初に招待を聞くべきである。このような人々をまず招待しなければならない。

金持ちのためになすべき働きがある。彼らに、天のたまものをゆだねられたものとしての責任を自覚させる必要がある。生ける者と死人をさばかれるおかたに弁明しなければならないことを、彼らに考えさせる必要がある。金持ちには神を恐れつつ愛をもつて働きかけなければならない。多くの場合、金持ちには自分の富にたより、自分の危険を感じない。彼の心の目は、朽ちない価値をもつものにひきつけられる必要がある。「すべて重荷を負って苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と言われた真の慈愛の權威を、彼らは認めなければならない(マタイー一ノ二八—三〇)。

教育、富、名声をもった高い地位にある人々は、自分の救いの重要性について語りかけられることはほとんどない。多くのキリスト教の働き人たちは、これらの階級に近づくことをためらっている。しかしそのようなことではない。もしだれかがおぼれていたら、彼が弁護士、あるいは商人、あるいは判事であるからといって、

わたしたちは彼が死んでいくままに放っておいてよいだろうか。がけからとびおりようとしている人を見たら、その人の地位や職業がどうあると、わたしたちはすぐに彼をひきもどすであろう。わたしたちは魂の危機にある人々に警告することをためらってはならない。

見たところ世俗のことに没頭しているからといってなおざりにしてはならない。高い社会的地位にある多くのものは深い悲しみをもっており、虚栄にあきっている。彼らは自分たちにはない平安を渴望している。社会の最上層の階級にも、救いを求めて飢えかわいているものがある。キリストの愛によって和らげられた心と親切な態度で、主の働き人たちが個人的に彼らに近づくならば、多くのものが助けを受けることであろう。

福音使命の成功は博学な講話、雄弁な論証、深い理論によるものではない。それは命のパンを渴望している魂に、使命を平易に語り、それを適合することにかかっている。「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」——これが魂の求めである。

もっとも単純でささやかな方法によって幾千という人々の心にふれることができる。世のもっとも才能のある男女と見られている人々、もっとも知能のすぐれた人々は、世の人が自分の一番興味をもつ事らについて自然に話すのと同様に、神を愛する人が神の愛について話すその単純なことは新鮮な感動をうけることがよくあるのである。

ときどき、よく準備され、研究されたことが少しも感化を与えないことがある。しかし自然の単純さで語られた神のむすこ、娘の、真実で正直な話は、キリストとその愛に対して長く閉じられてきた心の扉を開く力をもつのである。

キリストのために働く者は、自力で働くのではないことを心得ていなければならない。神の救いの力を信じて神のみ座をしっかりとつかむべきである。まず祈りによって神とすもうをとり、そしてそのあとで神がお与えになったすべての才能を用いて働くべきである。聖霊が与えられ彼の力となってくださる。奉仕の天使は彼のそばにいて、人々の心を感動させる。

もしエルサレムの指導者や教師たちがキリストのお教えになった真理を受け入れていたならば、彼らの町はどんなにか素晴らしい伝道を中心地となったことであろう。背信したイスラエル人は改心したのであるうし、主のためにおびたしい大軍が集められたことであろう。そして彼らはなんとすみやかに全世界に福音を伝えることができたことであろう。同様に今、感化力をもち、大きな能力をもつ有用な人々が、キリストに導かれるならば、彼らによってどんなに素晴らしい働きがなしとげられることであろう。倒れたものは助けおこされ、捨てられたものは集められ、救いのおとずれは遠く、広く伝えられる。招待はすみやかに発せられ、主の食卓に客が集められる。

とはいえ、わたしたちは貧しい階級の人々を無視して、すぐれた才能のある人々だけを考えてはならない。キリストは使者たちに、小道やかきねのあたりに行って、貧しく身分のひくい人々のところへも行くようにお教えになった。大都市の裏町や小道に、いなかの人通りの少ない小道に、教会とのつながりもなく、寂しく、神は自分たちをお忘れになったと感じている家族や孤独な人々——それは母国をはなれた外国人かもしれない——がいる。彼らは救われるために何をしなければならぬかを知らない。多くの者は罪の中に沈んでいる。多くのものは悩んでいる。彼らは苦痛、欠乏、不信、失望に圧倒されている。心身のあらゆる種類の病気が彼らを苦しめて

いる。彼らは苦悩が取り去られ、慰められることを切望している。サタンは、彼らを誘惑して、肉欲と快楽に慰めを求めさせる。これは彼らを破壊と死に至らせるものである。サタンは食べようとすれば、口もとで灰に変わるソドムのりんごを彼らにさし出している。彼らはかてにもならぬもののために金を費やし、飽きることもできないもののために労しているのである。

キリストがこられた目的は、こうした苦しむ人々を救うためであることをわたしたちは知らなければならぬ。彼らに向かってキリストは、次のように招いておられる。「さあ、かわいている者はみな水にきたれ。金のない者もきたれ。来て買い求めて食べよ。あなたがたは来て、金を出さずに、ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ。……わたしによく聞き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で自分を楽しませることができる。耳を傾け、わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることができる」(イザヤ書五五ノ一二)。

神は、わたしたちが旅人や、世から捨てられた者や、道徳力を失った貧しい人々を顧みるようにと特別な命令を与えられた。宗教には全く無関心に見える多くの者が、心の底では、休みと平安を求めている。彼らは罪の非常な深みに沈んでいるけれども、彼らを救うことができるのである。

キリストのしもべは、主の模範に従うべきである。主はあちらこちら歩まれたとき、苦しむものを慰め、病気の者をいやされた。そして、そのあとで、主の王国の偉大な真理を彼らの前に示されたのである。これが主に従う者の働きである。肉体の苦しみを除いてやるとき、あなたは魂の欠乏のために働く道を見いだすのである。あなたは高くあげられた救い主をさし示すことができ、回復の力をもつ唯一のお方であられる大いなるいやし主の

愛を告げることができる。

さ迷い出て、失望しているあわれな者に、絶望する必要はないと語りなさい。彼らはあやまちにおちいり、正しい品性を築かなかつたけれども、神は彼らを回復することを喜び、人びとを救いに入れることを喜ばれる。神はサタンにつかれていた一見全く望みのない者をすくって、恵みの支配をうける者とすることをお喜びになる。神は不従順の者の上に下る怒りから彼らを救うことをお喜びになる。すべての人のためにいやしときよめが備わっていることを彼らに告げなさい。主の食卓には彼らのすわる場所がある。主は喜んで彼らを迎えようとして待っておられるのである。

小道やかきねのあたりに行く者は、彼らが働きかけなければならぬこれまでと全く異なった種類の人々に出会う。そこには与えられたすべての光に従って生活し、知っている最良の方法で神に仕えている人々がいる。それでも彼らは自分たちと、その周囲の人々のために、まだまだ大きな働きが行なわれなければならないと感じている。神をもっと知りたいと彼らは切に望んでいる。しかし彼らは大きな光の一部を見はじめたにすぎない。彼らは、信仰によってはるか遠方に認めたまものを、神がお与えになるように、涙ながらに祈っている。大都会の悪の真中にこうした魂が多く見いだされるのである。彼らは非常に恵まれない境遇にいるものが多く、そのために世に気づかれずにいる。そういう人々が多いが、牧師も教会もその人々について少しも知らないでいる。しかし、彼らはその低く卑しくみじめな場所で主の証人となっている。彼らはわずかの光しかもたず、キリスト教の訓練を受ける機会もなかったことであろう。しかし彼らは、着る物もなく、飢え、こごえている人々の中にいて他の人々に奉仕しようとしている。神の豊かな恵みの管理者たちは、こうした人々をさがし出し、彼らの家を

訪問し、聖霊の力によって、彼らの必要をみたすために働くべきである。彼らと共に聖書を学び、聖霊の感動を受けて単純に彼らと祈りなさい。キリストはそのしもべたちに、魂に対する天来のパンとなる使命をお与えになる。尊い祝福が心から心へ、家から家へ伝えられるであらう。

たとえの中にある「人々を無理やりにひっぱってきなさい」という命令は、たびたび誤解されてきた。それは、わたしたちが、人々に強制して福音を受けさせるべきだという教えであるかのように解釈されてきた。しかしそれはむしろ、熱心に招待して、勧誘するならば効果があることを示すのである。福音は人々をキリストに連れてくるのに強制力は決して用いない。その使命は、「さあ、かわいている者はみな水にきたれ」（イザヤ書五五ノ一）、「御霊も花嫁も共に言った『きたりませ』…いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」である（黙示録二二ノ一七）。神の愛と恵みの力が、わたしたちに来ることをせまるのである。

救い主は、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはそこにはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであらう」と仰せになる（黙示録三ノ二〇）。主は軽べつや脅かしに会われてもひるんだり去つたりなさらないで、「どうして、あなたを捨てることができようか」と言って、たえず失われた者をおたずねになる（ホセア書一一ノ八）。かたくなな心がどんなに主の愛を退けても、主は再び来て、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている」と、更に強く訴えられるのである。人を引きつけずにはおかぬ主の愛の力が、魂にはいってくることを迫るのである。こうしてついに彼らはキリストに向かつて、「あなたの助けはわたしを大いなる者とされました」と言うのである（詩篇一八ノ三五）。キリストはご自身が失われたものをたずねるときに持つておられたのと同じひたすらな愛を、主の使者たちに



お与えになる。わたしたちは単に「来なさい」と言うのではない。招きを聞いても、その意味を聞きとることができない鈍い耳の人々がいる。彼らの目は備えられたものになんのよきものも見いだせないほど盲目になっている。多くの者は自分が大いなる墮落の淵に沈んでいるのを知っている。彼らは、わたしは助けをうけるにふさわしくありません、わたしをほっておいてくださいと言う。しかし働き人はそこでやめてはならない。やさしい同情をもって、失望した無力な者をしっかりと捕えなければならない。彼らに、あなたの勇氣、あなたの希望、あなたの力を与えなさい。親切に、彼らをして主のところに連れて来なさい。「疑いをいだく人々があれば、彼らをあわれみ、火の中から引き出して救ってやりなさい。また、そのほかの人たちを、おその心をもってあわれみなさい」(ユダ書二二、二三)。

もし神のしもべたちが信仰によつて主と共に歩むならば、主は彼らの使命に力をお与えになる。彼らは、人々が福音を受けいれないではいられなくなるように、神の愛を示すとともに神の恵みを拒むことは危険であることを示すことができる。人が神から与えられた分をなしさえすれば、キリストは驚くべき奇跡を行なわれるであろう。今日も人間の心の中に、過去幾時代もの間に行なわれてきた大変化がなしとげられるであろう。ジョン・バンヤンは歓楽と冒流(ぼうとく)の中から救われ、ジョン・ニュートンはどれい売買から救われて、高くあげられた救い主を伝えた。今日も、バンヤンやニュートンのような人が多くの人々の中から救われるにちがいない。神と協力する人間の器によつて、多くのあわれな社会の日陰者たちが教化され、ひるがえって彼らは、人間の中に神のみ姿を回復したいと願うようになる。よりよい道を知らないために、非常にわずかの機会にしかめぐまれず、誤った道に歩んでいる者が多くいる。そういう人々に光が潮のようによせて来るのである。キリストがザアカイ

に、「きょう、あなたの家に泊まることにしているから」とお語りになったように、主は彼らにも語りかけられる（ルカ一九ノ五）。そしてがんこな罪人であると見なされていた者たちが、キリストに目をとめていただいたために、幼児のようにやさしい心を持つ者となる。多くのものが大きなあやまちと罪から救い出される。そして機会と特権にめぐまれていながら、それを尊ばなかった者の位置をかわって占めるのである。彼らは神にえらばれた者、尊い者となり、キリストがみ国におはいりになるとときには、彼らはキリストのみ座の一番近くに立つのである。

しかし、「あなたがたは、語っておられるかたを拒むことがないように、注意しなさい」（ヘブル二ノ二五）。イエスは「招かれた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう」と言われた。彼らはその招待を拒んでしまい、彼らのうちだれ一人としてもう一度招待されるものはない。ユダヤ人はキリストを拒むことによって、自分たちの心をかたくなにし、サタンの力に自己を屈しつつあった。こうして彼らは神の恵みを受け入れることができなくなった。今日も同じである。もし人が神の愛を喜んで受けることをせず、その愛が心のなかで魂を和らげ、屈服させる永続的な力とならないならば、わたしたちは全く失われた状態にあるのである。主は今まで与えてこられたより以上の大きな愛をお与えになることはできない。もしイエスの愛が人の心を従わせないとすれば、わたしたちの心を動かす方法は他にないものである。

あなたがあわれみの使命を聞くことを拒むたびに、あなたは不信を強めているのである。あなたがキリストに心の戸を開かないそのたびに、あなたは、ますます、語っておられるお方の声を聞こうとしなくなる。ついにはあなたはあわれみの最後の訴えに応答する機会をなくしてしまうのである。「エフライムは偶像に結びつらなった。

そのなすにまかせよ」と、古代イスラエルについて書かれたように、あなたについて書かれないようにしなさい（ホセア書四ノ一七）。キリストがエルサレムのために泣かれたように、あなたのために泣かれることのないようにしなさい。そのときイエスはこう言われた、「ちようどめんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」（ルカ一三ノ三四、三五）。

わたしたちの時代はあわれみの最後の使命の招待が、人の子らにむかって発せられているときである。「道やかきねのあたりに出て行け」という命令は、その最後の成就に至っている。キリストの招待はすべての魂に発せられるべきである。使者は、「さあ、おいでください。もう準備ができましたから」と言っている。天使たちは今も人間の働き人と協力して働いている。聖霊はあなたをしいて来させるために、あらゆる手をつくしておられる。キリストはあなたの心にはいるうとして、かんぬきがはずされ、扉が開かれたことを示す物音を聞こうと耳をそばだてておられる。天使たちは、更にもう一人の罪人が見いだされたとの知らせを天にもたらすために、待っている。天の軍勢は、立琴をならし、喜びの歌を歌う用意をして、もう一人の魂が福音の祝宴への招待を受け入れるのを待っているのである。

## 第 14 章

## 人をゆるす方法

本章は、マタイ一八ノ二―三五に基づく。

ペテロがキリストのもとに来て、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか」と質問した。ラビたちは許しの限度を三度までとしていた。ペテロはキリストの教えから考えて、完全数である七回までのばそうと考えた。しかしキリストは、ゆるすことにうみつかれてはならないと、お教えになった。「七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい」と主は言われた。

そこで主は、ゆるしを与える理由がなんであるかということ、許さない精神をいざうかがいに危険であるかをお示しになった。主は、政府の事務をつかさどっていた役人に対して王がどんな処置を取ったかについて、一つのたとえをお話しになった。役人のうちには国家の巨額な公金を横領していたものがあつた。王が、資金をゆだねていたものの会計調査を行なったとき、王に対して一万タラントという巨額の負債を負った者のあることがわかった。その男は、王の前につれて来られた。この男には支払う金がなかった。当時の習慣によって、王は彼に、所有物を全部売り払って負債をつぐなえと命じた。しかし、驚いた男は王の足下にひれふし、王に嘆願し

て言った。『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。」

「その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せず、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまつまで、彼を獄吏に引きわたした」。このたとえには、たとえ全体を描き出すために必要なこまかい記述があるが、それらは重要な霊的意味をもつものではない。そうしたものに注意をそらしてはならない。ここに、いくつかの重要な真理が教えられているので、それにわたしたちの思いを集中すべきである。

この王が与えたゆるしは、すべての罪に対する神のゆるしをあらわしている。あわれに思つてもべの負債をゆるした王は、キリストを表わしている。人間は律法を破って、罪の宣告のもとにあった。人間は自分自身を救うことができなかった。そのためにキリストはこの世界にこられ、神性に人性をまとい、不義なもののために、義なるご自身の命をお与えになった。主はわたしたちの罪のためにご自身を与え、血によって買いとったゆるしをすべての人に価なしに提供される。「主には、いつくしみがあり、また豊かなあがないがある」(詩篇一三〇ノ七)。

ここに、わたしたちがわたしたちと同じ罪人に向かって、同情の心をいだかなければならないという理由が示されている。「神がこのようにわたしたちを愛してくださったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである」(ヨハネ第一・四ノ一一)、「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」とキリストは仰せになる(マタイ一〇ノ八)。

たとえにおいて、負債のある者が、「どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから」と約束して、猶予を願ったとき、その宣告は取り消された。負債は全部消された。そのすぐあとに、彼は、彼をゆるした主人の模範にならう一つの機会が与えられた。外に出ると、彼はわずかな貸しのある仲間に出会った。彼は一万タラントゆるされたばかりであった。彼は、この仲間には百デナリ貸していた。しかし、これほどのあわれみを受けた彼が、仲間に向かっては全然ちがった態度をとった。仲間は、彼自身が王に向かってしたと同じ訴えをした。しかし同じようなゆるしはえられなかった。つい先ほどゆるされたばかりの彼は、やさしい心も、同情ももたなかった。あわれみが彼に示されたのに、彼は仲間に向かってはあわれみをもたなかった。彼は待つてくださいという頼みに気をとめなかった。この恩知らずのしもべは、仲間に貸したわずかな金のことしか考えていなかった。彼は自分の当然受けるべきものと考えたものを全部要求した。そして彼のためにはめぐみ深くも取り消されたところの、同じきびしい宣告を仲間に対して下した。

今日いかに多くの者が同じ精神をあらわしていることであろう。負債を負ったものが主人にあわれみを願ったとき、彼は自分の負債の大きさをほんとうには理解していなかった。彼は自分の無力を知らなかった。彼は自分を救おうとした。彼は「どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから」と言ったのである。同様に、自分

の行ないによって神の恵みをえようと望んでいる者が多い。彼らは自分の無力なことを知っていない。彼らは働かずして与えられるたまものとして神のめぐみを受けず、自分の義をたてようと努力している。彼らの心は罪のために砕かれることなく、けんそんになっていない。彼らは他人に対してきびしく、寛容ではない。彼らの神に対する罪は、彼らに対する兄弟の罪とくらべると、一万タラント対百デナリで——ほとんど百万倍に当たる。しかし、彼らはあえて人をゆるそうとしないのである。

たとえば、主人は、この無慈悲な負債者の出頭を命じ、彼に「言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまふまで、彼を獄吏に引きわたした」。そこでイエスは言われた、「あなたがたがいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう」。ゆるすことを拒むものはそれによって彼自身がゆるされる望みを捨てているのである。

しかし、このたとえを誤用してはならない。わたしたちを神がおゆるしになるからといって、わたしたちが神に服従する義務が減少するものではない。お互いに仲間に対してゆるしの精神をもつからといって、なすべき義務を果たさずにすむものではない。キリストが弟子たちに教えられた祈りの中に、「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」と主は仰せになった(マタイ六ノ一二)。これは、わたしたちの罪がゆるされるために、わたしたちから借りている人に当然支払いを求めてよいものまでも要求してはいけないという意味ではない。もし彼らが支払うことができない場合、たとえば、それが不十分な管理の結果

ではあったとしても、彼らを獄に入れたり、しえたりして、ひどい取り扱いをするべきではない。しかし、このたとえばわたしたちに怠惰を奨励するように教えるものではない。神のことは、働こうとしない者は、食べることもしてはならないと言っている（テサロニケ第二・三ノ一〇）。主は、けんめいに働く人になまけ者を扶助することを求めてはならない。時間を浪費し、努力をしないために、貧しく乏しくなっている人が多い。このようなありさまにおちいった人びとが、その誤りを正さないならば、彼らのためにいくら努力しても、すべては穴のあいた袋の中に宝を入れるようなものである。しかし、避けることのできない事情で貧困におちいることもある。こうした不幸な人々に対しては、やさしさと同情を示さなければならぬ。わたしたちは自分たちが、彼らと同じ事情のもとにあったとすれば、自分がしてもらいたいと思うように、他の人々を取り扱うべきである。

聖霊は、使徒パウロを通して次のようにわたしたちをいましめておられる。「そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御霊の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。何事も党派心や虚栄からするのでなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。キリスト・イエスにあっただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい」（ピリピ二ノ一―五）。

しかし罪は、軽く考えてはならない。主は兄弟が悪をなすままに放任しておかないようにとわたしたちに命じておられる。「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、彼をいさめなさい」と主は言われた（ルカ一七ノ二三）。罪は罪として呼ばれるべきである。そして悪を行なう者の前に、はつきりとそれを示さなければならぬ。



パウロは聖霊によって、「時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい」と書いて、テモテを教えた(テモテ第二・四ノ二)。またテトスには次のように書いた、「法に服さない者、空論に走る者、人の心を惑わす者が多くある、…だから、彼らをきびしく責めて、その信仰を健全なものにしない」(テトス一〇一―一二)。

キリストは、次のように仰せになる。「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになる。もし聞いてくれないなら、ほかにもひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためである。もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい」(マタイ一八ノ一五―一七)。

主はクリスチャンの間の困難な問題は、教会の中で解決すべきであるとお教えになった。それらを神をおそれない人々の前に持ち出してはならない。もしクリスチャンが兄弟から不正なことをされた場合、法廷にもちこんで不信者に訴えるべきではない。彼はキリストがお与えになった教訓に従うべきである。復讐しようとするのではなく、その兄弟を救うことを求めるべきである。神は、神を愛し、おそれる者の権益をお守りくださる。わたしたちは確信をもって正しくおさばきになるお方に、問題をゆだねることができる。

くりかえし悪事を行ない、それを行なった者がそのあやまちを告白するとき、害を受けた者はしびれを切らし、これ以上許すことはできないと考えることが、しばしばある。しかし、救い主はわたしたちに誤りを犯した者をどのように取り扱うべきかをはっきりとお語りになった、「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、彼をいさめな

さい。そして悔い改めたら、ゆるしてやりなさい」(ルカ一七ノ三)。彼を、信用できないといって退けてはならない。「もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないか」と考えなさい(ガラテヤ六ノ一)。

もしあなたの兄弟があやまちを犯すならば、あなたは彼らをゆるすべきである。彼らが告白して来た場合、あなたは、彼らの心が十分砕かれているとは思えないとか、彼らが痛切に告白しているようには思われなとか言っではならない。人の心のなかまで読んだかのように、彼らをさばく力が、あなたにはあるのだろうか。神のことはこういつている。「そして悔い改めたら、ゆるしてやりなさい。もしあなたに対して一日に七度罪を犯し、そして七度『悔い改めます』と言ってあなたのところへ帰ってくれば、ゆるしてやるがよい」(ルカ一七ノ三、四)。神があなたをゆるしてくださいただけゆるしなさい。七たびでなく、七たびを七十倍するまでにといわれる。わたしたち自身、神の無代のたまものの恵みをこうおぼっている。わたしたちは恵み深い契約によって神の子と定められた。救い主の恵みによってわたしたちはあがなわれて、生まれかわった者となり、キリストと共なる世継ぎにまで高められたのである。この恵みを他の人々にあらわすようにしよう。

あやまちを犯したものを失望におとしいてはならない。パリサイ的なきびしさによって、兄弟を傷つけてはならない。にがにがしい軽べつの心をおこしてはならない。あざけりの調子を声に出してはならない。もしあなたが自分自身のことを語り、無関心をよそおい、疑いや、不信を示すならば、魂を滅びにおとし入れることになる。あわれみ深い長兄イエスの心をもった人間が彼の心にふれなければならない。心から彼に同情してあたかく手を握り、いっしょに祈りましょうとささやきかけなければならない。神はあなたがた二人に、豊かな経験をお与えになることであろう。祈りはわたしたちを互いに結びつけ、また、わたしたちと神とを結びつける。祈

りはイエスをわたしたちに近づけ疲れ果てて倒れそうな魂に、世と肉と悪魔に勝利する新しい力をもたらす。祈りは、サタンの攻撃をかわすものである。

人が人間の不完全さから目を転じて、イエスを見上げるとき、聖なる変化が品性の中におこる。キリストの霊が心に働いて、そのみかたちに一致させる。そして、イエスを高く掲げるように努めなさい。心の目を、「世の罪を取り除く神の小羊」に注ぎなさい(ヨハネ一ノ二九)。そしてあなたがこのような働きに従事するとき、「かように罪人を迷いの道から引きもどす人は、そのたましいを死から救い出し、かつ、多くの罪をおおつものであることを、知るべきである」(ヤコブ五ノ二〇)。

「もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう」(マタイ六ノ一五)。人をゆるさない精神を正しいと認めることはできない。他の人に対して無慈悲なものは、その人自身が神のゆるしのめぐみを受けていない証拠である。神のゆるしによつて、あやまちを犯した者の心は無限の愛なる神のたいなるみ心に近くひきよせられる。神のあわれみが潮のように、罪人の心に流れ込み、又その人から他の人々の心に流れこむのである。キリストがその尊い生涯にあらわされたやさしさとあわれみとが、主のめぐみの共有者となる者の中に見られるのである。しかし、「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない」(ローマ八ノ九)。そのような人は神から遠ざかっていた。彼が、神から永遠に切り離されるのは当然である。

彼が以前にゆるしを受けたことは事実である。しかし彼の無慈悲な心は、彼が今、神が愛の中にゆるしをお与えになったことを拒んでいることを示している。彼は神から自分を引きはなし、ゆるしを受ける前となんら変わ

りがない。彼は自分の悔い改めを否定した。そして彼の罪はあたかも彼が悔い改めなかったかのように彼の上におかれていたのである。

しかしこのたとえの偉大な教えは、神のあわれみと人間の無情との比較にある。また、それは、神のあわれみ深いゆるしがわたしたちのゆるしの尺度であるということを教えている。「わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか」。

わたしたちは自分がゆるす**から**ゆるされるのではない。わたしたちがゆるす**ように**ゆるされるのである。すべてのゆるしはなんのいさおもなくして得られる神の愛に基づいている。しかし他の人々に対するわたしたちの態度は、わたしたちがその愛を自分のものにしたかどうかを示すのである。キリストが、「あなたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう」と言われたのは、そのためである(マタイ七ノ二)。

第 15 章

人のいのちは持ち物によらない

本章は、ルカ二二ノ一三―二一に基づく。

キリストは人びとを教えておられた。そして、いつものように、弟子たちだけでなく他の人々もキリストのまわりに集まっていた。キリストは弟子たちに、彼らがやがて役割を演ずべき場面について語っておられた。彼らは、自分たちにゆだねられた真理を広く伝えなければならなかった。彼らは、この世の支配者たちと争うこととなるのも覚悟しなければならなかった。キリストのために彼らは法廷に立たされ、為政者や王たちの前に呼び出されなければならなかった。キリストは、だれも反論することができないような知恵を彼らに与えると保証なさった。群衆の心を感動させ、狡猾(こうかつ)な敵を論駁(ろんぱく)しなされたキリストのみことばは、キリストの内に聖霊の力が宿っているのをあかししたが、キリストは彼に従う者にこの聖霊の力を約束なさった。

しかし、天の恵みを、ただ利己的な目的のためにのみ望んだ人々がおおぜいいた。彼らは、真理を明らかにあししになるキリストの驚くべき力を認めた。彼らは、支配者や為政者たちの前で語る知恵が与えられるという約束が弟子たちに与えられるのを耳にした。キリストは、自分たちの世的な利益のためにもその力を貸してはく

さらないであろうかと彼らは考えた。

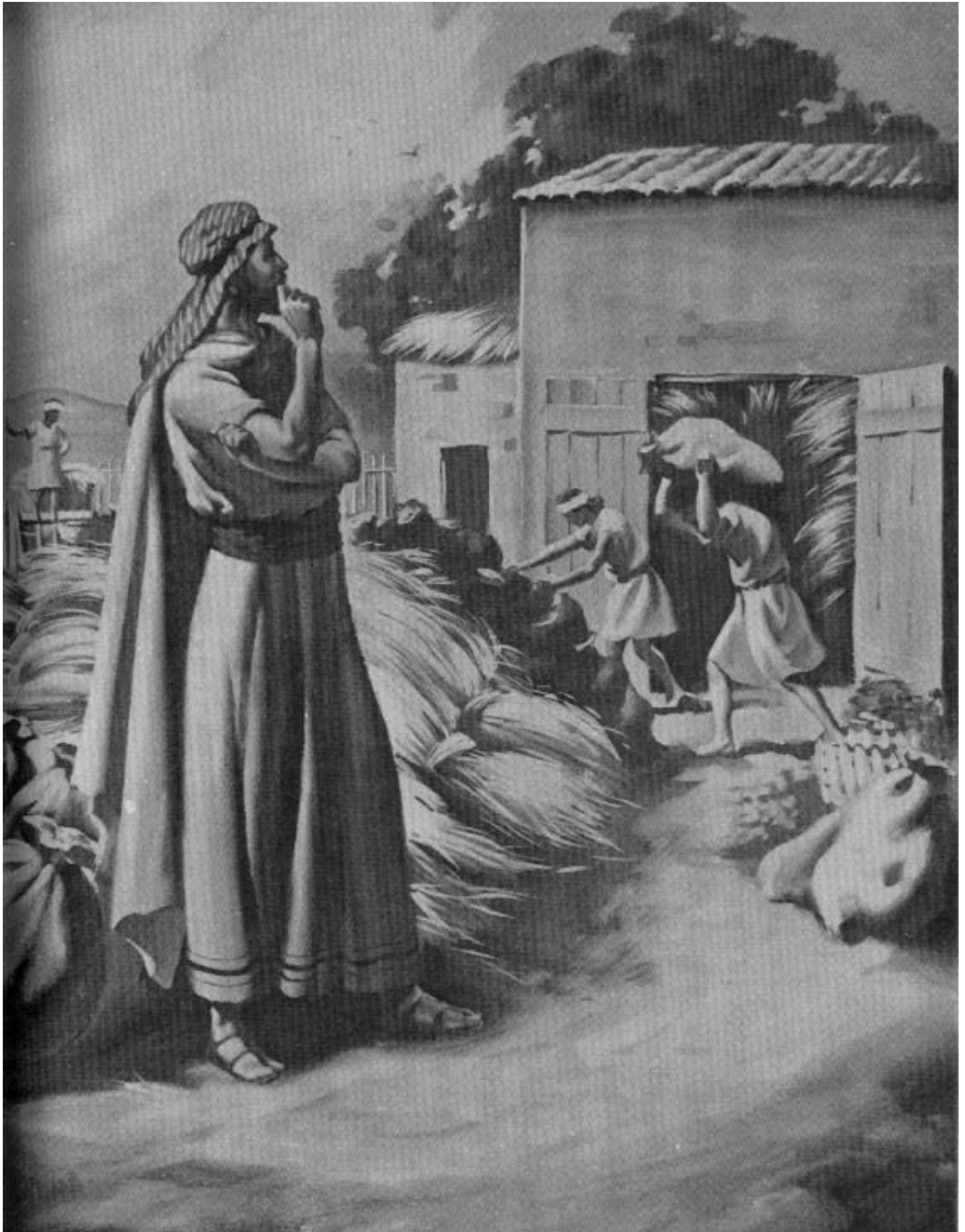
「群衆の中のひとりガイウスに言った、『先生、わたしの兄弟に、遺産を分けてくれるようにおっしゃってください。』」神はモーセを通して、財産の譲渡について、指示を与えておられた。長男は、父の財産のうち、他の子供たちの二倍を受けたが、他の兄弟たちは平等に分配を受けることになっていた。この人は、自分の分け前が兄弟に詐取されたと考えた。そして自分の力だけでは、自分が当然受けるべき分であると思われるものを手に入れることができなかった。しかし、もしキリストが口添えをしてくだされば、必ず自分の希望通りになるものと彼は考えた。この男は、キリストの、人の心を動かす訴えや、学者やパリサイ人に対する厳粛なけん責のことばを聞いていた。そのような命令のことばが兄弟に向かって語られるならば、彼は当方の権利を無視して分け前を渡さないようなことはないだろうと彼は考えた。

キリストが厳粛な教えをたれておられた最中に、この男は自分の利己的な性質をあらわした。彼は、主の能力を自分の現世の問題の解決に役立たせようと思ったのであるが、その霊的真理は彼の心を捕えなかった。彼の心は、遺産を獲得することに奪われていた。富んでおられたにもかかわらず、わたしたちのために貧しい者となられた栄光の王なるイエスは、神の愛という宝を彼に示しておられた。聖霊は彼に、「朽ちず汚れず、しばおこない」財産を受け継ぐ者となるようにと訴えていた（ペテロ第一・一ノ四）。彼は、キリストのみ力の証拠を見ていた。今こそ、偉大な教師に自分の心の最大の願いを表明すべきときがきた。しかし、バンヤンの寓話（ぐうわ）の中のくまでを持った男のように、彼の目は地上に向けられていた。彼は上のほうにある冠を見なかった。魔術師シモンのように、彼は、神のたまものを世的な利益を得る手段と考えたのであった。

救い主の地上における使命は終わりに近づいていた。恵みの王国の建設にあたって、主がなすべきことを成し遂げる時は、わずか数か月しか残っていなかった。それなのに、人間のどん欲は、一片の土地に関する争いのために、主をそのみ働きからそらそうとした。しかし、イエスは、その使命からそらされるべきではなかった。イエスは、「人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立てたのか」とお答えになった。

イエスは、この人に何が正しいかを告げることもおできになったろう。イエスは、その場合に何が正当かを知っておられた。しかし、兄弟たちは、いずれも、どん欲な心を持っていたための争いであつた。キリストは、こういう論争を解決することはわたしの仕事ではないと言われた。キリストは、福音の宣教という別の目的のためすなわち永遠の實在に対して人々の目をさまさせるという目的のためにこられたのであつた。

この場合のキリストのご処置は、キリストの名によつて奉仕するすべての者に対する教訓である。キリストが十二人の弟子たちをおつかわしになったとき、彼は、「行つて、『天国が近づいた』と宣べ伝えよ。病人をいやし、死人をよみがえらせ、らい病人をきよめ、悪霊を追いつせ。ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」と言われた(マタイ一〇ノ七、八)。彼らは、人々の現世的な問題の解決にあたるべきではなかった。彼らの仕事は、神と和らぐよう人々を説きすすめることであつた。この仕事にたずさわる彼らに、人類を祝福する力があつた。人間の罪と悲しみに対する唯一の救済策はキリストである。キリストの恵みの福音のみが、社会ののろいとなっているさまざまの悪を除くことができる。富んだ者が貧しい者に対して行なう不正、貧しい者が富んだ者に対していだく憎しみは、共に、利己心に根ざしており、これはキリストへの屈服によつてのみ根絶される。キリストのみが、利己的な罪の心を取り去り、新しい愛の心をお与えになるのである。キリストのしもべは、天からつか



金持ちは「こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいものを建てて、そこに穀野物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長生分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食べ、飲め、楽しめ」と言った。



わされた聖霊によって福音を宣べ伝え、キリストが人々のためにお働きになったように働くべきである。そのとき、この人類を祝福し高める働きにおいて、人間の力では全くなしとげられないような結果があらわされるのである。主は、この質問者を悩ましていた問題、また同様なすべての争いの根底を突いて、「あらゆる貪欲(どんよく)に對してよくよく警戒しなさい。たいたくさんの物を持っていたても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである」と言われた。

「そこで一つの譬を語られた、『ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、「どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが」と思いめぐらして言った、「こつしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食べ、飲め、楽しめ」。すると神が彼に言われた、「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか」。自分のために宝を積んで神に對して富まない者はこれと同じである。』」

愚かな金持ちのたとえによって、キリストは、この世をすべてとする者の愚かさをお示しになった。この人は、すべての物を神から受けていた。太陽は彼の土地の上を照らしていた。太陽の光は正しい者の上にも正しくない者の上にも輝くのである。天からの雨は、悪人の上にも善人の上にも降り注ぐ。主は植物を茂らせ、畑に豊かに物を生ぜしめられた。この金持ちは、農産物をどうすべきかと心を悩ました。彼の倉はあふれるほどであり、余分にとれたものを入れる場所もなかった。彼は、すべての恵みの源である神のことを思わなかった。彼は、貧しい人々を助けることができるように、神が彼を神の物をつかさどる家令とされたことを自覚しなかった。彼は、

神のたまものを分配するという尊い機会を持ちながら、自分の安楽のことしか考えなかった。

貧しい者、孤児、やもめ、苦しむ者、悩んでいる者の窮状は、この金持ちも知っていた。持ち物を施す多くの機会があった。豊かな持ち物から一部を分けてやることは彼には容易なことだったろう。そうすれば、多くの家庭は困窮から解放され、飢えている多くの人々は食物を与えられ、多くの裸の者は着物を着せられ、多くの人々の心は喜び、パンと着物を求める多くの祈りは答えられ、賛美の調べが天に上ったことであろう。「神よ、あなたは恵みをもって貧しい者のために備えられました」(詩篇六八ノ一〇)。この金持ちに与えられた祝福を通して、多くの人々の困窮に対する豊かな備えがなされていた。しかし、彼は、貧しい人々の叫びに対して心を閉じ、そのしもべたちに、「こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ」と言ったのである。

この人の目標は、減んで行く獣の目標より高くはなかった。彼は、神も天国も未来の生命もないかのように、自分の持つものはすべて自分の物で、神や人にはなんの負うところもないかのように生活していた。詩篇記者は、「愚かな者は心のうちに『神はない』と言つ」と書いたとき、このような人間のことを述べたのであった(詩篇一四ノ一)。

この人は、自己のために計画を立て、生活した。彼は、未来に対して十分の備えができたのを見とどけた。彼にとって今や、勤労の実をたくわえ、楽しむことがすべてであった。彼は、自分を他の人々よりも恵まれた者と思ひ、自分の賢明な経営法をてがらとした。彼は町の人々から、すぐれた判断力を持つ人、富裕な市民としてあ

がめられた。「みずから幸いなときに、人々から称賛され」るものだからである(詩篇四九ノ一八)。

しかし、「この世の知恵は、神の前では愚かなもの」である(コリント第一・三ノ一九)。金持ちが、楽しい年月を期待していたとき、主は全く別の計画を立てておられた。この不忠実な家令に言われたことは、「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう」ということばであった。この要求には金で応ずることはできない。彼がたくわえた富であっても、刑の執行猶予を買い取ることはできない。一瞬にして、彼が一生をかけて獲得したものは、彼にとって全く無価値なものとなる。「そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか」。彼の広大な畑も、いっばいに満たされた倉も、彼の支配のもとを離れる。「彼は積みたくわえるけれども、だれがそれを収めるかを知りません」(詩篇三九ノ六)。

彼は今の自分にとって価値のある唯一の物を、手に入れていなかった。自己のために生きることによって、彼は、同胞に対するあわれみとなって流れ出ていたはずの神の愛をしりぞけてきた。こうして、彼はいのちを拒否したのである。なぜなら、神は愛であり、愛はいのちだからである。この人は、霊的なものよりも地上のものを選んだ。そして、地上のものと共に彼は過ぎ行かなければならなかった。「人は栄華のうちに長くとどまることはできない。滅びうせる獣にひとしい」(詩篇四九ノ二〇)。

「自分のために宝を積んで神に対して富まない者はこれと同じである。」この描写は、いつの時代にも真実である。あなたは、利己的な利益のために計画を立てることも、宝を集めることも、古代バビロンの建設者が建てたような広大な邸宅を建てることもできない。しかし、破滅の使者を締め出すことができるほどの高い壁やがんじょうな門を造ることはできない。バビロン王ベルシャザルは、「盛んな酒宴を設け」、「金、銀、青銅、鉄、木、

石などの神々をほめたたえた」(ダニエル書五ノ一、四)。しかし、見えないかたの手が、壁に破滅のことばを書きしるし、敵軍の足音が宮殿の門の中に聞こえたのである。「カルデヤびとの王ベルシャザルは、その夜のうちに殺され」、別の国の王が王位についた(ダニエル書五ノ三〇)。

自己のために生きることとは、滅びることである。どん欲、自己のために利益を求めることは、魂をいのちから切り離す。物を獲得し、自己に引き寄せようとするのは、サタンの精神である。人びとに与え、自己を他の人々の幸福のために犠牲にすることは、キリストの精神である。「そのあかしとは、神が永遠のいのちをわたしたちに賜わり、かつ、そのいのちが御子のうちにあるということである。御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない」(ヨハネ第一・五ノ一、一二)。

それゆえ、キリストは言われる。「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っているても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである。」

## ことばよりは行動

本章は、マタイ二二ノ三―三三に基づく。

「『あなたがたはどう思うか。ある人にふたりの子があつたが、兄のところに行つて言った、「子よ、きょう、ぶどう園へ行つて働いてくれ」。すると彼は「おとうさん、参ります」と答えたが、行かなかつた。また弟のところに来て同じように言った。彼は「いやです」と答えたが、あとから心を変えて、出かけた。このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか』。彼らは言った、『あとの者です』。」

山上の説教の中で、キリストは、「わたしにむかつて『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである」と言われた(マタイ七ノ二一)。誠実を示すものは、ことばではなく、行為である。キリストは、あなたがたは、なんのすぐれたことを言うだろうかとは言われず、「なんのすぐれた事をしているだろうか」と言われるのである(マタイ五ノ四七)。「もしこれらのことがわかつていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである」というキリストのみことばは意味深い(ヨハネ一三ノ一七)。ことばには、それにふさわしい行為が伴わなければ価値がない。これが二人のむすこのたとえによつ

て教えられている教訓である。

このたとえば、キリストがその死に先だって最後にエルサレムを訪問されたときに語られた。彼は、神殿で売り買いする者たちを追いつかれた。彼のみ声は、神の力をもって彼らの心に語りかけた。人びとは驚き恐れて、言いわけも抵抗もせずに彼の命令に従った。

恐怖がおさまったとき、祭司や長老たちは、神殿にもどって来て、キリストが病人や死にかけている人々をいやしておられるのを見た。彼らは、喜びの声と賛美の歌を聞いた。神殿の中では、いやされて健康になった子供たちが、しゅろの枝をうち振り、ダビデの子にホサナと歌っていた。幼児は、回らない舌で、力強いやし主を賛美していた。それなのに、こうしたすべての事ながらも、祭司や長老たちの偏見やしつとを打ち破るには十分でなかったのである。

次の日、キリストが宮で教えておられると、祭司長たちや民の長老たちがイエスのもとに来て言った、「何の権威によって、これらの事をするのですか。だが、そうする権威を授けたのですか」。

祭司や長老たちは、キリストの権能について確かな証拠を見ていた。彼が宮を清められたとき、天の権威がそのみ顔からひらめくのを彼らは目撃した。彼らは、そのみことばによって立つ権威に抵抗することができなかった。再びその驚くべきいやしの行為によって、キリストは、彼らの疑問にお答えになった。彼は、その権威について、議論の余地のない証拠をお与えになったのであった。しかし、彼らの欲したのは証拠ではなかった。祭司や長老たちは、イエスにメシヤであることを宣言させておいて、そのみことばを悪く解釈して人々を扇動して、彼に立ち向かわせようとしていた。彼らは、キリストの影響力を失わせ、彼を殺そうと望んでいた。

イエスは、もし彼らがご自分のうちに神を認めることができず、そのみわざのうちにイエスの神性の証拠を見ることができなければ、自分はキリストであるとイエスがご自身についてあかしをしても彼らが信じないことを知っておられた。その答えにおいて、イエスは、彼らが引き起こそうとしていた問題を避けて、非難を彼ら自身に向けられた。

「わたしも一つだけ尋ねよう。あなたがたがそれに答えてくれたなら、わたしも、何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言おう。ヨハネのバプテスマはどこからきたのであったか。天からであったか、人からであったか」と彼は言われた。

祭司やつかさたちは当惑した。「彼らは互に論じて言った、『もし天からだと言えば、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。しかし、もし人からだと言えば、群衆が恐ろしい。人々がみなヨハネを預言者と思っているのだから』。そこで彼らは、『わたしたちにはわかりません』と答えた。するとイエスが言われた、『わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい』」。

「わたしたちにはわかりません」。この答えは偽りであった。祭司たちは、自分たちのおかれた立場を知っていたが、いいのがれをするために偽ったのである。バプテスマのヨハネはすでに現われて、彼らが今、権威の有無を論じているイエスについてあかしを立てたのであった。彼はイエスをさし示して、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言った(ヨハネ一ノ二九)。彼はイエスにバプテスマをほどこした。バプテスマをお受けになったのち、キリストが祈っておられると、天が開けて、神のみ霊がはどのように彼の上にくだり、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言う天からの声が聞こえた(マタイ三ノ一七)。

祭司やつかさたちは、ヨハネがどれほど、メシヤに関する預言をくり返して語ったかを知り、イエスのバプテスマのときの光景を知りながらも、ヨハネのバプテスマが天からのものであったと言おうとはしなかった。もし彼らが、心で信じている通りに、ヨハネは預言者であると告白するならば、どうして彼らは、ナザレのイエスは神の子であるというヨハネのあかしを否定することができたであろうか。また彼らは、ヨハネのバプテスマは人からであったということもできなかった。人々がヨハネは預言者であると信じていたからである。そこで彼らは、「わたしたちにはわかりません」と言ったのである。

ついで、キリストは、父親と二人のむすこのたとえを語られた。父は兄のところに行つて言った、「きょう、ぶどう園へ行つて働いてくれ」。彼は、「おとうさん、参ります」と答えたが、行かなかった。また弟のところに来て同じように言った。彼は「いやです」と言下に答えた。彼は従うことを拒み、悪い道に走つて悪友の仲間にはいつてしまった。しかし、後に悔いて、父の命令に従った。

このたとえの中で、父は神をあらわし、ぶどう園は教会をあらわしている。二人のむすこは二種類の人々をあらわしている。命令に従うことを拒み、「いやです」と言ったむすこは、公然と罪のうちに生活し、信心を口にすることもなく、神の律法の課する制限と服従のくびきに従うことを拒否する人々をあらわしている。しかし、これらの人々の多くは、のちに悔い改めて、神のご要求に従ったのであった。「悔い改めよ、天国は近づいた」というバプテスマのヨハネのメッセージによって福音が伝えられたとき、彼らは悔い改めて、罪を告白した(マタイ三ノ二)。

「おとうさん、参ります」と言つて、行かなかつたむすこは、パリサイ人の性格をよくあらわしている。この



おすこのように、ユダヤの指導者たちは、悔い改めがなんであるかを知らず、強いうめほれを持っていた。ユダヤ民族の宗教生活はうわべだけのものとなっていた。シナイ山で神の声がおきてを宣言したとき、すべての民は従うことを誓ったのであった。彼らは、「参ります」と言っただが、行かなかった。キリストがおいでになって彼らの前に律法の原則を示されても、彼らはキリストを拒否した。キリストは、当時のユダヤの指導者たちに、ご自分の権威と神としてのみ力について、十分な証拠をお与えになったのである。彼らは、それを明らかに認めながらも、その証拠を受け入れようとはしなかった。キリストは、彼らが服従の精神を持っていないために、いつもでも信じようとしないのであると言われた。「あなたがたは自分たちの言伝えによって、神の言を無にしている。…人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拜んでいる」とキリストは以前に彼らにおおせになられたことがあった(マタイ一五ノ六、九)。

キリストの前にいた人々の中には、学者やパリサイ人、祭司やつかさたちがいだが、二人のおすこのたとえをお語りになったあとで、キリストは聴衆に、「このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか」と質問された。われを忘れて、パリサイ人たちは、「あとの者です」と答えた。彼らは、それが自分たちを非難していることは気づかずにこう言ったのであった。そのときキリストのみ口から、非難のことばが発せられた。「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。というのは、ヨハネがあなたがたのところに来て、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそれを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしなかった」。

バプテスマのヨハネは、来て真理を宣べ伝えた。罪人はその説教によって、罪を悟り、悔い改めた。これらの

人々は、自己を義として、厳粛な警告を拒否する者たちよりも先に、天国にはいるであろう。取税人や遊女は無知であった。それに反して、知識のあるこれらの人々は真理の道を知っていた。それにもかかわらず、彼らは、神のパラダイスへの道を歩もうとはしなかった。彼らにとつていのちからのちへいたるかおりであるはずの真理は、死から死へいたるかおりとなった。自己を嫌悪した公然たる罪人たちは、ヨハネの手によってバプテスマを受けた。しかし、これらの教師たちは偽善者であった。彼らのかたくなな心は、真理を受け入れる妨げとなった。彼らは、罪を悟らせる神のみたまの力に抵抗した。彼らは神のいましめに従わなかった。

キリストは彼らに、あなたがたは天国にはいることはできないとは言われなかった。キリストは、彼らが天国にはいるのを妨げているものは、彼ら自身が作り出したものであることをお示しになった。これらユダヤの指導者たちに対して、戸はなお開かれていた。招きはまだ発せられていた。キリストは、彼らが罪を悟り、改心するのを見たいと望んでおられた。

イスラエルの祭司や長老たちは、宗教的儀式を行なつて日々を過ごした。彼らはこうした宗教的儀式を神聖なものと考えるあまり、俗事とは全く別のものにしていて、従つて彼らの生活は全く宗教的なものと思われていた。しかし彼らは、世の人に信心深く敬けんな者と思われたいと願い、人々に見てもらいたために儀式を行なった。服従すると口では言いながら、彼らは神に服従していなかった。彼らは、自分たちが教えていると公言している真理を行なう者ではなかった。

キリストは、バプテスマのヨハネを預言者たちのうちで最も偉大なものであると言明され、その聴衆に、ヨハネが神からつかわれた使者であるという証拠が彼らに十分与えられていることをお示しになった。荒野の説教

者のことばには力があつた。彼らはメッセージを断固として伝え、祭司やつかさたちの罪を責め、彼らに天国のわざを行なうように命じた。また、命じられたわざを行なわず、神の権威を無視することがいかに罪深いものかを、ヨハネは彼らに示した。彼は罪と妥協しなかつた。そして、多くの者が不義を離れたのである。

ユダヤの指導者たちの口にするところが真実のものであつたならば、彼らはヨハネのあかしを受け入れ、イエスをメシヤと信じたことであろう。しかし、彼らは、悔い改めと義の実を示さなかつた。彼らが軽べつした者たち、彼らより先に天国へと進んでいた。

たとえの中で、「参ります」と言つたおすこは、忠実で従順なように見せかけたが、やがて、彼のことばが真実でないことがわかつた。彼は、父に対して真の愛を持っていなかつた。そのように、パリサイ人も自己の清さを誇っていたが、試みられると、欠けていることが明らかにされた。彼らは自分たちの利益となると考えられるときには、律法の要求を苛酷なものとしたが、彼ら自身に服従が求められると、巧妙な詭弁(ぎべん)を弄(ろう)して、神の戒めの力を弱めたのである。彼らについて、キリストは、「彼らのすることには、ならうな。彼らは言うだけで、実行しないから」と言われた(マタイ二三ノ三)。彼らは、神に対しても、人に対しても、ほんとうの愛を持っていなかつた。神は、世を祝福するために、彼らが神の協力者となるように、彼らを召されたのであつた。しかし、彼らは、口ではその召しを受け入れながら、行為においては、服従を拒んでいた。彼らは自己に信頼し、自己の善良さを誇つたが、神のいましめを無視した。彼らは、神が彼らにお命じになったわざを行なおうとしなかつた。主は彼らの罪のゆえに、この不従順な民を絶縁しようとしておられた。

自分自身を義とすることは真の義ではない。それにすがりつく者は、恐ろしい欺瞞(ぎまん)におちいることに

なるだろう。今日、多くの者が、神のいましめに従っているといいながら、その心の中には、他の人々に対して流れ出る神の愛を持っていない。キリストは、主ご自身と一体となって世を救うみわざにたずさわるように彼らをお召しになる。しかし、彼らは、「おとうさん、参ります」と言うことだけで満足している。彼らは行かないのである。彼らは、神の働きをしている者と協力しない。彼らはなまけ者である。不忠実なむすこのように、彼らは神に偽って約束をする。教会の厳粛な契約をすることによって、彼らは、神のみことばを受け入れ、それに従うこと、神のご用に自己をささげることを誓った。しかし、彼らは、これを行なわないのである。□では、神の子であると称するが、生活と品性においては、その関係を否定するのである。彼は意志を神に服従させていない。彼らの生活は偽りである。

彼らは、それが犠牲を必要としない場合には、服従の約束を守るように見える。しかし、克己や犠牲が要求されたり、十字架がかかげられるのを見ると彼らはしりぞみするのである。そして、義務についての確信は薄らぎ、神のいましめを知りつつ犯すことが習慣となる。耳は神のみことばを聞くことであろう。しかし、霊的知覚力にはやない。心はかたくなになり、良心はまひしている。

キリストに対してはつきりした敵意をあらわしていないからといって、キリストに仕えていると思い違えてはならない。わたしたちは、このように考えて自分の心を欺くのである。時であれ、財産であれ、そのほかどんな神のおゆだねになったたまものであれ、神が神のご用に用いるようにわたしたちにお与えになった物を自分のために用いることは神に敵することになるのである。

サタンは、自己の勢力を強め、魂を自分の側にかち取るために、クリスチャンと称する者の、ものつくねむた

げで怠惰なところを用いるのである。自分はキリストのために実際の働きはしていないが、キリストの側にあると考えている多くの人は、敵に有利な立場を与えているのである。主のための勤勉な働き人とならないことによって、あるいは義務を果たさずみことばを語らずにいることによって、彼らは、キリストのためにかち得られたはずの魂をサタンが支配するままにさせているのである。

わたしたちは、怠慢や無為であって救われることはできない。真に改心した人が、無力な役に立たない生活を送ることはないのである。慢然と天国に流れつくというようなことは、あり得ない。なまけ者はそこにはいることはできない。もしわたしたちが、天国にはいろいろと努力しないならば、またもしわたしたちが、天国の律法を構成しているものを熱心に学ぼうとしないならば、それにあずかるにふさわしくないのである。地上において神と協力しようとしなない者は、天国においても神と協力しないであろう。彼らを天国に連れて行くことは安全ではないであろう。

神のことばを知りながら、それに従おうとしない者よりも、取税人や罪人のほうに望みがある。自分が罪人であることを知り、その罪をおおわず、神のみ前に、身も心も汚れていることに気づく者は永遠に天国から切り離されるのではないかとおそれをいだくのである。その人は、自分の病人でいる状態を認め、「わたしに来る者を決して拒みはしない」と言われた偉大な医者（ヨハネ六ノ三七）のこのような人々を主は、そのぶどう園の働き人としてお用いになることができる。

初め、父の命令に従わなかったおすこを、キリストは非難もなさらなかったし、また賞賛もなさらなかった。この第一のおすこのように服従しない人々は、そういう態度を取ったからといって、それは名誉なことではない。

彼らの率直さは徳と見なさるべきではない。ただその率直さが、真理と神聖によって清められるならば、人々をキリストのための大胆なあかし人とするであろう。しかし、罪人が、それを生来の状態のままで用いるならば、それは、悔べつたであり、反抗的であり、ほとんど冒瀆と言ってよいものである。人が偽善者でないということ、その人の罪を軽くするものではない。聖霊が心に訴えるとき、即刻これに応じることがわたしたちにとって一番安全である。「きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ」という召しが来るとき、その招きを拒んではならない。「きょう、み声を聞いたなら、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル四ノ七)。服従を延ばすことは安全ではない。あなたは二度と招きを聞かないかも知れない。

また、一時罪を心にいだいても、あとで、容易にそれを捨てることのできるなどとだれも考えてはならない。そうはいかないのである。心にいだくすべての罪は、性格を弱め、習慣を強める。肉体的、知的、道德的墮落がその結果となってあらわれる。人は犯した悪を悔い、正しい道を歩もうとすることであろうが、ひとたび、悪となれ親しんだことは、善と悪との識別を困難にする。形づくられた悪習慣によって、サタンは幾度も幾度も攻撃してくるのである。

「きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ」という命令によって、すべての人の誠実さが試みられる。ことばだけでなく行為が伴うであろうか。召された者は、その持つすべての知識を用い、忠実に、私心なく、ぶどう園の所有者のために働いているであろうか。

使徒ペテロは、わたしたちがどのように働くべきかについて、教えている。彼はこう言っている。「神とわたしたちの主イエスとを知ることによって、恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。いのちと信心と

にかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力によって、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳とによって、わたしたちを召されたかたを知る知識によるのである。また、それらのものによって、尊く、大いなる約束がわたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである。それだから、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい」(ペテロ第二・一ノ二七)。

もしあなたが、あなたの魂というぶどう園を忠実に耕すならば、神はあなたを、ご自身と共に働く者としておられるのである。あなたは、自分のためだけでなく、他の人々のためにも、なすべき働きがあるであろう。教会をぶどう園にたとえることによって、キリストは、わたしたちの同情と働きの対象を、教会内部の者にのみ限るようにお教えになったわけではない。主のぶどう園は広げなければならない。働きの方は全世界に広げられることを主は望んでおられる。わたしたちが神の教えと恵みを受けるとき、尊い作物をいかに育てるべきかについての知識を他の人々に分け与えなければならない。そうすることによって、わたしたちは主のぶどう園を拡張することができるのである。神は、わたしたちの信仰、愛、忍耐の証拠を見たいと待っておられる。神は、わたしたちが地上の神のぶどう園で有能な働き人となるために、あらゆる霊的便宜を活用しているかどうかを見ておられる。それは、アダムとエバが罪のために追放された神のパラダイス、エデンの住居にわたしたちがはいれるようになるためである。

神は、神の民に対して父としての関係に立っておられる。そして、わたしたちに、父としての神に忠実に奉仕

することを要求しておられる。ここでキリストの生涯を考えてみよう。キリストは、人類のかしらとして立つとともに、父なる神に奉仕なさった。こうして、すべての人の子らにとるべき道を示す模範となられた。神は、キリストのような服従を今日の人々に求めておられる。キリストは父なる神に、愛と喜びと自由をもってお仕えになった。「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と宣言された(詩篇四〇ノ八)。キリストは、なすべき働きを完成するためには、どんな犠牲も大き過ぎるとは考えず、どんな苦勞もつら過ぎるとはお思いにならなかった。十二才の時、彼は「わたしが自分の父の業をつとめている(詳訳聖書)ことを、ご存じなかつたのですか」と言われた(ルカ二ノ四九)。彼はすでに召しを聞き、働きに着手しておられたのであった。「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」と彼は言われた(ヨハネ四ノ三四)。

このように、わたしたちも神に仕えるべきである。最高の標準に基づいて服従する者こそ仕えていると言えるのである。神のむすこ、娘となろうと思う者は、神、キリスト、天使たちと共に働く者であることを示さなければならぬ。これはすべての人にとつてのテストである。彼に忠実に仕える者について、主は、「彼らはわたしが手を下して事を行う日に、わたしの者となり、わたしの宝となる。また人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ」と言っておられる(マラキ書三ノ一七)。

み摂理のうちに神がお働きになるのは、人々を試みて、人々に品性を発達させる機会を与えることである。それによって神は、彼らが神の命令に従うかどうかをためされるのである。善行によって神の愛を買い取ることはできないが、それはわたしたちが愛を持っていることをあらわすのである。もしわたしたちが、神に意志をささ



げるならば、わたしたちは神の愛を得ようとして働くようなことはしないであろう。神の愛を、価なくして与えられるたまものとして心に受け入れるならば、神に対する愛の心から、喜んで神のいましめに従うようになる。

今日、世界にはただ二種類の人々しかない。さばきのときにもただ二種類の人々が認められるだけである。つまり、神の律法を犯す人々とそれに従う人々である。キリストは、わたしたちが忠実であるか不忠実であるかをためす試金石を与えておられる。彼は言われた。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。…わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであらう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであらう。…わたしを愛さない者はわたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である」。「もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにあるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにあるのと同じである」(ヨハネ一四ノ一五、二一、二四、一五ノ一〇)。

## 第 17 章

## 選ばれる人たち

本章は、マタイ二二ノ一―四に基づく。

礼服のたとは、わたしたちの前にきわめて重要な教訓を展開している。婚姻は、人性と神性との結合をあらわし、礼服は、婚宴にふさわしい客と認められる者がみな所有しなければならぬ品性をあらわすのである。

このたとは、晩餐のたとえと同様に福音の招待が発せられて、ユダヤ民族がそれを拒んだために、異邦人にあわれみ深い招待が発せられたことを教えている。しかし、このたとは招待を拒絶した者に対して非常な恥辱と恐ろしい罰があることを教えている。婚宴への招待は王の招待である。それは命令を下す権威者から発せられている。それを受ける者に非常な名誉を与える。しかし、その名誉は正しく評価されなかった。王の権威は軽視された。家の主人の招待のほうは、冷淡に扱われたが、王の招待のほうには、侮辱と殺害が待っていた。彼らは王のしもべたちをあなどり、侮辱を加えて殺してしまった。

一家の主人は、自分の招待が軽んじられたのを見ると、招かれた人でその晩餐にあずかる者はひとりもないであろうと言った。しかし、王に侮辱を加えた者は、王の面前と彼の食卓から除かれるだけではすまなかった。王

は「軍隊を送ってそれらの人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。」

どちらのたとえでも婚宴には客がつれてこられたが、婚宴に出席する者はみな一つの準備をしていなければならないことが、後のほうのたとえで示されている。この準備を怠る者は退けられるのである。「王は客を迎えようとしてはいつてきたが、そこに礼服をつけていないひとりの人を見て、彼に言った、『友よ、どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいつてきたのですか』。しかし、彼は黙っていた。そこで、王はそばの者たちに言った、『この者の手足をしばって、外の暗やみにほうり出せ。そこで泣き叫んだり、齒がみをしたりするであろう』」

婚宴への招待は、キリストの弟子たちが発したものであった。わたしたちの主は、はじめに十二人を、次に七十人をつかわされた。彼らは神の国は近づいた、悔い改めて福音を信ぜよと人々に呼びかけた。だがこの呼びかけに応じるものはなかった。婚宴に招かれた者たちはこなかった。しもべたちはまたつかわされて言った、「食事の用意ができました。牛も肥えた獣もほふられて、すべての用意ができました。さあ、婚宴においでください。」

これはキリストの十字架後に、ユダヤ民族に発せられたメッセージであった。だが、神の特別の民であると自認する民族は、聖霊の力をもって彼らに伝えられた福音を拒んだ。しかも多くの者は、これを非常に軽べつした態度で拒んだ。またある者は、救いが与えられることと栄光の主を拒絶したことに対するゆるしがあたえられるという申し出に腹を立てて、使いの者たちを攻撃した。「大迫害」が起こった（使徒行伝八ノ一）。おおぜいの男女が獄屋に投げ込まれ、主の使者のなかには、ステパノやコブのように、殺害された者もあった。

こうしてユダヤ民族は神のあわれみを全く拒絶してしまった。キリストは、こうなることをたとえの中で予告しておられた。王は「軍隊を送ってそれらの人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。」宣言されていた通り

の審判がユダヤ人にくだり、エルサレムは破壊され、民族は散らされた。

婚宴への三度めの招待は、福音が異邦人に与えられたことをあらわしている。王は言った、「婚宴の用意はできているが、招かれていたのはふさわしくない人々であつた。だから、町の大通路に出て行って、出会つた人はだれでも婚宴に連れてきなさい。」

大通りに出て行つた王のしもべたちは、「出会う人は、悪人でも善人でもみな集めてきた」。それは多種多様な人から成る一団であつた。ある者は招待を拒絶した人々と同様、婚宴をもよおした主人になんの関心も持っていなかつた。はじめに招かれた者たちは、この世の利益を犠牲にしてまで王の晩餐に出なければならぬことはないと考えた。また招きを受け入れた者であっても、ただ、自分の利益のことしか考えていない者もあつた。彼らは婚宴の食卓にあずかるために来たが、王を尊ぼうとする気持ちは少しも持っていなかつた。

王が来て客を見わたすと、すべての者の本性が明らかであつた。それというのは、婚宴につどつた客の一人一人のために、あらかじめ礼服が用意されていた。この服は王の贈り物であつた。客はこれを着ることによつて婚宴を催した主人に敬意をあらわした。しかし一人の男はふだん着を着ていた。彼は、王の求めた準備を拒んだのである。高い価を払つて彼のために用意されてある服を、彼は無視して着なかつた。こうして彼はその主人をさげすんだ。「どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいつてきたのですか」という王の質問に、彼は何も答えることができなかった。彼は自分のいけないことを知っていた。そのとき王は言った、「この者の手足をしばつて、外の暗やみにほうり出せ。」

こうして、王が婚宴の客を吟味したことは、審判のみわぎをあらわしている。福音の婚宴に集まる客は神に

仕えることを表明する者、その名がいのちの書に書かれている者である。しかしクリスチャンであると告白する者がすべてほんとうの弟子なのではない。最後の報酬が与えられる前に、だれが義人の嗣業にあずかるにふさわしいかが決定されなければならない。この決定はキリストが天の雲に乗って再臨なさる以前に行なわれなければならない。キリストがこられるときには、報いを携えてきて、「それぞれのしわざに応じて報い」られるからである（黙示録二二ノ一二）。とすると、主の来臨の前にすべての人のわざがどんなものであるかがさばかれ、キリストの弟子の一人一人はその行為にしたがって報いが与えられるのである。

調査審判が天の法廷で行なわれるのは、人がまだ地上に住んでいるときにおいてである。キリストの弟子であることを表明するすべての者の生活が、神の前で調べられる。すべての者が天の書物の記録に従って吟味され、その行為によつて一人一人の運命が永遠に決定される。

たとえの中の礼服は、キリストの真の弟子が持つ清くてしみのない品性をあらわしている。教会は、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく」「汚れない麻布の衣を着る」のである（エペソ五ノ二七、黙示録一九ノ八）。この麻布の衣は「聖徒たちの正しい行いである」と聖書にしろされている（黙示録一九ノ八）。主を自分の救い主として受け入れるすべての者に信仰を通して与えられるのは、キリストの義であり、キリストご自身の汚れない品性である。

神が人類を最初に聖なるエデンに置かれたとき、彼らが着ていたのは純潔という白い衣であった。彼らは神のみこころに完全に一致した生活を送った。彼らの深い愛情はことごとく天の父にささげられた。美しく柔かい光——神の光が——罪を知らぬアダムとエバを包んだ。この光の衣は、天与の純潔という霊的な着衣の象徴であっ

た。もし彼らがずっと神に真実を尽くしていたら、彼らはいつまでもその光に包まれていたはずであった。しかし罪が侵入したとき神とのつながりは断たれ、それまで彼らを取り囲んでいた光は消え去った。彼らは裸となった自分の身を恥じて、いちじくの葉をぬい合わせておおいを作り、それを天の衣の代わりにしようとした。

これは、アダムとエバが神にそむいて以来、神の律法の違反者がつねに試みてきたことである。彼らは違反によってあらわれた裸をおおうために、いちじくの葉をぬい合わせて着た。彼らは自分でくふうした衣を着てきた。彼らは自分のわざによって罪をおおひ、神に受け入れられようとしてきた。

しかしこれはできることではない。人は、失われた純潔という衣の代わりになるものをくふうすることはできない。いちじくの葉で作った衣やこの世の服装がどれほどよいものであっても、それを着てキリストと天使と共に小羊の婚宴に列席することはできないのである。

キリストご自身の備えてくださった衣だけが、わたしたちを神の臨在の前に立たせてくれるのである。キリストはこのおおひ、すなわち主ご自身の義の衣を、悔い改めて信ずる一人一人の魂に着せてくださるのである。「そこで、あなたに勧める…。あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい」と主は言われる(黙示録三ノ一八)。

天の織機で織られたこの衣には、人間の創意による糸は一本も含まれていない。キリストは人性をおとりになって完全な品性を形成された。そしてこの品性をわたしたちに分け与えてくださるのである。「われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである」(イザヤ書六四ノ六)。わたしたちが自分でなし得ることは、罪で汚れている。しかし神のみ子は「罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない」(ヨハネ第一

・三ノ五)。罪は「律法を犯すこと」であると定義されている(ヨハネ第一・三ノ四英語欽定訳)。だがキリストは、律法のあらゆる要求に従順であられた。主はご自分について、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と言われた(詩篇四〇ノ八)。主はまた、この地上にあられたとき弟子たちに向かって、「わたし(は)わたしの父のいましめを守った」と言われた(ヨハネ一五ノ一〇)。キリストはその全き従順によって、あらゆる人間が神の戒めに従うことができるようになされた。人が自分自身の心をキリストにささげるとき、心はキリストの心と結合し、意志はキリストの意志に没入し、精神はキリストの精神と一つになり、思いはキリストのうちにとられて、わたしたちはキリストのいのちを生きる。これがキリストの義の衣を着ることである。そして、主がわたしたちをご覧になるとき、いちじくの葉の衣でも、裸と罪のみにくさでもなく、エホバなる神の律法への完全な従順であるご自分の義の衣をお認めになる。

婚宴の客は王の検査を受けた。王の命じるままに礼服を身につけた者だけが受け入れられた。福音の婚宴の客もこれと同じである。すべての者が偉大な王の厳密な検査を通過しなければならない。そしてキリストの義の衣を着ている者だけが受け入れられるのである。

義とは正しい行ないである。そしてすべての者は各自の行為によってさばかれる。わたしたちの品性は、わたしたちの行ないに現われる。行ないは信仰が本物であるかどうかを示す。

キリストはいつわりをおおせにならない。また聖書の教えは巧みにつくられた寓話ではないと確信するだけでは十分でない。わたしたちは、イエスのみ名こそ人を救う唯一の名であることを信じつつも、なお信仰によってキリストを自分の救い主として信じないでいることもできる。真理の理論を信ずるだけでは十分でない。キリス

トへの信仰を表明して名前を教会名簿に連ねるだけでは十分でない。「神の戒めを守る人は、神にあり、神もまたその人にいます。そして、神がわたしたちのうちにいますことは、神がわたしたちに賜わった御霊によって知るのである。」「もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである」(ヨハネ第一・三ノ二四、二ノ三)。これが回心のほんとうの証拠である。わたしたちが□で何を言おうとも、キリストが義の行為となつてあらわされるのでなければ、それは無にひとしい。

真理は心に植えつけられなければならない。それが頭脳を支配し、感情を調節しなければならない。人の品性全体が神のことばの印をおされなければならない。神のみことばの一点一画が日常生活の中にあらわされなければならない。天の性質にあずかる者は、神の義の標準であるその聖なる律法と調和する。神はこの規準によって人間の行為をおはかりになる。これが審判における品性の試金石となる。

律法は、キリストの死によつて廃棄されたと主張する者が多いが、これは「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思つてはならない…。天地が滅びゆくまでは、律法の一点一画もすたることはない」と言われたキリストご自身のことばと矛盾する(マタイ五ノ一七、一八)。キリストが生命を捨てられたのは、人間が律法にそゝいたその罪をつぐなうためであつた。律法を変えたり廃されたりできるものであれば、キリストの死の必要はなかつた。キリストは、地上の生活によつて神の律法をあがめられた。死によつて、キリストは律法を確証なさつた。キリストは、生命を犠牲としてささげられたが、それは神の律法を廃するためでも低い標準を設けるためでもなく、義が維持されるため、律法の不変性が示されるためであり、律法が永遠に確固として立つためであつた。



サタンは、人間が神の戒めに従うことは不可能であると主張した。事実、自分の力ではわたしたちは戒めに従うことは不可能である。しかし、キリストは人間の形をとってこられて、人性に神性が結合するとき人は神の戒めのあらゆる点に従いうることを、その完全な従順によって立証なさった。

「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ一ノ一二)。この力は人間には備わっていない。それは神の力である。魂はキリストを受け入れるとき、キリストのような生活を送る力を受ける。

神は、神の子らに完全を求められる。神の律法はご自身の品性の写しであり、またすべて品性の標準である。神がどのような人びとによってみ国を構成なさるかについてだれもまちがいをしないように、この永遠の標準がすべての者に与えられている。キリストの地上生活は神の律法の完全な表現であった。そして自分は神の子であると表明する者の品性がキリストのようになれば、彼らは神の戒めに従うのである。そのとき主は、天の家族を構成する一員として彼らを信頼することがおできになる。彼らはキリストの義の輝かしいよそおいを身にまとい、王の婚宴の座につく。彼らは血で洗われた会衆に加わる権利を持つのである。

礼服をつけずに婚宴に出席した人は、今日のわたしたちの世界の多くの人々を代表している。彼らはクリスチャンであると表明し、福音の祝福と特権にあずかることを主張するが、自分の品性が変えられる必要があるとは思っていない。彼らは真心から罪を悔い改めたことがない。彼らはキリストの必要を自覚せず、キリストへの信仰を働かせない。彼らは悪への先天的並びに後天的傾向に勝利していない。それにもかかわらず彼らは自分は高潔であると思っており、キリストに信頼せずに自分の功績にたよっている。彼らはみことばを聞きに婚宴にあつ

まるが、キリストの義の衣を身につけていない。

みずからクリスチャンと称する者の中には、単なる道德家にすぎない者が多い。彼らは、キリストを世にあらわして主をあがめる唯一のたまものを拒んでいる。聖霊のお働きについては彼らは何も知らないのである。彼らはみことばを行なわない。キリストと一体である者と、世に結ばれている者とを区別する天の原則は、ほとんど識別することができなくなっている。キリストに従うと表明する者は、もはや特別にわかれた民ではない。その境界線は明りようでない。民は世と、そのならわしと、習慣と、利己主義のとりこになっている。世が教会と共に律法に従わなければならないのに、逆に教会が世とともに律法を犯している状態である。教会は日ごとに世に転向しつつある。

彼らは、みなキリストの死によって救われることを期待はするが、キリストの自己犠牲の生活を送ろうとしない。彼らは価なくして与えられる豊かな恵みを賛美し、みずからをうわべだけの義であおって品性の欠陥を隠そうとする。しかし、彼らの努力は主の日になんの役にも立たない。

キリストの義は、心中に一つでも愛している罪があれば、それをおおうことをしない。人は、心の中で律法に違反していても外面的な違反行為を犯さなければ、世間の人々から高潔な人物と見なされるだろう。しかし、神の律法は心の秘密を見ぬく。すべての行為は、その動機によってさばかれる。神の律法の原則に調和している事からだけが、さばきのときに立ちうるのである。

神は愛である。神は、キリストを与えることによってその愛を示された。「御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るため」に「そのひとり子を賜わった」とき、神は、ご自分で買いとられた所有である人類

に何一つさし控えることをなさらなかった(ヨハネ三ノ一六)。神は全天をお与えになった。強敵サタンに打ち負かされないように、わたしたちはそこから力と能力を引き出すことができる。だが、神の愛は罪を許容するものではない。神はサタンの罪を許容されなかった。またアダムやカインの罪をも許されなかった。同様にいかなる人の子の罪もお許しにならない。神はわたしたちの罪を黙認したり、品性の欠陥を看過したりなさない。神はわたしたちに、そのみ名によって勝利することを期待されるのである。

キリストの義のたまものを拒む者は、彼らを神のむすこ娘とさせる品性を拒んでいるのである。彼らは婚宴の席につらなる唯一の資格であるものを拒んでいるのである。

たとえばの中で、「どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいつてきたのですか」と王に尋ねられたとき、この男は黙っていた。このことは大いなる審判の日にもそうである。人々は今は自分の品性の欠陥の言いわけをすることができても、その日にはなんの言いわけもできない。

キリストを告白する現代の教会は、最高の特権に恵まれている。主は、ますます輝かしい光の中でわたしたちに啓示されている。わたしたちの特権は昔の神の民の特権よりはるかに大きい。わたしたちは、イスラエルに託された大きな光を持っているばかりではない。偉大な救いの確証がキリストを通していつそう明らかに与えられているのである。ユダヤ人にとって型であり象徴であったものが、わたしたちにとっては実体として与えられている。彼らには旧約の歴史があったが、わたしたちにはそれに加えて新約の歴史がある。わたしたちには来臨なさった救い主、十字架にかかり復活し、開かれたヨセフの墓に向かつて「わたしはよみがえりであり、命である」と仰せになった救い主の確証がある。わたしたちがキリストを知り、キリストがわたしたちを愛しておられるこ

とによって、神の国はわたしたちのまん中に置かれている。キリストは説教によってわたしたちに啓示され、歌にうたわれる。霊の婚宴はわたしたちの前に豊かにとのえられている。測り知れない価で備えられた礼服はあらゆる魂に無代で提供される。わたしたちは、キリストの義、信仰による義、神のみことばのきわめて大きな尊い約束、キリストによって天父に自由に近づくこと、聖霊の慰め、神の国における永遠の生命の保証などが神の使者によって教えられている。神は、天の婚宴である大晩餐の準備のために、これ以上に何をしてくださる事ができるであらう。

天において奉仕の天使はこう言っている。わたしたちに行なえと命じられた務めを、わたしたちは果たしました。わたしたちは、悪天使の軍勢を押し返しました。わたしたちは輝きと光を人々の心に送り、イエスにあらわされた神の愛を思い起こさせました。わたしたちは彼らの目をキリストの十字架にひきつけました。彼らの心は、神のみ子を十字架につけた罪を強くさとりました。彼らは罪を自覚しました。彼らは回心のときにどんな段階をとるべきかを理解しました。彼らは福音の力を感じました。彼らの心は神の愛の尊さを見てくださいました。彼らはキリストの品性の美しさを見ました。だが多くの者にとって、こうしたことはみな無益でした。彼らは自分たちの習慣と性質とを神に従わせませんでした。彼らは天の衣を着るために地の衣服をぬぐうとしませんでした。彼らの心はどん欲に満ちていました。彼らは神を愛するよりも世の交わりを愛しました。

最後の決定の日は厳粛な日である。使徒ヨハネは預言の幻のうちにこう描写している。「また見てみると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあつた。天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開

かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた」(黙示録二〇ノ一、一二)。

人々が永遠の門口に立って過去をふり返ることは悲しいことである。自分の全生涯がありのままの姿で示される。そのときには世の快楽と富と名誉は、重大なものとは思われない。人々はそのときに、自分たちのさげすんだ義だけが価値あるものであることを知る。彼らは、サタンの惑わしのままに自分たちの品性が形成されたことをさとる。彼らが選んだ衣は、初めからの大背信者への忠誠のしるしであった。そのとき彼らは自分たちの選択の結果を見る。彼らは、神の戒めを犯すとはどういうことであるかを知る。

永遠のために準備する恵みの期間は、もうこれから先にはない。わたしたちがキリストの義の衣を着なければならぬ時は、この世においてである。主の戒めを守る者のためにキリストがお備えくださった住居を継ぐために品性を形成する機会はまだこれだけである。

わたしたちの恵みの期間はすみやかに閉じようとしている。終わりは近い。わたしたちは次のように警告されている、「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい」(ルカ二一ノ三四)。その日に準備ができていないことのないように、気をつけなければならない。礼服をつけずに王の婚宴につらなることのないように、注意しなければならない。

「思いがけない時に人の子が来る」。「裸のまま歩かないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身に着けている者はさいわいである」(マタイ二四ノ四四、黙示録一六ノ一五)。

第 18 章

# タラントの正しい使い方

本章は、マタイ二五ノ一三―三〇に基づく。

キリストは、オリブ山上で、ご自分がこの世界にもう一度こられることについて、弟子たちに語られた。そして、キリスト再臨の切迫を示す前兆をあげて、目をさまして、用意しているように弟子たちにお命じになった。キリストは、くり返して、「だから、目をさましていなさい。その日、その時が、あなたがたにはわからないからである」とおおせになった。そして、キリストの再臨を待つということは、何を意味するかを、お示しになった。それはただ漫然と待つことではなくて、勤勉に働いて、時を過ごすことであつた。主はそのことをタラントのたとえで教えられた。

「また天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えて、旅に出た」と主は言われた。

遠い国へ旅に出た人とは、キリストのことである。キリストは、このたとえを語られたとき、まもなくこの地

上から天へ帰ろうとしておられた。「僕ども」、つまり、どれいは、キリストの弟子たちのことである。わたしたちは自分自身のものではない。わたしたちは、「代価を払って買いとられた」もの（コリント第一・六ノ二〇）しかも、それは「銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」（ペテロ第一・一ノ一八、一九）。これは、「生きている者どもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために、生きるためである」（コリント第二・五ノ一五）。

すべての人類は、この無限の代価を払って買われたのである。神は、この世界に天の全資産を傾けること、すなわち、キリストにあつて、全天をわたしたちに与えることによって、すべての人の意志、愛情、知能、魂を買い取られたのである。信者であるとないと問わず、すべての人は、神の所有である。すべての者は、神のために奉仕するように召しを受けているのであつて、それに対する彼らの態度いかによつて、大いなる審判の日に、決算をしなければならないのである。

ところが、このような神の要求を、すべての人が認めているわけではない。たとえば、キリストのしもべたちといわれている人びとはキリストに奉仕することを受け入れたことを公言する人のみをさしている。

キリストに従う者は、奉仕をするためにあがなわれた。主は、奉仕が人生の真の目的であることをお教えになった。キリストご自身が、勤労者であられて、彼に従うすべての者に、神と人類に仕えるという、奉仕の法則をお与えになる。ここで、キリストは、彼らが、これまで考えもしなかったところの人生に対する高尚な見方をお示しになった。他のための奉仕に生きるということは、人をキリストに結合させる。奉仕の法則が、わたしたちを、神と同胞とに結びつける鎖となるのである。

キリストは、その僕たちに、「自分の財産」、つまり、神のために用いるべき何物かをとお与えになる。キリストは、「それぞれ仕事を割り当てて」おられる。すべての者は、天の永遠の計画の中に自分の占めるべき場所があるのである。だれでも、魂を救うために、キリストと協力して働かなければならない。天の住居の中に、わたしたちの場所が確実に用意されているのと同じように、わたしたちがこの地上で神のために働くべき場所が、定められているのである。

### 聖霊のたまもの

キリストが教会に託されたタラントというのは、特に、聖霊によって与えられるたまものと祝福のことである。「すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が与えられている。すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである」(コリント第一・一二ノ八―一二)。だれもが同じたまものを与えられるわけではないが、主のしもべにはだれにでも何かの霊のたまものが約束されているのである。

キリストは、弟子たちを去るに臨んで、「彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ』」(ヨハネ二〇ノ一二)。また、「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る」と言われた。しかしキリストの昇天後において始めて、たまものは、満ちあふれるばかりに注がれたのである。信仰と祈祷によって弟子たちが神の働



きのために全く自分たちを服従させたときに、始めて、神の霊が豊かに彼らの上に降り注いだのである。こうして、特別の意味において、天の財産が、キリストに従う者らにゆだねられたのである。「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」。「キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたひとりびとりに、恵みがあたえられている」(エペソ四ノ八、七)。「御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられたのである」(コリント第一・一二ノ一一)。たまものは、すでに、キリストにあってわたしたちのものであるが、それを実際に受けることは、神の霊をわたしたちが受けるか否かにかかっている。

ところが、聖霊の約束は、それが尊重されなければならないほどには、尊ばれていない。約束の成就も実現されなければならないほどに、実際に現われていない。福音の事業を力のないものにしているのは、この聖霊の欠乏である。学識、才能、弁舌など、先天的、後天的のいっさいの資質が備わっていても、神の霊の臨在がないならば、人の心に触れることも、罪人をキリストに導くこともできない。その反面、どんなに貧弱で無知な弟子であっても、キリストと結合し、聖霊のたまものを所有しているならば、必ず人びとの心に触れる能力をもつことができる。神は彼らを用いて、宇宙間の最高の感化を及ぼす器となさるのである。

### その他のタラント

特別の聖霊のたまものだけが、このたとえの中で表示されているタラントではない。タラントというのは、先天的であろうが、後天的であろうが、一般的のものであろうと霊的のものであろうと、すべてのたまものと才能のことである。これを、すべて、キリストのための奉仕に用いなければならない。わたしたちは、キリストの弟

子になったのであるから、自分自身と持っているすべてのものをささげて、キリストに従うのである。すると、キリストは、これらのたまものを清め高尚にして、再びわたしたちに返してくださるから、わたしたちは、同胞を祝福するためにそれを用いて、神の栄光をあらわすようになるのである。

神は、「それぞれの能力に応じて」、すべての者にお与えになった。タラントは、無計画に与えられるものではない。五タラントを使用する能力のあるものは、五タラントが与えられた。二タラントを活用することができものは、二タラントを受けた。一タラントだけを賢明に用いることができるものは、一タラントを受けたのである。だれも、大きなたまものを受けなかったからといって悲しむ必要はない。すべての者にたまものをお与えになった神は、たまもの大きい小さいにかかわらず、それが活用されることによって栄えをお受けになるからである。五タラントをさづけられたものは、五タラントを活用し、一タラントだけを与えられたものは、一タラントを活用しなければならぬ。神は、「持たないところによらず、持っているところによって」、人が返すことを望んでおられるのである(コリント第二・八ノ一二)。

たとえば、「五タラントを渡された者は、すぐに行つて、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。二タラントの者も同様にして、ほかに二タラントをもうけた」とある。

タラントは、どんなに小さくても、活用しなければならぬ。わたしたちが、何よりも心に留めなければならぬことは、どれほど受けたかということではなくて、現に与えられているものをどのように活用しているかということである。わたしたちのすべての能力を発達させることが、わたしたちの神と同胞に対して果たさなければならぬ第一の義務である。日々自分の能力と有用さを発達させていない者は、人生の目的を果たしていると

は言えない。キリストを信じると告白することは、主のために働く者として、最善を尽くして、向上することを誓約することである。そして、わたしたちの力の限り最大の善をするために、すべての能力を、最高の完全状態に発達させなければならない。

主は、大事業をなしとげようとしておられる。そして、この世で、忠実に真心から最大の奉仕をする者には、来世において、最大のものを主はお与えになる。主は、ご自分のために働く者を選んで、日々、彼らを種々な環境の下において、ご自分の計画に従って試練をお与えになる。神の計画を成就しようと真心からの努力をする者を主が選ばれるのは、彼らが完全であるからではなくて、彼らが、神と結合することによって完全に到達できるようにするためである。

神は、高い目標をめざすことを決心した者だけをお受けいれになる。神は、すべての人間が、最善を尽くすように義務づけられた。道徳的完全が、すべての者に要求されている。悪を行なう傾向に対しては、先天的であるうが、後天的のものであるうが、そのような傾向と妥協するために、義の標準を下げてはならないのである。品性が不完全であることは、罪であることを知らなければならない。品性のただしい属性は、ことごとく、完全な調和のとれた全体として神の中に宿っている。そして、キリストを、自分の救い主として受け入れたものは、これらの属性をみな持つ特権が与えられている。

神と共に働く者となることを願っている者は体のすべての器官と精神の能力とを完全な状態にするように努力しなければならない。真の教育とは、あらゆる義務を遂行することができるように、体的、知的、道徳的能力を準備することである。それは、体と心と魂を神の奉仕のために訓練することである。これは、永遠の生命につ

なぐる教育である。

神は、すべてのクリスチャンが、あらゆる面において、力量を増し、能率をあげてを求めておられる。キリストはご自身の血と苦悩という代価をわたしたちのために支払われた。そして、わたしたちが、喜んで奉仕することを待っておられるのである。主は、わたしたちがどのように働き、またどのような精神で働くべきであるかの実例を示すために、この世界にこられた。また主は、どうすれば神の働きを前進させ、神のみ名の栄えになるかを、わたしたちが研究することを望んでおられる。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」とある。この父に、わたしたちの最高の愛と献身とをささげて、栄光を帰すことを研究するように、主は望んでおられる(ヨハネ三ノ一六)。

とは言うものの、キリストは、品性を完成することがやさしいことであるとは、保証しておられない。高潔で円満な品性というものは、親から遺伝的にうけつぐものではない。また、偶然、ころがり込むものでもない。高潔な品性は、キリストの功績と恵みによって、人びとが努力することによって得られるものである。神は、タラント、すなわち、精神の能力をお与えになる。そして、わたしたちが、品性を形成するのである。品性は、自己とのきびしい戦いによって形成される。生来の傾向に対しては、争闘に次ぐに争闘をもって当たらなければならぬ。わたしたちは、きびしく自己を批判して、一つとして汚点を取り除かないで放っておくようなことをしてはならない。

わたしは、自分の品性の欠点を正すことはできない、などとだれも言ってはならない。そう思い込んでしまえ

ば、決して永遠の生命を受けることはできない。不可能であるということは、自分の心の中で、そう思ってしまうからである。勝とうと思わなければ、勝つことはできない。心が清めを受けずに汚れていることと、神の支配に喜んで従わないことからほんとうに困難なことが生じるのである。

すぐれた働きをするように神から資格をさずけられた人びとの多くがなぜ、なんらなすところがないかということ、彼らは、何もしようと努力しないからである。世には、なんの確かな目的もたず、なんの標準もなく一生を送っている人が、多くいる。このような人は、彼らのしわざに相応した報いを受ける。

人間は、自分が定めた標準以上には出ることができないことを記憶しなければならない。そこで、どんなに苦しく、克己と犠牲が要求されるときにも、標準を高くし、進歩の階段をのぼらなければならない。なににも妨げられてはならない。どんな人であっても、運命の網に捕えられて、どうにも身動きができないほどに、固く縛られている人はない。難局に直面した場合には、それに打ち勝つ決心がなければならない。一つの障害を打ち破ると、前に進むいっその能力と勇気がわいてくるものである。正しい方面に向かって断固として進むとき環境は、妨げとはならず、かえって、わたしたちの助けとなるのである。

わたしたちは、主の栄光のために、あらゆる品性の徳を養うように熱望しなければならない。品性建設のあらゆる面において、神を喜ばせなければならぬ。これはわたしたちにもできることである。エノクは、墮落した時代に生存しながら、神を喜ばせた。現代にも、エノクのような人びとがいる。

どんな誘惑にも屈しなかった、忠実な政治家ダニエルのようにわたしたちも立たなければならない。わたしたちを愛し、わたしたちの罪をあがなうために、その命を捨ててくださった主を失望させてはならない。「わたし

から離れては、あなたがたは何一つできないからである」と主はおおせになる（ヨハネ一五ノ五）。これを忘れないでほしい。もしあやまちを犯した場合には、そのあやまちを認めて、それを再びくり返さないように戒めとするならば、勝利を収めたことになる。こうして敗北を勝利にかえ、敵に乘ぜられることなく、あがない主にほまれを帰すことになるのである。

神のかたちにかたどって形成された品性は、この世から来たるべき世界に持って行ける唯一の宝である。この世で、キリストの教えを受けたものは、その身につけた神の性質を全部天の住居に持っていくのである。そして、天では絶えず成長する。であるから、この世で品性を形成することは、非常にたいせつなことである。

完全な品性は、人を完全な行動にまで高めるから、それを確固たる信仰をもって求める者には、天使も協力して働くのである。この働きに加わっているすべての者に対して、わたしはあなたの右にあってあなたを助けると、キリストは言われる。

人間の意志が、神の意志と協力すると、どんなことでもできるようになる。神がお命じになったことは、神の力によって完成することができる。神のお命じになることはどんなことでも、成しとげることができるのである。

## 知 能

神は、わたしたちが知能を啓発することを求めておられる。神は、神のしもべたちが、世の人びとよりすぐれた知性と識別力を持つことを望んでおられる。また、彼らが、不注意と怠惰のために有能で機敏な働き人になろうとしないことを悲しまれる。主は、心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主を愛する

ようにお命じになる。これは、わたしたちの全能力をあげて、創造主を知って愛するようになるために、知能の限り発達させる責任がわたしたちに負わされたことを言っている。

知能は、聖霊の支配下におかれて、啓発されれば啓発されるほど、それは神のために力ある働きをすることができる。たとえ教育はなくても、神に献身して、他を祝福したいと望んでいる人は、神のご用のために主に用いられることができるもので、現にそのような人もある。しかし、十分な教育を受けた人が、同じ献身的精神をもったとすれば、キリストのために更に広範囲の働きをすることができる。彼らは、有利な地位に立っているからである。

修得した知識を他に分け与えるために、できる限りの教育を受けるように、神はわたしたちに望んでおられる。人がどこでどのような働きに召され、神に代わって語るようになるかは、だれにもわからないのである。人が将来どのようなかを知っているのは、ただ、わたしたちの天の父だけである。わたしたちの弱い信仰では認めることのできない可能性が、わたしたちの前途にはある。そこで、わたしたちは、知性をみがいていて、必要ならば、この地上の最高の権威者の前に立って、みことばの真理を明らかにし、神のみ名の栄光を輝かすようにしなければならない。神のために働くために、知的の準備をする機会は、一つでも見のがしてはならない。

教育を受けなければならない青年は、確固たる決意をもって教育を受けるよう努力しなければならない。道が開かれるのを待たないで、自ら進んで開拓しなければならない。あらゆる機会を活用し、経済にも気をつけ、食欲や快樂のために、金銭を費やしてはならない。神が召された召しにかなった有用で有能な人物になるように決心しなさい。何をするにしても、徹底的で忠実でなければならない。知能を強める機会は与えられるごとに活用しなければならない。書物の研究と同時に、有用な実業にも従事して、忠実に努力し、目をさまし、祈りつつ

上からの知恵を得るように努力しなければならない。これが、青年に、円満な教育を与える。こうして、品性が向上し、他の人びとによい感化を及ぼし、彼らを義と聖の道へと導くことができるようになるのである。

わたしたちに与えられた機会と特権にめざめさえすれば、自学自習によって、はるかに大きな成果を見ることがであらう。真の教育ということは、大学の教育以上のものを意味している。科学の研究も無視してはならないものではあるが、神と生きた交わりを保つことによって、はるかに高等の教育を受けることができる。学生は、聖書を手にして、大教師イエスとの交わりにはいらないといけない。そして、みことばの探究中に出てくる困難な問題を解決することができる知能を訓練し養成しておかなければならない。

同胞を祝福するために知識をつえかわくように求めるものは、自分自身が神の祝福にあずかる。彼らの知能は、聖書の研究によって、活発な働きをするように刺激をうける。彼らの諸機能はますます発達して、知能も強い力を増してくる。

神のために働きたいと望んでいる者は、だれでも、自己を訓練することが必要である。雄弁などのすぐれたタラントよりも、自己を訓練することの方が、偉大なことをなしとげるのである。普通の知能の人でもよく訓練を受けた人は、最高の教育と最大のタラントに恵まれながら、自制心に欠けている人よりも、多くのことをなしとげることができる。

## こ と ば

話すという能力は、つとめて修得しなければならないタラントである。わたしたちが神から受けたあらゆるた



まものの中で、これほど大きな祝福をもたらす能力は、ほかにない。わたしたちは、声を使って、人を説得したり、信服させたり、神に祈ったり、賛美したりする。また、声を用いて、あがない主の愛について、人びとに語るのである。であるから、声を最も効果的に善のために用いるよう訓練することが、非常にたいせつである。

声の修練と声の正しい用い方は、知的でクリスチャン活動に従事している人びとでさえ、非常になおざりにしている。物を読んだり、話したりするときに、低すぎたり、早すぎたりして、何を言っているのかよくわからないことが多い。また、重苦しく、不明りような発音をする人がいる。かん高い、するどい調子で聴衆に不快感を与える人もある。聖句、賛美歌、報告、発表などを公衆の前でする場合に、何を読んでいるのかわかりにくく、せつかくの力も印象深さも失われてしまうことが、よくある。

このような欠点は、正すことができるものであるから、ぜひとも直さなければならない。聖書もこの点について教訓を与えている。エズラの時代に、聖書を人びとに読んで聞かせたレビ人について「彼らはその書、すなわち神の律法をめいりように読み、その意味を解き明かしてその読むところを悟らせた」といわれている(ネヘミヤ記八ノ八)。

熱心に努力することによって、だれでも、よくわかるように読み、音量のあるはっきりした丸い声で印象深く語ることができる。こうすることによって、わたしたちは、クリストのために働く者として大いに効果をあげることができる。

すべてのクリスチャンは、クリストの無尽蔵の富を他の人びとにのべ伝えるために召されたのである。であるから、わたしたちのことを完全にするように努めなければならない。聞く人の心を引きつけるような方法で神

のことは語らなければならない。神は、人間という通路がつたないものであることを望まれない。天からの流れが、人間を通じていくときにその人のために、それが軽んぜられたり、価値が低められたりすることは、神のみ旨ではない。

わたしたちは、完全な模範であるイエスをなげめなければならない。そして、聖霊の助けを仰いで、神の力によつて、完全な働きをすることができるようになるために、すべての器官を発達させるように努めなければならない。

特に公けの奉仕に召された者は、そうでなければならない。すべての牧師、すべての教師は、永遠の運命に関する使命を人びとに伝えていることを記憶しなければならない。語られた真理が、最後の審判の大きな日に、人びとをさばくのである。そして、真理を語った人の態度いかによつて、真理を受け入れるか拒むかを決定する魂もある。であるから、人びとの理解に訴え、心に印象を残すように語らなければならない。真理は、ゆっくり、明りように、厳粛に語り、しかも、それは、その扱っている問題の重要性にふさわしい熱誠のこもったものでなければならない。

ことばの力を正しく修練して用いることは、クリスチャン活動のあらゆる面に関係がある。これは、家庭生活の中にも、人との交際のどの場合にも必要なものである。わたしたちは、快い音声で話し、まちがいのない正しいことばを用い、親切で礼儀にかなったことばを使うようにしなければならない。やさしい親切なことばは、魂にとつて、露のようなもの、静かに降る雨のようなものである。聖書にも、キリストには、「気品がそのくちびるに注がれて」いたから「疲れた者を言葉をもって助けること」があできであつたとするされている(詩篇四五ノ

二、イザヤ書五〇ノ四。また、「いつも…やさしい言葉を使いなさい」(コロサイ四ノ六)「聞いている者の益になるようにしなさい」(エペソ四ノ二九)と主はお命じになるのである。

人の誤りを正し、改めさせようとする場合、ことばに気をつけなければならない。ことばは命に至る命の香りともなれば、死に至る死の香りともなる。人を譴責したり、勧告したりするときに、傷ついた魂をいやすのにはふさわしくない鋭いきびしいことばを出す人が多い。このような思慮に欠けた発言によって、心を傷つけ、誤った人を反抗的にさせることがよくある。真理の原則をのべ伝えるものは、すべて、天からの愛の油を受ける必要がある。どんな場合であっても、譴責のことばは、愛をもって語らなければならない。そうするならば、わたしたちのことは、人を怒らせたりしないで、改革をうながすことができる。キリストは、聖霊によってわたしたちに、活力と能力を供給してくださる。これがキリストのお働きなのである。

一言でさえも、無分別に言ってはならない。キリストの弟子の口からは、悪口や不まじめな話や、つぶやきやけがらわしいことを思わせることが出てはならない。使徒パウロは、聖霊に動かされて、「悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出してはならない」と言った(エペソ四ノ二九)。悪いことばというのは、よこしまなことばだけを言うのではない。それは、聖なる原則と清く汚れない信心に反する表現をさしている。これは、不潔なことを暗示したり、ひそかに悪をほめかしたりすることをも含んでいる。これらのことは、直ちにしりぞけないならば、大きな罪におとし入れるものである。

汚れたことばとたたかうことは、すべての家庭とすべてのクリスチャン個人個人の上に負わせられた義務である。愚かな話をする仲間の中にわたしたちがはいったときには、できるだけ、話題を変えるように努力すること



キリストは無限の神の子であったにもかかわらず、ヨセフと共に大工の店でお働きになった。

が、わたしたちの義務である。神の恵みの助けによって、静かに一言注意をするか、または、有益な話題を提供して人びとの心をその方に向けるべきである。

子供たちに、正しいことば使いを教えることは、親のつとめである。この修練を行なう一番よい学校は、家庭である。子供たちには、幼いときから、ていねいで愛にあふれたことばを両親に向かって、またお互いの間でつかうように教えなければならない。そして、柔和で真実で純潔なことばだけを、くちびるから出すべきことを、教えなければならない。両親自身が、日ごとにキリストの学校で学ぶ者となっていなければならない。そうすれば、「非難のない健全な言葉を用い」るように、自ら模範を示しながら、子供たちに教えることができる(テトス二ノ八)。これは両親の最も重大な責任の一つである。

わたしたちは、キリストに従う者として、互いのクリスチャン生活の助けとなり、励ましとなることばを語るようにしなければならない。わたしたちは、受けた恵みについてこれまでよりもっと多く語らなければならない。神のあわれみといつくしみ、救い主の愛のはかり知れない深さについて、語らなければならない。また、賛美と感謝をすべきである。心に神の愛があふれているならば、それが、会話にあらわれてくる。わたしたちの霊的生活の中にはいつてきたものを、他の人びとに分け与えることは、むしろいいことではない。偉大な思想、高貴な抱負、明確な真理の理解、無我の精神、敬けんと清めに対する渴望などは、当然ことばとなってあらわれ、心の中に秘められた宝がどんなものであるかを示す。こうして、キリストが、わたしたちのことばにあらわされるときに、その言葉は魂をキリストに導く力を持つようになるのである。

まだキリストを知らない人びとに、キリストのことについて語るようにしなければならない。わたしたちは、

キリストがなさったようにしなければならない。キリストは、会堂であろうと、路傍であろうと、岸から押し出された舟の中であろうと、パリサイ人の宴会であろうと、取税人の食卓であろうと、どんな場所であっても、高尚な生活に関することを人びとに語られた。主の教えの中には自然の事物や日常のできごとなどが織り込まれていた。また、イエスは、病をいやし、悲しんでいる人を慰め、子供たちを腕に抱いて祝福されたりしたので、聴衆の心は、イエスにひきつけられた。イエスが一度、口を開いてお語りになると、人びとは、すいこまれるように聞き入り、その一言一言は、だれかの魂にとって、いのちからのちにいたらせるかおりであった。

わたしたちも同様でなければならない。たとどこにいても、救い主のことについて、人びとに語る機会をとらえるようにしなければならない。わたしたちも、キリストの模範に従って善を行なうならば、人びとがキリストに心を開いたように、わたしたちにも心を開くのである。無作法な態度で話すのではなく、神の愛から生じた気転を働かせることによって、「万人にぬきんで」「ことごとく麗しい」救い主のことを彼らに語ることができる（雅歌五ノ一〇、一六）。これこそ、ことばのタラントを最高に用いる方法である。ことばは、わたしたちがキリストを罪からの救い主として、人びとにのべ伝えるために与えられたのである。

## 感 化

キリストの一生は、どこまでも限りなく感化を及ぼした。この感化は、キリストを神と全人類家族とに結びつけた。神は、キリストを通して、人間に感化力を与えておられるから、人は自分だけの生活をする事ができない。わたしたち個人個人は、神の総合体の一つとして、同胞と結ばれていて、お互いに義務づけられている。わ

わたしたちの幸福は他の人にも関係があるものであるから、だれ一人として、同胞から独立することはできない。各自が、自分は他の人の幸福のために必要であることを感じ、他人の幸福の増進のために努力することを、神は望んでおられる。

人はだれでも他に感化を及ぼすものである。信仰、勇氣、希望などの生き生きとした愛のかおりを放つものもあれば、あるいは、不平とわがままのために、重苦しく、冷たく憂うつで、心の中にひそむ罪の毒気を放っているものもある。わたしたちは、だれでも、このように自分のまわりに、一種のふんい気をもっていて、意識的に、または、無意識に、接する人びとに感化を及ぼしているのである。

これは、わたしたちの避けることのできない責任である。わたしたちのことは、行為、服装、態度、あるいは、顔の表情でさえも、感化力を持っている。このようにして及ぼされた感化によって、相手がどれほどよくなるか、または、どれほど悪くなっていくか、だれにもわからない。このような刺激はすべて、必ず収穫をもたらす種である。それは、人類世界の長いできごとの連鎖の一つの輪であって、それが、どこまで続いているのかわからない。

もしわたしたちが、自分たちの模範によって、又ひとびとの心の中によい原則を植えつけるのを助長したとすれば、彼らに善を行なう力を与えることになる。彼らはまた彼らで、同じ感化を他の人びとに与え、その人びとはまた他の人びとへと感化を及ぼしていく。こうして、わたしたちが、無意識のうちに及ぼした感化によって、幾千もの人びとが祝福を受けるようになる。

湖水に小石を投げると、波が生じて、次第に広がってついには岸にまで達する。わたしたちの感化もそれと同じで、わたしたちの知識と支配の限界を越えて、祝福があるいはのろいを与えている。

品性は力である。真実で無我の信心深い生活の無言のあかしは、どんな人をも感化しないではおかない力を持っている。わたしたちの生活の中に、キリストの品性をあらわすことによって、わたしたちは、救霊の働きをキリストと共にするのである。わたしたちが、キリストと協力できるのは、わたしたちの生活に、キリストの品性をあらわすことによるのみである。そして感化の範囲が広ければ広いほど、それだけ、善をなす範囲も広い。神に仕えるという者が、その日常生活において、律法の原則を実行して、キリストの模範に従うとき、すなわち、何をして、その行為によって、彼らが神を何ものよりも愛し、隣人を自分のように愛していることを示すときに、教会は、世界を動かす力をもつようになるのである。

しかし、感化は同様の力をもって悪にも誘うものであることを忘れてはならない。自分の魂を失うことは、恐ろしいことである。けれども他の魂を滅びにおとし入れることは、さらに恐ろしいことである。わたしたちの感化が、死から死にいたらせるかおりになることは、恐ろしいことであるが、それは、可能である。キリストと共に集めているといいながら、かえってキリストから散らしている者が多い。教会が弱いのはこのためである。平気で批評非難をする者が多い。邪推、しつと、不満の精神などを口にするによって、彼らは、サタンの配下となる。彼らが自分の行為に気づく前に、サタンは、彼らを用いて目的を達している。すでに悪い印象は与えられ、暗い影は投げられて、サタンの矢は、目標に当たったのである。こうして、キリストを受け入れたはずの人びとが、疑惑と不信と無神思想をもつに至った。一方、サタンの側で働いた人びとは、彼らの感化によって懷疑主義におちいり、神の譴責と懇願に対して心をかたくなにしてしまった人びとを満足げにながめる。彼らは、自分たちを、その人びとと比較して、自分たちは、徳もあれば、ただしくもあるとうめばれる。しかし、実は、



彼らの舌が無分別に語り、心が反逆的であつたために、このような哀れな品性の破壊者が現われるに至つたのに気づかない。この人びとが誘惑に負けて墮落したのは、彼らの感化によつたのである。

このようにして、自称クリスチャンが、軽はずみでわがままな態度で、いいかげんな生活を送ることによって、多くの魂を命の道から追いやっている。神のさばきのときに、自分たちの及ぼした感化の結果を見ることを恐れるものが多くあらわれることであらう。

ただ神の恵みによつてのみ、わたしたちは、このたまものを正しく用いることができる。わたしたちは自分のうちには、他人によい感化を及ぼすことができるものを持っていない。自分の無力と神の力の必要とを自覚するとき、わたしたちは自分自身にたよらないであらう。わたしたちは、一日、一時間、一瞬間がどんな結果を生じるかを知らないのであるから、天の父にわたしたちの道をまかせないで、一日を始めてはならない。天使たちは、わたしたちを保護するように、神の任命を受けているから、もし、わたしたちが、天使の守護のもとにあるならば、どんな危険なときにも、天使たちは、わたしたちの右にいるのである。わたしたちが、無意識のうちに、悪い感化を及ぼす危険がある場合、天使がわたしたちの側で、他のよい方法をとるように注意してくれて、言うべきことばを選び、わたしたちの行動を導いてくれる。こうして、わたしたちの感化は、無言で無意識のものである。他の人びとをキリストと天国に導く強い力となるのである。

## 時

わたしたちの時は、神に属するものである。一瞬、一瞬が神のものである。そして、わたしたちには、その時

を神の栄光のために活用するように、きわめて厳粛な責任が負わせられている。神がお与えになったたまものなかで、わたしたちの時間ほどに厳密な説明が求められるものは他にないのである。

時の貴重なことは、実に想像以上である。キリストは、一分一秒を貴重なものとみなされたが、わたしたちもそう思わなければならない。人の一生は、むだにすごすには、あまりにも短い。永遠のために備えをすべき恵みの日は、ほんのわずかしかない。浪費したり、自己の快樂のために用いたり、罪にふけったりする時間はない。将来の永遠の命のために品性を形成するのは、今である。厳密な審判の時の備えをするのは、今である。

人類家族は、死ぬころになつてからはじめて、真に生き始めるようなものである。もし永遠の命に関する真の知識を得るのでないならば、この世の絶え間なき労苦も無に終わってしまう。働きをする時間として、時を尊重するものだけが、永遠の命とその住居とにはいるにふさわしいものである。その人は、この世に生まれたかいがあつたといえるのである。

わたしたちは、今の時を生かして用いるように勧められている。しかし、むだに過ぎた時間は、永久に帰つてこない。一瞬間でも呼びもとすことはできない。ただ残っている時間を神の協力者となつて神の大贖罪計画のために最善をつくすことによつて、時をあがなうことができるだけである。

こうする者は、品性が一変する。彼は、神の子となり、王族の一員、天の王子となるのである。また、天使たちの友となるのにふさわしい者とされるのである。

今こそ、同胞の救いのために働くべき時である。キリストの働きのために金銭をささげさえすれば、それで、すべての義務を果たしたように考えているものがある。キリストのために個人的に奉仕をする貴重な時間のほう

は、いっこうに活用されていない。しかし、神のために活動的奉仕をすることが、健康と力をもったすべての者の特権であり義務である。すべての者は、魂をキリストに導くために働かなければならない。献金は、この代わりにはならないのである。

一秒一秒は、永遠にわたって重大な影響を及ぼすものである。いつでも義勇兵のように召集に応じて、奉仕をするために立たなければならない。助けを必要としている魂に命のことばを語るために今与えられている機会は、もう二度とこないかも知れない。その人に向かって、神が「あなたの魂は今夜のうちにでも取り去られるであろう」と言われるならば、その人は、わたしたちの怠慢のために用意ができないことになってしまふのである(ルカ二ノ二〇)。大いなる審判の日に、わたしたちは、なんといつて神の前に申し開きをしたらよいであろうか。

人生は非常に厳粛であるから、一時的の地上の物に心を奪われたり、永遠に重大性をもった物と比べるならば、全く取るに足らない小さい事のために絶えず心を煩わされてはならない。とはいふものの、神は、この人生の一時的の事からの中にあつて、神に奉仕するように、わたしたちを召されたのである。この世の仕事を勤勉にすることは礼拝と同様に、真の宗教の一部である。聖書は、怠惰であつてよいとは言っていない。怠惰は、この世界の最大ののろいとなっている。真に悔い改めた男女は、すべて勤勉に働く者となるのである。

知識を得、知力を啓発するか否かは、時間を正しく活用することにかかっている。知力の啓発は、貧困であるとか、身分がいやしい身分であるとか、逆境にあるからとかいって妨げられるべきものではない。ただ時間を重んじればよいのである。なんのあてもないむだ話、朝、床の中で浪費する時間、電車や汽車の中、駅で待つ間、食事を待つ時間、約束の時間に来ない人を待つ間などの時間を、本を手にして、研究、読書、思索などに活

用するならば、どのようなことが成しとげられるかわからない。固い決心をもって、たゆまぬ努力を重ね、注意深く時間を節約するならば、知識と知的訓練を受けることができ、どのような地位にでも適した者となり、よい感化を及ぼし、りっぱに役立つ人物となるのである。

整頓(せいとん)、徹底、敏速の習慣をつけることは、すべてのクリスチャンの義務である。たとえば、どのような仕事にせよ、ただだと不手ぎわにしてよい理由はない。常に仕事をしていながら、仕事が完成されないとなれば、それは、仕事に心を入れていないからである。仕事がおそく、思うように運ばない人は、このような欠点を改めるべきであることを自覚しなければならない。最大の結果を得るためには、どのように時間を用いるべきであるかを計画して、頭を働かせなければならない。気転と方法いかんによつては、他の人が十時間かかる仕事を、五時間で仕上げることができる。家庭の仕事をしている人で、仕事はそれほど多くはないが、時間を節約して計画しないために、一日じゅう仕事をしている者がある。彼らはおそくぐずぐずしているために、わずかのことを、たいへんな仕事のようにしている。けれどもだれでも意志さえ働かせれば、このような手数のかかるぐずぐずした習慣に打ち勝つことができる。それには仕事をするにあたって、はつきりした目標を立てることである。この仕事にはなん時間必要であるかを定め、その時間内に、仕事を完成するように全力を注ぐのである。意志を働かせるならば、手も器用に動くようになるのである。

自分から進んで改善しようという決意に欠けているために、人間は誤った習慣におちいつてしまふのであるが、一方、自分たちの能力の啓発に努力するならば、最上の奉仕をする能力を得ることができる。そうすれば、彼らは、あらゆるところから求められ、彼らの真価は、人びとから感謝されることであろう。

家庭の重荷を負うことによって、父母に対してやさしい思いやりを示すことができるのに、その時間を浪費している青少年が多い。青年は、自分たちの強い肩に、人生の負うべき責任を多くになうことができる。

キリストの生涯は、その幼少のときから、熱心な活動的の生活であつた。イエスは、自分を楽しませる生活をなさらなかった。彼は、無限の神の子であつたにもかかわらず、父ヨセフと共に大工の仕事をされた。彼の職業は意義深いものであつた。彼は、品性の形成者としてこの世界においてになり、彼のすべての仕事は、完全であつた。キリストが天の力によって人びとの品性を完全に改変なさると同様に、この世の仕事をも完全になさつたのである。彼は、わたしたちの模範である。

親は、時の価値とその用いかたを子供たちに教えなければならない。神の栄えをあらわし、人類を祝福するために何事かをするということは、努力に値するものであることを教えなければならない。子供たちは、幼いながらも、神のために伝道者となることができる。

親が子供たちに何もさせないでおくことほど大きな罪はない。やがて子供たちは、なまけ者になってしまい、無為無能の男女に成長してしまう。働く年齢になって、就職しても、仕事をなまけながら、それでいて忠実に働いたときと同じ給料を期待するのである。この種類の者と、忠実な家つかさになろうと自覚する者との間には、雲泥(うんでい)の差がある。

仕事をなまけ、不注意な生活をしている者は、その習慣が宗教生活にまで影響を及ぼし、神のための奉仕も十分にできなくなってしまう。勤勉に努力すれば、世界のために祝福を与え得る身でありながら、怠惰のために身を滅ぼしている者が多い。職業につかず、また確固とした目的も持っていないために、様々の誘惑におちいる者

が多い。悪友と悪習慣とが、心と魂を墮落させ、この世の命だけでなく、来たるべき命までも失ってしまうことになる。

どの方面の仕事に従事しても、神のことはわたしたちに、次のように勧めている。「熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え」、「すべてあなたの手のなしうる事は力をつくしてなせ。」「あなたがたが知っているとおり、あなたがたは御国をつぐことを、報いとして主から受けるであろう。あなたがたは、主キリストに仕えているのである」(ローマ二ノ一一、伝道の書九ノ一〇、「コサイ三ノ二四」)。

## 健 康

健康は祝福であるが、その価値を認めるものは少ない。しかし、知的、体的能力が力を発揮するには、体が健康でなければならない。わたしたちの感情は、身体の中に座を占めているから、身体も精神も最上の状態に保つようにして、わたしたちの才能を最高に活用しなければならない。

体力を減退させるものは、なんであつても、精神を弱め、善悪の識別力を弱める。だんだん善を選ぶ力がなくなり、正しいと知りつつ、それを行なう意志の力がなくなる。

身体の諸機能を誤用するならば、神の栄光のために用いることができるはずの寿命をちぢめ、神からゆだねられた仕事を果たすことができなくなる。悪い習慣をつづけたり、夜ふかしをしたり、健康を犠牲にしてまで食欲を満足させたりすることは、体を虚弱にする原因である。運動を怠ったり、心身を過度に疲れさせたりすると、神経系統の平衡が失われる。このようにして、自然の法則を無視したために寿命をちぢめ、奉仕ができなくなっ

た人びとは、神に対して盗みの罪を犯している。彼らは、また、同胞からも盗んでいることになる。他を祝福する機会、すなわち神がこの世界に彼らをお送りになったたいせつな仕事を、自分自身で短縮してしまった。そればかりではなくて、その短い期間に果たし得たはずのことさえできなくなってしまった。こうして、わたしたちが有害な習慣のために、世界から善を奪うときに、神はわたしたちに有罪の宣告を下されるのである。

肉体の法則に反することは道徳律に反することである。神は、道徳律の創設者であると同時に、肉体の法則の創設者でもある。神は、人間にお任せになったすべての神経とすべての筋肉とすべての機能の上に、神の律法をご自分の手でお書きになった。であるから、わたしたちの体の組織のどの部分の悪用であっても、それは、その律法の違反になるのである。

神の働きをするために必要な状態に身体を保つためには、すべての者が人体の構造について十分の知識を持っていなければならない。神の性質が人によって、十分にあらわされるように、肉体の命をたいせつに保存し発達させなければならない。肉体の組織と霊的生命との関係を明らかにすることは、教育の最も重大な科目の一つである。家庭でも、学校でも、この点によく注意しなければならない。だれでも自分たちの体の構造と生命を支配する法則とをよく知らなければならない。だれでも故意に肉体の法則について無知でいたり、知らずに自然の法則を犯すものは、神に対して罪を犯すのである。だれでも、命と健康を増進させるように最善をつくさなければならぬ。わたしたちの習慣は、神の支配下におかれた心の支配を受けなければならない。

使徒パウロは「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたはもはや自分自身のものではないのである。あなたがたは代価を払って買いとられたのだ。

それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」と言っている（コリント第一・六ノ一九、二〇）。

## 能力

わたしたちは、心をつくし、思いをつくし、精神をつくして神を愛するだけでなく、力をつくして愛さなければならぬ。これは身体的能力を十分に知的に活用することである。

キリストは、霊的のことにおけると同様に、世的のことにおいても、真実の働きをなさって、それがなんであっても、天のみこころを行なうという決心をもってなされた。天上のものと地上のものは、多くの者が想像している以上に、密接な関係をもち、また直接にキリストの支配の下にあるものである。地上に最初の幕屋を設ける計画をなさったのは、キリストであった。キリストはまたソロモンの神殿の建設のときの設計書をお与えになった。この地上の生涯でナザレの村の大工として働かれたお方は、ご自分の名があがめられるべき神殿を設計なさった天の建築家であった。

幕屋の建造にあたった人びとに精巧で美しい手ぎわを示す知恵を与えたのは、キリストであった。主は言われた、「見よ、わたしはユダの部族に属するホルの子なるウリの子ベザレルを名ざして召し、これに神の霊を満たして、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ……見よわたしはまたダンの部族に属するアヒサマクの子アホリアブを彼と共にらせ、そしてすべて賢い者の心に知恵を授け、わたしがあなたに命じたものを、ことごとく彼らに造らせるであろう」（出エジプト記三一ノ二一―二六）。

各方面の神の働き人が、自分たちの所有しているいっさいのものの与え主として、神を仰ぐことを、神は望ま



れる。すべての正しい発明と改良は、驚くべき計画を立て、すぐれたわざをなさる神からきたものである。医者  
の巧妙な手の働き、また医者が神経や筋肉を支配する力、あるいは巧妙な体の諸器官に関する知識などは、苦し  
む者を救うために用いるように与えられた神の力の知恵である。大工が金づちを用いる巧みさ、かじ屋が金床を  
鳴らす力などは、神から来る。神は人びとにタラントをおゆだねになって、人びとが神の指示を仰ぐことを期待  
される。どの部門のどんな仕事をするにしても、神は、わたしたちが、完全な仕事をすることができるように、  
わたしたちの思いを支配することを望んでおられる。

宗教と実業とは、全然別なものではない。それは一つである。聖書の宗教は、わたしたちのすべての行為とこ  
とばのなかに織り込まれなければならない。霊的のことを達成するのと同様に、この世的のことを達成する場合  
にも、天の力と人間の力とが結合しなければならない。この二つの力は、機械業や、農業、または商業や科学的  
事業などのあらゆる人間の職業において結合されなければならない。すべてのクリスチャン活動には、協力がな  
ければならない。

神はこうした協力が可能になる唯一の原則をお示しになった。それは神の栄光をあらわすことが、神と共に働  
くすべての者の動機でなければならないということである。わたしたちのすべての働きは、神を愛する心と神の  
みこころに従う心からなされるべきである。

神のみ旨を行なうことは、礼拝に参列する場合と同様に、家を建てるときにも必要なことである。そして働き  
人たちが、自分の品性建設を正しい原則に従って行なっているならば、彼らは、家を建てるごとに、恵みと知識  
に成長することができる。

しかし、どんなに大きなタラント、どんなにはなばなしの奉仕であっても、自己を祭壇にささげて、生きた犠牲として自分を焼きつくさないならば、神は、喜んでお受けにならない。根が清くないならば、神に受け入れられる実はないのである。

神は、ダニエルやヨセフを賢明な管理者となさった。彼らは、自分の心を喜ばせるためではなくて、神を喜ばせるために生きたために、神は彼らを用いて、お働きになることができた。

ダニエルの実例は、わたしたちによい教訓を教えている。それは、実業家は、必ずしもめくめのない政略的人間でなくてもよいということを示している。ダニエルは、バビロン帝国の総理大臣であったが、同時に神の預言者として、天来の靈感の光に浴していた。世の野心満々たる政治家たちは、草であって、やがて枯れてしまう野の花のようなものであると、聖書にしろされている。しかし、神は、そのみ事業の中に賢明な人びとを求め、各方面の働き場に有能な人びとを求めておられるのである。真理の大原則を、商取り引きのあらゆる面に織り込む実業家が必要である。そして、彼らのタラントは、徹底的研究と訓練とによって完成されなければならない。賢明で有能な人材になるために、機会を活用すべき人びとがあるとすれば、それは、この世に神の国を建設するために努力しているその人びとでなければならない。ダニエルは、厳密な調査を受けても執務上の欠点やあやまちは、何一つなかった。ダニエルは、あらゆる実業に従事する者のよい模範である。ダニエルの生涯は人間がもし、頭脳、骨、筋肉、心、命の力を神の奉仕にささげるならば、何をすることができるかを示したのである。

## 金 銭

神は、また人びとに財産をおゆだねになる。神は、富を得る力を人びとにお与えになる。神は天からの露と降りそそぐ雨によって地をうるおされる。また太陽を照らして、植物をはえさせ、繁茂させ、実を結ばせておられる。そして、神は、神のものを神に返すように人びとにお求めになる。

金銭はわたしたちが、自分に栄えを帰するために与えられたものではない。わたしたちは、忠実な管理者として、神に栄光を帰するために、金銭を用いなければならない。自分たちの財産の一部分だけが、神のものであると、思っている人がある。宗教的、慈善的、目的のために一部分をささげれば、あとは、自分のもので自由に使用してもよいと、彼らは考える。しかし、これはまちがいである。わたしたちの所有するものはみな神のものである。その用途について、責任を負わなければならない。一銭の金を使うにも、神を第一に愛し、自分のように隣人を愛しているかどうかあらわれるものである。

金銭は、大いなる善をすることができから、大きな価値がある。それが神の子供たちの手にあれば、貧しい人の食事、かわいた人の水、裸の人の着物となり、圧迫されている人びとの防御となり、病人を助ける手段にもなる。金銭は、困っている人びとを助け、他を祝福し、キリストの働きを前進させるために用いてこそ、価値があるのであって、もしそうでないならば、金銭は砂と同様でなんの価値もないのである。

死蔵された富は、価値がないばかりでなくて、のろいである。それは、天の宝から人の心を遠ざけてしまうこの世のわなである。神の大いなる日に、用いられなかったタラントや無視された機会は、その所有者を責めることであろう。聖書には、次のようにしるされている。「富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。あなたがたは、自分の身に降りかかるうとしていゐるわざわいを思って、泣き叫ぶがよい。あなたがたの富は巧ち果て、着物はむ

しばまれ、金銭はさびている。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、あなたがたの肉を火のように食いつくすであろう。あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている。見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している」(ヤ「ブ五ノ一―四」)。

しかし、キリストは、金銭を浪費し、不注意に用いることがよいとは言っておられない。「少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」という主の節約に関する教訓は、すべての弟子に対して与えられたものである(ヨハネ六ノ一二)。金銭が神から与えられたタラントであることを認める者は、だれでも、それを節約して用い、他に与えるために、たくわえておくことを義務と感ずることであろう。

外見や放縦な生活のために、金銭を浪費すればするほど、飢えたものに食べさせ、裸の者に着せる分が少なくなる。不必要なことに金銭を費やすたびに、善を行なう尊い機会が失われていく。それは、そのゆだねられたタラントを活用して神に帰すべきほまれと栄光とを、神から奪い去ることである。

### 親切な心と愛情

親切心、情深い心、霊的理解のすみやかなことなどは、尊いタラントである。こうしたタラントの持ち主には、重い責任が負わされている。これは、みな神のご用のために用いなければならない。ところが、ここであやまっている者が多い。彼らは、そのような特質を持っていることに満足し、それを他のために活発に働かせようとしていない。何かの機会があり、また境遇に恵まれれば、大いなる善事をするであろうと、自ら満足している。彼

らは、機会を待っている。彼らは、貧しい人に、わずかの金を恵むのをさえ惜しむ人びとの狭量さを軽べつしてこのような人びとこそ、利己的生活をしている人で、タラントの誤用に対する責任を負うべきであると考える。彼らは、自分たちをこのような狭い心の人びとと比較して、自分たちのほうが、これらのいやしい心の隣人よりは良い状態にあると感じて、満足感にひたる。ところが、彼らは、自分を欺いている。よい特質を持ちながら、それを用いないことは、それだけ責任が重い。大きな愛の心を持っているものは、単に友人ばかりでなくて、助けを必要とするすべての者を愛する義務が負わせられている。社会的に有利な地位もまたタラントであるから、それをわたしたちの感化の及ぶ限りの人びとの幸福のために用いなければならない。わずかの者にだけ親切にするのは、愛ではなくて、利己主義である。それは、どうみても、人びとを幸福にし、神に栄光を帰すものにはならない。こうして、主から与えられたタラントを活用しない人は、彼らが軽べつしている人以上に、罪深いのである。あなたがたは、主の意志を知りながら、それを果たさなかったという宣告が、この人びとには、下されることであろう。

### タラントの活用による増加

タラントは、活用すれば、増加する。成功は、偶然や幸運の結果ではない。それは、神ご自身の摂理の結果で、信仰と思慮深さ、徳と不撓（ふとう）不屈の努力の結果である。神は、わたしたちが、すべてのたまものを活用することを望んでおられる。そして、今持っているたまものを活用すれば、さらに大きなたまものをを用いるようになる。神は、わたしたちに欠けている特質を超自然的にお与えになったりしない。しかし、わたしたちが、持っ

ているものを活用するとき、神はわたしたちと共に働いて、すべての能力を増大し強化してください。主の奉仕のために全心をこめて熱心に犠牲をするならば、そのたびにわたしたちの能力は増すのである。わたしたちが、自分を聖霊の働かれる器として服従するときに、神の恵みがわたしたちのうちに働いて、古い傾向を退け、強い性癖に勝利し、新しい習慣を形造るのである。わたしたちが、聖霊のささやきに耳を傾けて従うならば、わたしたちの心は拡大され、ますます神の力を受け、さらに、よい働きをすることができるのである。眠っていた精力は呼びさまされ、まひしていた機能も新しい生命を受けるのである。

神の召しに従順に応じるならば、どのような卑しい働き人にも、必ず神からの援助が約束されている。このように大きなきよい責任を受けいれること自身が品性を高める。それは、知的、霊的能力を最高に活動させることを要求し、心と思いとを清めるのである。神の力を信じることによって、弱いものがどんなに強くなって不屈の努力を続け、大きな成果を生むようになるかは、驚くばかりである。たとえば、知識はわずかしなくても、その少しの知識をへりくだった気持ちで人びとに伝えるものは、全天の宝庫が彼の要求に応じて開かれることを知るであろう。光を伝えたいと望めば望むほど、さらに光が与えられるのである。魂を愛して神のことばを人に説明しようとするほどの、ますますみことばの意味が明らかに示される。知識を用い、能力を活用すればするほど、さらに多くの知識と能力とを持つようになるのである。

キリストのための努力は、すべて祝福となってわたしたちにもどってくる。神の栄光のために財産を用いるならば、もっと多くが与えられるのである。人びとをキリストに導こうとして、彼らのために祈りをささげるときに、わたしたち自身の心が神の恵みの生きた感化によって脈打つのである。わたしたち自身の愛の心が、神から

の熱を受けて、もっと燃えるようになり、わたしたちのクリスチャン生活はもっと現実で、もっと熱心で、祈りに満ちたものとなることであらう。

天では、人の価値は、人間が持っている神を知る能力によって評価される。この知識こそ、すべての能力が流れ出る泉である。神は人間のすべての能力が、神のみこころにかなった能力になるように創造された。神は常に人間の心を神の心と交わらせようとしておられる。神は、キリストと協力して神の恵みを世界にあらわす特権をわたしたちにお与えになる。これは、わたしたちがますます多くの天の知識を受けるためである。

イエスをながめることによって、いつそう明らかに神を見ることができるようになり、わたしたちは、ながめることによって変えられる。同胞に善を行ない、彼らを愛することは、わたしたちにとっては自然に行なう本能となる。そして、神の品性と全く同じ品性を自分たちの中に形成する。こうして、神のかたちにまで成長することによって、神を知る能力もますます増加する。わたしたちは、ますます、天上の世界との交わりを深め、永遠の知識と知恵の富を受ける力を絶えず強めるのである。

## 一 タラント

一タラントを渡された者は、「行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。」

タラントを活用しなかったのは、一番小さいたまものを渡された者であった。これは、自分のたまものは小さいから、キリストのご用に活用しなくてもよいと思うすべての者に対して与えられた警告である。もし彼らも、何かの大きなことができれば、どんなに喜んで、それをするのであらう。しかし、ほんの小さい奉仕しかでき

ないから、何もなくてよいと、彼らは考えるのである。これはまちがっている。神はたまものを分配なさることによって、人の品性をためておられる。自分のタラントの活用を怠るものは、不忠実なしもべである。もし、彼が五タラント渡されたとしても、一タラントを土に埋めたように、五タラントを埋めたことであろう。彼が一タラントを活用しなかったことは、天のたまものを軽視したことをあらわしている。

「小事に忠実な人は、大事にも忠実である」(ルカ一六ノ一〇)。小さい事は、それが小さいために、その重要性が認められない場合がよくある。しかし、小事は、人生において実際によい訓練を与えるものである。クリスチヤンの生活の中では、真に不必要なものはない。小事の重要性を軽視するために、品性形成上のあらゆる危険にあうのである。

「小事に不忠実な人は大事にも不忠実である」。どんなに小さい義務であっても、それに不忠実であることは、人間が神につくすべき奉仕を、創造主から奪うことになる。この不忠実さは自己にもどってくる。彼は神に完全に服従することによって受けることができる恵みと能力と品性の力を受けることができない。キリストから離れて生活をする結果、サタンの誘惑に負けて、創造主のご用をしながらも誤りをする。彼は、小事において正しい原則に導かれていないから、これは、自分の特別の仕事であるとみなす大事においても神に従わないのである。人生の小事を扱うときに見られる欠点が、たいせつなことを扱うときにも及んでくる。日ごろの態度が何事にもあらわれてくる。こうして、行為をくり返しているうちにそれが習慣となり、習慣は品性を形成し、品性は、わたしたちの現世と永遠の運命を決定するのである。

小事に忠実であってこそ始めて、大きな責任が負わせられたときにも忠実に行動するように訓練されるのであ



る。神は、ダニエルと彼の友人たちをバビロンの偉大な人びとの中に置かれたが、これは、異教の中にある人びとに、真の宗教の原則を知らせるためであった。ダニエルは、偶像教徒の中で、神の品性の代表者としておかれたのである。ダニエルは、どうして、こうした大きな信頼と栄誉を受けるにふさわしいものになったのであろうか。それは、小事に対する忠実さが、彼の全生活を貫いていたからである。ダニエルは、どんな小さい義務を行なうときにも、神をあがめた。神は、ダニエルと共に働かれた。神は、ダニエルとその友人たちに、「知識を与え、すべての文学と知恵にさとい者とされた。ダニエルはまたすべての幻と夢とを理解した」(ダニエル書一ノ一七)。

ちょうど神がバビロンにおける証人として、ダニエルを召されたように、今日、この世界において神の証人とするために、わたしたちを召されたのである。神は、わたしたちが、小事においても、大事においても神の国の原則を人びとの前にあらわすように望んでおられる。

キリストは、この地上の生活において、小事に注意すべきことをお教えになった。贖罪の大業ということが、常に主の心の重荷であった。主が教えたり、いやしたりなさったときには、主は、その心身の全精力をそのことに集中された。また、彼は、自然の中や人生のごく単純なことに心を留められた。イエスの最大のお教えは、自然界の単純なものを例にあげて、神の国の大真理を説明なさったときに語られたのである。どんなに卑しいしもべの必要でさえ、イエスは、みすごしにされなかった。彼の耳は、必要を訴えるすべての叫びを聞いたのである。彼は、群衆の中の病に苦しむ女が衣に触れたのを知り、その信仰のかすかな接触に答えられた。また、ヤイコヤコブの兄弟の娘を死からよみがえらせたときに、何か食物を与えるように、両親に注意なさった。また、主が、ご自分の大能の力によって墓からよみがえられたときに、身にまといておられた衣をたたんで、ていねいに適当な場所に置く

ことをおいといにならなかったのである。

クリスチャンとして、わたしたちがするように召された働きは、キリストと協力して、魂の救いのために働くことである。わたしたちは、すでに、この仕事をするを主と契約している。この働きを怠ることは、キリストに対して、不忠であることを表わす。しかし、この働きを完成するためには、忠実に良心的に小事をなさったイエスの模範に従わなければならない。あらゆるクリスチャン活動とその感化がよい結果をもたらす秘訣は、ここにある。

神は、民らが最高の階段にまでのぼって、神が与えようとしておられる能力を所有して、神の栄光をあらわすことを望んでおられる。わたしたちは、世の人びとよりは、はるかにまさった計画に従って動いていることを示すあらゆる準備が神の恵みのもとに整えられているのである。わたしたちは、神を信じ、神が人の心に働く力を信じているから、知力と理解力、技術と知識にすぐれていることを示さなければならない。

しかし、大きなたまものを与えられなかった者も失望する必要はない。常に品性の弱点に注意しながら、神の恵みによってそれを強めるように努め、持っているものを活用すればよいのである。人生のあらゆる行為の中に真実と忠誠とを織り込み、仕事の完成のために役立つ特質を養つべきである。

怠慢の習慣には、断固として打ち勝たなければならない。どんなに大きなあやまちをしても、忘れていたと言いわけをしさえすれば、それで十分であると考えている者が多い。しかし、彼らも他の人びとと同様の知能をもっているのではなからうか。それならば、物をよく覚えるように頭を訓練しなければならない。忘れることは罪であり、怠ることは罪である。怠る習慣をつけると、自分の魂の救いを怠るようになり、ひいては、不用意のた

めに、神の国にはいることがなくなるのである。

偉大な真理は、小事のなかにもあらわされなければならない。日ごとのどんなに卑しい務めも、宗教的態度で行なうべきである。神のことばに絶対的に従うことが、いかなる人にも、最大の資格を与えるのである。

直接宗教の働きに関係がないからといって、自分たちの生涯はなんの役にも立たず、神の国の発展のために何もしないと感じる人が多い。しかし、これはまちがった考えである。だれかのしなければならぬ仕事を与えられているならば、自分たちは神の大きな家族の中でなんの役にも立たないなど思ったりしてはならない。どんなに小さな務めでも軽視してはならない。まじめな仕事は、なんであっても祝福である。その仕事を忠実にしているならば、どんな信任でも受ける訓練となるのである。

どんな仕事でも、全く自己を捨てて神のために行なうならば、神はそれを最上の奉仕としてお受けになる。真心から喜んでささげるささげ物は、なんであっても、小さいものではないのである。

たとえ、わたしたちはどこにいても、その場にある義務を果たすように、キリストは命じておられる。もし家庭にいるならば、家庭を楽しいところにするように喜んで熱心に行かないさい。あなたが母親であれば、子供たちをキリストのために育ててください。これは講壇に立つ牧師と同じく、神のための働きである。また、台所で働くことが、自分の義務であれば、完全な料理人になるように努めなさい。健康的で栄養のあるおいしいものを作りなさい。そして料理に最高の材料を用いるときに、自分の心にも最高の思想がわいてくるような材料を与えなければならぬことを忘れないでほしい。また、農業その他の職業に従事している人は、現在している務めを成功させるように努力してください。今している仕事に注意を集中しなさい。どんな仕事をしていても、キ

リストを代表しなさい。キリストがあなたの立場にあられたら、彼がなさる通りにしなさい。

タラントは、どんなに小さくても、神には、その使い場所がある。一つのタラントでも賢明に活用されるならば、それは、定められた働きを成し遂げるのである。小さい義務を忠実に果たしていくことによって、わたしたちは、加え算で仕事をしていくけれども、神は、かけ算で、わたしたちのために働いてくださるのである。このような小さいものが神の働きの中で、何よりの貴重な感化となるのである。

どんなに小さい義務の遂行にあたっても、生きた信仰が金の糸のようにその中に織り込まれていなければならぬ。そうすれば、日ごとの仕事の全体が、クリスチャンの成長を助け、イエスを絶えず仰ぎ見るようにする。わたしたちは、キリストを愛しているので、なすすべての事に力がいるのである。こうして、わたしたちは、タラントを正しく活用することによって、わたしたちをより高い世界に、金の鎖で結びつけることができるのである。これが真の清めである。というのは、清めとは神のみこころに完全に従いながら、日ごとの務めを快活に行なうことであるからである。

ところが、何か大きな仕事任せられるのを待っているクリスチャンが多い。彼らは、自分たちの野心を満足させるに足るような大きな場所をみつけないために、人生の平凡な義務を忠実に果たさない。平常の務めは、あまり興味がないと思っている。こうして、日一日と神に忠実に仕える機会を逸している。何か大きな事をしようと待っている間に、彼らは、なんの目的も達せず、働きも完成しないで、人生を過ごしてしまうのである。

## 返されたタラント

「だいぶ時がたってから、これらの僕の主人が帰ってきて、彼らと計算をしはじめた」。主がしもべたちと計算されるときにはすべてのタラントがどれだけ増したかが厳密に調べられる。行なった働きが、しもべたちの品性をあらわすのである。

五タラント与えられたものと、二タラント与えられたものとは、託されたものと利益とを主に返した。これは彼らが、何も自分の功績を認めないことを示している。彼らのタラントは、与えられたものであった。別のタラントをもうけたのではあるが、元金がなければ利益もなかったのである。彼らは、ただ自己の義務を果たしたことを認めている。資金は主のものであったから、利益も主のものである。もしも主が彼らに愛と恵みとをたまわらなかったならば、彼らは、永遠に破産してしまったことである。

しかし、主がタラントをお受けになったとき、それがいかにも彼らの功績であるかのように、しもべたちを賞賛し、報われたのである。彼の顔には、喜びと満足の色があらわれていた。主は彼らに祝福を与えることができることを喜ばれるのである。神がしもべたちに奉仕と犠牲をお与えになるのは、神の側に与えなければならぬ義務があるからではなくて、愛とやさしさにあふれた心からなさるのである。

「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」。

神が喜んでお受けになるものは、神への忠実さ、忠誠、愛の奉仕などである。聖霊に動かされて、人びとを善

と神とに導いた行為は、天の書に記録される。そして、このような働きをしたしもべは、神の日に賞賛を受けるのである。

彼らは、自分たちの働きの結果、あがなわれた人々を、神の国でみるときに、主の喜びにあずかるのである。そして、彼らは、この地上で神と共に働くのにふさわしい者となっていたから、天でも神とともに働く特権が与えられる。わたしたちが、天でどうなるかは、現在どんな品性もち、神のみわざの中で何をしているかによってきまる。「それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためである」とキリストご自身が言われた(マタイ二〇ノ二八)。キリストのこの地上の働きは、キリストの天の働きである。この地上でキリストと共に働くことの報いは、来たるべき世界で、キリストと共に働くという、より大きな力と特権が与えられることである。

「一タラントを渡された者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます。』」

人びとはこのように神のたまものを用いなかったことの弁解をする。いかにも神が横暴苛酷で、人間の欠点をさがしては、罰を与えるもののように考える。何も与えずにおいて要求し、まかないにおいて刈るもののように非難する。

神が人々の所有を要求し、彼らの奉仕をお求めになるのを非難して、神は苛酷な主人であるというものが多くいる。しかし、わたしたちは、すでに神のものである物のほかに何も神にささげることとはできない。ダビデ王は

「すべての物はあなたから出ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです」と言った(歴代志上二九ノ一四)。万物は、創造によるばかりでなく、贖罪によって神の所有なのである。現世ばかりでなく、来世においても受ける祝福のすべてには、カルバリーの十字架が押されている。であるから、神が苛酷な主人であつて、まかないところから刈るという非難は不当である。

主人は、悪いしもべの不当な非難を別に否まなかった。しかし、このしもべの行動はなんの弁解の余地がないことを示している。主人の利益になるように、タラントをふやす方法は、すでに備えられていたのである。「主人は言った、『それなら、わたしの金を銀行に預けておくべきであつた。そうしたら、わたしは帰ってきて、利子と一緒にわたしの金を返してもらえたであらうに』」。

わたしたちの天の父は、わたしたちが与えられただけの才能を発揮することをお求めになる。わたしたちには負うことができない重荷を無理に負わせられることはない。「主はわれらの造られたさまを知り、われらのちりであることを覚えていられるからである」(詩篇一〇三ノ一四)。神がわたしたちにお求めになることは、すべて、恵みによつて、わたしたちのなし得ることなのである。

「多く与えられた者からは多く求められ」る(ルカ一一ノ四八)。わたしたちのできることから少しでも足りなければ、それに対する責任を負わなければならない。主は、わたしたちにどんな奉仕ができるかを正確にお計りになる。活用した能力と同様に、活用しなかった能力も調べられる。わたしたちの才能を正しく用いたならば、到達し得たはずのことに對して、神はその責任を問われる。わたしたちは当然なし得たにもかかわらず、才能を神の栄えのために用いなかったために、なし得なかったことを、さばかれる。自分の魂を失わないまでも、用い

なかった才能の結果がどんなものであるかを永遠にわたって知られることであろう。なぜなら、得べきであって得なかったところのすべての知識と才能とは、永遠の損失となるからである。

しかし、わたしたちが自分を全く神にささげて、神の指導に従うならば、その達成については、神が責任を負ってください。わたしたちが、忠実に働くならば、これが成功するかどうかを気にすることを神は望まれない。失敗のことは一度でも考えてはならない。わたしたちは、失敗することのないお方と協力しなければならない。自分の弱さや無能のことを口にしてはならない。これは、神に対する不信を示し、みことばを拒むことを示している。重荷についてつぶやいたり、負わせられた責任を拒んだりするならば、それは、主が苛酷であって、能力を与えないで要求するといっているのと同じことである。

なまけたしもべの精神を、わたしたちはけんそんということがあるが、真のけんそんはこれとは全く異なったものである。けんそんであるということは、何も知力に欠け、抱負もなく、おく病な気持ちで人生を送り、失敗することを恐れて責任を避けることではない。真のけんそんは、神の力に頼って神の目的を成就することである。神はみこころにかなう人びとを用いてお働きになる。神は大きな働きをするのに、最もいやしい器をお選びになる。それは、神の力が人間の弱さによってあらわされるためである。わたしたちは、標準をもっていて、それによって、一つの事を偉大であるといい、他のものを小さいと言うのである。しかし、神は、人間の定規でありにならない。人間が大きいと思うことを、神も大きく思い、人間が小さいと思うことを、神も小さく思われるものと決めるはならない。才能を評価したり、仕事を選んだりすることは、わたしたちのすることではない。わたしたちは、神が負わせてくださった荷を神のために負い、常に神のみ前に出て、安んじているべきである。



仕事はなんであっても、真心から喜んでする奉仕を神は喜ばれる。神とともに働くものとされたことを喜び、感謝の心をもって義務を果たすことを、神は喜ばれるのである。

### 取りあげられたタラント

「さあ、そのタラントをこの者から取りあげて、十タラントを持っている者にやりなさい」という宣言がなまけたしもべに下された。これは、忠実に働いた者に与えられた報いと同じく、最後の審判の時の報いであるだけでなく、現世においても、徐々に与えられる報いである。霊界も自然界と同じである。用いない能力は弱くなり、衰えてしまう。活動は生命の法則である。「各自が御霊の現れを賜わっている」(コリント第一・一二ノ七)。たまものは、他を祝福するために活用するならば増加する。ところがそれを、自己のために閉じ込めてしまえば、減少して遂には取り去られてしまう。自分の受けたものを分け与えることを拒む者は、ついに与えるものがなくなってしまう。これは魂の能力を弱め、ついに滅びにおとしれてしまう自滅の道である。

利己的で自己中心の生活を送りながら、主と一緒に喜ぶことができると思ってはならない。彼らは無我の愛の喜びにあずかることはできない。彼らは天の宮廷にふさわしくない。天にみなぎっている清い愛のふんい気を理解することができない。天使たちの声も、立琴の音楽も、彼らには満足を与えない。彼らにとって、天の科学は、一つの解き得ぬなぞである。

大いなる審判の日に、キリストのために働かず、ただ自分のことと、自分を喜ばせることのみを考えて、なんの責任も負わず、浮き草のような生活をした人びとは、全地の審判主から悪を行なった人びとの中に入れられて、

同じ宣告を受けるのである。

クリスチャンであるといいながら、神の要求を果たさず、そのことを別に悪いことと思わない者が多い。彼らは、神を活すもの、殺人、姦淫(かんいん)を行なう者が罰を受けるのに値することを知っている。しかし、私たちは、宗教的集会を楽しみ、福音の説教を聞くことを愛しているから、クリスチャンであると思っている。彼らは、自分のことばかりに目を過ごしていたのであるが、この不忠実なしもべが「そのタラントをこの者から取りあげよ」という宣告を聞いて驚いたように、彼らも驚くのである。彼らも、ユダヤ人と同じように、祝福を正しく用いないで、自分の楽しみにあててしまった。

自分は、神のために働く能力がないと言って、クリスチャンの働きをしないことの弁解をする者が多くいる。しかし、神は、彼らをそのような無能力者に造られたのであるうか。決してそうではない。彼らの無能は、自分たちが活動を怠って、それを故意に続けた結果である。「そのタラントをこの者から取りあげよ」という宣告の結果は、すでに彼らの品性の中にあられている。タラントをいつまでも用いないでいると唯一の光である聖霊をけしてしまうのである。「この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい」という宣告は、彼ら自身が、永遠に決定したことを、天が承認したことを示しているのである。

## 豊かな人生の秘訣

本章は、ルカ一六ノ―九に基づく。

キリストが、この世にこられたのは、俗事の追求が頂点に達した時代であつた。人びとは、永遠のことをこの世のこの次におき、未来のことを現在のこの次にしていた。彼らは、幻影を実在と思い、実在を幻影であるかのように思い違いしていた。彼らは、信仰によつて見えない世界を見なかつた。サタンは、この世の物を、何よりも魅力的で、興味深いもののように見せかけていたので、人びとは、サタンの誘惑に心を奪われていた。

キリストは、このような状態をくつがえすためにこられた。彼は、このように人びとを惑わして捕えていた魔力を解こうとなさつた。キリストは、そのお教えの中で、天が人に要求するものと、地が人に要求するものとの関係を明らかにして、人の心を現世のことから転じて、将来のことに向けさせようとなさつた。この世のものの追求ではなくて、永遠のための準備をするように、イエスは彼らをお招きになつたのである。

「ある金持のところにとりの家令がいたが、彼は主人の財産を浪費していると、告げ口をする者があつた」と主は言われた。この金持ちは、自分の財産を全部、このしもべに任せていた。ところが、彼は忠実ではなかつ

た。そして、主人は、自分の財産がたえず横領されているのに気づいて、彼をやめさせることにして、帳簿の清算を命じたのである。そして、「あなたについて聞いていることがあるが、あれはどのようなのか。あなたの会計報告を出しなさい。もう家令をさせて置くわけにはいかないから」と彼は言った。

解雇されることがわかった家令は、自分の前に三つの道が残されているのを知った。この家令は心の中で思った。『どうしようか。主人がわたしの職を取り上げようとしている。土を掘るには力がないし、物ごいするのは恥ずかしい。そうだ、わかった。こうしておけば、職をやめさせられる場合、人々がわたしをその家に迎えてくれるだろう。』それから彼は、主人の負債者をひとりひとり呼び出して、初めの人に、『あなたはわたしの主人にどれだけ負債がありますか』と尋ねた。『油百樽（たる）です』と答えた。そこで家令が言った、『ここにあなたの証書がある。すぐそこにすわって、五十樽と書き変えなさい。』次に、もうひとりに、『あなたの負債はどれだけですか』と尋ねると、『麦百石です』と答えた。これに対して、『ここに、あなたの証書があるが、八十石と書き変えなさい』と言った。

この不忠実なしもべは、他の人びとを彼の不正直な行為の仲間ひき入れた。彼は、主人に損害を与えて、その人びとに利益を得させたのであるから、このような便益を受けることによって、彼らは、このしもべを友人として彼らの家に迎え入れなければならないはめになった。

「ところが主人は、この不正な家令の利口なやり方をほめた。」この世の主人は、自分に損害を与えた男の抜け目のないやりかたをほめた。しかし、金持ちの賞賛は、神の賞賛ではなかった。

キリストは、不正な家令をおほめになったのではなくて、ご自分が教えようと望まれた教訓を、人びとのよく

知っているできごとを例にあげて説明なさったのである。「不正の富を用いても、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう」と言われたのである。

救い主は、取税人や罪人と交わったために、パリサイ人の非難をお受けになった。しかし、イエスのこの人びとに対する関心は、減少せず彼らに対する彼の努力はやまなかった。イエスは、彼らの職業が彼らを誘惑におとしいれていたのを認めになった。彼らは、悪へのいざないにかこまれていた。悪の道に一步ふみ込むのは、容易なことですぐにでも、大きな不正と極悪な犯罪へと落ちこんでいくのである。キリストは、なんとかして、彼らの心を高い目標と高尚な主義に引きつけようとなさった。不正な家令の話をなさったときに、主が心に思っておられたのは、このことであつた。取税人たちの間ではちようどたとえの中で言われているようなことが起こっていたので、キリストの描写を聞いていると、それが自分たちのことのように彼らには思えた。彼らは心をひかれた、そして、自分たちの間の不正な習慣によっても、靈的真理の教訓を学んだ者が多くあつたのである。

しかしながら、このたとえば、直接弟子たちに向かって語られた。まず、真理のパン種が彼らに与えられて、それから、それが他の者に伝えられたのである。キリストの教えの多くは、始めのうち弟子たちにも理解することができなかった。そして、時には、彼の教えが全く忘れ去られたかのように思われた。しかし、弟子たちは、これらの真理を聖霊の力によつて、再び思い起こすことができ、日ごとに教会に加えられた新しい改心者たちに、明りようにそれを伝えたのである。

また、救い主は、パリサイ人に向かつても語っておられた。彼らもキリストのことばの力を必ず理解するよう

になるという希望をお捨てにならなかった。彼らの中にも強い感動を受けたものが多くいた。そして、やがて聖霊の命じるままに真理が語られるのを聞いたときに、多くの者がキリストを信じるようになるのであった。

パリサイ人たちは、キリストが取税人や罪人と交わっていると非難して、キリストの名声を傷つけようとした。ところが、今度は、キリストがこれらの非難者たちを譴責なさることになった。イエスは、取税人の間で起こったできごとを取り上げて、それによってパリサイ人たちの行動がどんなものであるかを示すとともに、彼らが自分たちの誤りを正す唯一の方法をもお示しになったのである。

この不正な家令に託された主人の財産は、慈善に用いるためのものであった。ところが、彼は、それを私用に使ってしまった。イスラエル人も、そうであった。神は、アブラハムの子孫をお選びになった。神は強いみ手をもって、彼らをエジプトからあがない出された。神は、世界を祝福するために彼らを神聖な真理の保管者となさった。神は、彼らが光を他に伝えることができるように、生きたみことばを彼らにお託しになった。しかし、神の家令は、これらのたまものを自分たちを富ませ、高めるために用いてしまった。パリサイ人たちは、自尊心が強く、自分を義とする心に満たされていたので、神の栄光のために用いるように、神から任せられた財産を乱用してしまった。

たとえの中の家令は、将来のためになんら用意をしていなかった。彼は他の利益を図るためにゆだねられていた財産を、自分のために費やしてしまった。彼は、ただ現在のことしか考えていなかったのである。もしも、家令の職が取り上げられてしまうならば、彼には、何一つ自分のものと言えるものはなかった。ところが、まだ主人の財産が、彼の手許にあった。そこで、彼は、将来の欠乏に備えて、自分の身の安全をはかるために、その財

産を用いようとした。この目的を達成するためには、彼は、新しい計画のもとに働かなければならなかった。彼は自分のためにかき集める代わりに、他に分け与えなければならなかった。このようにしておけば、彼が解雇されたときに迎えてくれる友ができるかもしれないと思った。パリサイ人もそれと同じであつた。家令の職が、まもなく、彼らから取り去られて、彼らは将来の備えをしなければならなくなるのであつた。彼らも、他人に利益を与えることによってのみ、自分に利益をもたらすことができたのである。彼らも現世において、神のたまものを他の人びとに分け与えて、始めて、永遠のために備えることができたのである。

キリストは、このたとえを語られたあとで、「この世の子らはその時代に対しては、光の子らよりも利口である」といわれた。すなわち、世俗的に賢い人びとは、いわゆる神の子供たちが、神に奉仕するよりは、もっと賢く真剣に自分のために働いているということである。キリストの時代には、その通りであつた。それは、現代でも同じである。クリスチャンであると言っている多くの人びとの生活を見てみるとよい。神は、彼らに技能と能力と感化力をお与えになつた。また、神は彼らに金銭をお与えになつたが、これは、彼らが神の協力者となつて大いなる贖罪の働きをするためである。神から与えられたたまものは、全部、人類を祝福し、なやむ者、欠乏の中にある人びとを助けるために用いるものである。わたしたちは、飢えたものに食べさせ、裸なものに着せ、やもめや孤児の世話をし、苦しむ者やおさえられている者のために奉仕しなければならぬ。神は、世界じゅうに不幸がゆきわたることをお望みにならなかつた。また、ある一人がありあまるぜいたくな生活をする一方、他の人びとの子供たちがパンに飢えるようなことは、神のみこころではなかつた。実際の生活に必要なもの以上の富は、善を行ない、人類を祝福するために用いるために、人に託されているのである。「自分の持ち物を売って、施し

なさい」(ルカ二二ノ三三)。「惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び」(テモテ第一・六ノ一八)、「宴会を催す場合には、貧乏人、不具者、足なえ、盲人などを招くがよい」(ルカ一四ノ一三)と主は言われたのである。「悪のなわをほどき」「くびきのひもを解き」「しえたげられる者を放ち去らせ」「すべてのくびきを折る」「飢えた者に、あなたのパンを分け与え」「さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ」「裸の者を見て、これに着せ」「苦しむ者の願いを満ち足らせ」(イザヤ書五八ノ六、七、一〇)「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マルコ二六ノ一五)以上のことばが主の命令である。クリスチャンと称している者の大部分が、このような動きをしているであろうか。

ああ、神のたまものを私用に使っているものが、なんと多いことであろう。また、次から次に家や土地をふやしているものがなんと多いことであろう。快樂のため、食欲を満たすため、ぜいたくな住居や家具や衣服などのために、金銭を費やしているものがなんと多いことであろう。その反面彼らの同胞は、悲惨と犯罪、病氣と死の中に残り残されている。無数のものが、あわれみの目も向けられず、同情に満ちたことばや行為を一つとして受けることもなく、滅び去っているのである。

人びとは、神の物を盗んでいるのである。彼らが財産を利己的に使用することは、人類の苦しみを和らげ、魂を救うことによって当然、神にかえっていくべき栄光を、主から奪うことになる。彼らは、神からゆだねられた財産を横領している。「わたしはあなたがたに近づいて、さばきをなし、…雇人の賃銀をかすめ、やめめと、みなしごとをしえたげ、寄留の他国人を押しつけ」る「者どもにむかつて、すみやかにあかしを立てると、万軍の主は言われる」「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたはわたしの物を盗んでいる。あな



たがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物をもってである。あなたがたは、のろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである」(マラキ書三ノ五、八、九)。「富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。…あなたがたの富は朽ち果て、着物はおしばまれ、金銀はさびている。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、…あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている。」「あなたがたは、地上であごり暮し、快樂にふけり、」「見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している」(ヤコブ五ノ一三、五、四)。

やがて、すべての者は、そのゆだねられたたまものを引き渡すように要求される。最後の審判の日には、人間のたくわえた富は、彼らにとってなんの価値もなくなる。彼らには、何一つ自分の所有であるといえるものはない。

世の宝をたくわえるために、その一生を送る人びとは、この世的の援助を得るために努力した不正な家令ほどにも、彼らの永遠の幸福のために賢く、思慮深く準備をしていない。この世の子らは、その時代に対しては、いわゆる光の子らよりもりこうなのである。預言者が、大審判の日の幻の中で言ったのは、この人びとのことである。「その日、人々は拝むためにみずから造ったしろがねの偶像と、こがねの偶像とを、もぐらもちと、こうもりに投げ与え、岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、主が立って地を脅かされるとき、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける」(イザヤ書二ノ二〇、二二)。

「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたが

たを永遠のすまいに迎えてくれるであろう」とキリストは言われる。神も、キリストも、天使も、すべてが悩み、苦しみ、罪に沈んだ者のために奉仕している。この働きのためにあなた自身をささげ、神のたまものをこの目的のために用いてください。そうすれば、あなたは、天に住むものの群れに加わることができる。あなたの心は、彼らの心と共鳴し、あなたの品性は、彼らと同じようになることであろう。あなたにとって、これらの永遠のすまいの住民たちは、他国人ではなくなる。地上の万物が過ぎ去るとき、天の門衛は、あなたを喜んで迎えることであろう。

また、他人を祝福するために用いた財産は、報酬をもたらし、正しく用いられた富は、大きな善事をなしとげる。魂がキリストに導かれる。キリストの計画に従って人生を送るものは、この地上で自分が世話をし、犠牲をした人びとと、神の宮で会うことであろう。あがなわれた人びとは、自分たちの救いのために器となって働いた人びとを覚えていて、心から感謝することであろう。忠実に救霊の働きをしたものにとって、天はすばらしいところである。

このたとえの教訓は、すべてのものに与えられたものである。すべての者は、キリストを通して与えられた恵みに対して責任を負わなければならない。一時的な地上の事ながらに没頭するには、この人生は、あまりにも厳粛である。永遠で、目に見えないかたからわたしたちが伝えられたことを、他に伝えることを、主は望んでおられる。

毎年、幾百万とも知れない多くの人びとが、警告を受けず、救いにもあずからずに、永遠にこの世を去っていく。わたしたちには、それぞれの人生において、時々刻々、魂に接触して彼らを救いに導く機会が与えられてい

る。このような機会は、絶えず来ては去っていく。神は、わたしたちがこのような機会を最善に活用することを望んでられる。一日、一週、一か月と月日は過ぎていく。それは、働く時が、一日、一週、一か月と減っていることである。おそくても、あと数年後には「あなたの会計報告を出しなさい」という拒むことのできない声をきかなければならないであろう。

キリストは、すべての者によく考えてみよと仰せになるのである。正直に計算をしなさい。はかりの一方には、永遠の宝、命、真理、天国、そして、救われた魂に対するイエスの喜びなどのすべてを代表しているイエスを置き、向こう側には、世が与え得るあらゆる魅惑物をおいてはかるのである。一つのはかりの一方には、自分の滅びと自分が救い得たはずの魂の滅びとをおき、他の側には、自分とその人びとのために与えられる神の命に等しい命をおいて見よう。この世とそして永遠のために、よく計ってみなさい。あなたがそうして計っているところへ、キリストは、「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか」と言われるのである（マルコ八ノ三六）。

神は、わたしたちが、地上のものよりは、天のものを選ぶことを望んでられる。また、天にたくわえることができることをもお示しになった。神は、わたしたちの最高の目標に励ましのことをかけ、わたしたちの尊い宝を安全に守ってくださいるのである。「わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも少なくする」と主は言われる（イザヤ書一三ノ一二）。虫がくい、さびがつく富が一掃されるとき、キリストのしもべたちは、彼らが天に積んだ宝と朽ちない富とを楽しむことができるのである。

キリストにあがなわれた者の友情は、この世のあらゆる友情よりまさったものである。キリストが準備のため

に行かれたすまいにはいる資格を与えられることは、地上のどんなりっぱな宮殿に住む資格よりもまさる。この地のどんな賞賛のことばよりも、救い主が忠実なしもべたちに言われるこのことばのほうがすぐれている。「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ二五ノ三四)。

キリストの財産を使い果たしてしまった者にもなお、永遠の富を獲得する機会が与えられている。「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。」「自分のために古びることのない財布(さいふ)をつくり、盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝をたくわえなさい」(ルカ六ノ三八、一二ノ三三)。「この世で富んでいる者たちに、命じなさい。…良い行いをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び、こうして、真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台を自分のために築き上げるように、命じなさい」(テモテ第一・六ノ一七―一九)。

であるから、あなたの財産をあなたに先だって天に送ることにしよう。あなたの宝を神のみ座のかたわらにたくわえよう。そして、キリストの無尽蔵の富を確保することにしよう。「不正の富を用いても、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富がなくなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう」。

## 奉仕の精神

本章は、ルカ一〇ノ二五―三七に基づく。

ユダヤ人の間では、「わたしの隣り人とはだれのことですか」という問題は、絶えない議論の種であった。彼らは、異邦人やサマリヤ人についてはなんの疑問も持たなかった。彼らは、異国人であり、敵であった。しかし、自国民と社会の各階級の中でどこに区別を設けるべきであろうか。祭司や律法学者や長老たちは、いったい、だれを隣り人とみなすべきであろうか。彼らは、自分たちを清めるために、あれこれと儀式を行なって日を送っていた。そして、無知で軽率な群集に接触すると、自分たちの身が汚れて、それを除くためにはめんどろな儀式をしなければならぬと、教えていた。彼らは、「汚れた」人びとを隣人と呼ばなければならないのであろうか。

キリストは、この質問に対して、よいサマリヤ人のたとえを語って、お答えになった。わたしたちの隣人は、単に自分の教会の一員であるとか、わたしたちと信仰を同じくする者とかいうのではないことをお教えになった。そこには、人種、皮膚の色、または階級の差別がない。わたしたちの隣人とは、わたしたちの助けを要するすべての人をいうのである。わたしたちの隣人は、敵に出会って傷つけられたすべての魂である。わたしたちの隣人

は、神の財産であるすべての人である。

よいサマリヤ人のたとえば、ある律法学者がキリストに質問したことから、語り出されたものである。キリストが教えておられると、「ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、『先生、何をしたら、永遠の生命が受けられましょうか。』」この質問は、パリサイ人たちが、キリストのことばの端をとらえてわなにかけるために、律法学者に言わせたものであったので、彼らは、熱心にイエスの答えに耳を傾けた。ところが、救い主は、議論をしようとはなさらずに、質問した当人に答えをお求めになった。「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」とお聞きになった。シナイから与えられた律法を、イエスは軽視していると、なおもユダヤ人は、イエスを非難した。ところが、主は、救われるかどうかは、神の律法を守ることにあると言われた。

律法学者は、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』また、『自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ』とあります」と言った。キリストはそれに答えて、「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」と言われた。

この律法学者は、パリサイ人の立場とその行ないに満足していなかった。彼は、聖書の真の意味を悟ろうと願って、研究を続けてきた。彼は、この問題に深い関心を寄せていたので、真剣に「何をすべきでしょうか」と聞いた。彼が律法の要求について答えたときに、彼は、すべての儀式や礼典に関するいましめを省略した。彼は、これらのものを全く無価値なものとして、ただ、すべての律法と預言者とがよって立つところの二大原則をのべたのである。救い主がこの答えを賞賛なさったことは、ラビたちの間におけるキリストの立場を有利に導いた。彼らは、律法の解説者の述べたことを是認なさったイエスを非難することはできなかった。

「そのとおりに行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」とキリストは言われた。キリストは、常に、律法は、一つのまとまったものとして神がお与えになったものであることを教えられた。つまり、一つの原則がその全体を貫いているから、一つのいましめを守って、他を破るということは不可能であることを示された。人間の運命は、律法のすべてに従うことによって決定するのである。

キリストは、だれでも自分の力で律法を守ることができないことを知っておられた。彼は、この律法学者が真理を発見するようになるために、さらに明らかな批判的研究にはいるように導こうと望まれた。ただ、キリストの徳と恵みを受けることによってのみ、わたしたちは、律法を守ることができる。罪のためのあがないの供え物を信じることによって、墮落した人間は、全心をもって神を愛し、また自分を愛するように、隣り人を愛することができるのである。

律法学者は、始めの四条も、後の六条も守っていないことを知った。彼は、キリストの厳肅なことばを聞いて罪を認めただ、自分の罪を告白する代わりに、それを弁護しようとした。真理を認めようとせず、戒めを実行することがどんなに困難なことであるかを示そうと努めた。こうして、彼は、心の感銘をにぶらせ、人びとの目の前で自分を弁護しようとした。彼は、自分で答えることができたほどであるから、彼の質問はしなくてもよいものであったことが、救い主のことばによってわかる。しかし、彼は、もう一つの質問をして、「わたしの隣り人とはだれのことですか」といった。

再び、キリストは議論にまきこまれるのを拒まれた。そして、まだ聴衆の記憶に新しい一事件のことを語って、質問にお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物を

はぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った」と、彼は言われた。

エルサレムからエリコへ行く旅人は、ユダヤの荒野の一角を通らなければならなかった。道は、岩かどけわしい谷間を下っていて、強盗が出没し、しばしば暴力行為の行なわれるところであった。旅人が襲われ、貴重品が全部奪われた上、半殺しの目に会って路傍に横たわっていたのは、ここであった。こうして、彼が倒れているところへ、一人の祭司が通りかかった。彼は、旅人が傷つき、血にまみれて横たわっているのを見たが、なんの助けも与えないで行ってしまった。彼は「向こう側を通って行った」。次に、レビ人が現われた。彼は何が起こったのかを知ろうとする好奇心から、立ち止まって、この被害者を見た。彼は、自分がなんとかしなければならぬのを自覚したけれども、それは快い義務ではなかった。この道を通らなければよかった。そうすれば、傷ついた人を見ないですんだのにと彼は思った。彼はこれを自分には全く無関係な事件であるとして、「向こう側を通って行った。」

ところが、その同じ道をやって来たサマリヤ人は、この苦しんでいる人を見て、他の二人がしようとしなかったことをした。彼は、やさしく親切に傷ついた人に救いの手をのべた。「彼を見て気の毒に思い、近寄ってきて、その傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った」。祭司とレビ人は二人とも神を敬っていることを公言してはいたが、サマリヤ人こそ真に悔い改めた人であることを示した。このようなことは、祭司やレビ人にとって不快な仕事であつたと同様に、サマリヤ人にとっても不快な仕事であつた。しかし、サマリヤ人は、彼の精神と働きが神と一





良いサマリヤ人は、傷ついた人を見て深く同情し、他の人々が助けることを拒んで行ってしまったにもかかわらず、彼は心から助けてあげた。

致していることを示したのである。

キリストは、このたとえの中で、律法の原則を、直接に力強くお教えになった。そして、聴衆がこのような原則を実行していないことを指摘なさった。イエスのことばは、実に明確であつたために、聴衆は、何一つ非の打ちどころを見つけないことができなかった。この律法学者も何一つ批評するところを見つけないことはできなかった。キリストに対する彼の偏見は取りのぞかれた。けれども、彼は、サマリヤ人に対する偏見には打ちかつことができないで、サマリヤ人と名をあげて答えることはできなかった。キリストが、「この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になつたと思うか」とおたずねになつたときに、彼は「その人に慈悲深い行いをした人です」と答えた。

「そこでイエスは言われた、『あなたも行つて同じようにしなさい。』」困っている人に、同じような親切を示しなさい。そうすることによって、あなたは、律法を全部守つてゐるという証拠を示すことになるのである。

ユダヤ人とサマリヤ人との間の大きな相違は、宗教的信条の相違、すなわち、真の礼拝とは、なんであるかということにあつた。パリサイ人は、サマリヤ人のことを少しもよく言わず、にがにがしいのろいを彼らに浴びせていた。ユダヤ人とサマリヤ人との間の反感は、実に激しく、キリストがサマリヤの女に水を求められたときなど、彼女がそれを非常に不思議に思つたほどであつた。かの女は「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」といった。「これは、ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかつたからである」と福音書記者は、つけ加えている(ヨハネ四ノ九)。また、ユダヤ人が、神殿で殺気だつてキリストを石で打とうとして立ち上がったとき、「あなたはサマリヤ人で、悪霊に取りつかれてゐると、

わたしたちが言うのは、当然ではないか」と言ったのは、彼らの憎悪をあらわすのに最も適したことばであった（ヨハネ八ノ四八）。しかしながら、祭司やレビ人は、主が彼らにお命じになった仕事を自分たちは怠りながら、憎み軽べつしているサマリヤ人に、同胞の一人を介抱させたのである。

このサマリヤ人は、「自分を愛するよう、あなたの隣り人を愛せよ」という戒めを実行して、彼を非難した人びとよりも、彼の方がただしいことを示した。彼は、自分の命を危険にさらしてまで、傷ついた人を、自分の兄弟として介抱した。このサマリヤ人はキリストを代表している。救い主は、人間の愛がとうてい及び得ない愛を表わされた。彼は、わたしたちが、傷ついて死にひんしていたときに、わたしたちをあわれんでくださった。彼は天の全軍の愛が一身に注がれていた清い幸福な天にお留まりにならなかった。彼は、わたしたちの哀れむべき悲惨な姿を見て、それを理解し人類とご自身とを一つに結びつけられたのである。主は、敵を救うためになくなられたのである。主は、ご自分を殺す者のために祈られた。主は、ご自分の模範を指しながら、「これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである。」「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と彼の弟子たちに言われるのである（ヨハネ一五ノ一七、一三ノ三四）。

祭司とレビ人は、神ご自身がお定めになった神殿で奉仕するために行った帰り道であった。神殿の奉仕に参加することは、大いに名誉ある特権であった。そして祭司やレビ人は、このような名誉が与えられたのであるから、路傍にたおれている未知の傷ついた人に奉仕することは、自分の品位を下げることだと思った。こうして、彼らが同胞を祝福する神の器となるために、神がお与えになった特別の機会を、彼らは見すごしてしまった。

今日、同じまちがいをしている者が多い。そのような人びとは、自分たちの義務を、はっきりと二つに分けて

いる。第一は、神の律法に定められた、大事なものである。その次は、彼らが小さいと考えている事であって、ここにおいて、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」という戒めが、無視されている。この方面のことは、彼らの気の向くままに、衝動的に行なわれている。こうして、品性はゆがめられ、キリスト教は、誤解されているのである。

苦しんでいる人びとに奉仕することは、威厳をそこなうことのように考えている人がいる。魂の宮を荒れるにまかせている人びとを、無関心と軽べつの目で見る人が多い。また、別の動機から貧者をかえりみない人がある。彼らは、何かりっぱな企てを進展させようと努力していて、それがキリストのために働いていることのように考えている。彼らは、偉大な働きをしているから、貧しい者や困っている者の必要に気を配ることはできないと考える。彼らは、自分たちが、偉大であると考えていることを押し進めるためには、貧しい人びとを圧迫さえるのである。彼らは、こうして貧しい人びとを困難な苦しい立場におとし入れ、彼らの権利を奪い、その必要をかえりみない。それでいて、彼らは、キリストの事業を押し進めていると考えているのであるから、これをみな当然のことと思うのである。

逆境にある兄弟や隣人を助けしないで、彼らを苦しむままに放任している者が多い。彼らは、クリスチャンであると言っているから、キリストの代表者とは、このように冷淡で利己主義なのであるうかと、兄弟や隣人に考えさせてしまう。主のしもべたちが主と協力しないために、実は彼らを通して流れ出なければならぬ神の愛が、彼らの同胞から、著しくしゃ断されている。また人間の心とくちびるから、大いなる賛美と感謝とが神に返るべきであるのに、それも妨げられている。神の清いみ名に帰すべき栄光が神に帰せられずに奪い去られている。キ

リストが命をすてて救おうとされたその魂、神がみ国にともない、永遠に神とともに住ませようとされた魂が、神から奪われているのである。

真理は、わたしたちの実践によつて、世界に大きな感化を及ぼさなければならないのに、まだ、ほとんど感化を及ぼしていない。単なる信仰の告白は、世に満ちているが、それらにはなんの価値もない。わたしたちは、キリストのしもべであると主張し、神のことばの中の真理を全部信じるといつてみても、信じるのがわたしたちの日常生活のなかで行なわれていないならば、隣人に対してなんの役にも立たない。どんなにりっぱなことを口で言ってみても、わたしたちが、クリスチャンでないならば、自分を救うことも、同胞を救うこともできない。わたしたちの言うすべてのことはよいも、一つの正しい模範が、世界を益するのである。

キリストの働きは、利己的な行ないによつてすることはできない。キリストの働きは、圧迫された者と、貧しい者を救う働きである。キリストの弟子であるというものの心のなかには、キリストのあわれみの情がなければならない。すなわち、キリストが命をささげてまで救おうとなさったほど高く評価された人びとにたいして、深い愛をもたなければならない。これらの魂は、わたしたちが神にささげるどんな供え物よりも、はるかに尊いのである。いかにも重大だと思われることに全能力を傾けて、困った人をおろそかにし、他の人の正当な権利を奪うならば、それは、神のお喜びになる奉仕ではないのである。

聖霊の働きによつて魂が清められるということは、キリストの性質を人間のなかに植えつけることである。福音を信じることは、生活の中にキリストが宿ること——すなわち、生きた活動的な原則が宿ることである。それは、品性によい行ないとなつてあらわれるキリストの恵みである。福音の原則は、実際の生活のどの方面から

引き離すことはできない。クリスチャンのどんな経験も、どんな働きも、すべてがキリストの生活を代表するものでなければならぬ。

愛は信心の基礎である。たとえば、□でなんと言おうと、もし、兄弟に対する無我の愛をもたないならば、神に対する純粹の愛をもっていない。しかし、他人を愛そうと**努める**ことによって、この精神を得ることはできない。必要なのは、心の中にキリストの愛が宿ることである。自己がキリストの中にとけこむとき、愛は自然にわいて出る。他を助け、祝福しようとする気持ちが常に内からわき出て、天からの光が心にあふれ、顔に表わされると、クリスチャンの品性が完成の域に達するのである。

キリストが住まれる心に愛が欠乏することはない。神がまずわたしたちを愛してくださいのために、わたしたちも神を愛するのであるならば、わたしたちは、キリストが命をおすてになってまで愛されたすべての人びとを愛するようになる。神と接触していながら、人間と接触しないということとはできない。宇宙の王座にすわっておられるキリストのなかには、神性と人性が結合しているのである。キリストに連なるものは、愛という金の鎖によって、同胞と結ばれているのである。こうして、キリストのあわれみと同情とは、わたしたちの生活にもあらわれてくる。わたしたちは、貧しい者や不幸な者が、わたしたちのところへつれて来られるまで待たなくなるであろう。そして、他人の悲しみに同情することを求められることも不要になるであろう。わたしたちが、貧しい者や苦しむ者に奉仕することは、キリストが、あまねくめぐって善を行なわれたのと同様に自然にできるのである。

愛と同情心のあるところ、他人を祝福し高めようとする心のあるところには、神の聖霊の働きがあらわされる。

異教主義に閉ざされたところで、聖書にしろされた神の律法も知らず、キリストの名も聞いたことのない人びとが、自分たちの命の危険をも顧みないで、神の使者たちを親切に扱い、保護したことがある。彼らの行動は、神の力の働いたことを示している。聖霊が未開地の人びとの心にキリストの恵みを植えつけ、彼らの性質や教育とは全く反対の同情心を呼び起こしたのである。「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」とあるが、この光が彼の心を照らした(ヨハネ一ノ九)。もし彼が、この光に従っていくなれば、それは、彼の足を神の国まで導くことであらう。

神の栄光は、倒れたものを起こし、苦しむ者を慰めることにあらわれる。人の心のなかにキリストが宿られるところは、どこであっても、キリストが同じようにあらわされる。キリストの宗教が活動するところは、どこにも祝福があふれ、その働くところにはどこにも輝きがみなぎるのである。

神は、国籍、人種、階級の差別をなさらない。神は、全人類の創造者である。すべての人びとは、創造によって、一つの家族であり、贖罪によって、一つなのである。キリストは、あらゆるへだての壁をこわし、神殿のどのへやをも解放するためにこられた。それは、すべての魂が自由に神に近づくことができるようになるためであった。キリストの愛は、どんなところにもゆきわたって行くほど、広く深く満ちあふれたものである。それはサタンのまどわしにおちいついていたあわれな魂をサタンの勢力の下から引き上げて、神のみ座、すなわち約束のにじにかこまれたみ座のそばに、こさせるのである。

キリストにあつては、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、どれいも自由人もない。すべてのものは、キリストの尊い血によって近いものとなったのである(ガラテヤ三ノ二八、エペソ三ノ一三)。

いかに宗教的信仰の相違があろうと、人類の苦しみの叫びに耳を傾けて、それに答えなければならない。宗教上の相違が原因となって悪感情が存在するところでは、個人的奉仕の行ないをすることによって、多くのよい結果が生じる。愛の奉仕は偏見をくだき、魂を神に導くのである。

わたしたちは、他の人びとの悲しみや困難や苦難をこちらから早く察して、貴賤（きせん）貧富の別なく、人びとと共に喜びも苦しみも味わわなければならない。「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」とキリストは言われるのである（マタイ一〇ノ八）。わたしたちの回りには、試練に会って、同情のことばと援助の手を要する気の毒な魂がいる。同情と助けの必要なやもめたちもいる。また、キリストが神から託されたものとして受けるように弟子たちにお命じになった孤児たちもいる。このような人びとは、とかく見過ごしにされがちである。彼らは、みすばらしく、粗野で、みたところ少しも好ましくない人びとのようであるかもしれないが、彼らも神の所有なのである。彼らも価をもって買われたのであって、神の目の前には、わたしたちと同じように価値のあるものである。彼らは、神の大家族の一員であるから、クリスチャンは管理者として、彼らの責任を負っているのである。「わたしは、彼らの魂をあなたの手に求める」と神は言われるのである。

罪ほどはなはだしく悪いものはないが、罪人をあわれんで助けるのは、わたしたちの務めである。しかし、すべての罪人に同じ方法で接近することはできない。心のかわきをかくしている者が多い。そうした人びとには、やさしいことばや親切な心づかいを示すことによって、大きな助けを与えることができる。また、非常な欠乏のなかにありながら、それを知らないでいるものもある。彼らは、自分の魂の恐るべき欠乏を自覚しない。深く罪に沈んで、永遠の世界の実在感を失い、神の像を失い、救うべき魂のあることさえわからない人びとが無数にい



るのである。彼らは、神を信じなければ、人をも信用しない。この人びとには、おのれを忘れた親切な行為によってのみ近づくことができる。まず、彼らの肉体的必要を満たさなければならぬ。彼らに食を与え、体を洗い、人並みの衣服を着せなければならぬ。彼らがわたしたちの無我の愛の証拠を見るときに、キリストの愛を信じて、ことがやさしくなるのである。

あやまちにおちいり、はじと愚かさを感じている人びとが多い。彼らは、自分たちの過失や誤りをながめて、絶望するばかりになる。わたしたちは、このような魂をおろそかにしてはならない。流れに逆らって泳ぐものは、水流の全勢力と戦わなければならない。沈みゆくペテロに長兄イエスの手がさしのべられたように、このような人に助けの手をさしのべることにしよう。希望に満ちたことは、確信をうながし、愛をめざめさせることばを語ることにしよう。

あなたに兄弟の愛が必要であつたように、心の病いになやむ兄弟が、あなたを必要としている。彼は自分と同じように弱かったことのある人の経験を必要とし、彼に同情と助けを与え得る人を必要としている。わたしたちが、自分自身の弱さを知っているということは、困りはてている者を助けるのに役立つはずである。苦しんでいる魂を見たならば、わたしたちが神から与えられた慰めを、分け与えないで通り過ぎてはならないのである。

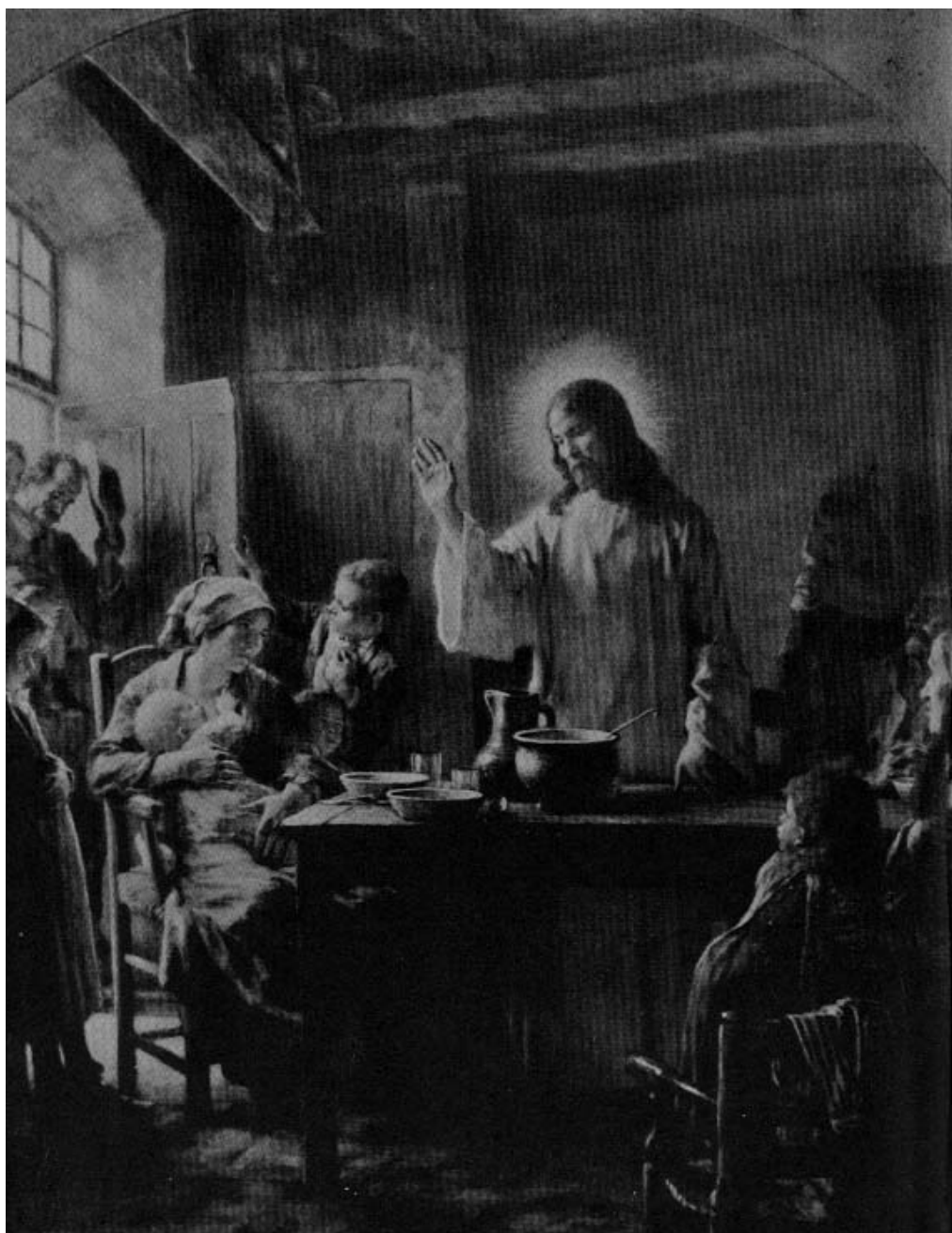
人間の思いと心と魂とが生まれつきのままの性質に勝利するのは、キリストとの交わり、生きた救い主と個人的に接触することによってである。さまよい出た者にむかつては、全能の手が彼をささえていること、またキリストがその無限の人性によって彼をあわれんでおられることを語らなければならない。あわれむことをせず、助けを求める叫びに耳を傾けない律法と権力とを信じるだけでは十分ではない。彼は、あたたかい手を握り、同情

にあふれた心に信頼する必要がある。神が常に彼のそば近くにあられて、あわれみ深い愛をもって、見守っておられることを、彼の心に銘記させなければならない。常に罪を悲しまれる天の父の心、なおさしのべられている天の父の手、「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」という天の父の声などを彼に考えさせなければならない（イザヤ書二七ノ五）。

この働きにたずさわるとき、わたしたちには、目には見えない友がある。傷ついた旅人の世話をしたサマリヤ人のそばには、天の使いたちがいたのである。神のご用をして同胞に奉仕するすべての者のそばにも、天使が立っている。そして、あなたはキリストご自身の協力を得るのである。キリストは、回復者であられるから、キリストの監督の下に働くならば、大いなる結果を見ることがあろう。

わたしたちが、この仕事を忠実にするか否かに、他の人びとの幸福ばかりでなくて、わたしたち自身の永遠の運命がかかっている。キリストは、すべて向上することを望む者を高めてご自分との交わりに入れようとしておられる。これは、キリストが父と一つであられるように、わたしたちをキリストと一つにするためである。わたしたちを利己主義から救い出すために、苦難や災難に会うことをお許しになる。神は、わたしたちのうちに、神の品性の特徴である同情とやさしさと愛をはぐもつと望んでおられる。この奉仕の仕事を受けいれることによつて、わたしたちは、キリストの学校にはいり、神の宮廷にふさわしい者とされる。これを拒むならば、キリストの教えを拒むことであつて、彼の前から永遠に離れることを選ぶことになるのである。

「あなたがもし、わたしの務を守るならば、……ここに立っている者どもの中に行き来することを得させる」——神のみ座をとりまく天使たちの間にあなたをおくと主はいわれるのである（ゼカリヤ書三ノ七）。天に住む者



わたしたちの主はしばしば貧しい者や、賤しい人のためにお働きになった。そのように、今日キリストの精神を持つ者は、彼らを助けたり、あわれんだりすることによって、それを明らかにする。

たちが地上で行なう働きに協力することによって、わたしたちは、天で彼らと交わる準備をしているのである。「救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわれた」(ヘブル一ノ四) み使いたちは、この地上で、「仕えられるためではなく、仕えるため」に生きた人びとを喜んで迎えるのである(マタイ二〇ノ二八)。わたしたちは、この祝福された交わりのなかで、永遠の喜びに満ちあふれて、「わたしの隣り人とはだれのことですか」という質問に含まれたすべてのことを学ぶことができるであらう。

第 21 章

働きと報酬

本章は、マタイ一九ノ一六―三〇、二〇ノ一―六、マルコ一〇ノ一七―三二、ルカ一八ノ一八―三〇に基づく。

神の恵みは無代価のものであるという真理を、ユダヤ人は全くといってよいほど、見失っていた。神の恵みは、努力して手に入れるべきものであると、ラビたちは教えていた。彼らは、義人の受ける報いを自分たちの行ないによって得ようと望んだ。こうして彼らの礼拝は、強欲な利益を目的としたものとなった。キリストの弟子でさえ、この精神から全くぬけきることができていなかった。救い主は機会あるごとに、彼らの誤りを正そうとなさった。ぶどう園で働く労働者のたとえのすぐ前に、一つのできごとが起こった。イエスは、その事に関連して、正しい原則をお語りになった。

イエスが道を歩いておられると、一人の若い役人が、イエスのところに走って来た。そして、みまえにひざまずいて、うやうやしく言った。「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか」。

役人は、キリストを神の子として認めたのではなくて、尊敬すべきラビとして、話しかけたのである。救い主は「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない」といわれた。何を根拠にして、**わたし**

をよいというのか、神だけがよい方である。あなたがわたしをそのような者であると認めるならば、わたしを神の子、神の代表者として受けなければならないのである。

「もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい」とイエスは、つけ加えられた。神の品性は、神の戒めの中に表現されている。そして、人間が神との調和を保つためには、神の戒めの原則が、すべての行為の源泉とならなければならない。

キリストは、戒めが要求することを、少しもゆるやかにはなさない。絶対にまちがう余地のないはつきりしたことばで、永遠の命に入るには、戒めに従わなければならないことをお示しになった。これは、墮落前のアダムに要求されたのと同じ条件である。主は、エデンの園で人間に要求なさったのと同じ完全な服従と、しみのない義とを今も求めておられるのである。恵みの契約の下で要求されることは、エデンで要求されたものと同様に広いもので、清く、正しく、善である神の戒めとの調和である。

「いましめを守りなさい」とのことばに対して、若者は、「どのいましめですか」とたずねた。彼は、何かの儀式上のいましめであると思ったが、キリストは、シナイ山から与えられたいいましめのことを言っておられたのである。彼は、十戒の第二枚めの板からの数か条をあげて、それをまとめて、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」とお命じになった。

青年はちゅうちよすることなく、「それはみな守ってきました。ほかに何が足りないのでしょうか」と答えた。彼の律法に関する考えは、外面的で表面的であった。彼は、人間的な標準から見れば、汚点のない品性を持っていた。彼の外面的生活は、だいたいにおいて、罪のないものであった。彼も自分の服従は、非のうちどころのないもの

であると信じていた。しかし、神と自分の魂との関係が、全く正しいものではないかというひそかな恐れがあった。これが「ほかに何が足りないのでしょうか」という質問を彼にさせた。

「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになる。そして、わたしに従ってきなさい」とキリストは言われた。「この言葉を聞いて、青年は悲しみながら立ち去った。たくさん資産を持っていたからである」。

自分を愛する者は、律法を犯す者である。イエスは、このことを青年に示そうと望んで、彼の心のなかの利己心をあらわすテストをお与えになったのである。イエスは、彼の品性の病気になっているところをお示しになった。青年は、それ以上、啓発されることを望まなかった。彼は、心に偶像をもっていた。この世が、彼の神であった。彼は戒めを守っていたと公言はしたけれども、すべての戒めの精神と命である原則に欠けていた。彼は、神と人に対する真の愛を持っていなかった。これがないことは、天国にはいるにふさわしい者とするすべてを彼が欠いていたことを示したものであった。彼は、自己を愛し、世の利益を愛していたから、天の原則と調和していなかった。

この若い役人が、イエスのところへ来たとき、彼の真実さと熱心さに救い主は心をひかれた。「イエスは彼に目をとめ、いつくし」まれたのである。主は、この青年が、義の説教者として奉仕する可能性をもっているのをごらんになった。彼は、イエスに従った貧しい漁夫たちをお受けになったのと同様に、この才能あるりっぱな青年をも喜んでお受けになったことであろう。もしもこの青年が、救霊の働きにその才能をささげたならば、彼はキリストのために勤勉に働いて成功をおさめる働き人となったことであろう。

しかし、彼は、まず第一に弟子となる条件を受けいれなければならなかった。彼は、神に全くおのれをささげなければならなかった。救い主の召しを受けたときに、ヨハネ、ペテロ、マタイおよびその仲間の者は、「いっさいを捨てて立ちあがり、イエスに従ってきた」のである（ルカ五ノ二八）。これと同じ献身が若い役人に要求されたのである。そして、この点において、キリストは、ご自身がなさったよりも大きな犠牲をご要求になったのではない。「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが彼の貧しさによって富む者になるためである」（コリント第二・八ノ九）。青年は、ただキリストのお導きに従いさえすればよかったのである。

キリストは、青年をながめ、彼の魂を引きつけようと望まれた。主は、彼を祝福の使者として、人々のところへつかわそうと熱望された。捨てるように言われた物の代わりに、キリストは、ご自分との交わりという特権をこの青年に提供なさったのである。「わたしに従ってきなさい」と主は言われた。ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、この特権を喜びとみなしたのである。この青年自身も、キリストを尊敬の念をもつてながめた。彼の心は、救い主に引きつけられた。しかし、救い主の自己犠牲の原則を受けいれるまでにはなっていなかった。彼は、イエスを選ぶよりは、富のほうを選んだ。彼は、永遠の命を欲したけれども、ただ一つの生きる道である無我の愛を魂の中に受けいれようとせず、悲しみつつ、キリストから去っていった。

青年が離れて行ったとき、イエスは弟子たちに、「富んでいる者が天国にはいるのは、むずかしいものである」と言われた。このことは弟子たちを驚かした。富んでいる者は、天の特別の恵みを受けた者とみなすように彼らは教えられていた。彼ら自身も、メシヤの王国では、世的の権力と富を受けることを期待していた。もしも、



富んでいる者が神の国にはいれないとするならば、いったい他の人びとには、どんな望みがあり得るであろうか。  
「イエスは更に言われた、『子たちよ、神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう。富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい』。すると彼らはますます驚い」た。彼らは、この厳粛な警告の中に、自分たちも含まれていることを自覚した。救い主のこのことばによって、彼ら自身の心の中に権力と富に対するひそかな願いがあつたことが明ちにされた。彼らは心配になつて、「それでは、だれが救われることができるのだろうか」と叫んだ。

「イエスは彼らを見つめて言われた、『人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである』」。  
富んでいる者は、富んでいるからといって、天国にはいられるのではない。富は、光のうちにある聖徒たちの特権にあずかる資格を与えない。何の功績もなくして与えられるキリストの恵みによってのみ、人は、神の都にはいることができるのである。

「あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ」という聖霊のことばは、貧しい者に対すると同様に富んだ者にも語られたのである(コリント第一・六ノ一九、二〇)。人びとがこれを信じるとき、彼らの所有物は、神からの委託物とみなされるようになり、神の指示に従つて、失われた魂の救いのためや、苦しんでいる人や貧しい人を慰めるために用いられるようになる。人の心は地上の宝に執着するから、こうしたことは人にはできないことである。富にとらえられている魂は、人間の欠乏の叫びに対してつんばである。しかし、神には、すべてのことが可能である。キリストの無比の愛を眺めることによって、利己的な心は、とカされ、和らげられる。パリサイ人サウロと同じように、富んでいる人も、「わたしに

とって益であつたこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思つている」というようになる(ピリピ三ノ七、八)。そのとき、彼らは、どんな物でも自分のものとは考えなくなる。彼らは、自分たちを神の数多くの恵みの管理人であると認め、神のためにすべての人のしもべとなることを喜ぶのである。

救い主のことばによつて受けた心の強い感銘からまず最初にわれに帰つたのはペテロであつた。ペテロは、自分と兄弟たちがキリストのために捨てた物のことを満足げに考えた。ペテロは「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました」といった。そして、若い役人に与えられた「そうすれば、天に宝を持つようになるう」という条件づきの約束を思い起こして、ペテロは、自分や兄弟たちがその犠牲の報いとして、何を受けるであらうかとたずねたのである。

救い主の答えは、これらのガリラヤの漁夫たちの心をおどらせた。それは、彼らの最高の夢の栄えある実現を描いたものであつた。「よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従つてきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであらう。」イエスはなお続いて、「おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであらう」といわれた。

しかし、「ついては何がいただけるでしょうか」というペテロの質問は、そのまま改めないであくならば弟子たちをキリストの使者とするのにふさわしくない精神、すなわち、雇い人根性をあらわしていた。イエスの愛にひきつけられていたとはいっても、弟子たちは、まだパリサイ主義から完全に解放されていなかった。彼らは、

まだ、働きに相当した報いを受けるという考えのもとに働いていた。彼らは、自己高揚と自己満足の精神をいだいて、お互いに比較し合っていた。だれかが、何かの失敗でもすると、他の者は、優越感にひたっていた。

キリストは、弟子たちが、福音の原則を見失うことのないように、神が働き人を扱われる方法と、神が働き人にお求めになる精神が何であるかを、たとえによって説明なさった。

「天国は、ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである」と主は言われた。職を求める人は市場で待ち、雇い主もそこへ行つて、働き人を見いだすというのが、当時の習慣であつた。たとえの雇い人は、それぞれ違った時間に出かけて行つて働き人を雇つたと言われている。朝早く雇われた人びとは、一定の賃銀で働くことを約束した。あとから雇われたものは、賃銀を主人の考えに一任した。

「さて、夕方になつて、ぶどう園の主人は管理人に言った、『労働者たちを呼びなさい。そして、最後にきた人からはじめて順々に最初にきた人々にわたるように、賃銀を払つてやりなさい』。そこで、五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デナリずつもらった。ところが、最初の人々がきて、もっと多くもらえるだろうと思つていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけであつた。」

ぶどう園の働き人に対する主人の扱い方は、神が人類家族を扱われる方法を代表している。これは一般に人間の間で行なわれているやり方とは反対である。この世の事業においては、報酬は完成した仕事の量に応じて与えられる。労働者は、自分の働いた分だけを受けることを期待する。しかし、このたとえの中では、キリストは、この世の国ではなくてご自分の国の原則を説明された。主は、どんな人間の標準にも支配されない。「わが思い

は、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっている……天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い」と主は言われる(イザヤ書五五ノ八、九)。

このたとえで、最初の労働者は、一定の賃銀で働く約束をし、定まった額をもらい、それ以上何ももらわなかった。後で雇われた人びとは、「相当な賃銀を払うから」という主人の約束を信じた。彼らは賃銀について、何の質問もしないで、主人を信頼していることを示した。彼らは、主人の正当なことに公平なことを信じた。そして、彼らは働きの量によらないで、主人の情け深い気持ちによって報われたのである。

そのように、神は、わたしたちが、不信心な者を義とされる神を信頼するように望んでおられる。神の報いは、わたしたちの功績によるのではなくて、「わたしたちの主キリスト・イエスにあって実現された」神ご自身の目的に従って与えられるのである(エペソ三ノ一一)。「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、……わたしたちは救われるのである」(テトス三ノ五、六)。そして、神を信頼するもののためには、神は「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えて」かなえてくださるのである(エペソ三ノ二〇)。

神の前に価値があるのは、なしとげた働きの量や目に見れる結果などではなくて、働きをした精神である。夕方の方の五時にぶどう園に來た労働者は、働く機会が与えられたことを感謝した。彼らの心は、彼らをやとってくれた人に対する感謝でいっぱいであった。そして、その日の終わりに、主人が彼らに一日分の賃銀を払ったとき、彼らはたいへん驚いた。彼らは、そのような賃銀をかせがなかったことを知っていた。雇い主の顔に表わされた

親切心を見て、彼らの心は喜びにあふれたのである。彼らは、主人の親切と分にあまる報酬とをいつまでも忘れることはできなかった。自分の無価値なことを知りながら、五時になって、神のぶどう園にはいった罪人もこれと同じである。彼の奉仕の時間は短く、報酬を受ける価値のないことを感じるのであるが、自分のようなものでさえ、神が受け入れてくださったことに大きな喜びを感じている。彼は、けんそんと信頼の念をもって働き、キリストと共に働く特権を感謝しているのである。神は、このような精神を嘉納なさるのである。

報酬のことは全く神におまかせして安んじていることを、主はわたしたちに望まれる。キリストが魂に宿られると、報酬のことは、第一の関心事ではなくなる。それがわたしたちの奉仕の動機ではない。わたしたちは、第二義的の意味で、報酬に関心を持つべきは当然のことである。神は、わたしたちが、約束の祝福を感謝することを望んでおられる。しかし、神は、わたしたちが報酬を熱心に求めたり、また、すべての義務に対して報酬を受けるべきであると思うことを、お望みにならない。わたしたちは、報酬を受けることよりはむしろ、報酬のことは、全く度外視して、正しいことを行なうように心がけなければならない。神と同胞への愛が、わたしたちの動機でなければならない。

このたとえば、最初に働きへの召しを受けながら、主のぶどう園に入らなかった人びとを容赦しているわけではない。主人が五時ごろ市場へ行つて、働きのない人びとを見たとき、「なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか」と尋ねた。すると、彼らは、「だれもわたしたちを雇ってくれませんか」と答えた。夕方、雇われたものはだれも、朝にはいなかった人びとであった。彼らは、召しを拒んだのではなかった。拒んで後に悔い改めるのは結構なことであるが、あわれみ深い最初の召しを軽んじることは安全ではない。

ぶどう園の労働者が、「それぞれ一デナリ」ずつもらったとき、朝早く仕事を始めた人びとは立腹した。自分たちは、十二時間も働いたではないか。夕方涼しくなってから、一時間しか働かなかった者よりも多く与えられるのが当然ではないか、と彼らは考えたのである。「この最後の者たちは一時間しか働かなかったのに、あなたは一日じゅう、労苦と暑さを辛抱(しんぼう)したわたちと同じ扱いをなさいました」と彼らは言った。

そこで主人は彼らの一人に答えて言った、「友よ、わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと一デナリの約束をしたではないか。自分の賃銀をもらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。自分の物を自分が見たいようにするのは、当りまえではないか。それともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか」

「このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう。」

たとえの最初から働いた労働者は、自分たちの働いたことを理由にして、他の者よりは優遇されることを要求する人びとを代表している。彼らは、自己賞賛の精神をもって仕事をし、克己と犠牲の精神をもってはしないのである。彼らは、一生の間神に仕えると公言したことであろう。困難、欠乏、試練には、だれよりも進んで耐えたことであろう。そして、そのために、彼らは、大きな報酬に値する者であると考える。彼らは、キリストと共に働く特権よりは、報酬のことを考えるのである。彼らは、その労苦と犠牲とによって、他の人びとよりも榮譽を受ける資格があると思うのであるが、この要求が認められないために、腹を立てるのである。もしも彼らが、愛と信頼の精神をもって働いたのであれば、彼らは続いて先頭に立ったはずであつたが、怒りっぽい、不平を鳴らす性質は、非キリスト的で、信頼するに足りないことを明らかにした。彼らは、自己を他よりも先にし、神を

信頼せず、兄弟たちをねたみ、うらやみ精神をあらわした。主の慈愛と寛大さは、ただ彼らのつぶやきの材料となるに過ぎなかった。こうして、彼らは、彼らの魂と神との間になんの関係もないことを示した。彼らは、偉大な働き人なる主と共に働く喜びを知らないのである。

狭量で自分のことばかりを考える精神ほど、神にきらわれるものはない。神は、このような精神をあらわす者と共に働くことはできない。彼らは、聖霊の働きに対して無感覚である。

ユダヤ人は、最初に主のぶどう園に召されたものであった。そのために、彼らは、高慢で自らを義としていた。彼らは、自分たちの長年の奉仕の結果として、他の人以上に大きな報酬を受ける資格があると思った。神のことがらに関して、異邦人もユダヤ人と同じ特権にあずかることができることをほめかすことほど、ユダヤ人を怒らせるものはなかった。

キリストは、最初に主に召された弟子たちに向かって、彼らの間では、このような悪感情をいだいてはならないと警告なさった。イエスは、教会の弱点とのりいとなるのは、自己を義とする精神であることを認められた。

とかく、人間は、天国にはいるために、自分たちで何かの行ないをすることができると考える。また、幾分かの進歩をするならば、主が来て助けてくださると思いやすい。こうして、自己を高め、イエスのお姿はあらわされない。わずかの進歩しかないのに、高慢になって、優越感をいづくものが多い。彼らは、人の賞賛を求め、自分が最も重要視されないと、人をねたむのである。キリストは、こうした危険から弟子たちを守ろうとなさった。自分の功績を誇ることは、すべて見当違いである。「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さと

くあつて、わたしを知っていること、わたしが主であつて、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる」(エレミヤ書九ノ二三、二四)。

報酬は、働きによるものではなくて、全く恵みによるものである。それはだれも誇る者がないためである。「それでは、肉によるわたしたちの先祖アブラハムの場合については、なんと言ったらよいか。もしアブラハムが、その行いによつて義とされたのであれば、彼は誇ることができよう。しかし、神のみまえでは、できない。なぜなら、聖書はなんと言っているか、『アブラハムは神を信じた。それによつて、彼は義と認められた』とある。いったい、働く人に対する報酬は、恩恵としてではなく、当然の支払いとして認められる。しかし、働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人は、その信仰が義と認められるのである」(ローマ四ノ一五)。であるから、他人よりも自分をすぐれたものであると思つたり、他人に対してつばやいたりする理由はない。だれも他の人以上の特権が与えられていないし、当然の権利として報酬を要求することもできないのである。

先のものも後のものも共に、大きな永遠の報酬にあずかるのであるから、先のもものは、後のものを喜んで迎えるべきである。他の人の報酬のことについてつばやく者は、自分自身が、ただ恵みだけによつて救われたことを忘れている。この労働者のたとえば、すべてのしつとと邪推とを非難している。愛は、真理を喜び、うらみがましい比較を試みない。愛をもっている者は、ただキリストのうるわしさと自分の不完全な品性とを比較するだけである。

このたとえば、すべての働き人に対する警告である。たとえば、奉仕の期間がどんなに長く、どんなに労苦を重ねても、兄弟に対する愛がなく、神の前にけんそんがないならば、彼らは無に等しいのである。自己に王座を占



めさせることの中に、宗教はない。自分に栄光を帰すことを目当てにするものは、キリストのために力ある働きを行なわせる唯一のものである神の恵みに欠乏していることを見いだすことであろう。高慢と自己満足にふけると、必ず、働きはそこなわれるのである。

わたしたちの働きを神に受けいられるものにするのは、働きの時間の長さではなくて、働きを喜んで、忠実にする精神である。わたしたちのすべての働きにおいて、自己を全く降伏させることが要求されている。真心から、おのれを忘れて行なった最も小さな義務は、利己心に汚された最も大きな働きよりも、神に喜ばれるのである。神は、わたしたちが、どれほどキリストの精神を抱いているか、また、わたしたちの仕事がどれほどキリストのみ姿をあらわしているかをごらんになる。神は、仕事の量よりも、わたしたちの仕事に対する愛と忠実さのほうを尊重されるのである。

利己心が死に、首位を争う心が消え、心に感謝が満ち、愛が生活をかぐわしいものとするそのときこそ、キリストが魂のうちに宿り、わたしたちは、神と共に働く者として認められるのである。

働きは、どんなに困難であっても、真の働き人は、それを重荷とは思わない。彼らは喜んで自分自身を使いくそうとするのである。しかし、これは、喜びにあふれて行なう楽しい仕事なのである。神にある喜びは、イエス・キリストによって表わされている。彼らの喜びは、イエスの前におかれた喜び、つまり、「わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」(ヨハネ四ノ三四)。彼らは、栄光の主と共に働いている。この自覚は、あらゆる労苦を楽しいものにし、意志を強め、何か起こっても、心をささえる。彼らは、キリストの苦しみにあずかって気高くされ、無我の精神をいだいて働き、キリストの思いやりの精神をもち、

キリストと協力してご用にあたることによって、いよいよ主の喜びを満ちあふれさせ、主の尊い名にほまれと賛美とを帰するのである。

これが神を真に礼拝する精神である。この精神が欠けているために、先と思われる多くの人が後になり、この精神を持つている人は、後と思われても、先になるのである。

キリストに自分たちをささげはしたものの、まだ、主のご用のために大きな仕事をしたり、大きな犠牲をする機会を得ない人びとがたくさんいる。このような人びとは、神が一番お喜びになることは、必ずしも、殉教者の自己犠牲でないことを知って慰めを得るべきである。天の記録の最高位に立つのは、必ずしも、日ごとに危険と死に当面する宣教師であるとは限らないのである。その私生活においてクリスチャンである者、日ごと自己犠牲において、心の真実さと純潔において、ののしられても柔和なことににおいて、信仰と敬けんにおいて、小さいことに忠実なことににおいて、家庭生活において、キリストの品性を代表する者、このような人は、世界的に名高い宣教師や殉教者以上に、神の前には尊いのである。

品性を評価するにあたって、神と人との標準は、なんと大きな相違があることであろう。世の中や親しい友人さえも知らない、家庭内や心のなかの誘惑、数々の誘惑に打ち勝ったことなどを神はごらんになる。自己の弱さを知って、けんそんに行っていること、一つの悪い思いでさえ、心から悔い改めることなどを、神はごらんになる。また、神は、ご用のために心から奉仕する人をごらんになる。自己とのはげしい戦い、そして遂に、その戦いに勝利したことなども注目なされるのである。これらのすべてを、神が知っておられ天使も知っている。主をおそれ、主の名をおぼえる者のために、主の前に記憶の書がかかっている。

学識があるとか、地位があるとか、または、人の数とか、才能の数とか、人間の意志の力とかに、成功の秘訣があるのではない。わたしたちは、自分の無力を感じて、キリストをめい想すべきである。そうするならば、すべての力の力であり、すべての思いの思いであるキリストの助けによって、喜んで従っていく人びとは、勝利から勝利へと進むのである。

わたしたちの働きは、どんなに短く、またどんなに卑しいものであっても、単純な信仰をもって、キリストに従っていくならば、必ず報酬を受けることができる。いかに偉大で賢明な人びとでさえも、得ることができなかったものを、最も弱く卑しい者が受けることができるのである。天の黄金の門は、自己を高める者のためには開かない。また、高慢な心の者にもあげられない。しかし、永遠の門は、小さな子供のふるえる手が触れたときに広く開かれるのである。単純な信仰と愛とをもって神のために働いた者のうける恵みの報酬は、実に祝福されたものである。

第 22 章

# 人生の収穫

本章は、マタイ二五ノ一二に基づく。

キリストは、弟子たちと一しょにオリブ山に座しておられる。夕日は、山のかなたに沈み、夕やみのとばりが空をおおっている。すぐ目の前には、何かの祝い事でもあるのか、あかあかとあかりが輝いている家がある。窓から流れ出る光と、付近に待っている人びとは、やがて、婚礼の行列が現われるしるしである。東洋では、婚礼が夜、行なわれるところが多い。花婿は、花嫁を迎えに行って自分の家まで連れてくる。婚礼の行列は、たいまつをともし花嫁の実家から、招かれた客のために宴会の用意がしてある花婿の家までいく。キリストがごろんになった光景の中には、婚礼の行列が到着するのを待って、それに加わろうとしている人びとがいる。

花嫁の家の近くに、白い着物をまとった十人のおとめがいる。各自は、火のついたあかりと、油を入れる器を持っている。それぞれ花婿が現われるのを今か今かと待っている。しかし行列はなかなか現われない。何時間も経過する。待っていたおとめたちは、疲れて眠ってしまう。すると夜中に「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と呼ぶ声がする。彼らは急に目をさまして、起き上がる。見ると行列は、たいまつをあかあかとたき、楽の音も楽

しく近づいてくる。彼らは、新郎の声も、新婦の声も聞く。十人のおとめたちは、それぞれのあかりを整えて、急いで出かけようとする。ところが、五人は、器に油を入れるのを怠った。彼らはこんなに遅れるとは思っていなかった。彼らには、万一の場合の用意がなかった。彼らは、あわてて、思慮深い女たちに「あなたがたの油をわたしたちにわけてください。わたしたちのあかりが消えかかっていますから」とたのむ。しかし、待っていた五人は、あかりを整え、器に持っていた油をもしびに入れてしまった。余分の油はない。「わたしたちとあなたがたとに足りるだけは、多分ないでしょう。店に行つて、あなたがたの分をお買いになる方がよいでしょう」と彼らは答える。

彼らが買いに行っているうちに、行列は進んで行き、彼らを置いて行ってしまった。もしたあかりを持った五人は、列に加わり、婚礼の行列と共に家に入り、戸は閉ざされた。思慮の浅い女たちが、婚宴の場に着いたときには、思いがけなくも入場を拒まれた。彼らは婚宴の主から、「わたしはあなたがたを知らない」といわれた。彼らは暗い夜の寂しい通りに取りのこされた。

キリストは、花婿を待っている人びとをgoranになりながら、十人のおとめの話を弟子たちに語られた。キリストは彼らの経験によつて、キリストの再臨直前の教会の経験を説明なさった。

二種のおとめたちが待っていたことは、主を待望すると公言する人びとも二種あることを示している。彼らは純粹の信仰を表明するので、おとめと呼ばれている。あかりは、神のことばを代表している。「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」と詩篇記者は言っている(詩篇一一九ノ一〇五)。油は、聖霊の象徴である。聖霊は、ゼカリヤの預言の中に次のように表わされている。「わたしと語った天の使がまた来て、わたしを

呼びました。わたしは眠りから呼びさまされた人のようであった。彼がわたしに向かって『何を見るか』と言ったので、わたしは言った、『わたしが見ていると、すべて金で造られた燭台（しょくだい）が一つあって、その上に油を入れる器があり、また燭台の上に七つのともしび皿があり、そのともしび皿は燭台の上にあって、これにおの七本ずつの管があります。また燭台のかたわらに、オリブの木が二本あって、一本は油をいれる器の右にあり、一本はその左にあります。わたしはまたわたしと語る天の使に言った、『わが主よ、これらはなんですか』。…すると彼はわたしに言った、『ゼルバベルに、主がお告げになる言葉はこれです。万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである。』…わたしはまた彼に尋ねて、『燭台の左右にある、この二本のオリブの木はなんですか』と言い、重ねてまた『この二本の金の管によって、油をそれから注ぎ出すオリブの二枝はなんですか』と言うと、…すると彼は言った、『これらはふたりの油そそがれた者で、全地の主のかたわらに立つ者です』（ゼカリヤ書四ノ一―一四）。

金の油は、二本のオリブの木から、金の管によって燭台の上の油を入れる器にいれられ、そこからともしび皿に注がれて聖所の中を照らした。そのように、神のみ前に立つ聖なる者から、神のご用に献身した人間という器に、聖霊が注がれるのである。これら一人の油そそがれた者の役目は、天からの恵みを神の民に与えることである。この恵みだけが神のみことばを、足のともしび、また、道の光とすることができる。「万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」（ゼカリヤ書四ノ六）。

たとえのなかで、十人のおとめは、みな、花婿を迎えに出た。だれもがあかりと油の器をもっていた。しばらくの間は、彼らの間になんの相違も見られなかった。キリスト再臨直前の教会もその通りである。すべての者が

聖書の知識を持っている。すべての者がキリストの再臨の近づいたことを聞き、確信をもって彼の出現を待つのである。しかし、たとえにあったように、現在も同じである。待つ時間が長びいて信仰が試みられる。そして、「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と呼ぶ声がしたとき、準備のできていない者が多い。彼らは、あかりと共に、器の中に油を持っていない。彼らは聖霊に欠けているのである。

神の聖霊がないならば、どんなにみことばの知識があっても役に立たない。聖霊を伴わない真理の理論は、魂を生かすことも、心を清めることもできない。聖書の戒めや約束をどんなによく知っていても、神の霊がその真理を心に深く刻みこませなければ、品性は変えられない。聖霊によって、目が開かれるのでないならば、人は真理と誤りを見分けることができず、サタンの巧妙な誘惑におちいつてしまう。

思慮の浅い女たちによって代表されている種類の人びとは偽善者ではない。彼らは、真理に関心をもち、真理を擁護し、真理を信じる人びとにひきつけられてはいるが、聖霊の働きに自分自身をゆだねていないのである。彼らは、岩なるキリスト・イエスの上に落ちて、彼らの古い性質がくだかれていない。この種の人びとはまた、石地の聴衆とも言われている。彼らは喜んでみことばを受けいれるが、その原則をかみしめて自分のものとはしないのである。その感化が持続しない。聖霊は、人が心の中に新しい性質の植えつけられるのを望んで、同意するのに応じて、人の心にお働きになるのである。ところが、思慮の浅い女によって代表されている人びとは、表面的の働きに満足している。彼らは、神を知らない。彼らは、神の品性を学んでいない。神と交わっていない。であるから、彼らはいかに神に信頼し、ながめ、生きるべきかを知らないのである。彼らの神への奉仕は、形式化してしまう。「彼らは民が来るようにあなたの所に来、わたしの民のようにあなたの前に座して、あなたの言

葉を聞く。しかし彼らはそれを行わない。彼らは「先では多くの愛を現すが、その心は利におもひている」(エゼキエル書三三ノ三一)。使徒パウロもこれが、キリストの再臨直前に住む人びとの特徴であるといっている。「終りの時には、苦難の時代が来る。その時、人々は自分を愛する者、…神よりも快樂を愛する者、信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう」(テモテ第二・三ノ一―五)。

この種の人びとは、危険の時に平和無事と叫ぶ人びとである。彼らは、安泰の夢をむさぼって、危険を感じない。しかし、その惰眠から驚いてめざめて、自分の欠乏に気づくと、その足りないところを他人に補ってもらおうとする。ところが、霊的のことにおいて、だれも他人の欠乏を補うことはできない。神の恵みは、すべての魂に豊かに与えられた。「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」という福音の使命はすでに伝えられた(黙示録二二ノ一七)。品性は譲渡することができない。だれも他の人に代わって信じることはできない。他の人に代わって、聖霊を受けることもできない。聖霊の働きの実である品性を人に分与することはできない。「主なる神は言われる、わたしは生きている、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにいても、彼らはそのむすこ娘を救うことができない。ただその義によつて自分の命を救うのみである(エゼキエル書一四ノ二〇)。

品性がわかるのは、危機においてである。「さあ花婿だ、迎えに出なさい」との熱心な叫びが声高々と真夜中にあがって、眠っていたおとめたちが目をさましたときに、だれがそのときのための用意をしていたかがわかる。両方とも不意におそわれたのであったが、一方には、非常の場合の用意があつて、他方にはその用意がなかったのである。そのように、今日でも、何か急に予期しない災害とか何か死に当面するようなできごとの時に、神の



約束に真の信仰をおいているかどうかがわかるのである。また、魂が、恵みにささえられているかどうかがわかる。恵みの時の終わりに、最後の大きなテストが来るのであるが、その時では、魂の必要を満たすにはおそすぎる。

十人のおとめたちは、この地上歴史の夕暮れ時に待っていた。すべての者は、クリスチャンであるといっていた。すべての者は招きを受け、名を持ち、あかりを持ち、神に奉仕していると公言していた。すべての者は、見たところ、主の現われを待っているように思えた。しかし、五人は、用意がなかった。彼らは、あわてふためき、ついに婚宴に列することができなかった。

最後の日に、多くの者はキリストの国に入れられることを要求して、「わたしたちはあなたとご一緒に飲み食いしました。また、あなたはわたしたちの大通りで教えてくださいました。」「主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか」と言う。しかし、それに対して、「あなたがどこからきた人なのか、わたしは知らない。みんな行ってしまえ」と言われるのである(ルカ一三ノ二六、二七、マタイ七ノ一二)。彼らは、この地上の生涯において、キリストとの交わりにはいっていないかった。であるから、彼らは、天のことばを知らず、天の喜びを味わうことができない。「いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない」(コリント第一・二ノ一一)。「わたしはあなたがたを知らない」という運命の宣告ほど、人の耳に悲しくひびくことばはない。あなたがたおざりにした霊の交わりこそ、婚宴の席の楽しげな群れの中にあなたを加わらせるところの唯一のものであった。その場にあなたは加わることはできない。その光は、盲目になった目には見えず、その音楽は、つんぼの耳には

聞こえない。世俗のためにまひした心には、その愛も喜びも、楽しいものとは思われない。人は、自分自身を天とのまじわりにふさわしくないものにすることによって天から除外されるのである。

「さあ、花婿だ」という叫びを聞いて目をさまし、それから油のきれたあかりに油を補って、主を迎える用意をすることはできない。今、キリストとかけ離れた生活をしていながら、天ではキリストとの交わりにふさわしいものとなることはできない。

たとえの中で、思慮深い女たちは、あかりとともに、器の中に油を持っていた。あかりは、彼女たちが待っていた夜の間に、あかあかと燃え続けた。それは、花婿を祝う光を、いよいよ輝かしくしたのである。その光は、暗黒の中に輝いて、花婿の家と婚宴の場所への道を照らしたのである。

そのように、キリストの弟子たちは、世界の暗黒に光を輝かさなければならぬ。神のことばは、聖霊の働きによつてそれを受け入れる人の心を変える光になる。人びとの心に、みことばの原則を植えつけることによつて、聖霊は、彼らの心の中に神の性質をめばえさせる。神の栄光の光、すなわち、神の品性が、神に従う者のなかに輝き出なければならぬ。こうして、彼らは、神に栄えを帰し、花婿の家、すなわち神の都と小羊の婚宴への道を照らすのである。

花婿が来たのは、真夜中であつた。——最も暗い時であつた。そのように、キリストがおいでになるのも、この地上歴史の最も暗黒の時である。ノアやロトの時代の状態は、人の子の来られる直前の世界の状態をあらわしていた。聖書は、この時のことをさして、サタンが全力を傾け、「あらゆる不義の惑わし」をもって働くといっている(テサロニケ第一・二ノ九、一〇)。この最後の時代に暗黒、様々の誤り、異端、まどわしなどが急速に増加

したことを見ても明らかにサタンが働いていることを知ることができる。サタンは、ただ世俗の人びとを捕えるばかりでなくてわたしたちの主、イエス・キリストの教会であると称しているものをもあざむいている。大背教は、一寸先も見えない真夜中の暗黒のようになることであろう。これは、神の民によっては、試練の夜、嘆きの夜、真理のために迫害を受ける夜となる。しかし、その暗黒の夜から、神の光が輝くのである。

神は「やみの中から光」が照りいであるようになさった（コリント第二・四ノ六）。「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。神は『光あれ』と言われた。すると光があつた」（創世記一ノ二、三）。そのように霊的暗黒の夜に、神は「光あれ」と仰せになる。神の民には、「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから」と言われる（イザヤ書六〇ノ一）。

「見よ、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上にあらわれる」（イザヤ書六〇ノ二）。

世界は神に関する誤った解釈の暗黒におおわれている。人びとは、神の品性の知識を見失い、それを誤解し、誤って理解している。この時にあたって、神からの使命、よき感化を与え、救いの力をもった使命を宣言しなければならぬ。神の品性を明らかにしなければならぬ。世界の暗黒の中に、神の栄光の光、恵みとあわれみと真理の光が輝かなければならぬ。

預言者イザヤは、この働きのことを次のように述べている「よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、声をあげて恐れるな。ユダのもろもろの町に言え、『あなたがたの神を見よ』と。見よ、主なる神は大能をもってこれ、その腕は世を治める。見よ、その報

いは主と共にあり、そのはたらきの報いはそのみ前にある」(イザヤ書四〇ノ九、一〇)

花婿を待ち望んでいる者は、「あなたがたの神を見よ」と人びとに言わなければならない。あわれみに満ちた最後の光、世界に伝えるべき最後のあわれみの使命は、神の愛の啓示である。神の子らは、神の栄光をあらわさなければならない。彼らは、その生活と品性において、神の恵みが彼らのためにどんなことをなしたかを表わさなければならない。

義の太陽の光はよい行ない、——真のことば、清い行ないなどによって、輝き出なければならない。

父の栄光の輝きであられるキリストは、世の光として、この世界に來られた。彼は、人びとに神をあらわすために來られた。そして、キリストのことについて、「神はナザレのイエスに聖霊と力を注がれました。よい働きをしながら…巡回されました」としるされている(使徒行伝一〇ノ三八)。また、ナザレの会堂で、彼は言われた。「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してください。だからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである」(ルカ四ノ一八、一九)。主は、弟子たちに、このような働きをするように、お命じになった。「あなたがたは世の光である。」「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」といわれた(マタイ五ノ一四、一六)。

預言者イザヤも、この事について、次のように述べている。「また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これに着せ、自分の骨肉に身を隠さないなどの事では

ないか。そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、あなたは、すみやかにいやされ、あなたの義はあなたの前に行き、主の栄光はあなたのしんがりとなる」(イザヤ書五八ノ七、八)。

このようにして、霊的暗黒の夜に、神の栄光が教会を通して輝き出て、失望した者を励まし、悲しむ者を慰めなければならぬ。

わたしたちのあたり一面に、世の人びとの悲しい叫びが聞こえる。どちらを向いても、欠乏と困窮に陥っている者がいる。人生の困難や悲惨を和らげ、救うことが、わたしたちの務めである。

実際の行為は、単なる説教以上に、はるかに効果がある。わたしたちは、飢えた者に食を与え、裸の者に着せ、家なき者に宿を与えなければならない。いや、それ以上のことをするように命ぜられている。魂の欠乏を満たすことができるのは、キリストの愛だけである。もし、キリストがわたしたちの中に宿っておられるならば、心は神からの同情と、キリストのような熱烈な愛の泉がせきを切ってわき出るであろう。

神は、わたしたちが、困っている人びとに、贈り物をするだけでなく、快活な顔をして希望にあふれたことばを語り愛のこもった親切な握手をすることを求めておられる。キリストは、病人をおいやしになったときに、人びとの上に手をおかれた。そのように、わたしたちも助けようとする人びとに近く接触しなければならないのである。

世の中には、希望を失っている者が多い。彼らに、太陽の光を取りもどしてやろう。勇気のくじけた者が多い。彼らに、励ましのことを語り、彼らのために祈りをささげよう。命のパンが必要な者もある。彼らには、聖書を読んで聞かせよう。地上の医者や薬ではいやされない心の病に苦しんでいる者もある。わたしたちは、そのよ

うな人のために祈り、イエスのところへ連れて来よう。そして、ギレアドには、乳香があり、そこに医者がいることを知らせよう。

光は祝福である。それは、恩を知らず、神聖を汚す、腐敗した世界に、おしみなく宝を注ぎ出す普遍的祝福である。義の太陽の光もこれと同じである。全地は、罪と悲しみと痛みという暗黒に包まれているから、神の愛の知識によって照らされなければならない。天のみ座から輝く光は、宗派、階級、地位のいかんを問わず、どの人からも除外されてはならない。

希望とあわれみの使命は、地の果てまでのべ伝えるべきものである。望む者はだれでも、手を伸ばして神の力を自分のものとし、神と和らぎ、平和を得ることができ。異教徒も暗黒に閉ざされている必要はない。輝かしい義の太陽の光の前では、やみは消え去らねばならない。よみの力は、打ち破られたのである。

しかし、自分が与えられていないものを、他に分け与えることは、だれにもできない。人間は、神の働きにおいて、何一つ自分で造り出すことはできない。だれでも、自分の力によって、神のために光を掲げる者となることはできない。天からの使者が金の油を金の管に入れ、その油が金の器から聖所の燈台に流れ込んでいくことによって、光があかあかと輝いたのである。人間も神の愛が絶えず注がれることによって、光を放つことができる。すべて、信仰によって、神と結合した者の心には、愛という金の油が豊かに流れ込んで、よい行ないや、神に対する真心からの奉仕となって輝きであるのである。

聖霊という大きな無限のたまものの中には、天のすべての資源が含まれている。神の恵みの富が、地上の人びとに流れないのは、神の側に何か制限があるためではない。喜んで受けさえするならば、だれでも聖霊に満たさ

れるのである。

神の恵みの富、はかり知ることのできないキリストの富を世界に伝えるための神の生きた通路になるという特権は、だれにでも与えられている。キリストは、他の何ものにもまして、キリストのみ霊と品性とを世界に代表する器があらわれるのを望んでおられる。人間によって救い主の愛があらわされることほど、世界が求めているものはない。人の心に喜びと祝福を与える清い油を注ぐことができる管を、全天は待っているのである。

教会が世の光であるイエスの光を受け、インマヌエルの栄光に輝き、全く変えられた体となることができるように、キリストはあらゆる準備をなさった。彼は、すべてのクリスチャンが光と平和の霊的ふんい気に包まれることを望んでおられる。そして、わたしたちがキリストご自身の喜びを、わたしたちの生活のなかにあらわすことを願っておられるのである。

み霊の内住は、天の愛があふれ出ることによってわかる。神の満ちた徳は、献身した代表者を通して流れ出て、人びとに与えられるのである。

義の太陽は「その翼には、いやす力を」備えている(マラキ書四ノ二)。そのように、真の弟子からは、だれからでも、生命と勇気と援助と真のいやしを与える感化が発散するのである。

キリスト教は、ただ罪の許しを与えるだけではない。それは、まずわたしたちの罪を取り去って、そのあいたところを、聖霊の徳で満たすのである。これは、神の光を受けて、神にあって喜びことである。自己を全くおなしくして、絶えず、キリストの臨在の祝福を受けることである。キリストが魂を支配なさるときに、そこには、純潔と、罪からの自由がある。福音の計画の栄光と、その満ち満ちた完全さとが生活の中に完成されるのである。

救い主を受け入れることによって、完全な平和、完全な愛、完全な確証の喜びを味わうことができる。神が確かにみ子を世の救い主として、世界に送られた証拠として、わたしたちの生活のなかに、キリストの品性の美とかわしさがあらわれるのである。

キリストは弟子たちに光を輝かすように努力せよと、お命じにならなかった。ただあなたがたの光を輝かしなさいと言われただけであつた。もし、キリストの恵みを受けているのであれば、光はあなたのうちにある。障害物を取り除くならば、主の栄光は、あらわれるのである。光は暗黒の中に輝き出て、やみを追いやってしまう。こうしてあなたは自分の感化の及ぶ範囲で、光を輝かさずにはおられない。

人間の姿の中にキリストご自身の栄光があらわれることは、天と人間との間を非常に近いものにするのであつて、キリストの宿られるすべての魂の中に神の宮の栄光が見られるようになる。そして、内住のキリストの栄光に、人びとは捕えられるのである。こうして、神に導かれた多くの魂の賛美と感謝とは、潮のごとくに、偉大な与え主なる神に栄えを帰すのである。

「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから」(イザヤ書六〇ノ一)。この使命は、花婿を迎えに出る人びとに与えられている。キリストは、力と大いなる栄光をもって来られる。彼は、ご自分の栄光と父の栄光とをもって来られる。彼は、すべての聖天使をひきいて来られる。全世界が暗黒に閉ざされている時に、聖徒たちの住居にはどこにも光がある。彼らは、キリストが再びおいでになる最初の光をとらえるのである。主は、輝く栄光に包まれておられる。そしてあがない主なるキリストは、お仕えするすべての者の賛美をお受けになる。悪者は、み前からのがれ去るけれども、キリストに従った者は、喜びにあふれる。家長ヨ



ブは、はるかに、キリスト再臨の時をながめて、「しかもわたしの味方として見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない」といった（ヨブ記九ノ二七）。キリストに忠実に従った人びとにとって、キリストは日ごとの伴侶、親しい友であった。彼らは、神との密接な接触、絶えざる交わりを保ってきた。彼らの上に、主の栄光がのぼった。イエス・キリストのみにあらわれた神の栄光の知識の光が、彼らの中に反映したのである。今彼らは、莊嚴な王の大いなる輝きと栄光に浴して喜ぶのである。彼らは、心に天を持っているから、天との交わりに入る準備ができているのである。

彼らは、輝く義の太陽の光を受けて、頭をもたげ、彼らのあがないの近づいたことを喜ぶのである。彼らは、花婿を迎えて、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる」と言うのである（イザヤ書二五ノ九）。

「わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った、『ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつらう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。…』それから、御使はわたしに言った、『書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである』。『小羊は、主の主、王の王である…。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る』（黙示録一九ノ六―九、一七ノ一四）。



ホーム・ライブラリー

1 生活を豊かに

2 教 育

3 豊かな人生の秘訣

4 心を育てる家庭教育

NDC 190.4/328P/22cm

---

1971年1月20日 初版発行

著 者 エレン・G・ホワイト  
訳 者 清 野 喜 夫  
発 行 者 安 河 内 寿  
印 刷 所 福 音 社

---

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発 行 所 福 音 社  
電話 (045) 921-1414 振替横浜7-599番

---

〒241 横浜市旭区上川井町846

発 売 所 三 育 協 会  
電話 (045) 921-1121

---

転載複製を禁ず 製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN

☆ご愛読下さいましてありがとうございます。当社出版物は直販制  
ですので書店には出しておりません。お問合せ、ご用命、出版目  
録のご請求等は、直接発売所へお申し越し頂きたい存じます。